
IS <インフィニット・ストラトス> 花の銃士

東湖@物書きの人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS<インフィニット・ストラトス> 花の銃士

【Nコード】

N7741R

【作者名】

東湖@物書きの人

【あらすじ】

IS世界にオリ主を放り込んでみました。「なろう」デビュー作。幼いころからの付き合いの織斑姉弟と篠ノ之姉妹。そしてもう一組の姉妹。この三組の姉妹に加え、原作キャラも彼らに巻き込まれていく。

燃え+微ダーク+萌え、な成分で構成できるよう精進致します。救いようのない話にはならない、筈。

感想を頂けるとモチベーションの向上に繋がると思いますのでつまらないことでも感想いただければ嬉しいです。

なお、この作品は Arcadia 様にも投稿させていただきます。

prologue 「はじまり」(前書き)

はじめまして東湖@物書きの人、略して東湖です。

勢いではじめてしまった。途中打ち切りの可能性大。

そんな地雷でも是非読んでいただければ嬉しい限りです。

懐かしい夢を見ている。

いや。懐かしい、と言えるのかどうか怪しい。

もっと適当な言葉で当てはめるとすればデジャブ。

見たこと筈なのに、知っている筈なのにそのことを頭では知
っているとは認識できてしまう。

だが懐かしいと思えるのであれば自分の記憶の片隅に刻まれてい
ることなのである。

何時？ 夕暮れ時。

どこで？ どこかで。

誰と？ 誰かと。

何してる？ 何かをしてる。

重要な部分がるで思い出せないがこれだけは言える。

彼らとはまた、会える気がする。

「……さん、露崎仕種さん」

アナウンスの声に目を覚ます。いけないいけない、集中のために目を瞑っていたがまさかウトウトすることになるとは。

呼ばれたのは自分の名前。次は自分が飛翔とぶ番であるという知らせ。

大きく息を吸い、肺に溜めた空気を一気に吐き出す。

「緊張しているか？」

後ろからよく知った女性から声をかけられる。それはこの関係者で私が非常にお世話になっている人物の声だ。

どうやら深呼吸している様子から私が緊張していると見られたら

しい。

まあ、大抵は深呼吸して落ち着かせようと思うのが普通なのだが私の場合は単に大きな呼吸をしただけ。

自分を落ち着かせようなんて気持ちはそこに微塵もないのだが。

「いいえ。でもどうしてここに？」

かぶりを振って、声のする方に向き直る。

「なに、お前が出ると聞いてな。たまたま時間が空いていたから来ただけだ」

「わざわざありがとございます。でも、そういうことは身内にしてあげればいいのに」

「あいつの時は丁度、試験官をしていたからな。時間が合わなかった方だけだ」

「またまた。この場で会いたくなかったからでしょう？」

私の深く考えず言った軽口とともに女性の目が細くなり殺気立てようとするのを本能的に察知する。

これ以上は狩られる！？

「まあ、いい。で、試験のほうはどうなんだ？ お前は」

「問題ないです。私にとって勝つことは息をしているのと同じこと

ですから」

そして不敵な笑みで声をかけた女性に応える。

「勝つことは息をすることと同じ」

それは私の口癖だ。

常勝無敗。そんなありきたりなスローガンのような言葉では収まらない私を私たらしめる根底に沁みついたワード。

息をするくらいに当たり前なこと。

息をすることに何を恐れるだろうか？ 何を心配するだろうか？

人間は決してそんなことに怖がるように出来ていない。

息を吸って、吐いて。血液に酸素を取り入れ、体内の二酸化炭素を吐き出し。

それはごくごく当然のこと。

私にとって勝つとはそれと同じくらい些細なことなのだ。

しかし、それ以外に特別なことがあるとすれば勝負事独特の昂揚感。

少しだけ心臓の鼓動が速い気がするが、こればかりは仕方ない。何せ性分なんだから。

「そうか。それは頼もしい限りだ。立場上、あまり肩入れ出来ないがこれだけ言わせてもらおう」

そう言つて女性は不敵な笑みを返して来た。

「頑張れよ仕種」

「ええ、頑張つて来ます。千冬先生」

世界最強のIS操縦者、織斑千冬に応援されることほど嬉しい激励など他に存在しない。

「では勝ってきます」

大きな翼のようなスラスタを吹かせ私は紫雲を柵引かせてピットを飛び立った。

そして

『試合終了。勝者、露崎仕種』

少女は言葉通り息をするように一つの勝利を勝ち取った。

「まさか、山田先生を倒してしまうとはな」

他の教師たちが騒然とする中、モニターに映る映像を千冬は感慨深げに眺めていた。

山田真耶はあんな可愛らしい容姿をしてこそいるが元日本代表候補生。実力は折り紙つきなのだ。

それをこつも簡単に打破してしまうとは、予想はしていたが内心は少し驚いていた。

これで試験官に勝った人間はこれで三人、いや二人目なのだろう。

もう一人も勝ったことになっているが、どう見たってあれは自爆の他に言いようがない。

あいつがISを展開出来たことに気が動転してしまいそのまま直

進し、かわされ、壁にぶつかって気を失ったという恥ずかしい失態を勝利というのは無理があるだろう。

そのビジョンを思い出してしまう眉間を抑えながら千冬はハア、とため息を吐く。

「それにしても」

もう一度、目をモニターに戻す。

そこに映っているISを装着した一人の少女に彼女の面影を重ねる。

容姿に戦い方、そして口癖……。その全てが彼女とダブって見えた。

「勝つことは息をしているのと同じこと、か……。やはり、あいつと同じなのだな仕種」

誰にでもなく、千冬は小さく呟いた。

prologue 「はじまり」(後書き)

誤字脱字ありましたら報告お願いします。

オリ主設定が必要ならば、感想の方お願いします。

以前、別の掲示板でオリ主設定出しているんやろとか言われていますので。

第1話 「ファースト・インプレッション」(前書き)

早速感想ありがとうございます。
頑張って続けて参ります。

第1話 「ファースト・インプレッション」

「全員揃ってますねー。じゃあSHR始めますよー」

IS学園、一年一組。

黒板の前でにっこりとほほ笑むのは副担任の山田真耶先生。

やや幼い顔つきにずり落ちた黒縁眼鏡、少しだぼついたサイズの合っていない大きめな服。

ちなみにぱつと見の第一印象は「背伸びした大人」。

うん、我ながら的確な表現である。

ちなみに入試の時に私の対戦相手だ。あの時はお世話になりました。

「それではみなさん、一年間よろしくお願いしますね」

「……………」

返答がない。まるで屍のようだ。いや、みんな生きてるけどさ。

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。えっと、出席番号順で」

涙目になりながら進める可哀想な山田先生。

ここが普通の女子高ならばこんなことになりはしないだろうに。

こんなに教室に微妙な緊張感が流れているのかは簡単だ。

原因は女の花園の教室、そのど真ん中の一番前に座っている男子、織斑一夏だ。

あの織斑千冬の弟で、全世界で唯一ISに乗れる男性として世界的にニュースに流れた時の人だ。

まあ、彼がここに来た……というか強制入学させられたのはここにいた方が都合がいいからだろう。

第一に身の安全。

普通の高校に通った日にゃ一夏が何故ISを使えるかの実験体にするためどこかの組織に拉致されるに違いない。最悪ホルマリン漬けなんてことも……。うえ、想像したら吐き気がして来た。

それに比べてIS学園は在籍している間は国家などから一切の干渉を受けない。そんな感じの特記事項があつた筈だ。

そう言った意味で一夏はここにいた方が身のためなのだ。

その他にも事情はたくさんあるが政治問題とか外交問題とか私の偏った学習しかしていない頭では理解できないので割愛させていた
だきたいで候。

そしてあつちの窓辺の奥にいるのが篠ノ之束の実の妹、篠ノ之箒。剣道の全国大会で優勝するくらいべらぼうに強い。

彼女が纏う張り詰めた雰囲気はまさしく古い時代の日本男子のそれなのだがこの六年でなんか鋭さを増してないでしょうか。

もう一度視線を前に向けて映り込んできたのは落ち着きない一夏。まあ、それも当然ですよ。

なんてっ たってクラスの男女比は男：女＝1：28。

周りからは奇異の目で見られるし私だって逆の立場にはなりたくない。

そんな一夏は周りの空気に耐えかねて幼馴染みに助けを求めるところな視線を送るのだが……、

(……………ぷいっ)

顔を逸らされた。

うん、箒も相変わらずで何より。

あ、次は一夏の番か。なのに箒に視線を送り続けていて呼ばれていることに気付いていない様子。

「……………織斑くん。織斑一夏くんっ」

「は、はい!？」

山田先生に目の前で大声で呼びかけられたため思わず声が裏返ったまま返事する。

そのため案の定、くすくすと周りから笑い声が聞こえてきて余計に落ち着きをなくしている。まったく何やってるんですか。

「あつ、あの、お、大声出しちゃってごめんなさい。お、怒ってる? 怒ってるかな? ゴメンね、ゴメンね! でもね、あのね、自己紹介、『あ』から始まって今『お』の織斑君なんだよね。だからね、ご、ゴメンね? 自己紹介してくれるかな? だ、ダメかな?」

ペコペコと謝る山田先生。

先生、低姿勢なことはいいいことかもしれませんが度を超してるのは流石に生徒に舐められますよ……。

「いや、あの、そんなに謝らなくても……っっていうか自己紹介しますから、先生落ち着いて下さい」

「ほ、本当ですか? 本当ですね? や、約束ですよ? 絶対ですよ!？」

涙目になりながら手を取り熱心に詰め寄る山田先生。

自己紹介程度で涙目なんてこの先やってけないですよ……。

「えー……、えっと、織斑一夏です。よろしくお願いします」

立ち上がって当たり障りなく言葉を選び自己紹介をする。そしてそのまま着席で終わり。

これが織斑一夏が描いている自己紹介プランだった。

だったのだ。

彼はそうするつもりだったに違いない。てか、このなんともいえない間はこれで終わりにしようと思っていたと断言できる。

しかし周囲の女子からの『もっと聞きたいな』『みたいな期待に満ちた眼差しが終わるに終わらせられない状況を作り出している。

「す、好きなことはお風呂。えー、特技は家事全般、です」

しどろもどろになりながらも自己紹介を続ける。それでも『これで終わりじゃないよね?』みたいな空気に変わらない。

さて、空気を読まないことに定評のある一夏はどのような言葉を選ぶのか。

決意したのか一夏は大きく深呼吸をして、

「以上です」

四文字で締めた。

ガッシャーン！ 一同は某お笑い養成事務所のようにずっとける。

うむ、想像通りの終わり方だった。

「あ、あれ……?」

拙かった? みたいなことを言いたげな一夏。

バカヤロー、拙いに決まっている。

「いつ !?」

なんて私の心の代弁するかのようにはパンツ! と出席簿が火を噴いた。

その鉄槌を下した人物は私のよく見知った黒のスーツがよく似合う人物でその名も……。

「げえつ、関羽!?」

「誰が三国志の英雄だ、馬鹿者」

パンツ! と再びいい音を立てて叩かれる。

いや、寧ろ彼女の強さからすると呂布……。

「だから、何故私を三国志の英雄で例えようとする」

チョークが私のおでこを捉えて砕け散った。単に当たっただけなのではない、砕けたのである。

一体、万力の力を込めればこういうことになる? それを受け止めた私の頭も大概だけどさ。

それに別にかわしてもよかったのだが、自分の責任で後ろの子にも被害が被るのは悪い気がするので甘んじて受けることにする。超絶痛い。

しかし、何故考えてることが分かった？ テレパシー？ 考えを顔には出さないようにしているのだが……。

「だ、大丈夫……？」

隣の子がひそひそと話しかけてくる。まあ、出席簿あれの次にチヨークれなのだ。軽く引いてるのかもしれない。

「大丈夫じゃない、って言ったら何かしてくれる？」

意地悪くそんなことをいうと小さな声でええっ！？ と慌てる。

あら、ブラックジョークはお気に召さなかったか。

「気にしないで冗談ですよ。見ている以上に重症じゃないから」

くすりと笑っておでこを押さえながら視線を前に戻す。

「織斑先生、もう会議は終わられたのですか？」

「ああ山田先生。クラスへの挨拶を押し付けてしまってますまなかったな」

「い、いえっ。副担任ですからこれくらいはしないと……」

はにかみながら千冬先生と話している山田先生。あ、なんか初めて教師らしいところを見たや。

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。出来ないものには出来るまで指導してやる。私の仕事は若干十五歳を十六歳までに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな」

なんとという一方通行。なんとというファシズム。

そんなことを宣言する教師が全世界にいていいものか。

が、私の思惑とは裏腹にクラスの女子たちが途端に黄色い声を上げ色めき立つ。

クールビューティー、強い女性を見事に体現した女性が目の前に立つ千冬先生である。

第一世代IS操縦者の元日本代表で公式戦無敗。しかも第一回ISの世界大会　　モンド・グロッソの格闘部門及び総合優勝者なのだ。

つまりは世の女性たちの憧れの的である。

ところがある日、突然現役を引退し姿を消した……ってことになつてるけど一夏の驚きようを見る限りここで教師をしていることを当人に話してないみたいだ。

「キヤ

！　千冬様、本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！ 北九州から！」

いや、別に南北北海道からでもいいけどさ。

「あの千冬様にご指導いただけるなんて嬉しいです！」

「私、お姉様のためなら死ねます！」

ミーハーな黄色い声援が飛び交う。

千冬先生は見慣れ過ぎた光景なのか非常に鬱陶しそうだ。

まあ、現役時代から今までずっとこんな調子だったとすると呆れも入ってきて当然だろう。

「……毎年、よくもこれだけの馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？ 私のクラスにだけ馬鹿者を集中させているのか？」

「きゃあああああつ！ お姉様！ もっと叱って！ もっと罵って！」

「でも時には優しくして！」

「そしてつけあがらないように躰をして〜！」

躰というか一部嗜好の矯正が必要な生徒がいるような気がしない

でもない。

「で？ あいさつも満足に出来んのか、お前は？」

「いや、千冬姉、俺は……」

パンツッ！ 本日三日の出席簿がお見舞いされる。千冬先生、身内鼻肩しないからってポンポン人の頭を叩いていいもんじゃないですよ。

「織斑先生と呼べ」

「……………はい、織斑先生」

頭を押さえながら席に着く一夏。

それにしても学習能力低いよ一夏。何回千冬姉って呼んで叩かれてるのさ。

「え……………？ 織斑くんって、あの千冬様の弟……………？」

「じゃあ、世界で唯一男で『IS』を使えるって言うのも、それが関係して？」

「ああっ、いいなあっ。代わって欲しいなあっ」

ひそひそとそんな話が耳に入って来る。

今のやりとりで一夏と千冬先生の関係がバレてしまったようだ。

まあ、遅かれ早かれいずれバレることになるから別に深くは気にしないけどさ。

いずれ、私や箒のこともバレるだろうし。

その後も滞りなく自己紹介が進んでいく。

「次、露崎さん」

教室全体を見渡していたら自分の番が来た。

「露崎仕様です。好きなものは自由、趣味は観葉植物です。よろしくお願いします」

立ちあがり背筋をぴんと伸ばして自己紹介をしたところでクラスメイトの多くは織斑姉弟に首っ丈でほとんど生徒の耳に届いていない。

……なんだかなあ。自己紹介したのにリアクションがないってのは悲しいぞ。

「あ、一つ言い忘れてることがありましたが」

思い出した、というか言っておかなければならないことがあった。

「私、専用機持ってます。そこんとこヨロシクです」

最後に興味を引く一言をわざと残して席に座る。

専用機。

ISは世界に467機しかこの世に存在しない。

しかも、ISのコアを作ることが出来るのは全世界で篠ノ之箒の姉、東さんだけ。

その束さんは現段階ではISのコアをこれ以上増やす気はないという。

現在その467機のISを国家や企業などに適当な数に割り振られている。

つまり、私はそんな大変貴重な467分の1を保有していると言
う訳だ。

「……………」

クラスもその一言が効いたようでさつきとは違ったざわめきが生まれる。

「み、みなさん静かにっ！　じゃあ次の方、お願いしますっ！」

山田先生はいっぱいいっぱいになりながら自己紹介を進めるように促す。山田先生には悪いことしたなあ。

自己紹介が一通り終わる頃にSHRの終わりのチャイムが鳴る。

「さあ、SHRは終わりだ。諸君らにはこれからISの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で体に染みこませる。いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ」

ああ、折角あそこでの生活とはオサラバしてこれからは晴れて自由の身だと言うのにここでも自由はないのか。

まあ、でもここは学校であるからあそこの万倍マシだろうし、あの程度の我慢で色々な自由を手に来るから別にいいですけどね。

そんなことを思いながらまだ痛むおでこを擦って机に次の時間までのエネルギー節約のために突っ伏した。

第1話 「ファースト・インプレッション」(後書き)

……しまった。仕種の容姿の描写がない。
2話の調整をせねば。

第2話 「平民の心、エリートは知らず」(前書き)

「一日に三話も投稿するなんて馬鹿じゃないか。ストックが切れたらどうするんだい？」

「それよりも連載するんだったら僕と契約してまほ(r y」

ISなのに何やってるんだろう……。

ちなみにもうストック切れたけどね。乙！

第2話 「平民の心、エリートは知らず」

side:織斑一夏

「あー……」

第一声がこんなので申し訳ないが、俺は参っていた。

正直、もう駄目だ。ノ センキューだ。この後の授業を受ける気力すらない。

一時間目のIS基礎理論授業が終わった休み時間、織斑一夏は机に突っ伏していた。

周りからは奇異の目が授業中、休み時間を問わず絶え間なく注がれている。

なにせ全世界において男でISを動かせる人間がここにしかないのだ。否が応にも目立ってしまう。

そうになると俺はもう客寄せパンダ。俺を一目見ようと休み時間の度、全学年からここまで俺を観察しに足を運びに来ることになるのだらう。

これは精神的にかなりきつい。

女の園をロマンだとかほざいていた悪友にじゃあ、代わってみるか？　と言ってやりたい。

しかも追い打ちをかけるように授業はチンプンカンプン。

IS学園に入学してくる奴は事前学習しているというのは本当らしい。

前の授業でも俺が頭を抱えているその横ですらすらとノートを取っていたのだ。

うう、こんなことなら『必読』と書かれていた参考書に目を通しておくべきだった……。

古い電話帳と間違っ捨てそうになる時に気付いてよかったがそれきりだ。

だいたい、あんな分厚いものに目を通せというのに無理がある。

開始、三秒で止められる自信がある。

(誰かこの状況を助けてくれ……)

「……ちょっといいか」

「え？」

天に俺の願いが届いたのか突然かけられた懐かしい声に顔を上げる。

「……箒？」

目の前にいたのはさっき助けを求めていたのに助けられなかった薄情な幼なじみ、篠ノ之箒だった。

剣道が続けていたのか平均的な身長よりもポニーテールと相まって長身を思わせる。

そのうえ彼女の纏う雰囲気は六年前に比べると凜としたものになっていた。

「着いて来い」

それだけ言うてすたすたと先に行ってしまう。

「早くしろ」

「お、おう」

箒に叱咤されると急いで後をつける。

もっともあの空気にしたんじゃ気が休まらない。それなら幼なじみの箒といた方が気が楽だ。

それにあの箒から声をかけてきてくれたんだ。積もる話もあるんだろっ。

教室の外まで溢れ返っていた女子たちが箒の行く道をざあつと道を空ける。モーゼの海渡りかよ。

箒というモーゼがいるおかげで一人では行けそうもなかった屋上に出ることが出来た。

外ということで緊張感から解き放たれた解放感が心地よい。

それでも何人かの視線を感じるが教室や廊下に比べれば幾分かましなものだ。

「で、何の用だよ？」

「……………」

「六年ぶりに会ったんだ。何か話があるんじゃないのか？」

「う……………」

箒はそこではつ悪そうに黙りこんでしまう。

気まずい。教室にいるとはまた何か違った意味で気まずい。何か会話をせねば。

ていうかそれしなかったらなんで人目を気にして屋上まで呼んだんだ箒……………。

「そういえば」

「何だ？」

ふと言わなければならないことを思い出した。

「去年、剣道の全国大会で優勝したってな。おめでとう」

赤らめながら口をぽかんと空けている。

「なんでそんなこと知ってるんだ」

「なんでって、新聞で見たし……」

「な、なんで新聞なんか見てるんだっ」

いや、逆に聞くがなんで俺は新聞を読んではいけない？

あれ、褒めた筈なのになんで俺怒られてるんだ？

「あー、あと」

「な、何だ!？」

興奮しすぎだ。ちょっと落ち着け。

「久しぶり。六年ぶりだったけど、篝だっですぐに分かったぞ」

「え……」

「ほら、髪型一緒だし」

そう指摘すると顔を赤らめながら長いポニーテールを弄り出す。

「よ、よくも覚えているものだな……」

「いや、忘れないだろ。幼なじみのことぐらい」

「……………」

その一言で急に視線が厳しくなる。いやいや、なぜそこで睨まれなきゃならない!?

むしろ、覚えてたことに対してもう少しだけ感動して欲しいんだが……なんて希望を箒に持てる筈もない。

「まあ、仕種の方は自己紹介されなきゃちょっと分かんなかったけど」

「仕種か。私もあの変わり様に驚いたが、あれは変わり過ぎだ」

「だろ？ あれを仕種だつて言われても分かんねえつての」

露崎仕種。

箒と同じく、俺の幼なじみの一人。

あいつは箒とは別の意味で見違えた。

箒の場合、俺の持っている箒像そのままに成長した感じだったためすぐに判った。

無銘の日本刀みたいな感じが名匠が作り上げた日本刀にランクアップしたような……そんな雰囲気だ。

しかし仕種の場合、何もかもが違っていた。

当時の面影すらない、虫の変態に近い感覚だ。

アオムシがチョウに変わるのと同じようなあの感じ。

あんな綺麗な紫がかった黒髪の似合う子になっているなんて思いもしなかった。

目元は子供の頃の名残があるが、それ以外はまるで同一人物とは思えない変身振りだ。

だから名乗られるまでホントにあの子が仕種だって判らなかった。

会ってない期間は箒よりも短い筈なのに……月日というものはこつも人間を変えてしまうのか。

「なあ、一夏……」

箒が何か言いかけたところで二時間目の始まりを告げるチャイムが鳴る。

「俺たちも戻ろうぜ」

「わ、分かっている」

他の奴と同じように教室へ戻っていく。流石はIS操縦者、行動が早い。

(ああ、この後もあの訳の分からない授業か……)

帰り道で次の授業のことが頭をよぎる。

そう考えるだけで頭が痛くなる。

よし、後で篤か仕種に聞いてみよう。聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥と言っし。

土下座でもなんでもしたらきつと教えて貰えるだろう。

Side: 露崎仕種

一夏と篤が外に出たそんな頃。

私はちよつとした厄介事に絡まれていた。

「ちよつとよろしくって?」

金の縦ロールに青のカチューシャ、そして淡いサファイアのようなブルーの瞳。そして『いかにも』今の女子という雰囲気を感じたこの感じ。

そう、これが厄介事である。

今の世の中、ISの登場によって大きく女性が優遇されている、
というか女性「偉い」という式が完成してしまっている。

そうなると男性の立場は完全に労働力、奴隷のそれと変わらない。
そのため男性が女性のパシリとして走り回る姿が度々目に映る。

それにこういった自分様は偉いという手合いはあまり好きではない。
い。

今まで偉そうな奴と散々相手にして来ただけあって適当なあしらい方は知ってはいるがそれでも好きになれない人種に変わらないのだ。

「なんででしょう?」

「貴女も教官に勝ったと聞きましたけど、その情報は間違いじゃなく
くて?」

私が試験官に勝ったことを認められないと言いたげな雰囲気を醸
し出す。

彼女の雰囲気からすると実際いいとこの身分なのだろう。

「生憎と、その情報は事実ですが。それとも教官に勝った人物が二

人もいては不服？」

私の言葉に一瞬、悔しそうに顔を歪めるがすぐに体裁よく取り繕う。

「っ。いえ専用機持ちなら当然のことだと思ひまして。イギリス代表候補生、このセシリア・オルコットに同じクラスで学べることを幸運に思いなさいな」

要は自分は代表候補生だから偉いと、選ばれた人間 エリートだから偉いんだと。だからラッキーなんだと。

なんちゅう飛躍した思考してるんだ。それにホントに偉い人間って自分を誇らないらしいですよ？

「……まあ、そうですね。一年のこの時点で専用機持ちと同じクラスになれるのは運がいいといってもいいでしょうね」

「ええ、そうですね。そうですねとも！」

私が調子を合わせてやっただけなのにえらくご機嫌だ。

だって半分事実で半分投げやりな回答を全部真に受けているんだもの。

あれ？ もしかしてこの人、案外ちよろい？

「しかしそれを他人に押し付けるのはあまりよくないので次からは考慮していただきたいのですが」

「む。どうしてですか？ わたくしの素晴らしさを理解してください。だから他の方も理解してください。さるはずなのですが」

勝手に理解したことにされちゃったよ。理解したつもりはないんですけど、ね……。

「……理解したつもりはないんですけどね」

「？ なにかおっしゃいました？」

いけないいけない思わず本音が漏れてしまった。しっかりせねば、口チャックと。

「それにしても、どうしてあの男はここに入学できたのかしら？ 前の授業でも一つも理解してなさらなかったようですし」

……後半の点だけは同意。いくら今までISとは無関係だったとはいえここは入学前に事前学習が必要な学校だ。そのための参考書を読んでなかったのだろうか？

「だいたい、男というのは無能なのよ。あの男もきつと何かの偶然が重なってここに来てしまっただけに決まっています！ その点、貴女は物分かりが良く大変聡明な方。よろしければわたくしが仲良くしてあげてもよかったですよ？」

つまりはわたくしと近しい立場にいる人間だから友人になってあげてもよかったですよ？ そういうことを言いたいらしい。

一二つ返事で返せばいい。それが穏便にすませる反応だ。

「ふっ。「冗談を」

しかし、彼女の放ったその前の一言が私の琴線に触れたためそれが出来なかった。いや、しなかった。

「は？」

ピシリとセシリアの笑顔が張り詰める。

「私は友人を卑下する人間とはとてもではないですが仲良くは出来そうにないですね。残念ですが」

「あ、貴女それってどういう……」

突然の出来事に訳が分からないといった風にくるたえる。

セシリアは当然、肯定してくれるものだと思っていた。先ほどまで自分の意見を肯定してくれたし好印象だった。おまけに専用機持ち。この人物は自分に相応しいと彼女は勝手に思い込んでいた。

だから私という人間が手のひらを返したように否定したということに思わぬ事態に狼狽した。

「織斑一夏、彼は私の友人ですが」

セシリアはその言葉に完全に絶句する。

「半分は認めましょう。しかし偶然とはいえ男がISを動かしてしまつたらその時点でここ以外に選択肢がなくなつてしまつたと思えるのが一番妥当でしょう」

「それに、一夏は馬鹿おこであれ無能なんかじゃない」

私の静かなプレッシャーに気押されてセシリアはたじろぐ。

「あ、貴女身の振り方を弁えた方がいいじゃありませんこと!?!? それはわたくしとブルーティーズを敵に回してこれから平穩な学園生活を送れると思つての物言い?」

挑発ともとれる言葉にふと過つたアレと今後の学生生活を天秤にかける。

「ええ、送れるでしょう。何の不自由もなく」

鼻で一蹴しながら自信あり気に応える。

自信を持ってこれは言える。

私は人間としての最底辺を知っている。

アレには一切の妥協は許されず、一切の自己意思は存在しない。

あるのは繰り返し行われる作業、作業、作業の数々。

そんな場所に比べ比べればここは極楽浄土のようなものだ。

それに、私自身目の前で他人を見下して驕る人間には負けないだけの力は備えているつもりだ。

「それは私が取るに足らないということですか!？」

「そう思つのであればそうなのでしょう?」

怒りがある点を超えると冷静になるらしい。目をすっと細める。

「日本は礼儀を重んじる国だと聞きましたが、貴女は些か口が過ぎますわね」

「生憎と大和撫子とは程遠い育ちで。平民の不法法くらい寛大な器で流して欲しいんですが、無理でしょうか?」

にらみ合った二人の間にタイミングよく二時間目の始まりを告げるチャイムが鳴る。

「まあ、いいですね。詳しい話はまた後ほど」

そう言い残してセシリアは自分の席へ戻って行った。

言い過ぎたかな。まあいいか。あんな驕った人間に対しては言い負かすくらいでちょうどいい。

二時間目の終わり、一夏も私とおんなじように絡まれていた。ご愁傷様。

三時間目は一、二時間目とは違い山田先生ではなく千冬先生が教壇に立っていた。

「それではこの時間は実践で使用するための各種装備の特性について説明する」

それに関しては既に詰め込んであるため特段問題はない。

むしろ、私がヤバいのは一般教養。特に古文、漢文、英文法、数学……あれ、詰んでない？

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決め

ないといけないな」

そう思い出したように口にした。

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……まあクラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスに実力推移を測るものだ。今の時点でたいした差はないが、競争は向上心を生む。一度、決まると一年間変更はないからそのつもりで」

色々大変な役柄がごっちゃになったのだが、要するに小学校でいう学級委員みたいなやつだ。

選ばれる人にはご愁傷様としか言いようがない。

もっとも、選ばれる人間なんて決まっているようなものですね。

「はいっ。織斑くんを推薦します！」

「私もそれがいいと思います」

次々と一夏が推薦される。

まあ、当然といえば当然。物珍しさとクラスの看板の意味を込めたら彼以外に適役はいないか。

「では候補者は織斑一夏……他にはいないのか？ 自薦他薦は問わないぞ」

「お、俺!？」

いや、織斑一夏は貴方しかいないでしょう。

「織斑。席に着け、邪魔だ。さて、他にはいないのか？ いないなら無投票当選だぞ」

「ちょ、ちょっと待った！ 俺はそんなのやらな」

「自薦他薦は問わないと言った。他薦されたものに拒否権はない。選ばれた以上は覚悟をしろ」

おおう、なんとという帝政。ここの国は民主政治じゃなかったのか。

「いや、でも」

「待って下さい！ 納得いきませんわ！」

一夏が反論しようとしたところでバンと机を叩いて立ち上がるセシリア。そういえば、さっき一夏と揉めてたなあ。

「そのような選出は認められません！ 大体、クラス代表が男なんていい恥さらしですわ！ わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか!？」

おーおー、言いますねえ。いまどきの女の子ってこれほどなまでに男嫌いだっけ。

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！ わたく

しはこの様な島国までISの修練来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ありませんわ!」

男を猿呼ばわり、ね。一昔前は男女平等とか言っていたのによくもここまで身分が落ちたものだ。というかイギリスも島国でなかったか？

「いいですか!? クラス代表には実力があるものがあるべき、そしてそれは国にも選ばれた代表候補生であるわたくしですわ!」

怒涛の剣幕で捲し立てる。普通ならここで一回落ち着くのだろうが、セシリアの自分自慢は益々熱がこもっていく。

まあよくもこうも自己主張出来たもんだ。その一点にだけは感心させられる。

ただ、相手を貶して自分の方が優れているという言い方が気に喰わない。

それに私自身、恥ずかしい話だが気の長い方ではない。

だから、もしこれ以上貶されるようなことが続くのであれば。

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなければいけないこと自体、わたくしにとっては耐え難い屈辱で」

我慢の限界だ、と思うより先にセシリアの言葉が私の堪忍袋の緒を切った。

ああ、もうこれ以上エリート様の演説を聞いているのは耐えられ

ない。

「イギリスだって「じゃあ、悪いですが帰っていただけませんか？」……し、仕種？」

何かを言おうとした一夏よりも早く私の口が言葉を吐いて出た。

「な……！ 貴女、何を言ってる！」

予想外の方向から一言だったのだろう、自称英国淑女様は思わず狼狽している。

「こんなところにいるのが耐えられないのでしょうか？ なら、とつとと荷物まとめてお国へ帰っていただけませんかと言ってるんです」

「だ、誰がそのようなことを！ 貴女、わたくしの祖国を侮辱しますの！？」

「私が侮蔑しているのは貴女であって貴女の祖国ではないんですが。それともあれですか？ 私が祖国ですとかいうクチですか貴女は？」

くつくつと笑う。ああ、ダメだ。あの高慢ちき金髪縦ロールが赤くなつてく表情が面白くて仕方ない。

人の不幸は蜜の味……とはいかないが気に入らない相手を言い負かすことに関しては不本意ながら自分の好きなことの一つなのかもしれない。

「日本人を黄色人種イエローモンキーと馬鹿にするのも構いませんよ。貴女がどういう教育を受けてきたかの質がそこで図れますしどうい風を考えて

いるのか分かるので」

こう言う時に限って相手の上げ足を取るような言葉がスラスラと出てくる。

「舌好調女、露崎仕様です。どこの野球選手だ。」

「しかし、貴女の言う猿がISを開発したと言うことを忘れていただいては困りますけどね。それすらも理解出来ないなんて猿以下ということでしょう?」

それこそが決定的にして致命的な一撃。セシリアが後進的と称したことの最大の矛盾点。

周知の通りISを発表したのはまぎれもない日本人、篠ノ之東である。その彼女の多大な功績あつての今の世の中だ。

つまりは彼女がISを作らなければ女尊男卑の世の中は有り得なかったのだ。

このような世の中を作った人物の祖国を後進的と称するのはあまりにもおこがましい限りである。

「……あ、貴女、わたくしに喧嘩売ってますの?」

顔を真っ赤にしながら睨みつけてくるセシリア。しかしその言葉は矛盾点を指摘された動揺が見て取れる。

「日本侮辱して喧嘩吹っ掛けたのはそっちが先でしょうに。私はそれに見合っいい値で買ったまで」

それを席に座ったまま冷ややかな目で流す。

「あ、あの仕種、さん……？」

一夏には何故かさん付けで呼ばれる始末。

周囲の女子も険悪な雰囲気におろおろしているが、そんなことは別にどうでもいい。

これほど言われっぱなしというのは周りがよくても私が我慢ならないのだ。

耐え忍ぶというのは日本人の美德かもしれない。

しかし、言いたいことを飲み込んでしまっただけは駄目だと私は思う。

自分に正直に。言いたいことははっきりと。

強制に囚われていた自分とは違う。選択権を与えられなかったあの場所とは違う。

ここには、私の求めていた『自由』がある。

日の当たらないジメジメした空間ではない。

ここには、私のしたいように出来る場所があるんだ。

「私、今の時代に珍しい男女平等思想の持ち主ですので男のこと、見下してる人にはどうにも我慢できないんですよね」「

くすくす笑いながらも言葉を続ける。

「男は奴隷なんかじゃない。ましてや猿なんかじゃない。彼らはれつきとした人間です」

はつきりと全男の意思を代弁せんが如く侮辱したセシリア対して宣言した。

「決闘ですわ！」

私に指差し、そう宣言する。手袋をしていたら投げつけてくれるんだろうか。

「受けて立ちましょう。それで、時間は何時がよろしいですか？」

「そんなもの聞かれるまでもありませんわ！ 今日の放課後、第三アリーナで……」

「何を勝手に決めている馬鹿者。そういうことは教師を通せ」

パンツ！ と小気味よい音が頭蓋骨に響く。

いいのは音だけ。実際は無茶苦茶痛い。うおおおお……何故私だけ……。

「明らかにお前が言い過ぎだからだ。それで、露崎は織斑を推すのだな？」

「はい。クラス代表は全体の意見を聞ける人間がいいと思いますの

で。強さなんて追々身につければいい話ですし」

頭を押さえながらそう言ってちらりとセシリアの方を見るとぐぬぬと言い負かされて悔しそうに睨み返してくる。いい気味だ。

「では露崎が勝てば織斑が、オルコットが勝てばそのままオルコットがクラス代表となる。両者、それでいいな」

「ま、待てよ千冬姉！ 俺はそんな……」

反論しようとした矢先にガンと机に叩き伏せられる。

「織斑先生だ。それにこれは決定事項だ、お前の意見は聞く耳を持たん」

「……はい、織斑先生」

目の前の光景はまさしく女尊男卑の体現。

女子の無理が通れば男子の道理が引つ込む。

クロすらシロに変えてしまうとはこのことだ。

「待って下さい。わたくしは織斑一夏とも決闘を申し込みますわ！」

「はあ！？ なんで俺まで……」

「あら、露崎さんが男性に対してこれほど買っていらっしやるのに貴方はそれを無碍にするおつもりですか？」

「ぐ……」

セシリアには間違ったことを言っていないため一夏は反論できない。

「ここで買わなきゃ男が廃りますよ一夏」

「そつだぞ一夏。男を見せろ」

私の面白の茶化しに何故か箒の援護攻撃。嬉しい誤算である。

「こう二人は言ってるが織斑、どうする？」

「だー！ もう分かったよ！ その勝負買ってやるよ！」

一夏がそうやけっぱちに声を荒げるのを見ると千冬先生は口元をニヤリと釣り上げる。これは確信犯だな。

「決まったな。露崎とオルコットの勝負は二日後の水曜、織斑とオルコットの勝負は一週間後の月曜。それぞれ放課後の第三アリーナで行う。織斑と露崎、オルコットはそれぞれ用意をしておくように。それでは授業を始める」

手をパンと鳴らして千冬先生が話を締める。

準備するための期間は一夏よりも短いがまあ、経験もあるし後は相手のISのデータだけなんだが相手は代表候補生なんだからどこかに露出はあるだろうしなんとかなるか。

そこに考えが行き着くと、授業に集中し直した。

第2話 「平民の心、エリートは知らず」(後書き)

仕種とせっしーはどうしてこうなった？

次で「クラスメイトは全員女」が終わります。

オリIS？ もうちょっと待ってくださいね。

第3話 「再会する幼なじみたち」 (前書き)

3日ぶりです。やっと小説の1話分が終わる。

ノープラン投稿が続くと思います。がぬるい目で見てやってください。

第3話 「再会する幼なじみたち」

授業が全て終わり放課後。教室を後にして現在は職員室前にいる。

理由は至極簡単。

「露崎、会議の前に少し話がある。着いて来い」

との千冬先生から直接ご指名をいただいたからである。ちなみに一夏は授業後、授業内容の理解が追いつかず重度のグロッキー状態で私と呼ばれたことなど知る由もない。

そんなことを考えていたらドアが開き呼び出した本人が出てきた。

「すまない、待たせたな」

いえ、と短く返すと千冬先生は壁にもたれかかる。

「それで、うまくやっていけそうか？」

千冬先生からそう切り出される。

ただ声色は教師の時の厳しいものではなく、近所のお姉さんのような幾分か優しいものだった。

「まあ、それなりに。学校なんて久しぶりなものですから集団行動に馴染めるかどうか」

「ほう、それなのに初日から騒動を起こすのかお前は」

上げ足を取るように意地の悪い笑みを浮かべる。

「う……」

そう言われると反論に出来ず言葉が詰まる。

そもそもきつかけは単に上から目線が気に入らないのと男を馬鹿にしたことに対して吹っかけた痴話喧嘩である。

それがあれよあれよという間に事が大きくなり、その延長にたまたまISの勝負があったというだけのことであって。

結局のところ、この両者の争いの根幹は「侮辱ひげされたからやり返す」という実にガキの喧嘩みたいなものだ。

「仕方ないじゃないですか、腹が立つたんですよ。それに私が起こさなくても一夏がやっていたでしょうし」

「言いかけたところをお前に被せられたからな」

とはいえ、一夏も結局あのイギリスの代表候補生と戦う羽目になったけど。何も言えなかつたうえに勝手に戦うことが決められてしまつて実にお気の毒様だ。

「で、勝算はあるのか？」

そう聞かれると、私は質問の可笑しさに歪な笑みが零れる。

「勝算がある、ないの問題じゃないんですよ千冬先生。私は、全ての勝負に勝たなければいけないんです。息をしなくてはいけないことと同じで私は勝たなきゃ生きていけないですよ」

勝たなければ明日がある保障がない。私の人生はそうであったしこれからもそうなのだろう。

更に失敗すれば明日がない。一時期はそんな生活すら強いられていた。

幸いと天の助けか敗北とは遠い生活を送ってきた　　というよりも勝負事から身を遠ざけていた　　がここは違う。

IS戦に常に勝敗は存在する。ISを操縦する限り、勝負に身を置かなければならない。

自分は人一倍負けてはいけない立場なのに勝ち負けがつく生き方しか選択肢がなかったとはなんとも皮肉な話である。

「そうだったな。お前も、あいつも難儀な宿命を背負ったものだな」
そう思い出したように呟く。

「家系の問題ですし、こればかりはどうにもならないですね」
抱えている問題のあまりのままならなさに思わず苦笑する。

世の中にどうしようもないことは存在する。

織斑の家も篠ノ之の家も私の家も世の中の不条理にさらされた。

私たちの場合はその一つが家系のことだったというだけで……。

「それで、あいつの調子はどうなんだ？」

「ええ、割と良好らしいです。医者の方からもそろそろ仕事しても大丈夫だって言われてますし」

「そうか」

それを聞いて安堵の表情を浮かべる。

「さて、私も行くか」

「これから会議ですか？」

「いや、その前にあいつの荷物のことを伝えにな」

「？ 一夏は寮に入ってなかったんですか？」

「本来なら一週間は家から通うことになってたんだが如何せん事情が事情でな。急遽、部屋割りを弄って相部屋にした」

……もう何も言つまい。

「道草せずに帰れよ露崎」

そう苗字で告げて先生として教室に向かっていった。

「そう言われて素直に帰るほど人間が出来てないんですけどね私」

とはいえ今の時間から行ける場所なんて限られている。うーん、部活見学でも行きますか……。

色々な場所を巡っていたら案外と時間が過ぎてしまった。

部屋に帰る途中、夜は何食べようかなんて考えながら歩いていたら目の前に黒山の人だかりが出来ていた。

こんなことになる騒動の元凶なんて鼻っから知れてますが。

「……まったく、なにやってるんだか」

そう誰にも聞かれないくらいに小さく愚痴ると騒動の中心に向か
つてすたすた歩を進める。

「一夏」

「し、仕種か……?」

廊下にへたり込みながら私を見上げる一夏。仏様にでもあつたか
のような表情だ。

「ええ、何があつたんですか?」

「ああ、部屋に入ったら箒がいて……」

「分かりました。皆まで言わなくて結構です」

「え、俺まだ全部言っていないのに……」

どうやら相部屋の住人は箒で、一夏が部屋に帰った時に偶然持ち
前のラッキースケベが発動してしまつて追い出された、とそれくら
いの予想は朝飯前です。

「一応聞きますが、部屋は間違つてないのですね?」

「お、おう」

「ん、分かりました。なんとかしましょう」

「ねーねー織斑くんってさ露崎さんとどういう関係なの?」

とりまきの女の子の一人が一夏に話しかける。

「どついう関係ってただの幼なじみだよ」

『え!?!』

周囲の女子たちがざわめく。また一夏がいらんことを言ったのだろつ。

「い、いつからなのかな」

「小学校の頃からだけど。箒の家が剣術道場をやっていて仕種も俺より後からだけどそこに通ってた」

「じゃ、じゃあ織斑くん篠ノ之さんとも幼なじみなの？」

「そうだけど」

その場にいた全女子が息を呑んだ。「これなんて幼なじみ補正?」とか「幼なじみとか……。くっ、鉄板じゃないの……。!」とかがちらほら聞こえてくる。しょーもない。

きゃいきゃいと後ろで質問攻めに合ってるの知らん顔してコンコンとノックをしてドアに向かって話しかける。大勢の前でこれやるのってなんかシュールな気が……。

それにこのドア、いくつか穴が空いてボロボロになっている。打突で木製ドアを打ち抜くなんてどんな……。いや、なんにも言うまい。

「筈、仕種ですが」

「仕種か？ 何の用だ」

あまりにもつつけんどんな回答。筈の声から不機嫌が滲み出ている。

「要件を簡単に言います。一夏を部屋に入れてくれませんか？」

「な……！ どうしてそのようなことを！」

「ここは一夏の部屋でもあるのですが」

「知るか！ 廊下でもどこでも寝ればいいたろう！」

ドアの向こうで声を荒げはつきりとした拒絶の意思を示す。おおよその構成成分は恥ずかしさと怒りによるものだろう。

「そうですね。このままでは一夏が他の人間に喰われることになるのですがそれでも……」

「ま、待てっ！ 喰われるってどういう意味だ！」

私が含まのある一言を言ったら案の定、食いついてきた。

「深く考えずその言葉通り、ぱっくりと」

だってそりゃそうだろう。一対多。数の暴力に肉体的に普通の高校生の一夏が敵う筈もない。もっと分かりやすく言えば一夏のていそ……。

「一夏！ は、早く入れ！」

早かった。実に早かった。まさしく魔法の呪文のようだ。

「お、おう」

凄みで押されながら返事を返す。

「サンキューな仕種。そっだ上がってけよ」

「いえ、そういう訳には」

「遠慮すんなよ。それに話したいこともあるし」

こちらの気苦労も知らずに。

後ろをちらりと盗み見する。ここで断ればどうなる？ 繰り上げ式に後ろの女子が詰めかけてくること間違いない。

そうなると一夏がまたほっぴり出されて以下エンドレス。

「……じゃあ、少しだけお邪魔します」

そう言って入ろうとすると後ろから、「ああつずるい！」とか「二人を相手なんて……」とか「やはり幼なじみは伊達じゃない」とか「一部自重しろと言いたいような言葉が飛び交うが相手にしたくないので無視を決め込む。」

部屋に入るとむすっとした箒が仁王立ちしていた。

すぐに着られるのが剣道着しかなかったのだろう。帯の締め方が
緩い。

「何故だ」

はい？

「何故、仕種がここにいる！」

いやいや、第一声にはないでしょう箒さん。なかなか失礼
な言われようをした気がする。

「それは俺がここに呼んだからで」

ギンツ！ と箒の視線が鋭くなる。ヤのつくお仕事の人たちも真
っ青な怖さだ。

あまりのやるせなさに思わず溜息をつく。

「別にいいだろ、仕種も幼なじみなんだし」

「確かにそれは、そうだが……」

箒の歯切れが悪い。

まあ、箒からすれば二人きりでいたいところなのだが一夏が間違
ったことをいつてる訳でもないため強くも言えない。

つまるどころ、私はお邪魔虫なんだろう。なんか虫の居所が悪い。

虫だけに。

「……お邪魔なら出ていきますが」

「気にすんなって。それに今出ていくの無理だろ？」

「……確かに」

ドアの外には女子たちがひしめいているのをドア越しにひしひしと感じられる。今あそこに行くのは自殺行為だとしか言いようがない。

ああ、千冬先生早く外の女子を散らしてください。

それにしても私が気を使って二人きりにしようと思ったのにそれに気がきもしない相変わらずの唐変朴ぶり。むしろ、パワーアップしてる……？

「日本茶でいいか？」

「ええ、出されたものなら比較的なんでも」

「分かったよ。篝もいるよな」

「なんで、そんなもの」

「いいだろお茶ぐらい。せっかくこうして三人集まったんだからお茶でも飲んでゆっくり話そうぜ」

「……好きにしろ」

そう言つとそつぱを向いてしまつ。箒は昔から一夏に対して変に捻くれたところある。素直になるのが気恥ずかしいからそれを隠してるからなんでしょうけど。恋する乙女だなあ。

「それで一夏はどうするんですか？」

一夏の淹れたお茶を飲みながら私から今後についてを切り出す。

「ん？ 何がだよ」

何がじゃないだろ。

「一週間後の代表決定戦。ISのこと全然理解してないようですよ。このままじゃ勝ち目ないですよ？」

「う……」

「ふん、安い挑発に乗るからだ」

「私の言葉に同調したのはどこの武士娘でしょうっ？」

「う……」

負い目があるらしくばつの悪そうな顔をする。

「悪い仕種、このままじゃ何も出来なくて負けてしまいそうだ。俺にISのこと教えてくれないか！」

確かに私は専用機を持っている。ただそれは他の人間よりうまく扱えるだけであってうまく教えられる訳じゃない。やってみるのと教えるのはまるで違うものだ。

それに私自身、大したことを教えられるほどISの事を理解している訳じゃない。教えられるとしたらひたすらに反復練習しろとしか言いようがない。

「箒に教えてもらえばいいんじゃないですか？」

「ど、どうしてそうなる！」

「同室だし私よりも一緒にいられる時間が長いじゃないですか」

「い、一緒……?!」

箒は素っ頓狂な声を出しながら顔を赤らめる。

「ああ、それもそうか」

しかもそれをそのままの意味で解釈する一夏。

「箒、教えてくれないか？」

「私よりも仕種に見てもらえばいいじゃないか」

私の後に頼まれたのが不満なのかふん、と顔を背ける。仕方ない無理矢理にでも背中を押してやるか。

「あの時……」

「ええい！ 分かった！ 何度も言うな！」

「じゃあ、箒。教えてくれるんだな？」

「その前に明日の放課後、剣道場に来い。一度、腕が鈍ってないか見てやる」

「え、でもISSの……」

「見てやる」

「……はい」

何とも言えない威圧感に押され一夏は首を縦に振るしかなかった。

言っておくがたまたま、一夏の周りに強い女子が集まっているだけである。もしくはそういう星の下に生まれたというだけである。あれ、駄目じゃん。

三人で夕食をとった後、二人と分かれ1032と書かれた自室のドアに鍵を差し込みノブを捻る。

IS学園は全寮制で、生徒はすべて寮で生活することが義務付けられている。

付け加えるなら部屋は個室ではなく二人で一部屋の相部屋である。

本来なら私の部屋にも同居人がいる筈なのだが、クラスが奇数なため必然的に一人だけ余る。そしてたまたま私が余った一人に選ばれたというわけだ。

本当はもっと事情があるのだろうけどそれを考えるのはあまりに無粋なものだろう。

扉を開けると一夏の部屋と同様、国立が用意したへたなビジネスホテルよりもずっとグレードの高いベッドが目飛び込んでくる。

ISは国防力に直結する。IS学園の生徒は何万分の一の狭き門を通つての入学のため基本的にエリート扱いされる。そして、エリートの私たちにはそれ相応の待遇があるわけだが。

「贅沢は敵とは言いませんが、慣れないものですね」

一人小さくあるとしたらの不満を愚痴る。

昔から割と質素儉約な生活を送っていたためこういう豪勢なもの

は落ち着かない。しかしまあ、くれるというのなら厚意に甘えて素直に受け取っておくべきだろう。

「ふわ……」

広い二人部屋で小さく欠伸をする。

大したことはしていないのに疲労感が眠気を誘う。

「シャワー……は明日の朝でいいか」

そう結論付けると寝巻に着替えてベッドにボタン。いかん、このもふもふ感は眠気が加速する……。

瞼が落ちて完全に眠りへ落ちる前のまどろみの中、ふと思った。

そういえば。あの金髪ロール、私と一夏と勝負することになってるけど結局はどうなったら代表が決まるんだろ？

第3話 「再会する幼なじみたち」 (後書き)

仕種の容姿なんですけどマジ恋の京みたいな感じですよ。しょーもない。性格は別のキャラをモデルにしています。

イメージCVも性格の人とおなじです。ISもおなじです(才イマテ

ISが出たらたぶん分かるのでそれまで内緒ということ。

第4話 「剣をとる者」(前書き)

一日がかりの突貫作業でよく出来たものだ。自分で自分を褒めてあげたい。

第4話 「剣をとる者」

入学式翌日の朝八時、私は洋食セットのトレーを学食のおばちゃんから受け取って座れる場所を探していた。ちなみにメニューはクロワッサンとロールパン、コーンスープ、ウインナー、マカロニサラダ、ロールパンにつけるプラケースに入った苺ジャム&マーガリンだ。懐かしいな。

きよろきよろと見回していると見知った顔が既に朝食を取っていた。

二人の空気は会話がなく気まずいものと一緒にいてる時点で、

「相変わらず仲がいいというか、お節介を焼いているというか」

篤はああいう性格なため、一人にしておくとすぐに孤立してしまう。しかも本人がそれを気にしていないのだから性質が悪い。そういうところを知っているから一夏は世話を焼いてるんだろう。

私も人のことを言えないが、篤ももう少しだけコミュニケーションの向上に努めたらどうなのだろうか。いや、それこそ無理難題か。篤自身、変なところがあの人に似たんだろう。まったく世知辛いものです。

「一夏、箒、おはようございます」

「ん、ああ仕様か。おはよう」

「……おはよう」

「ええ。横いいですか」

「ああ、いいぜ」

「……………」

私が気に入らないのかむすつとした表情をする。

今更なことですが箒、一夏の融通の利かなさに一々目くじら立てていたら神経持ちませんよ。

「箒、なに不機嫌になってるんだ？」

「不機嫌になどなっていない」

そうやって反芻してる時点で不機嫌だと言ってるようなものですが。

「箒、一夏はこういう人間だと諦めて割り切った方がいいですよ。そうでないところからがしんどいですから」

「分かってはいるが、なんか納得いかない……………」

そう言って味噌汁を啜る。……………まったく世知辛い。

それにしても、一夏に向ける視線は相変わらずだ。まあ、一日二日で態度が変わることはないだろうしそのうち自然なものになるだろう。問題は、

「ねえねえ織斑くんの横にいるのって誰？」

「昨日友達から聞いたけど幼なじみなんだって」

「幼なじみいいな。私も織斑くんの幼なじみに生まれたかったな」

一夏を取り巻く私たちまで興味の対象にされてしまうことである。

知り合いが一夏と篤と千冬先生しかいないんだから一夏たちとつるむのは必然というか。そういった意味で私たちまで見られるのは仕方のないことだというか。

「だから篤」

「な、名前で呼ぶなっ！」

「……………篠ノ之さん」

「……………」

剣幕に押されて仕方なく名前で呼ぶと今度は顔をしかめてしまった。ああ、相変わらず苗字は駄目か。

「ね、ねえ織斑くん。ここいいかなっ？」

見ると同じクラスの女子三人が朝食のトレーを持って隣に立っていた。

「俺は別にいいけど、仕種いいか？」

「好きにしてください。それとも、私と席代わりますか？」

そう一番私寄りに立っていた女の子が「へ？」と声を上げたかと思つと頭からポツと音を立てて真っ赤になる。

「冗談ですよ」

「あ、あはは。そ、そうよね。露崎さんて案外お茶目なんだね」

照れ隠しに笑みを浮かべながら席に着く。これで六人掛けの席がすべて埋まってしまった。

「ああ〜っ、わたしももつと早く声をかけておけばよかった……」

「まだ、まだ二日目。大丈夫、まだ焦る段階じゃないわ」

「昨日のうちに部屋に押しかけた子もいるって話だよ」

「なんですって!?!」

……もう、後ろのことは正直どうでもいい。

「うわ、織斑くんって朝すっごい食べるんだ」

「お、男の子だね」

「俺は夜少なく取るタイプだから、朝たくさん取らないと色々きついんだよ」

そうつらつらと持論を述べるが実は千冬先生の受け売りである。このシスコンめ。

「ていうか、女子って朝それだけしか食べなくて平気なのか？」

三人のメニューは多少違うがパン一枚と飲み物一杯と少なめのおかずが一皿。

「わ、私たちは、ねえ？」

「う、うんっ。平気かなっ？」

「お菓子よく食べるしー」

顔を見合せながら苦笑する。女にはマリアナ海溝よりも深い事情があるのだ。それ以上聞くのはあまりに無粋である。というかかなり失礼である。

「……織斑、露崎、私は先に行くぞ」

「ん、ああ、また後でな」

食べ終わった箸は先に席を立って行ってしまう。

「露崎さんてそんなに食べて大丈夫なの？」

「食べないと頭が働きませんから」

「いいなー。そんなに食べて体型維持出来るなんて」

「ねーねー、なんかコツとかあるのー？」

パンと手を打つ音が食堂に響いた。

「いつまで食べている！ 食事は迅速に効率よく取れ！ 遅刻した奴にはグラウンド十周させるぞ！」

千冬先生が聞き耳を立てていた生徒たちが朝食を取ることに意識を戻す。

ちなみにだがIS学園のグラウンドは一周五キロある。それが十週……軽く死ねる。ていうかフルマラソンを超えているよね？

とはいえ、私は話しながら食べていたのでそれほど急がなくても食べ終えられる。そのままペースを崩さずに食べ終え、一夏たちよりも先に席に立ち教室へ向かう。

二時間目が終わって、一夏は相変わらず授業内容が分からずうん喰りながら教科書を見ている。マジで大丈夫か？ あれで一週間後に代表候補生と戦うんだぜ？

そこに通達事項があるのか千冬先生が歩み寄る。

「ところで織斑、お前のISだが準備まで時間がかかる」

「へ？」

「予備機が無い。だから、少し待て。学園で専用機を用意するそう
だ」

事の重大さを理解していないのか一夏はぼかーんとしている。

「専用機！？ 一年の、しかもこの時期に！？」

「つまりそれって政府からの支援が出てるってことで……」

「ああ。いいなあ。私も早く専用機欲しいなあ」

まったく理解できないといった風の一夏。それを見かねた千冬先生がため息交じりに呟く。

「教科書六ページ。音読しろ」

「え、えーと……」『現在、幅広く国家・企業に技術提供が行われているISですが、その中心たるコアを作る技術は一切開示されていません。現在世界中にあるIS467機、そのすべてのコアは篠ノ之博士が作成が作成したもので、これらは完全なブラックボックス化しており、未だ博士以外はコアを作れない。しかし博士はコアを一定数以上作ることを拒絶しており、各国家・企業・機関では、それぞれ割り振られたコアを使用して研究・開発・訓練を行っています。またコアを取引することはアラスカ条約第七項に抵触し、すべての状況下で禁止されています』

「つまりそう言う事だ。本来なら、IS専用機は国家あるいは企業に所属する人間しか与えられない。が、お前の場合は状況が状況なので、データ収集を目的として専用機が用意される事になった。理解出来たか？」

「な、なんとなく……」

まあ一夏の場合、例外中の例外のためそのデータ蒐集の役割が大きいですけどね。

「あの、先生。篠ノ之さんって、もしかして篠ノ之博士の関係者なんでしょうか……」

遅からず気付くと思ったけどね。千冬先生のことも一日と持たなかったし東さんもおんなじぐらいしか持たないか。ということは次は私の番か……。

篠ノ之東。稀代の天才。ISをたった一人で作成し完成させた千

冬先生と私の姉の同級生だ。

私自身、何度か会ったことあるが普通の人間の思考を逸脱している。だからこそ『天才』と呼ばれるのだろう。

人を食ったような態度を称するなら「狡猾な羊」だ。ちなみに千冬先生は「真面目な狼」、私の姉は「潔癖な山羊」と言ったところか。

「そうだ、篠ノ之はあいつの実の妹だ」

言っちゃっていいのかそんな重要なこと。束さん今世界中の人が血眼になって搜索しているんですけど。でも当の本人はそれをけらけら笑いながら隠遁生活をしているんだろうな。何だこの必死さの雲泥の差は。

「ええええーっ！ す、すごいっ！ このクラス有名人の身内が二人もいる！」

「ねえねえっ、篠ノ之博士ってどんな人！？ やっぱり天才なの！？」

「篠ノ之さんも天才だったりする！？ 今度IS操縦教えてよっ」

それがバレた瞬間、クラス中の女子が篝の席に一齐に詰め寄る。

「あの人は関係ない！」

篝はたまらなくなくなったのか声を荒げた。クラス中の女子は一瞬、何が起こったのか理解が追いついていない。

「……大声を出してすまない。私はあの人じゃない。教えられるよ
うなことは何も無い」

周りにいた人間はそう言われてしまい渋々と席に戻る。私も箒の
気持ちをつ分からなくもないけどね……。

「さて、授業を始めるぞ。山田先生、号令」

「は、はい！」

千冬先生に促されて授業が始まる。箒、大丈夫かな。

「安心しましたわ。まさか訓練機で対戦しようなんて思っていなか
ったでしょうけど」

いつの間にか一夏の席の立っていたセシリアは、手を腰に当てながらそう言った。

「まあ？ 一応勝負は見えてますけど？ さすがにフェアじゃありませんものね」

「？ なんでさ？」

あ、その口癖は何かヤバイ気がする。虎道場に四十回近く足を運ばなきゃいけないような猛者の姿が目につかぶ私はどうすればいい？

「あら、ご存じないのね。いいですわ、庶民のあなたに教えて差し上げましょう。このわたくし、セシリア・オルコットはイギリスの代表候補生……つまり、現時点で専用機を持っていますの」

「へー」

「……馬鹿にしていますの？」

「いや、すげーなと思ったただけけど。どうすげーのか分からないが。あ、そっぴや仕様も専用機持つてるんだっけ？」

「ええ、これがそうですが」

「コサージユか。それが仕種のISの待機状態か？ ずっとオシヤレアイテムだと思っただぞ」

「案外と待機状態はそういうものが多いですね。チョーカーであったり指輪であったり……」

「わたくしを無視しないでくださる!? そういつ行いを一般的に馬鹿にしていると言うでしょう!?!?」

ババン! 両手で机を叩かれる。うるさいですね、こっちが話してる最中になんですか。

「……こほん。先程貴方もう言っていましたでしょう? 世界でISは467機。つまりその中で専用機を持つものは全人類六十億超の中でもエリート中のエリートなのですわ」

「そ、そうなのか……」

「そうですわ」

「人類つて六十億超えてたのか……」

「女尊男卑の割に男も頑張ってますね」

「そこは重要じゃないでしょう!?!?」

ババン! ああ、教科書が落ちたじゃないですか。

「あなたたち! 本当に馬鹿にしていますの!?!?」

「いや、そんなことはない」

「だったらなぜそんなに同じタイミングで言えるのかしら……!?!?」

A .それはもちろん、心の中で馬鹿にしているからでしょう。

「なんでだろうな、箒」

そう言った瞬間に私に振るな！ 的な視線が一夏を貫いた。……
ホントに空気読めないですよね。

「そういえば貴女、篠ノ之博士の妹なんですよってね」

……空気を読めない馬鹿がここにもう一人いた。

「妹と言っただけだ……」

一夏を貫いた視線がそのまま、セシリアも貫く。私だってあれは怖いですし。

「ま、まあどちらにしてもこのクラスで代表に相応しいのはこのセシリア・オルコットだということをお忘れなく」

そう言い放って自分の席に戻っていく。世間一般、今のセシリアを尻尾を巻いて逃げだしたと言うのだ。勉強になりましたか？

「一夏」

「分かってるよ」

こういうときの以心伝心は幼なじみで出来るので助かる。

「任せましたよ」

「おおい！？ 話がちげえじゃねえか！？」

あーあーきこえない。

そのまま、一人でお昼へ向かうのだ！。

遠くで一夏の声が聞こえるがシカトを決め込むことにした。辛辣に扱われることは愛される証ですよ一夏。

早く放課後にならないかな。

side:織斑一夏

で、時間は過ぎて放課後。

「箒との約束で剣の腕を一度確かめてもらうことになった、んだけど……。」

「どういうことだ」

「いや、どういふことって言われても……」

剣道場。手合わせして十分でのされてしまった。いやあ、強くなつたな箒。流石、全国で優勝するだけの實力はある。昔はあんなに俺の圧勝だったのに。

「どうしてここまで弱くなっている!？」

「受験勉強してたから、かな」

「それならば私もしていた! 中学では何部に所属していた!」

「帰宅部。三年連続皆勤賞だ」

そうは言っているが家計を助けるためにバイトをしていた。とはいえバイトのせいにして剣を握るのを怠っていたというのは紛れもない事実で。

「っ! 鍛え直す! IS以前の問題だ! これから、毎日放課後三時間、私が稽古を付けてやる!」

「箒、それよりもISのことをだな……」

「だから、それ以前の問題だと言っている!」

取り付く島もねえ……。

「情けない。ISを使うならまだしも、剣道で男が女に負けるなど……悔しくはないのか、一夏!」

「そりゃ、まあ確かに格好悪いとは思っけど」

「格好? 格好など気にしてられる立場か! それとも、なんだ。やはり、こうして女子に囲まれるのが楽しいのか?」

「な訳あるかよ。どこ行っても珍獣扱いだし、だいたい……」

「やはり今まで剣を取ってませんでしたか」

剣道場の入り口から仕種の落ち着いた声が響く。なんか俺の寿命を引き延ばしてくれたような気がするのなんなんだ?

「仕種、どうしてここに?」

まさか俺にISのことを教えに……。

「いえ、一夏が叩かれる様を見に来ようと思ひまして。面白いものが見れました」

いい性格してるなチクショウ! ええい、少しでも期待した俺がバカだったよ!

「まあそれはさておき、一夏、勝負しませんか?」

「え?」

仕種は俺や箒と同じく篠ノ之神社で剣術を受けていた。無論、実力も把握しているのだが。

「ただし軽くですよ。明日のこともあるので一夏と違って根を詰めてやるべきでもないですし」

そういえば、仕種は明日セシリアと戦うことになっているんだ。たしかにやりすぎて筋肉痛とかコンディション最悪だよな。

「それに私も三年、剣を取っていないのでいい勝負になると思いますがよ？」

挑発とも取れる不敵な笑み。その余裕がいい感じにムカついたので俺はそれに乗ってやることにした。

「ああ、いいぜ。やってやろうじゃないか」

それを聞き届けた仕種は竹刀を借りるとそのまま……。

「ってこのままでいいのかよ」

仕種は制服姿にソックスだけ脱ぐ。防具を借りれるんだったら借りた方が安全のためなんだが。

「私は構いませんよ。一本取れるんでしたら、ね」

そう言ってすつと上段に構える。

仕種は相変わらず構えに隙がなかった。三年間、剣を取らなかつ

たといつて腕は錆付いたとしても型は忘れていない。見覚えのある型は既に鉄壁。

「では、いつでもどうぞ」

先制攻撃権を譲る仕種。なんていうか相変わらずなスタンスだな。

「はああああっ!!」

その言葉に甘えて動く。

あいつはいつも自分から動こうとしない。全ては受けてから、守りから攻勢に転じる後の先が仕種の典型的なスタイル。

「おおおおっ!!」

縦に竹刀を振り下ろすが、読んでたとばかりに受け止め軽くないなされる。

「ぶっ

」!

そのまま俺の勢いを利用し一気に後ろに下がられ距離を取られる。仕種との勝負、やりにくいんだよなあ。追えども追えどもあともう一押しところで上手く逃げられる。

とにかく、攻めるしかない。打って感覚を取り戻さないと。

何十合と打ち合っただろう、いや何度仕種に打ち込んだだろう。攻めては全ていなされその度に距離を離され仕切り直される。仕種の守りは城壁のように硬く、微塵も隙がない。三年間、剣を握っていないというのに相変わらずの集中力。流石は俺たちの中での技巧派だ。

「相変わらずの読みやすい太刀筋と分かりやすい力押し。掠め手とかないんですか？」

「生憎そんなものねえよ。仕種こそ、相変わらずの鉄壁の守りだよな」

軽口を叩き合うが実力は俺の方が負けていた。

仕種の決め手はカウンター。相手が攻め込んで来た中のどこか分らないような隙に反撃の手を打つ。そのタイミングは絶妙でどうしても剣で追い切れない瞬間にこそぞとばかりに打ち込んでくる。

仕種はその気になれば何本でも一本奪えただろうがそれをしなかった。馬鹿にしていることはないが、向こうも三年前の感覚を取り戻そうとしているのだろう。

とりあえず、俺が出来ることは感覚を取り戻すために打ち合うしかない。それに俺から行かないと絶対に自分から攻めてこないし。

記憶にある限り、露崎仕種は強かった。

織斑一夏、篠ノ之箒と同門の仲間の中で一番「剣術」を扱えたのは仕種かもしれない。

真つ直ぐな一夏や箒より、しなやかな仕種は強かった。袈裟で叩き切ろうが真一文字だろうが、全てを巧みにいなす。そしてその僅かな隙を縫うようにして一本を奪う。

力ではなく技。強いのではなく巧い。それが仕種の剣術だった。

しかし、こうして向かい合っていると幸いです。

小学校の頃夕暮れの剣道場、俺と箒と仕種とこうして……。

(あれ……)

ふと、思考が止まる。

何か、違う……。いや、違うけど違わない？ なんとなく名状し難い違和感。

言い表すならその時の光景と今見ている光景が一直線上にあるような気がしない。箒ではこのようなことはない筈なのに。

それはまるで、脱線したレールの上を走り続けているような……。

「いつ!?!」

パシンっという音と共に目の前に閃光が走った。

どうやら、違和感を探すのに必死になりすぎて面打ちを食らったらしい。打たれた場所ががじんと痛む。

「……一夏、勝負の最中に呆けるとはいい度胸です。集中力もそこまでおざなりになっているとは救いようがありませんね」

顔は笑っているが、心は笑っていない。しかも心なしかいつも以上に辛辣だ。

「むう、一戦でなんとなく掴めてきましたがまだ足りません。もう一戦、要求します」

そう言つと目を細めてすつと上段に竹刀を構える。その構えはさつき同様隙がないのだが、

「……やっぱりなんか違うような」

「? 何が違うというのだ」

「箒も仕種と剣持って向かい合ったら分かるって、ほら」

竹刀を渡され言われた通り構える。

「む」

仕種と向き合った筈は思わず声を漏らす。

「確かに……何とも言えない違和感を感じる」

「だろ？　そのせいで集中力切れちまって」

「へえ、そんなに可笑しいですか私が剣を構えるのは」

違和感があると言われて気に入くないのかじとりと睨む。

「いや、なんていうのかな。うーん、なんていうか……。ああ、分かんねえなあ。なんて言えいいのか言葉が出てこねえ……」

もやもやした気持ちが残るがまあ仕方ない、こればかりは突然どこかでこのもやもやの正体が閃くかもしれないし今は保留だ。

「今度は私が見てやるう」

「ふふ、お手柔らかに」

「六年前とは違うことを見せてやるう」

あれ？　これって俺のためなことだよな？

第4話 「剣をとる者」(後書き)

次回、いよいよIS戦です。

オリ主の姉はもう少し引つ張る予定。

剣道の描写？ なにそれ美味しいの？

第5話 「紫陽花、開花」 (前書き)

実家に帰っていたため投稿が遅くなってしまいました。申し訳ないです。

戦闘描写って難しい。

第5話 「紫陽花、開花」

「仕種、お前なに食ってるんだ？」

食堂に出会って第一声がそれってなんですか一夏。

今日は珍しく篝とは一緒にいない。後に篝に聞いたんだが篝曰く、「今朝は顔も合わせたくなかった。それだけだっ」とのこと。昨日の晩にまた何かやらかしたんですか一夏……。

「何ってカツサンドですが。見れば分かるでしょう」

そう言って断面を見せてやる。ソースカツがほんのりと焼けた食パンにはみ出んばかりの大きさに挟まれている。しかもカツがジューシーなことこの上ない。

「いや、分かってるけどさ」

一夏は煮え切らないのか渋い顔のまま席に着く。私はそんな態度も全く気にせずカツサンドを頼張る。

「食堂のメニューにカツサンドなんてなかった気がするんだがなあ……」

「オバチャンに言っても作ってもらいました。いわゆる裏メニューっ

て奴です」

「んなこと出来るのかよ!？」

「トンカツ定食が出来るんですからこれも不可能ではないでしょう」

それを聞いた一夏はあまりの唐突さにぼかーんとした顔をする。私だってダメ元で頼んだんですがまさか作ってくれるとは、IS学園の食堂のオバチャン恐るべし……。

「あー、カツ食べてるのってやっぱりゲン担ぎ？」

頬張りながら喋るのは行儀が悪いので無言で縦に頷く。

今日の放課後にはセシリアとの勝負が控えている。これもそのための下準備だ。

勝負事がある日にはカツを食べると相場は決まっているのだ。これを食べるのと食べないのでは安心感が違う、もう既に一種の儀式となっている。

だがしかし、朝からガッツリ食べたくない自分にとってカツ丼やトンカツというのは胃に負担が大きいため、せめてものカツサンドということどこに落ち着いている。だったら昼にトンカツ定食を食べばいいじゃないかという無粋な質問は受け付けませんよ。

「仕種もジnkusとか担ぐんだな。ひよっとしてIS学園に入学する時も？」

「ええ」

さもありなん。当然のことだ。

「これでは昼寝さえ出来ればコンディションは完璧なんですけどね」

「仕種、千冬姉の授業でそれはいくらなんでも蛮勇過ぎるぞ……」

一夏は呆れたと恐れに含まれた調子で説得を試みた。どちらかというよりもそんなことをした時の惨状を想像しているようでもある。

「出来ればと言っただけです。実際にするつもりはありませんよ」

一夏の恐れに満ちた表情が滑稽でくすくすと笑う。まあ実際にはつてしまいそうなのが今日の前に座つてたりするんですが。

「あれ、なんでだ？　なんか今誰かすげえ馬鹿にされた気分だ……」

「気のせいでしょう」

とはいえそれにどうしてこういうことにだけは鋭いんでしょう？　女性関係は貧血眼鏡殺人貴並かそれ以上に鈍いくせに。

「仕種、大丈夫なのか？」

「それは一週間後に行われる貴方にかける言葉でしょうか？」

「ぐ……」

相変わらず辛辣な言葉を浴びせられる一夏。箒も隣でうんうんと頷かない。一夏がもつと凹むでしょうが。

第三アリーナのAピット。時間は放課後、セシリアとの試合開始前に幼なじみがピットに駆けつけてくれた。

IS学園のアリーナは放課後に全生徒に解放される。千冬先生がそれをなんとか確保してくれたがそれでも一時間が限度。それに専用機持ちの決闘を見ようと学園中の生徒が見に来ているらしい。

「さて、行きましようか」

そう呼びかけると髪につけていたコサージュが光を放ち、瞬時に鮮やかな紫色をしたフレームが身体を包む。

四枚の多方向性推進翼、両肩の展開式スラスタバインダー、脚部自身を覆うような巨大なスラスタユニット。更には肩部や腰部などに多数配置されている姿勢用制御用のノズル。

多少重装甲じゅうくになってしまったがそれでも機動力は折り紙つき。その上射撃補正などもIS自身はかなり学習している。

「これが、仕種のIS……」

一夏は始めて身近で見るISの展開に感嘆の声を漏らす。

「ええ、紫陽花オルテンシア。カスタム元のデザインとは程遠いものになってますがかなり私好みに弄った優秀な子ですよ」

「カスタム元って、これは元々量産機なのか？」

隣にいる筈が尋ねる。

「ええ。第二世代リファール・リヴァイヴ、疾風の再誕。打鉄と同様、汎用性の高い機体です」

ちなみに打鉄とは純国産の第二世代ISのことだ。ガード型で使いやすい多くの企業や国家が訓練機として採用している。

「露崎さん、準備はいいですか？」

「ええ」

山田先生の確認に短く答え、そして一夏の方に向き直る。

「一夏、しっかり見ておいて下さい。参考になるかどうかは分かりませんがどうせ刀一本の機体フレード・オンリーに乗ることになるでしょうから回避の仕方とかは見ておいて損はないでしょう」

「ちょ、ブレオンってなんでだよ!？」

「なんでって一夏は刀一本で世界を獲った千冬先生の弟ですよ？
その人が用意する機体も刀一本に決まってるじゃないですか」

「なんだよそのカエルの子はカエル理論は!？」

残念、カエルの子はおたまじゃくしなんだなこれが。

「言ってくれるな、露崎」

一夏とやりとりを聞いていたのか、後ろから現れた千冬先生がす
っと目を細める。やば、なんか死相が……。

「どうせそのつもりなんでしょう？ 千冬先生？」

「まあ、否定はしないがな」

「おおおおおおいっ!？」

五月蠅い馬鹿者、とバカッと一夏の頭に拳骨が落ちる。ご愁傷
様。

「それに、お前だって似たようなものだろう?」

「それはまあ、そうですね」

そう言われると尊敬するあの人のことを意識してしまい、少しだけ照れ臭くてくすりと苦笑する。

織斑一夏が姉の千冬さんを尊敬するのと同じように。

私もその高みに立ちたい人がいる。

それはとても身近で、でも限りなく遠くて。

私の憧れで、私のたった一人の肉親^{ねえさん}。

「では勝^いってきます」

「あいつになんか負けるなよ!」

「ああ、勝^つて来い仕種」

あの時と同じようにピットから飛び立った。違うことといえば背負っている人数。幼なじみ二人分、あのときよりも重い。

それでも私の思いは揺るがない。息をするように、今度も勝ちを重ねさせてもらおう。

「あら、逃げずに来ましたのね」

先に競技場に出ていたセシリアは私の少し上空で待っていた。相変わらず手を腰に当てているのが様になっている。

「それに、量産機のカスタム機とは笑止万全ですわ。だからそんな貴女に最後にチャンスを上げますわ」

「一応聞いておくことにしますが、それはどんなですか？」

「わたくしが一方的な勝利を得るのは自明の理。ですから、ボロボロの惨めな姿を晒したくなければ、今ここで謝るといふのなら、許してあげないこともなくつてよ」

セシリアは既に勝った気である。いくらオルテンシアが専用機とは言え相手は第三世代でこっちはあくまで第二世代。性能差はカスタムで埋めたとはいえこちらは機体独自の能力を持ち合わせていない。

それでも。見識や情報で相手を侮るような相手に負けるほどこちらの腕は錆付いていない。

「それはありがとうございます。なら私はお返しと言ってはなんですが、お山の大将でお高くとまってる貴女の社会勉強（こけいけん）のために貴女には敗北の二文字を差し上げましょう」

私の皮肉に顔を歪める。恩情を仇で返されたのがお気に召さなかつたらしい。

「そう、交渉は決裂ということですね。それなら」

警告！ 敵IS射撃体勢に移行。トリガー、確認、初弾エネルギー装填。

ハイパーセンサーが敵機が攻撃態勢に移ったことを告げる。

来る！！

「お別れですわね！」

閃光が放たれるとほぼ同時、身体を左へ回転させ光線をかわす。

「あら、初弾を避けるのですわね」

「冗談。先制攻撃権を貴女に譲ってあげただけです」

「っ。その減らず口、どこまで通用しまして！」

再びレーザーライフル スターライトmk? を構え引き金を引く。

上空からのレーザーによる射撃の雨。本降りにはほど遠いがかなりの数が私を目がけて降り注ぐ。二百メートルのこの競技場で放たれたレーザーが目標に到達するまで僅か0.4秒。いくらISのハイパー・センサーで知覚が強化しているとはいえその時間はあまりにも短すぎる。つまり、かわすには銃口から判断するか完全に直感に頼るかしかない。

「さあ、踊りなさい。わたくしセシリア・オルコットとブルー・テイアーズの奏でる円舞曲^{ワルツ}で！」

「やなことです。一人で勝手に踊ってなさい」

戦いは開幕した。

side: 織斑千冬

「仕種！」

一夏は思わずモニターに向かって叫んだ。

篠ノ之も一夏のように叫ぶことはないがじっとモニター見入っている。

そんな中、山田先生は不思議そうな、それでいて怪訝な表情を浮かべる。

「山田先生、どうかしましたか？」

「あ、いえ。私と戦った時もそうなんです、戦い慣れているというか安定感があるというか」

言葉を選びながらたどたどしく繋げる。

「オルコットさんは代表候補生として長い間ISの操縦してきたから彼女の實力も納得出来るんですが、それを代表候補生でもない露崎さんがオルコットさんを上回るなんて……」

山田先生が言いたいことが分からないでもない。代表候補生でもないのに専用機持ち。そのうえ、代表候補生と渡り合う。何も知らない人間からすればあいつは異常なのだ。

一年のこの時期で代表候補生となれば最低でも二百時間はこなしている。その上、オルコットは早くから代表候補生に選ばれていた。つまり、私の示した最低ラインは軽く通過しているに違いない。そのオルコットを以ってしても仕種には届かない。

「やっぱり、姉妹だからなんでしょうか……」

ぼつり、と山田先生はそんなことを漏らした。その一言に思わず

眉を顰める。

「山田先生。露崎も、あいつも、実力に見合うだけの努力を重ねている。才能のその一言で片付けてしまつてはあまりにもお粗末です」

「そ、それはそうですね。失礼しました」

ばつの悪そうにしゅんと頂垂れる。

「にしてもあの馬鹿者は一体何を考えている」

違和感に顔を顰める。それに気付いている人間は私と篠ノ之だけだよ。あいつも異変に気付いたようで顔を曇らせる。

山田先生や一夏はまだ気づいていない。一夏はともかく、山田先生が気付かないのは拙いのではないだろうか。まあ、抜けたところがあるので仕方ないのかもしれないが。

何気なくモニターを見る一夏の様子を盗み見た。

ひょっとすると……。

一つの可能性がよぎった。しかしそれは限りなく確信に近いものであった。

「そういうことか。あのお人よしめ」

私が心底呆れながらそう呟いた隣で山田先生は不思議そうに首を傾げる。

ホントに、姉妹揃ってお節介なものだ。

真剣勝負の最中でIS戦闘のレクチャーなんて一体どこの馬鹿だ。

side:露崎仕種

「貴女、一体どういうつもりですの……?」

先程まで降り注いでいたレーザー光線の雨はその一言と共に止んだ。

何発が掠って僅かにゲージが減っているが目立った外傷はない。

戦闘にも全然支障をきたさない、まだまだ戦えるレベル。

あれだけの砲撃の嵐を小破もしていないとは自分で自分を褒めて

やりたいものだ。

「どうして！一度も引き鉄を引こうとしませんの!?!」

顔を真っ赤にしながらライフルの引き金から指を離して私を指差す。

引き鉄を引こうとしていないとセシリアは言っているがそれは語弊がある。

何故なら、私は武装を展開すらしていない。

ただ、敵の射撃に合わせ回避行動を繰り返しただけ。

途中からはBT兵器のブルー・ティアーズも投入してきて難易度が上がったが、それでも問題なく回避を続けた。

徹頭徹尾かわすことだけに専念した結果、痺れを切らせたセシリアは攻撃の手を止め、今に至る。

今の彼女は冷静さを欠いている。戦いにおいて冷静さであることは鍵を握る。頭に血が上ると判断力が鈍る。判断力が鈍ればミスを犯す。そのミスが勝敗を分けることとなる。

だからもう一押しをすることにした。

「一夏」

プライベート・チャンネルを開き、Aピットの一夏に繋ぐ。

『な、なんだよ急に』

突然通信を入れられて驚き身構えている。

「もうそろそろいいでしょう？ 後は任せますから」

『お、おいちょっと待てよ！ 仕種、一体……』

用件だけを告げると一方的に打ち切る。一夏は何か言いたそうだったが特に気する必要がない。というか、説明してる時間がないしこれだけで充分だ。

「まさか、貴女あの男のためにデータ収集をしていたと……？」

セシリアの真っ赤だった顔がさっと血の気が引いていき青ざめる。

「まあ、そうですね。一夏は何分初心者なものでデモを見て回避の仕方ぐらい参考になればな、と思ひまして。それに一夏のISがまだ届いてないので見て感じてもらうぐらいしか出来なすし」

「どこまで、貴女はどこまでわたくしを愚弄すれば気が済みますの！？」

青かった顔は再び真っ赤になり激昂する。真剣勝負のつもりがこれまで男のためにわざとかわすことしかしてこなかったのだ。もともとプライドの高い彼女だ。その誇りを汚されたことへの屈辱は私の想像を絶するものに違いない。

「本気を出さないというのなら、そのまま負けてしまいなさい！」

私の態度がとうとう彼女の怒髪天を突いた。先程とは比べ物にならない光の豪雨スコールが降り注ぐ。しかし、その精度は先ほどよりも数段欠いている。

下手な鉄砲も数撃ちや当たると昔の先人は言ったが、出る数なんて砲身一つにつき一つな以上狙いが荒くなれば当然それは無駄撃ちなのだ。

これでかなりやりやすくなった筈だ。

「さて、いきますか」

13分42秒。この試合初めての武装、二丁のハンドガン<フタリスズカ>を展開し構える。

「ふん、ようやく武器を構えましたわね。しかし散々馬鹿にしてくれた相手に慈悲をくれてやるほどわたくしは優しくなかってよ!」

左手を横に振り、ブルーティアーズを飛ばしてくる。

しかし私はもうこの兵器の特性は戦いの中で既に掴んである。

このブルー・ティアーズはセシリアの癖なのか定石に乗っかったものなのかは知らないがあれは私の反応のもっとも遠いところ
死角からの攻撃をしてくる。

後は簡単だ。どこに飛んでくるかが分かるといふことは逆を言えば、相手にどこへ飛ばさせればいいのかを『誘導することが出来る』。

BTのレーザーを回避しながらあらかじめ予想した入射角に合わ

せ、銃のトリガーを引いた。

そしてビットはビームのマシガンに吸い寄せられるように弾が命中し、爆発する。

「っ！」

遠目であったがセシリアの息を飲む姿がはっきりと見て取れた。

「私にとって勝つことは息をすることと同じ、息をするように勝利をもぎ取って見せましょう」

反撃の狼煙が上げられた。

第5話 「紫陽花、開花」 (後書き)

という訳でオリ主、ISのモチーフは毒舌聖母サディステイック・マリアのカレン・オルテンシアさんでした。

セシリア戦は今回と次回の二話になる予定です。

ちなみにオルテンシアはフランス語で紫陽花の意味。

フランス……？ シャル……？ さあて、どうなることやら。

エイプリルフール企画（前書き）

Warning!!

- ・この作品はエイプリルフール企画であると断言しておきます。
- ・気休めに書いたため色々と手抜きです。
- ・思い返しても酷い出来です。
- ・見るなよ！？ 後悔するぞ！？ 絶対見るなよ！？

そんなものでも構わねえという勇者たちは下へGO

東 「はろはろ、世界中のみんなから愛されてる天才美少女の篠ノ之束さんだよ」

千冬「織斑千冬だ。お前の場合、指名^{あし}手配されてるの間違いだがな」

東 「おー、ちーちゃんうまいこと言うねー。座布団の代わりに

東さんがハグハグしてあげよう！」

千冬「止めんか。こんなところまで呼び出して」

ギリギリギリ！

東「痛い痛い痛いっ！　ち、ちーちゃんギブ、ギブ！　ちーち
やんの愛が痛いよー！」

千冬「ほう、まだ軽口を叩ける余裕があるか。では、」

ギリギリギリ！！

東「ぎ、ぎにゃあああああああああああ！！」

千冬「もっとキツく締め上げても構わんだろっ？」

しばらくお待ちください……。。

東 「ち、ちーちゃん酷いよ。ちーちゃんて昔っから愛情表現がバイオレンスだよ……。何度、東さんの天才頭脳が割れそうになったことか……」

千冬 「安心しろ。あれは馬鹿にしかしない」

東 「それって天才の私を馬鹿扱いするの!？」

千冬 「今頃気づいたか阿呆。お前の場合、天才が一周回って馬鹿だからな。よかったな、お前は該当してるぞ」

東 「なんか喜んでいいのか悲しんでいいのか複雑だよ……」

千冬 「それで、私をこんなところまで呼び出して何の用だ。私だっ

て事務が忙しいんだが」

東 「よくぞ聞いてくれたねちーちゃん！ 今回は東さんお手製のISについて説明するのだ！ ブイ！」

千冬「……いや、まだ登場していないオリジナルのISについて説明するのは色々な地雷臭がするんだが」

東「ふふん、そこは問題ナッシングだよ。『ぼくのかんがえたさいきょうのIS』なんて東さんにかかればちよいのちよいなんだなこれが！」

千冬「もう私が反対したところで聞かんのだろうな……。勝手にしろ」

東 「ちーちゃんにそんな風に見放されても東さんは言葉通り勝手に進めちゃうのだ！」

東 「じゃんじゃーん！ これが今東さんが絶賛制作中のIS、黄菊「がねぎく」！ あ、ちなみに黄は「こがね」って読まないからね。当て字だよん」

千冬「菊は日本の国の花だな」

東 「いえーす。ちなみに桜も日本の国の花だよん」

東 「で、黄菊は白式と同じ第四世代ISでスペック的に白式と同じくらいで紅椿に少し劣るかなー。あ、燃費に関してはノーコメントで」

千冬「これだけのスペックを誇るんだ。これで燃費が悪くなかったら化け物としか言いようがない」

東「どんなに優れていても弱点があるってのはお約束だね！
まー、はつきり言えるのはいつくんの白式と通常運用の紅椿よりは燃費が良いってことくらいかな」

千冬「零落白夜を備えた白式とでは比較対象にならん、あれは特別すぎる。データを見る限り強いて挙げるとしたらブルー・ティアーズよりは悪いってところか」

東「ま、ブルーチーズがどうか知らないけど」

千冬「ブルーチーズ……。オルコット、強く生きる……」

東「でー次！ 待機状態！ 黄菊は指輪なんだよ！ チェーンに繋いでネックレスにするもよし！ 指に嵌めるもよし！ 好きなようにアレンジしたまえ！ 私としては本来の使い方を推奨するね！
！ もしよかつたら東さんが直々に……へぶ！」

千冬「これ以上痛い思いをしたくなかつたら自重だ東」

東「……それは最終通告と受け取っていいね？」

千冬「ああ、そうだな。最後通告だ」

東「ふふふ。ちーちゃん、私の答えなんてとつこの昔から決まり切りきつっているんだよ」

「だが、断る！！」

千冬「そうか。東、短い付き合いだったな」

ギリギリギリギリ!!

東 「ギャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアムス!
」!

もっじばらくお待ちください……。

東 「つ、次、武装説明……」

千冬「ボロボロになりながらも自重しないのは流石^{バカ}天才だな」

東 「ほ、褒めたって何も出ないよ……。でもちーちゃんがいい
っていうんなら私のハジ……。「次は砕くから真面目にやれ」……ふ

あい」

千冬「分かればよろしい」

東「ほい！　これがお目玉っていうかこれしかないメインウエポン！　ビーム兵器と実弾兵器をこの一本で使えちゃうお得なロングライフル、ハルジオン？！！　砲身にもレーザーブレード仕込んでいるから接近戦もモーマンタイなのだ！」

千冬「見覚えのある形だな。これはもしか……」

東「はいはい、これ以上は禁則事項ネタバレです。いくら親友のちーちゃんでも触れちゃいけないところがあるんだゾ」

千冬「いや、エイプリルフール四月一日企画なんだからそれほど真剣にしなくてもな」

東「ちゅちゅちゅ。おふざけてっていうのは真剣にふざけてこそ真のおふざけてっていうものなんだよちーちゃん！　そこんところの見通しがまだまだ甘いね……」

千冬「もう勝手に言ってる……」

東「で最後に単一能力なんだけど知りたい？　知りたい？　だけど教えてあげない！」

千冬「……おい」

東「でも、東さんはすごーく優しいから名前だけは教えてあげよかな！」

東 「その名も『百花繚乱』！！ 能力未定！ 皆さんの意見を待ってるよ！！」

千冬 「人頼みか貴様！！」

東 「でもう締めなんだけど。総評するなら、黄菊は白式や紅椿のような高機動近接型とは対になる高機動射撃型。使い手は相当な器用さが必要って感じだね」

千冬 「で、こんなピーキーなISに誰が乗るんだ？」

東 「またまた、分かってるくせに」

千冬 「ふっ、さてな」

千冬 「しかし黄色の機体か。白や紅にしろ今度もまた派手だな」

東 「ええーチューリップみたいでいいじゃない。な〜らんだ〜、な〜らんだ〜、紅、白、黄色」

千冬「……まさかそのために黄色のISを作ったんじゃないだ
ろっな」

東「え？　そうだけど？」

終わり。

エイプリルフル企画（後書き）

本気にするのも嘘と取るのも読者次第。

でも百花繚乱のワンオファビリティは受け付ける。

なんとなく定まってはいるが……厨二病患者の意見も聞いてみたい
気がします。

第6話 「その心に問う」(前書き)

次第にペースが落ちるよ！ 注意してね！

書いていたらセシリアが超ヒロイン回になった。

オルコツ党員でもないのにどうしてだ？(ちなみに筆者はファース
党)

第6話 「その心に問う」

side：セシリア・オルコット

「くっ、そんな……！」

セシリアは焦っていた。対戦相手はカスタム機とはいえ所詮は第二世代。第三世代のブルー・ティアーズと代表候補生の自分なら造作もなく捻じ伏せられるという絶対の自信を持っていた。

しかし、現実はまだで逆。捻じ伏せるところか相手に叩き伏せられそうな嘘のような本当。

機体スペックは確実にこちらが上回っている。操縦技術も同年代では抜きん出ているという自負を持っている。

ではどうして。自分は今、相手に押されているのだろうか？

「ええい、ちょこまかと……！」

こちらの照準も相手のクロス・グレット・ターン三次元躍動旋回により思っように定まらない。

仕様あいてはそんな様子を嘲笑うかのようにブルー・ティアーズBT兵器を翻弄する。そして、言うまでもなく自分は翻弄されている。翻弄すべき武器に自分が翻弄されては本末転倒もいいところだ。

そんな思考の間にもまた一つ、ハンドガンによってブルーティアーズが撃墜おとされる。

「二つ」

爆散するブルー・ティアーズを尻目に冷たい声で宣言する。

「くっ！」

残るビットはあと二つ。冷静でありたいのに焦りはますます加速する。

あちらにはまともな被弾がない。それは自分が一度も命中させられなかったから。

なのに相手が動き出した途端にこちらの被害だけは増してゆく。まるで眠れる獅子を起こしたように……。

冗談ではない。代表候補生でもない人間など赤子の手を捻るくらいに簡単に撃墜おとせる。いや、そうでなくてはいけないのだ……！

「いい加減にまともになりなさい！」

「そんな無茶苦茶な命令は聞けませんよお嬢様。ほら後一つ」

こちらの叫びも虚しく、またひとつBTが破壊され仕種のカウン
トは続く。

(たかが島国の庶民の生意気に……！ どうして、どうして！)

先ほどの挑発も相まってこちらの苛立ちと焦りが最高潮に達する。

戦闘ではいかに自分が冷静でいられるかが求められる。そのこと
は重々理解している。しかし理屈あたまでは分かっているてもそうは言っ
てられない。

ならば、どうしてこんなにも追いつめられる。こんなにも歴然と
した差が存在する。

「ラスト」

最後のBT兵器ブルー・ティアーズが破壊された時にと心に一雫が波紋を立てた。

……ああ、理解した。

これは機体スペックの問題ではない。認めたくないことだが相手
の操縦技術が私よりもずっとかけ離れているだけなんだ。

「さて、これで全部ですか」

作業終了、と何事もなかったかのように言っただけのける。

ああ、わたくしを邪険に扱ったあの時の彼女の振る舞いは正しい。

わたくしは露崎仕種にとってその辺に転がっている有象無象うしやうむしやうに過ぎない。

彼女の實力からすれば、IS学園の一年生は等しく「下」なのだろつ。

そう考えると何故かさつきまで沸き立っていた頭が不思議と冷めていく。

その現実を思い知らされた戦慄。

それを認められない己の矜持。

板挟みまげりになりながらも相手の瞳を睨み返す。そう、まだこの心が折れる訳にはいかない。

わたくしはイギリスの代表候補生。敗北は許されない。強くあらなければ、オルコットの名を守れない。これくらいの障害てきを乗り越えられずしてこれからどうIS学園を過ごしていくことになるのだろうか。

「……どうやら立て直したようですね」

仕種はそう感心したように呟く。

「ええ、おかげさまで。頭の方が冷めて参りましたわ」

軽口で牽制しながら心に闘争心ねんじやうしんを再投下するとすぐさまに状況判断に移る。

残された武器はスターライトmk?と近接戦闘用のインターセプター。

そして弾道型のブルー・ティアーズが二機。

そのうえこちらは前半戦で撃ち過ぎたためエネルギーも残り弾薬も少ない。

対する相手はシールド・エネルギーもまだまだ安全域。おまけに武装の把握もままならない。ホントにキツイ。

とりあえず、あのハンドガンは射程距離がスターライトmk?よりも短いらしい。となれば、あれは必然的にこちらに近づかなければ当たらない。

ならば近づいてくるのを誘いだして……。

そう作戦を立てると後ろに飛ぶと距離を詰めるために追うように相手も動いた。

(かかりましたわ)

あまりの作戦のハマリ具合に思わずにやりと口角が釣り上がる。

「お生憎様。ブルー・ティアーズは六機あつてよ!」

スカート状のアーマーを外しミサイルの砲身を向ける。このタイミングならいくら相手も回避は……!!

「そんなことだろうと」

考えを呼んでいたかのように腕に光が集まる。そして、またたく間武装を展開し構える。この間、僅かに零コンマ五秒。

「っ!？」

こここの来ての大誤算。相手は回避ではなく迎撃を選んだのだ。

いや、それ以上にこちらが誘い込んだと思っていたのがまるで逆でそれを読んだ相手にいいように誘い込まれたとでもいうの!？

しまったと思ったところで時間は巻き戻らない、ミサイルは既に発射してしまっている。

それをレールガン ストレリチア がミサイルを発射した直後、スカートのアーマーに偽造した左のブルー・ティアーズを打ち抜いていた。

「きゃあああっ!」

至近距離でのミサイルの爆発に大きくシールド・エネルギーが大きく削られる。

「 思っていましたけどね」

再び引き金は引かれ銃弾が放たれる。右側が打ち碎かれる。

「これで正真正銘、ビットは全滅ですね」

そういつとレールガンクロスを収納しハンドガンを再び構える。

それよりも煙幕によって隠されているその上から右のチェスト部分を撃ち抜くなんてどういう技術をしているのだ。まったく技量の差が日々表れてゲンナリする。

とにかく、もう一度立て直そうと考え直す。

相手は自分と同じ射撃型。射撃型の弱点は懐に飛び込まれると弱いところだ。故に間合いを詰めさせてはならない。近距離型は逆に距離を詰めなければ勝てない。

ならば、ブレードの届くような間合いを詰めてくることはない。

そう結論づけた瞬間。空中で停滞していた花は紫の閃光となり、爆ぜた。

イグニッション・ブースト
瞬時加速。

内蔵される全てのスラスタを吹かし一気にトップスピードに持つていく強襲戦法。
ブリッツ・アクション

おまけにあれだけの数のスラスタが一気に稼動しようものならその速度は現行の第三世代ですら余裕で上回る。

紫電の如く相手に向かって突貫する。その速度は形容した通りまさしく雷。

セシリアが間違えていたところはオルテンシアがブルー・ティアーズと同じ中距離射撃型ではなく、高機動射撃型ということだ。

「な　　！」

セシリアが驚愕の表情を浮かべる。しかし、その一瞬ですら私にとっては十二分な隙だ。

こちらの接近に驚きながらもスターライトmk?を構えようとした瞬間に、銃身に向かって思い切り鋭い回し蹴りを入れる。

加速度による威力も相まって蹴りの衝撃で銃身が曲がってしまい使い物にならなくなってしまふ。それにたとえライフルが無事だとしてもこれだけ接近された状態でライフルを取りまわすことは無理だ。

「くっ……!!」

「これで武装は全壊。そろそろ終幕と参りましょうか」

近接武器を呼び出しさせる時間すら与えない。

両手にフタリシズカを構え離脱させる間もなくそのまま零距离射撃。

撃ち出す有らん限りの光弾の嵐。あるいは数の暴力とでもいうのだろうか。

前半戦と先程のミサイルの爆風によってかなり消耗していたエネルギーでは堪え切れる筈もなくは相手がようやく離脱に光を見出した頃には、

『試合終了。勝者、露崎仕種』

勝利のブザーが鳴っていた。

「すごかったぞ仕様！」

試合が終了してピットに入りたいの一番にそう感激の声を上げた。興奮冷めやらぬ状態を見るとやっぱり男の子なんだなあってしみじみ思う。

「ふん、勝てたからよしとしよう」

「箒も多少言葉に刺があるが喜んでくれている。持つべきは幼なじみだ。」

「お前ならこれくらい当然だろう」

「そんななか千冬先生だけは辛辣だった。この人に褒められた試しがない。」

「ちょっとくらい褒めてもいいんじゃないですか織斑先生？」

「そうそう、山田先生もつと言ってください。私って褒められて伸びるタイプなので。」

「真剣勝負でIS戦のレクチャーする馬鹿に誰が褒めるか馬鹿者」

酷い……。馬鹿つて二度も言いましたよね？ …… まあ、言われるだけのことをしたんだから当然といえば当然か。

「千冬先生、今日のIS戦のVTRつて借り出しとか出来ませんか？」

「確かに資料として録画されるが……。週末になるが別に構わないか？」

「ええ。試合前に一度でも見られれば充分です」

口頭で教えてもいいが映像資料があった方が分かり易いだろう。なにせ一夏だし教えるのならば懇切に懇切の二乗ぐらい丁寧でもまだ足りないぐらいだ。

「次は貴方の番ですよ。一夏」

「ああ！ 俺も勝つからな！」

私の試合を見たことにより気合いの入りようが違う。だが、

「どうだか。変なミスで負けるんじゃないですか？」

一夏が気合いが空回りした場面をしょっちゅう見かける気がする。こういう手合いは調子づかせてはいけないとガイアが囁きかけてくるよつな……。

「待てえええっ！！ 持ちあげた瞬間に落とすって何様だてめええ！？ ワレモノの如く丁重に扱えよ！？」

「男の子なんだから多少ガサツでもいいじゃないですか。千冬先生はどう思いますか？」

「調子に乗った織斑ならありえんこともない話だな」

「ち、千冬姉エ……」

この二人に容赦の二文字はない。

ちなみに千冬姉と呼んだ一夏にはおなじみの出席簿がお見舞いされた。いい加減学習せい。

「一夏、箒。今日、千冬先生が言ったこと覚えてますか？」

夕暮れの寮へ帰る道、二人に問いかけた。

「なんのことだ？」

「私もどれか見当がつかないんだが」

二人とも私の言いたいことを読み取ってくれない。これでは主体性がなかったか。むう、日本語ってこれだから難しい。

「一夏の機体のことですよ」

「あ、ああ。たしか刀一本がどうかのくだり？」

一夏の答えに頷く。

「千冬先生は刀一本で世界を極めた。ならばその人が弟に託す機体も刀一本ってというのが道理っていうんじゃないのですか？」

「んなこと言っても俺は千冬姉じゃないしなあ……」

そついいながら一夏は腕を組む。

「謙遜しなくても一夏は剣の素質は充分あるんですよ。なにせ、一夏は箒を圧倒してたんですから」

「む、昔の話だ！ 今では私の方が強い！」

箒が真っ赤になりながら怒鳴る。あー確かにそのこと根に持ってたな。それに不甲斐なさがプラスされればむきになるのも無理はない。

「だいたい！ 何故おまえたちは剣をとることをやめてしまったんだ！ 剣の腕は三日欠かせば七日を失うというのだぞ！？」

やべー。思いつきり地雷踏んづけたかも……。

「あー、それは……」

「一夏、素直にゲロンティしてしまいなさい」

「ゲロンティってなんぞ！？」

「説明がめんどいので省略します。どうせ、一夏のことだから千冬先生にいらん気を使って剣をとる時間がなかったんでしょう？ このシスコン」

「な！ そんな理由で剣を止めたのか！？ 不埒だぞ一夏！！」

これ以上は余計に遠回りになりそうだ。早く話題転換せねば。

「……とにかく、ISのことを教えるより一夏は幕との鍛錬に集中してください」

「え。なんでだよ」

「ISも所詮は人の延長、パワードスーツです。剣みたいな道に通じるものはそのまま腕がダイレクトに反映されますからね」

ISそれを動かすのは所詮はヒト。ヒトの技術をISの知識と融合させることで真にISは強さを発揮する。

「そついやさ、仕様も剣強かったけどなんで銃なんだ？ あんなに強かったのに」

「……あの人の影響ですよ。それに剣よりも適性が高いんです。僅かだけですけどね」

一夏の問いに少しだけ戸惑いながらも苦笑いする。それにとえ剣の方が適性が高かったとしても私は銃を選んでいただろう。……なんていうか私も一夏のこと笑えないな。

「それに私のスタイルだとIS戦に合わないんですよ。後の先、確実に先手を許すのは大きなアドバンテージになりますし。巧くさばけたからといって決定打が与えられる訳ではない、リスクが大きいんですよ」

私は一夏や箒のようにがしがし攻めるタイプではない。相手のほんの僅かな隙を縫うように埋めて攻める。それが露崎仕様が得意とする戦術だ。

そのことは当然、ISにも反映される。セシリアの焦りを生じさせ、隙を作りそこを攻め立てる。それが私の戦術。

「とにかく、私はいつも通り一夏を鍛え直せばいいんだな？」

意気揚々と言う箒。

「ま、そついうことです。あ、試合前の日は軽めにしてくださいね。セシリア対策をしますから」

「まかせておけ」

「こつ算は言ってるので、頑張りなさい一夏」

「お、おう……」

明日からはきつい扱きになるでしょうね。頑張りなさい一夏。これでも勝つために必要なことです、ええ。

「ふああ……」

相変わらず駄々っ広い部屋の中に緩みきった欠伸が一つ。

いつものように一夏たちと夕食を取り、その後室内のシャワーを浴びて寝巻に着替え後は寝るだけだ。

今日はなるべく早く寝たい。模擬戦ではそれほど疲れていないが慣れない学校生活の方かなり労力を持っていかれておりいつも以上に疲れている。

身体を横たえ眠りに入ろうとしたそんな時、控えめで上品なノックする音が聞こえる。

「む、う。寝るつもりだったのに誰ですか？」

ベッドに預けた身体をゆっくり起こしてのろのろと扉を開けるとそこには、

「少し時間よろしいかしら？」

放課後に戦ったセシリア・オルコットがいた。

「よろしくくないです。眠いので明日にしてください。失礼します」

扉を閉める。ふう、危なかった。

「ちょっとお待ちなさい！ その態度はあんまりですわ！！」

がしつとドアに足をかけ閉じられないようにしている。うわ、なにこの人しつこい……。

「キンキン甲高い声で喚かないください。こっちはもう寝るところだったのに……」

「わたくしが用があると言ってわざわざここまで足を運んでいるのですよ！？ 客をもてなすのが礼儀ではなくて!?!」

えー、相変わらずの上から目線、非常に面倒くさいです。

「だいたい、あの勝負は……」

「喧しいぞ」

その一言と共にずがんと、出席簿ではなく拳骨がブロンドの頭に落ちる。ちなみならずがんとというのは形容ではなく実際にそういう音がしたのだ。

殴ったのは言うに問わず千冬先生。一夏の話によるとこの寮長をしているらしい。現れる時にダースベイダーのテーマが流れたのは私だけではないだろう。もしくはターミネーター。

「何を部屋の前で騒いでいる。他の連中に迷惑だ馬鹿者」

頭を押さえながらセシリアは縮こまっている。うわ、ご愁傷様。

「露崎も少しくらい聞いてやれ。それでこいつが黙るんだろう?」

「え、しかし……」

反論しようとしたノータイム、ずがんとという音が脳天に落ちる。実際受けとずがん、ではなくずどんというのが正しいニュアンスだった。体験してみないと分からないこともあるものだ、まる。

「しかしも駄菓子もない。これは命令だ」

「い、イエスマム」

教師じょうしの命令は絶対らしい。一体、どこの軍隊だ……。

ドアの隙間から覗き見ていた野次馬たちも千冬先生が振り返ると一斉にドアを閉める。

そうして廊下に取り残されるセシリアと私。

「……入りなさい」

「ど、どうしてわたくしが貴方の指図など……」

「また殴られたくなかったらさっさと入ってください」

先程の痛みを思い出したのかセシリアはびくっと肩を震わせた後、渋々頷く。人間、痛みには弱いらしい。

ドアを閉めてパチンと部屋の明かりを点ける。そのまま備え付けの冷蔵庫を開ける。

「なんか飲み物とかありますか？」

「いいえ。お気付かないなく」

そう言うと上品にベッドに腰掛ける。そうですか、と短く返答すると椅子に腰かける。

そして、そこに訪れる気まぜい沈黙。

(何故そこで黙るんですか!?) 話すことがあってここまで来たん

でしょう！？　なのにどうして黙りこくるんですこのパツキンロー
ルは！？)

そんなことを愚痴ってみたところでこちらの思いが通じそうもな
い。こちらから話しかけるしかないのか。

とはいえ話題が……そういえば、

「先に言うべきことがありました」

そう告げるとセシリアに向き直りまっすぐ見据える。相手もそれ
に応えるように見つめ返しは何を言われるのかと心待ちにして身構
える。

そう言って頭を下げる。

「へ？」

突然、想像もしないような一言に素っ頓狂な声を上げる。

「以前、貴女のことを侮辱しましたね？ 売り言葉に買い言葉でしたが、貴女を傷つけることを言ったのに変わりありません。ですので、その非礼を詫びます」

「あ、頭を上げて下さいまし！ わ、わたくしもあの時は大人げなかったといえますか……」

バツの悪そうになりながらもわたたと慌てる。あ、微妙にかわいいぞこいつ。

「ですからっ！ この件はお互いが悪かったということでおあいこということ。これでよろしいかしら？」

そう言って始めて自然な笑顔を見せた。

「そうですね。これで仲直りということ」

握手をする。白く、か細く、小さな手のひらだった。

「それで、何を話に来たんですか？」

「……わたくしの父はいつも母の顔色ばかりを窺うような人間でした」

僅かの沈黙の後、意を決したのかセシリアは自信の過去を独白する。

「名家に婿入りしたことを引け目に感じていつも……。逆に母はISが開発される以前、女権があまり著しくない時代でも自信と誇りを持って生きていた。厳しかったけれどわたくしの憧れでしたわ」

表情に華やかさが生まれるがそれも一瞬、すぐに暗い表情に変わる。

そう、だったのだ。

「三年前、父と母を亡くしましたの。その時何故か二人一緒にいて鉄道事故に巻き込まれて……」

話の内容のせいか沈痛な表情になる。仕方のない話かもしれない。嫌だったとはいえ一応の父と憧れの母を同時に亡くしたのだ。辛くない筈ないだろう。

私の三年前といえば。あの頃か。

「それからは両親の遺産を守るのに必死でしたわ。さまざまな勉強をしているその一環でISの適性テストを受けましたらA+判定が出ましたの。そして国籍保持のためイギリス政府からISの代表候補生のお誘いを頂いて、即断しましたわ。色々両親の遺産を守るのに都合のいい条件も頂いてますし、世界最強の兵器を自身が操ることが出来るんですから、断る理由がありませんわ」

明かされていくセシリアがそうならざるを得なくなった過去。

顔色ばかりをみて過ごす情けない男を見て育ったんだらう。金に群がる男に嫌気は差したのだらう。

男を見下すのはそういう男を見て育ってきたから。誇りを守るためにそれに降りかかる害虫おとしを払うためにそうせざるを得なかったから。

「その時からわたくしは将来、情けない男とは結婚しないと心に決めておりますの」

「露崎さん。貴女の言う通りならば、男は捨てたものじゃないかもしれない。けれどわたくしはいまいち信用することが出来ない。わたくしが見てきた男の中に少なくともそういう人間は一人もいなかったのだから」

そう一息を置いて、まっすぐな視線を投げかける。

「だから仕種。貴女からみて織斑あのおとこ一夏はどういう男なんですか？」

それがここに来た理由。ならば、真面目に答えてやるというのが当然の筋だらう。

「あいつは馬鹿です。愚直なほどに一直線な男。それでいて他人の気持ちにまるで気付きもしない唐変朴な男。そして心に何と言われようと曲げない一本の柱を持つてる男です」

それを聞き届けると張り詰めていた頬を緩める。

「随分と評価なさるのね。あの方に惚れてますの？」

「あいつに惚れる？ 何を馬鹿な。あんな他人の心を読めない朴念仁に惚れるなんて地球が逆回転するくらいにあり得ないです」

「そ、そこまで言い切ってしまいますの……」

当然です。私があいつに惚れるなど無料大数にひとつあり得ない。

「でも、気をつけるなさいセシリア。一夏は貴女の条件を満たした強い意志を持った男ですから。あいつに惚れたら骨が折れますよ」

「そこまで言われると興味が出てきましたわね。注意しておきますわ」

くすくすと意地悪そうにそれでいて上品に笑う。

「ところで。貴女はどうして、そんなに強いんですの？」

「私の答えなんか聞いて、役に立つか分かりませんかよ？」

「それでも、聞いておきたいんです。貴女はどうしてそんなに他人に媚びることのない強さを持っているのかそれを知りたいんです」

「私は巧く戦えるだけ。強い訳じゃない。それでもその根底にある強さを言ってしまうなら」

「誰にも負けたくないから」

第6話 「その心に問う」(後書き)

戦闘の終わりがあっさり過ぎたかも……。

セシリアの独白の部分はそれを埋めるべくわりとがつつり書きしましたが。

次回はキャラ紹介とIS紹介を張り出すべきかなあ……。意見がありましたら感想ください。

第7話 「始まりの白」(前書き)

ゆとりタイム発動してしまった。申し訳ない。
その分、いっぱい詰め込んだつもり。
しかし、あくまでつもりなのでご勘弁を。

第7話 「始まりの白」

私とセシリアの戦闘から五日、土日を挟んだ月曜日の放課後。私
の時と同じように第三アリーナのAピットにいた。

「
なあ、箒」

「なんだ、一夏」

あの日から一週間、一夏は物の見事に箒に扱かれ続けた。いや、
確かに扱いてやってくれとは言ったけど根を上げさせられないとこ
ろまで扱くとは流石、古き良きスポコン魂に溢れた数少ない人間だ
箒。

おかげで一夏は大分勝負の勘は取り戻せたようだが、それでも「
錆だらけ」から「錆ついた」に変わっただけ、というかほとんど変
わりない付け焼刃状態なのだがどこまでやれるか分からない。

「いや、来ないな。俺のIS」

そう。

一夏の専用機は一夏が男故に少し調整に時間がかかっているらし
い。

らしい、というのはあくまで憶測だから実際は間に合わなかつ

たZE！ だからまことに、ま・こ・と・に！ 申し訳ないんだけど量産型の打鉄で戦ってもらんだZE！ なんて言われてもこの状況下では不思議ではない……って何を言っているんだ私は。不意に謎の毒電波が。

つまりは、試合の開始時刻を回っているが一夏のISはまだ来ていないのである。

「お、織斑くん織斑くん織斑くん！」

山田先生がわたたとこけそうになりながら駆け寄って来る。足取りが危なっかしいこと限りない。山田先生はこれさえなければいい先生なだけだなあ。

「山田先生、深呼吸して落ち着いてください。はい、深呼吸。すーはーすーはー」

「すーはー、すーはー。あ、ありがとうございます落ち着きました」「いえいえ。で、何がどうしたんですか」

「それですね！ 織斑くん、来ました！ 織斑くんの専用IS！へ？ と一瞬呆けたような顔をする。

「織斑、すぐに準備しろ。アリーナを使用できる時間は限られているからな。ぶつつけ本番のものにしろ」

「この程度の障害、男子たるもの軽く乗り越えて見せろ。一夏」

「……同情しますが、やるしかないですよ。一夏」

「え、あの……?」

「……早く!」「……」

四人の声が見事に八毛る。一夏、貴方がどもってる時間なんて一秒もないんですよ!

斜めに噛み合った防壁扉がガコンと音を立てて開くと、

そこに、『白』がいた。

「これが……」

「はい! 織斑くんの専用IS、『白式』です!」

「体を動かせ。すぐに装着しろ。時間がないからフォーマットとフイッティングは実戦でやれ。出来なければ、負けるだけだ。分かっているな」

千冬先生にせかされて一夏は白式に触れる。

一夏は不思議そうに固まるがそれも一瞬、白式について理解したのか動くことを再会する。

「背中を預けるように、ああそつだ。座る感じでいい。あとはシステムが最適化をする」

カシユ、カシユという機会音と共に一夏が白式と一つになる。

「ISのハイパーセンサーは問題なく動いているな。一夏、気分は悪くないか？」

「大丈夫、千冬姉。いける」

「そうか」

千冬姉って呼んでるのに一夏が怒られていない。まあ、千冬先生も「織斑」じゃなくて「一夏」って呼んでるから私人として心配してるんだろっけど。

「一夏、昨日私が教えたこと。忘れてないでしょうね？」

「ああ、ちゃんと覚えてるよ。対ブルー・ティアーズの必勝法、使わせてもらっさ」

そう言っただけで笑いかける。逆にその笑みが不安を誘う。

「……念を押しますが、最後の最後まで気を抜かないように。私からはそれだけです」

一夏の場合、平気で「やったか!？」みたいな死亡フラグを立てますからね。

「充分だよ。仕種」

「……………」

隣の筈はなんて声をかければいいのか分からないのか黙りこくっ

ている。

「箒」

「な、なんだ仕種」

じれったいので、箒に助言をしてやることにする。ほんと、不器用ですよね箒って。

「こづいつ時は言いたいことを言っておきなさい」

う、うむと首を縦に振る。うん、素直でよろしい。

「一夏」

「ん、なんだ箒」

「その、なんだ。勝ってこい」

「ああ、行ってくる」

そう告げて一夏は飛び立つ。

世界で唯一ISを動かせる男の公式戦が始まった。

飛び立った僅かな時間に思考を思いめぐらせる。

箒と仕種と千冬姉の期待を背負って戦う。一人だけでも重いというのにそれが三人分となると流石に重い。

世界最強ちいゆねえの弟っただけでもハードル上がってるのに、周囲からの期待の目も充分に重しになる。

けれど、

「負けらんねえよなあ……」

そんな重圧にも負けず一人、静かに闘志を燃やし呟く。

勝つと約束したからには、果たさねばならない。信頼に応えなければならぬ。

やっと、守ることの出来る力を手に入れたんだから。

「来ましたわね。織斑一夏。レディをエスコートする男が遅刻するなんてマナー違反ではなくて？」

空に飛んだその先に、蒼は腰に手を当てて試合の開始を待っていた。

ISネーム『ブルー・ティアーズ』。戦闘タイプ中距離射撃型。特殊装備あり。先程白式から送られてきた情報を再確認する。

もともと、昨日に仕様たちと映像を交えての対策会議はやっているから相手の手の内は知り尽くしている。

けれどそれで勝負が決まるわけではない。相手は代表候補生、国の未来の代表を担うために訓練を受けてきたエリート中のエリート。対してこちらは先日までISのIの字も知らなかった一般人に毛が生えた程度のズブの素人。到底、この差は埋められるものではない。

「悪い。少し立て込んでてな」

軽口を牽制に戦うべき敵を見つめ返す。

ふん、と鼻を鳴らしながら腰に手を当てているが以前の彼女とは態度が違う。ハイパーセンサー越しでなくても一週間前との対応の違いははっきり見て取れる。

前なら俺の一挙一動に対してもっと侮蔑した目で見ていた筈だ。

……それが原因でこんなことになっているんだが。

それに彼女の纏う雰囲気はどこか張り詰めている。ピリピリと、真剣勝負に挑むような、何か見極めるようなそんな空気がだ。

なら、深いことはどうでもいい。

侮られて試合をするより、真剣勝負で手を抜かれるより、本気でぶつかってくれるのならずっといい。

この場に来てようやく彼女と対等の立場に立てた気がする。

「試合を始めるに当たって問いますが織斑一夏、貴方は何のために戦うのですか？」

そんなことを聞かれると思ってもみなかった。

「え……と」

いきなりの問いに思わずどもってしまっ。んなこと急に言われてもうまく言いたいことが纏まらないっていつか……。

「結構ですわ。今答えられないのなら、答えが出た時に聞きましょう」

おう、勝手に進めるぞこの女。やっぱり根っこは変わらないみたいだな。

「お互いの全てを賭けなさい織斑一夏！ このセシリア・オルコックが全身全霊お相手致しましょうー！ー！」

開幕を宣言すると当時、スターライトmk?からレーザーが放たれる。

「うおっ！？」

耳をつんざくような音のレーザーを間一髪でかわす。

「いい反応ですわ。ですが、それもいつまで続くかしら？」

続けて引き金が引かれる。降り注ぐレーザーの雨。必死に回避するがそれでも二発、三発と雨に撃たれる。

（くっ！ 白式が俺の反応速度に追いつけてない！）

精密射撃がエネルギー・シールドをどんどんと削る。いくらなんでもこのままではジリ貧だ。

「武器はないのか……！」

白式に問い、展開可能な武器一覧を開くと一覧の中には近接ブレードしかない……ってやっぱり刀これ一本だけかよ……！

「ま、分かった話だけどさあつ……！」

悪態づきながらも、唯一の武器である一・六メートルほどのブレードを展開する。

「中距離射撃型に近接武器で挑もうなんて……笑止ですわ」

「これしかないんだから仕方ないだろ。それに剣には一応の心得があるしな」

「確かに素人に銃の扱いについて心得てる筈ありませんし。そっちの方が勝てる確率が上がるかもしれませぬわね。しかしっ……！」

右腕を横に振り、背中に配置された非固定浮遊部位のフィン・アーマーを飛ばす。ブルー・ティアーズだ。

「そんなもので経験の差が埋まるほど程、勝負は甘くありません」とよー！」

始まるブルーティアーズを含めてのレーザーの嵐。

しかし、前回の戦いで札は見えているので対処の仕方は分かっている。

(ビットが狙ってくるのは俺の一番、反応が遠いところからだ)

仕種の対策講義を思い出しながら、白式を攪乱するように飛びまわるビットのレーザー群をかわす。

どこから来るかが分かるのならばその方向に注意深く意識を向けてやればいい。

(それにあいつがブルー・ティアーズを扱ってる間はBTの制御に集中しなくちゃいけないからライフルを撃つことはない……！)

身体をねじながらビットから繰り出されるレーザーのコンビネーションをかわす。

(だったらっ！)

一瞬の隙を突き、スラスターを吹かしビットの包囲網を突破する。

ビットを置き去りにして、無防備な奴の懐に飛び込めばいい。

「っ!?!」

一瞬、セシリアの顔がたじろぐのが見えた。

「はあああああっ!?!」

「くっ!」

セシリアは僅かに遅れながら急いで銃を構え、ライフルから放たれる閃光を
かわした。

「うおおおおおっ!?!」

そのまま気迫で相手との距離を肉薄し、ついに刀の届く距離まで詰めた。

至
近接武器を構えていない相手に対して確実に一撃が入ることは必
だった。

どくん、と心臓は跳ねる。これは畏だと本能が告げる。

しかし、そんなもの本能でなくても理性でも充分に理解することが出来てしまった。

何故なら、セシリアのその口元は全てが思い通りに言ったことを喜ぶように歪んだのだから。

「っ!?!」

嫌な予感と共に、予期せぬ方向から光がスラスターを撃ち抜いた。

「な　　!?!」

予測不能の事態に思わず動きを止めてしまう。

今、一体何が……!?!

「勝負の最中に余所見をしている暇はありません!?!」

「しま　　!」

セシリアの声に我に返るが、既に遅い。セシリアはライフルを素早く構え直すと放たれる閃光が右肩を撃ち抜く。

「ぐ、う!?!」

至近距離で攻撃を受けた衝撃で大きく弾き飛ばされる。

正面から受けたライフルにシールド・エネルギーが削られる。

詰めていた距離を一気に離される。その距離二十メートルあまり、近接武器の間合いとしては絶望的だ。

失念していた。

何故、こつとも簡単にセシリアは突破を許した?

彼女がこつちが対策をとっていることを分からない訳ではない筈

だ。

つまりは、

「まんまと誘い込まれたってことかよ」

小さく悪態づく。ブルー・ティアーズの特性を理解し、それを利用したのだ。じゃくてん

しかし、それだけでは説明出来ない。あれは仕種の時ではライフとの両立はほとんど不可能だと対策講義では結論付けていた。

では、何故ブルー・ティアーズのレーザー光がスラスターを撃ち抜いたんだ？

「驕りを捨てたわたくしは以前のわたくしとは違いましたよ？」

誇り高くセシリアはそう宣言する。彼女が戦いに駆り立てるのは驕りではなく誇り。

理解出来ないまま、一方的な豪雨が降り注いだ。とにかく、今は相手の手数を増やさせてトリックを見極めるしかない。

side:露崎仕種

「仕種！ 話が違う！ あいつはビットとライフルの併用は出来ない筈だろう！？」

管制室で試合を見ていた筈がものすごい剣幕で突っかかる。

無理もない。私たちが対策会議をした時点では想定していないことが目の前で起こっているのだから。

「……確かに私が戦った時点では併用してなかったし出来なかった筈です。私だってこんな予想外なんですよ筈」

私だって目の前で起こっている事に対して理解が追いついていない。

「あ………すまない」

思わず感情的になってしまったのを自省し、ばつの悪そうに項垂れる筈。

「BT兵器、ブルー・ティアーズの特徴は毎回命令を送らなくては
いけない。その間どうしても操縦者は無防備になってしまう。正規
のやり方ならこれは絶対の筈です。そのシステムが一週間やそこら
で変わるとは思えない」

「しかし現に……！」

「自律制御だな」

千冬先生はモニターを見据えながらそう呟くと一斉に視線が集ま
る。

「手動操作マニュアルのような相手の死角を突くような多角的な動きは出来な
くなるが、自律制御リモートにプログラムを任せることでライフルと同時使
用のコンビネーションが出来るようになったというわけだ。あくま
で推論だがな」

そう考えるのが妥当だろう。だが本当にそれだけなのだろうか？

「でも、たった一週間のうちにBTの自律制御用のパッチを組み立
てるなんて……」

「なに、あいつは代表候補生だ。協力者がいない訳ではないだろう」

山田先生の懸念を切り捨てる。確かにそれは否定出来ない。国の
威信を背負って立つ代表候補生ならば、バックアップ体勢は充実し
ているだろう。

「しかし、一週間で凄い人の変わりようだな露崎。一体オルコット
に何を吹き込んだ？」

そう言つと千冬先生はちらりと視線を移す。

「吹き込んだつて人聞きの悪い。少し話をしただけですよ」

まあ、某魔法少女のような肉体的言語的なOHANASHIはしてないんですけど。

「……そうか。ならかまわん」

それだけ言つと千冬先生はまたモニターに目をやる。千冬先生は必要以上に深く詮索しないでくれるのでこちらとしても非常に助かる。

私も再びモニターに目を戻す。映っているのはライフルとBTに翻弄されながらも私に言われたことを実行する一夏。

「私の対策会議、無駄にしないでくださいよ。もう少しで、逆転の糸口を掴めるんですから」

柄にもなく映るモニターに映像に対して語りかける。

教えたのは必勝法だけではない。相手の機体、武器の特性。

そして白式の状態。

今はまだその時ではない。

その時が来れば、きっと

。

side：織斑一夏

「くう！」

ボロボロになりながら相手の攻撃をかわす。反撃の糸口さえ掴めない。

先程からはライフルとの連携ではなく同時攻撃ばかりだ。

いや、ばかりではなくこの試合全ては同時攻撃？

ひょっとすると、

確認するために一端、距離を置く。

それを見逃さずにセシリアはライフルが放たれる。それと同時に飛び回っていたビットも一斉にレーザーを放った。

懸念していたことが当たり、ついに核心を突いた。

（見えた！　B Tとライフルが同時に使えるようになったカラクリが！）

「このB Tは仕種の時と違って、お前のライフルの引き金がスイッチになってるんだ。だから、ライフルとビットを同時に扱っことが出来る。いや、扱っているのは結局ライフル一本か」

右の目尻が引き攣った。ハイパーセンサーのおかげか微妙な表情の変化も見逃さない。

「最初はビットの連携もあったが、ライフルを交えてになるとどうしてもトリガーの方が優先度が高い。だから、連携はなくなり同時攻撃しか出来なくなる。違うか？」

「小細工は所詮小細工。対策が裏目に出て自爆すると思っっていたのに存外に戦況を見る目に肥えていますのにね」

それは負け惜しみではなく、真に感心しての言葉。

種が分かれば後は簡単だ。

逆を言えば同期しているライフルを引かせなければB Tは飛んでるだけの飾りだ。

そう思案したと同時に、スラスターを吹かせる。

だったらそれを撃たせる間もなく距離を詰めれば

！！

「ですが、これを忘れてはおりませんか？」

にやり、と口元を釣り上げると同時、ガコンと弾道型ミサイルの砲身を向ける。

「こちらは真正正銘、自律制御ですよ！」

まずい、飛んでいるレーザーのビットが印象が強すぎてこっちのことをすっかり忘れていた！

真正面に突っ込んでくるミサイルなどかわす術もなくデッドラインを越え、爆発に巻き込まれた。

昨日の対策会議を思い出す。

はは、走馬灯って奴かよ。もうすぐ負けだつてのに今更思いだすなんて。

『一夏、届くばかりの貴方の機体はまだフォーマットとフィッティングが済んでいません』

『フォーマットとフィッティングってなんだよ？』

『……言葉通りの意味だ。お前は英語も出来ないのか？』

『く……』

『筭の通りですよ。初期化と最適化。フォーマット
フィッティング来たばかりのISはこの二つが行われていません。しかしこれが終了すれば、』

『すれば、どうなんだよ？』

『そのISは真の意味で貴方の専用のISになる、ということですよ。せいぜい、時間を稼ぎなさい』

ああ、つまり。

「機体に救われたか。バカ者め」
「タイミングよ過ぎて笑えませんね。これが主人公補正って奴ですか」

仕種が、時間を稼げと言っていたのはこのための布石というわけか。

爆炎の中から白騎士^{ナイト}の姿が立ち現れる。それは先程のような無骨なデザインではなくもっと洗練された中世の鎧をイメージさせる。

受けたダメージも修復され、完全な状態が再現される。

フォーマットとフィッティングが終了しました。確認ボタンを押してください。

「^{ファースト・シフト}一次移行……。貴方、まさかフォーマットも済んでいないISで私に勝負を挑んだというの!?!」

急な展開にこちらも状況は掴めないがどうやら、そうらしい。

ISのデザインだけでなく、手に持っている刀の形状も変わっている。そんなことよりも刀の銘が、

「雪片弐型……………。雪片って千冬姉の」

千冬姉はこの一振りで世界を取った。雪片はその時に使っていた刀の銘。

そしてこの剣も雪片の名を冠する名刀。弐型というからには発展型なのだろう。

「俺は世界で最高の姉さんを持ったよ」

三年前も六年前もおそらく十五年前も。俺はずっとあの人の弟であの人は俺の姉だ。

でもそろそろ守られるばかりも嫌になってきた。だから、これからは。

「俺も、俺の家族を守る」

「貴方、何を言って

」

「とりあえず、千冬姉の名前を守るさ！」

剣を構え、セシリアに向かって突貫する。

「わたくしだって負けられませんのよ！」

四機全部のビットを解放し群として飛ばす。

見える。それにさっきよりも使いやすく、ずっとこっちの思いに
応えてくれる。

一瞬で飛んできたブルー・ティアーズ全てを振り切る。瞬間加速
も先程の比じゃない。これならば、やれる！

「な……！！」

無視されるとは思ってもいなかったのだろう。次の行動の第一歩
が遅れた。その隙は俺に廻って来た最高のチャンスだった。

(この一撃に全てを賭ける……！！)

一撃必倒。

千冬姉はいつもそうだった気がする。だから、弟の俺もそうであ
らねばならない。

たとえ、まだ未熟なこの身でもその形に近づきたい。

やられる前にやれ。

ブルー・ティアーズを戻すには距離がありすぎる。ライフルを構
えるにはあまりに遅すぎる。

逃げる蒼の雫をついに捉えた。

「おおおっ！！！」

下段から上段への逆袈裟切りで切り裂いた。

「きゃあああああっ！！！」

一閃。

振り抜いた剣を構え直し、もう一撃を加えようとした時点で試合終了を告げるブザーがなる。

『試合終了。両者エネルギー切れにより引き分け』

「「え………?」「」

あまりにも唐突な事態に間の抜けた声が重なる。

見るとシールド・エネルギーのゲージが空っぽになっていた。

どういう原理か知らないがとりあえず雪片式型で攻撃したのが原因なのだろうか。

「あーくそ、もう少しだったのに。やっぱりええな、やっぱり前半削られ過ぎたのが原因か……？」

「あ、あの……」

「ああ、そういえば言っていなかったな。俺が何のために戦うのか」

俺は口を開いて、語った。

俺の、俺が戦う理由を。

side：露崎仕種

「大見得切って、引き分けとはなんてザマだこの大馬鹿者」

開口一番、千冬先生から一夏は相変わらずキツイお言葉を頂いて

いた。

いや、正直言って代表候補生相手にズブの素人相手が引き分けるのは大健闘だと思うんだ、なんて目をしている一夏。

甘いですよ一夏、そんな勝つてもないのに労いの言葉をかける千冬先生なんて幻想に幻想による幻想のための幻想くらい甘いです。

「武器の特性を考えずに使うからああなるのだ。身を持って分かっただろう。明日からは訓練に励め。暇があればISを起動させる。いいな」

「まあ、負けてない分だけ今日はこれで許してやる」

「ま、負けてた時は……？」

「織斑、知ってるか？ 好奇心は猫を食い殺すって言葉があるぞ？」

「い……。やっぱりいいです」

……千冬先生、脚色し過ぎです。本当は殺すだけでいいんです。

「じゃあ、はい」

山田先生から手渡されるIS起動のための電話帳^{ルルブック}。読んでおけるといふことなんだろう。ご愁傷様。

「帰るぞ」

幕の短い一言に打ちひしがれる一夏。

にしてもホント、傷心の相手にも容赦ないですね箒。

寮へ帰る道のり、箒が一夏に問う。

「一夏、悔しくないのか？」

「そりゃ悔しいさ。後、もう一歩だったのに」

その一言を聞いて安心したのか、ぶすつとした表情の中に安堵を浮かべた。

「なら、いい」

「あ、明日からはあれだな。ISの訓練も入れないといけないな」

「無理すんなよ。あれって申請に何枚も書かないといけないんだろ？」

確かに一夏の言う通り、学園でISの使用許可の申請書は何枚も提出して初めて通る面倒くさい代物だ。

専用機持ちには無縁な話だが、生憎と箒は専用機を持っていない……む？ 束さんなら専用機押しつけててもおかしくないのにな。どうしてだろ？

「む、無理などしていない！！」

「ふーん、じゃ仕種は？」

「私は一夏が私の動机的になってくれるんでしたらお付き合いしますが」

「ひでえ役回りだな俺!？」

「後ろから刺されるよりはよっぽど本望でしょう」

「仕種の中の俺の評価はどうなってんだ!？」

「女の敵。今日もフラグひとつ立てやがって」

「フラグってなんぞ!？」

知らなくて結構、時に無知は罪なのです。

「そ、それは本当なのか仕種!？」

食いついてくる筈。

「ええ。私からも注意したのですが無理でした」

「いや、仕種はよく最善は尽くした、悪くない。全ては一夏、お前が悪いんだ!！」

「……もう、どうだっていいよ」

「とにかく、これからもこの『私』が教えてやるからな! 必ず放課後に時間を空けておくのだぞ!」

そう声高らかに私のところを強調して宣誓する筈。

にしても。

進展しないなあ、この二人。

方や世紀の唐変朴、方や恋に奥手な純情少女。押し倒して既成事実さえ出来ればそれでオーケーの筈なのに。

ああ仲人、面倒くさ……。

side：セシリア・オルコット

負けた筈なのに、今日の戦いは不思議と悔しさが込み上げてこなかった。

逆に憑き物が取れたかのように清々しい気持ちにさせられる。

『俺が戦うのは……そう、守るためかな』

彼は戦いを終えた空でそう私の問いに答えた。

『そのために強くなりたい、強くなって誰かを、大切な人を守れるようになりたい。そんな人間になってみたいんだ』

あの決意と自信に満ちた表情を思い出すと途端に胸が熱くなる。

母のように自信に満ちたあの目。芯の通った意思の持ち主。

まさしくセシリアが求めていた男性像を体現したかのような男だった。

だから知りたい。どうして、そんな風に強く生きられるのか。

だから知りたい。彼の言う大切な人になりたい。

ふと一週間前に話し合った彼女が見せた嫌そうな顔を思い出し、思わず笑ってしまう。

「ふふ、申し訳ありませんわ仕種。貴女の忠告無駄にしましてしまいましたわ。でもこれで惚れない女は世界に広しといえど、貴女ぐらいなんでしょうね」

彼女が彼の言葉に揺るがないのは彼と織斑一夏と同じ、もしくはそれ以上の決意を秘めているからなのだろう。

もっとも彼女の根底にあるのは負けたくないというものだと言いたるところを見ると、相当の負けず嫌いなのだろう。

でも彼女には感謝している。おかげで世界を歪んだ視点で見るところから解放してくれたんだから。

おかげで彼に出会えたんだから。

「織斑、一夏……」

名前を愛おしげに口ずさむだけで思わず頬が緩む。それだけで胸がいつぱいになる。

だから、今回の負けは特別この思いに満たされることで埋め合わせよう。

セシリア・オルコットは生まれて初めて恋をした。

side：織斑千冬

寮長室、ベッドに腰掛けながらおもむろに携帯を手に取り、ダイヤルをかける。

三度のコール音の後、ブツという音と共に電話が繋がる。

「ああ、私だが」

『もしもし千冬？ 久しぶり。それといきなり私だがつて止めた方がいいよ？ どのわたしわたし詐欺って感じだし』

くすくすと笑い声が電話越しに聞こえる。その笑い方は流石姉妹の笑い方とよく似ている。

千冬の声を変とするとするならこの声はメゾソプラノ、もう一人の幼なじみはソプラノと称するのが適当だろう。

「お前が私だと分ければ別に構わん。だいたい、お前の携帯にかけてるんだ。お前以外の人間が出ることはない」

『相変わらず、強引というか大雑把というか……』

はあ、と溜息を吐かれる。失礼な。

『で、要件は何？ 千冬って必要最低限しか連絡くれないから私に何か頼みたいことがあって連絡したんでしょ？』

声は真面目な雰囲気でも聞きかえす。

付き合いが長い分、こちらにかけてきた意図を読み取ってくれるので助かる。

「ああ。実は二組の先生が産休を取ることになってな。五月末までは出るらしいが六月からに休むことになるのだが今、臨時で教師を探している。出来れば腕の立つ人をと理事長は言っている」

『面白そうだね。それと私とどういう繋がりがあるの?』

「なに簡単なことさ。沙種さくね、IS学園の臨時教師をしてみないか?」

『それってさ、教職免許いるんじゃない? 私、千冬みたいに免許持ってないし』

「気にするな。大学では教職課程を取っていたんだらう? それに、教師は無理でも講師くらいなら出来るだらう」

『相変わらずああいえばこう言う……。いいよ、受けてみるよ』

「分かった。理事長には私から話を通しておく。と言ってもお前の名が出た時点で即採用だらうがな」

『……それってアンフェアじゃない?』

「仕方ないだらう? お前も私と同じ最強の名を冠する者なんだからな」

『ていうかさ千冬、最初っから私にIS学園の教師させる気でこの電話かけて来たんでしょ?』

「さて、どうだかな」

笑っていた。ただ、幸いと電話越しなのでこの表情が相手に見えるわけじゃない。

『ま、いいか。そういうことにしておく。私もいつまでも無職ぶーたろーでいる訳にはいかないし』

『じゃあ千冬、また学園で。仕種のことよろしくね』

そう言うと、プツと電話が切れる。それを聞き届けるとベッドに体を横たえる。

「よろしくね、か……」

最後の一言を呟く。

それは、まるで

。

第7話 「始まりの白」(後書き)

オリキャラその2のフラグ、投入！

近日公開、乞うご期待！ っっていうてもシャルが編入してくるまで出て来ませんがね。

相変わらず書いているとせっしーのヒロイン度がどんどん上がって
る。なんでさ？

第8話 「宴と過去と」(前書き)

書くことが何もなくて済む。

第8話 「宴と過去と」

「では、一年一組のクラス代表は織斑一夏くんに決定です。あ、一繋がりでもいい感じですね!」

嬉々と山田先生が話す。クラスメイトもきやいきやいと盛り上がっているそんな中唯一人、一夏は真つ白に燃え尽きていた。

「どうしてこうなった……」

教室の朝一番、一夏は打ちひしがれている。アスキー的に表記するならOrzといった具合だ。

「それは」

「当然だろう織斑」

千冬先生が割って説明に入る。

「聞いてなかったのか? 織斑。私は言った筈だぞ、露崎が勝てば、代表は織斑だと」

その一言を思い出したのかピシリと固まる。あー、そういえばそうだったなこの代表決定戦。

私が勝てば織斑一夏、セシリアが勝てばそのままセシリアが。

結果は私の勝ち。イコール代表は織斑一夏。うん、方程式が成り立ったぞ。

「じゃ、じゃあ俺とセシリアの試合って」

「はっきり言えばレクリエーションだ。といってもお前がどこまでやれるかの基準を測るのも一環だったかな」

真剣勝負をレクと一緒に……。絶対、この人には敵わない。私の勘がそう告げている。

「しかし気落ちする必要はなくてよ。初めての戦闘で代表候補生のわたくしに引き分けたのですからむしろ一夏さんは誇りに思ってもいいぐらいですわ」

出てきたよ、セシリア・オルコット。出しゃばりというかどこにかしこにもしゃしゃり出るといっつか……。マテ、一夏さん、だと？

「それにそのようなことにならなくてもわたくしは辞退するつもりでしたけど」

「……なんでだよ」

恨めしそうなのと意外そうなものの双方の入り混じった目で一夏は尋ねる。その声に不機嫌がいくらか籠っているが今の絶好調なセシリアにはスルーされるだろうに。

「IS操縦は実戦が何よりの糧。クラス代表ともなれば戦いには事

欠きませんもの」

あーそれに関しては同意。下手な知識よりも実践の経験の方が何倍も本人のためになる。

ISは理屈だけで動かす訳ではない。ISは身体に装着するパウードスーツである以上、その動きを身に染み込ませる方が絶対に効率がいい。実際、私もそうしてきたし。

「流石セシリア、分かってる！」

「そうだよー。折角世界で唯一の男子がいるんだから同じクラスになった以上持ちあげないとねー」

「私たちは貴重な体験が詰める。他のクラスには情報が売れる。一度で二度美味しいね、織斑くんは」

最後、教師の目の前で営利目的で一夏を使わない。

「そ、それですわね……」

こほん、と咳払いした後、顎を手に当てる。お、これは今までに見られなかった行動だ。

「そちらがよろしければわたくしのような優秀かつエレガント、華麗にしてパーフェクトな人間がISの操縦を教えて差し上げれば、それはもうみるみるうちに成長を遂げ」

あ、確信した。こいつ一夏にフラグ立てられやがった。それもベタ惚れだ。

「生憎だが、一夏の教官は私で足りている。私が、直接頼まれたのだからな」

がたんと立ちあがり、反論する箒。私が、のところに力を入れているのは第三者の私から聞いても間違いではない。

それに、昨日のこともあるから箒の心中穏やかじゃないっていうのも頷けるのだが、教室で殺気を振り撒くのはどうかと思うのだが箒さんや。

しかし今日のセシリアは違った。絶好調女セシ……っとこのネタは天井だから自重自重っと。

「あらISランクCの篠ノ之箒さん。Aのわたくしに何の用かしら？」

「ら、ランクは関係ない！ い、一夏がどうしてもと懇願するからだな」

してねーなんて目をするんじゃないです一夏。面倒くさいことになるじゃないですか。

「座れ、馬鹿ども」

すたしたと二人の元に歩いていき、出席簿ぜんたいこうげきで一掃。恐るべし。

「お前らのISランクなんてゴミ同然だ。私からしたらどれも平等にひよつこだ。まだ殻も敗れていない段階で優劣をつけようとするな」

なんて千冬先生らしく分かりやすい表現だ。世界最強の言葉は違う。

「代表候補生でも一から勉強してもらおうと前に言っただろう。くだらん揉め事は十代の特権だが、生憎私の管轄時間だ。自重しろ」

そう言い放つと何も言い返せずに二人ともすごすごと席に戻っていく。

「とにかく、クラス代表は織斑一夏。異存はないな」

クラスに元気のいい返事がかえる。

いちか、がんばれー、ふぁいとー。

一夏がクラス代表に選ばれて早いものでもう四月の末、桜も花びらが全て散り葉桜に変わった頃。

「ではこれよりE.S.の基本的な飛行操縦を実践してもらおう。織斑、露崎、オルコット。試しに飛んで見せる」

まあ、実践の例は私たち専用機持ちがするのですが、不出来な一夏にとってこれはかなり酷だろう。

なにせ、何かをやらかす度にこうして衆目に恥ずかしいところを晒すわけだから。

先日もあんな凡ミスを……、ああ情けない。

余計な思考をしながらでもゼロコンマ秒数でオルテンシアを展開する。まさしく片手間。

「よし、では飛べ」

そう千冬先生に指示された通りに飛ぶ。

「何をやっている織斑。スペック上のデータでは白式はブルー・テイアーズやオルテンシアよりも上なんだぞ」

早速叱責の言葉を頂く一夏。ちなみに出力的なデータでは白式

ブルー・ティアーズ オルテンシアとなっている。しかし技術ではこれが面白いように逆になるんだが。

「自分の前方に角錐を展開させるイメージってなんだよ」

「イメージは所詮イメージ。自分がやりやすい方法を模索する方がよっぽど建設的ですよ」

「そう言われてもなあ。大体、空を飛ぶ感覚自体がまだあやふやなんだよ。なんで浮いてるんだこれ？」

「そういうことを詮索するのは野暮つてものですよ。ISだから飛べる、それでいいじゃないですか」

まさしく魔法の言葉だ。ISの摩訶不思議万能説は伊達じゃない。

「じゃあ、仕様は飛ぶ時どういふうにイメージしてるだ？」

「私は飛ぶときは飛ぶとしか考えてないですね」

ちなみに筭に聞くと『ぎゅん、という具合だな』とお言葉を頂いた。うん、分からん。だがなんとなく言いたいことは分かる。それとしか言いようがない。

クラス代表の勝負以降、セシリアとも放課後に訓練している。もつとも毎回、セシリアと筭が一夏の指導のことで衝突して最後に一夏がフルボッコされてるのが定例のパターンとなりつつある。

私？ 傍観者ですが何か？

「一夏さん、一夏さんがよろしければまた放課後にご指導して差し上げますわ。その時はその、ふたりっきりで」

「一夏！ いつまでそんなところにいる！ 早く降りて来い！」

……箒、千冬先生の指示が出てないのに無理言いなさんな。

「織斑、露崎、オルコット。急降下と完全停止をやって見せる。目標は地表から十センチだ」

「了解です。では一夏さん、仕種。お先に」

そう言うとセシリアが先行して急降下していく。

みるみる地表に近づいていき、千冬先生が指定した十センチで完全停止した。流星は代表候補生。

「じゃ、私も行きますか」

そう呟くと地表に向けて背中のスラスターを吹かす。

ぐんぐんと大地に近づいていく。そして、おおよその感覚で急停止。

結果は地表五センチ。ん、こんなものか。

「よし、ラスト織斑！」

千冬先生に促されると一夏も地上へ向けて急降下していく。が、ロケットブースターを背中に点火させたように白式が加速する。機

体スペックの高さがよく表れている。

あ。あのペースだと地面とキスする。

そう思い描いたと同時に、手にレールガン、ストレリチアを展開し落ちてくる目標地点の射線上に放った。

「ぶふおおおおおっ!？」

放たれた弾は落ちてくる白式に見事クリーンヒット。横からの力学エネルギーによって地面に激突することなくぶっ飛ばされる。ふう、撃墜マークがまた一つ増えちまったぜ。

「へ？ え、ええええええ!？」

一拍遅れて大いに驚いた悲鳴を上げる山田先生。周りの生徒もやっつてることのぶっ飛び度に軽くドン引きだ。箒やセシリアですらほかーんと口を開けている。千冬先生だけ例外的にこめかみを押さええている。

「露崎、発砲許可は出してないぞ」

「いえ、あのままだと地表にクレーターを作りかねなかつたのでこちらの判断で発砲しました」

「いつつつつてえな仕様！ 死ぬかと思っただじゃねえか!？」

「ISの絶対防御があるので死ぬことはありません。ですので撃ちました」

「俺は死ぬかと思ったけどな!!」

ていうかそんだけ怒鳴れるんなら元気じゃないですか。

「では聞きますが、地面にぶつかってクレーターを作るのとレールガンでぶつとばされるの、貴方はどっちが良かったですか？」

「ぶつとばしてから聞くなよ!! どちらも嫌だよ!」

あーいえばこういう。ホントにガキですね一夏は。

「情けないぞ、一夏。昨日、私が教えてやったじゃないか」

箒からもお叱りの言葉が届く。と、いっても教えていたのはあの擬音のことを言っているのだろう。うん、だから無理。あんなの分かるの某プロのミスターしか分かんないし。

「大体だな、お前というやつは昔から」

「一夏さん、お怪我はなくて?」

箒のお小言を遮るようにはずいとセシリアが一夏ににじり寄る。

「あ、ああ。別に問題ないけど……」

「そう。それは何よりですわ」

ほう、「これは怒っている箒に対してセシリアは優しくしてポイントを稼ごうという魂胆なのか。」

しかしそれだけでは一夏は落とせないんだな、これが。一夏は好意を厚意として受け取りますからね。それで何人の女が泣いてきたことか。

「ISの装備をしていて怪我をするわけないだろう……」

「あら篠ノ之さん。他人を気遣うのは当然のこと。それがISを装備していてもですわ。常識でしょ？」

「お前が言うか。猫かぶりめ」

「鬼の皮を被っているよりはマシですわ」

「おい、馬鹿ども。邪魔だ。端の方でやってろ」

ぐぬぬと、睨み合っていたところを千冬先生が二人の頭を押し分け一蹴。やはりこの人に敵う人は世界に片手で数えられる数しか存在しないのか。

「なあ、仕種。どうして、セシリアと箒は喧嘩してるんだ？」

「分からないんですか？」

「ああ、さっぱりだ」

「……一夏、乙女の純情が理解できないというのなら
女の嫉妬に溺れて溺死しろ」

「で、でき……!?!」

「というわけで、織斑くんクラス代表おめでとう！」

「「「おめでとうー!!」「」「」

パンパンパン、と一斉にクラッカーが鳴り響く。

今は夕食後の自由時間、寮の食堂で一組の生徒はみんな揃っていた。ただ二組や三組の生徒が混じってるような気がするのはいかなあ……。

それに、というわけでってなんですか。主語をつけなさい、主語

を。

「いやー、これでクラス対抗戦も盛り上がるね」

「ほんとほんと」

「ラッキーだったよね。同じクラスになれるなんて」

「ほんとほんと」

……ちなみにさつきから相槌を打っているのは二組の子だ。

「人気者だな、一夏」

「本当にそう思うか……？」

「客寄せパンダであることは間違いないですけどね」

「……否定できねえ」

篤は機嫌が悪い。こういうところが好きじゃないというのもあるけど、一夏が女子にちやほやされてるのが気に入らないらしい。

「はいはい、新聞部です。話題の新人、織斑一夏さんに特別インタビューに来ましたー！」

おおっ！ とクラスのみんなが盛り上がる。はいはい、勝手に盛り上がってくださいな。

「あ、私は二年生の黛薫子。よろしくね。新聞部副部長やってまー

す。これ名刺ね」

そう言って名刺を一夏に手渡す。きつと一夏は画数が多そうな名前だなどかつまらないことを考えているに違いない。

「ではではズバリ織斑くん！ クラス代表になった感想をどうぞ！」

「あー、ええと。まあ、なんというか頑張ります」

「えー、もつといいコメント頂戴よ。俺に触れると火傷するぜ！とか」

「自分、不器用ですから」

「うわ、前時代的！」

そういう貴女の言葉も随分、前時代的ですけどね。

「ま、適当に捏造しておくからいいとして」

ジャーナリストが捏造するなよ！ なんて突っ込みもスルーされるに違いないのでそつと横に置き去りにしていこう。

「ああ、セシリアちゃんもコメントちょうだい」

「わたくし、こういったコメントはあまり好きではありませんが、仕方ありませんわね」

とかいいつつも満更でもなさそうな感じ。

「コホン。ではそもそもわたくしが何故、クラス代表を辞退したか
というそれはつまり」

「長そうだからいいや。適当に捏造しておくから。織斑くんに惚れ
たからにしよう」と

「なっ、なっ、ななっ……！」

あー、凶星だ。みるみる内に顔がリンゴのように真っ赤になっ
ていく。

「何を馬鹿な」

「一夏さん、何をもって馬鹿とおっしゃるのかしら!？」

「はいはい痴話喧嘩はそれくらいにして!。じゃ最後に露崎さん
もインタビューしとこかな! 一組の専用機持ちだし、何せあの沙
種類の妹だし!」

沙種様、ねえ……。千冬様、千冬様とここに来て散々聞いたけど
まさか実の姉を様づけで呼ばれるとは思ってもみなかった。

ま、仕方のない話といえば仕方のない話かもしれない。なにせ、
私の姉さんは。

「まったくよくもこんなに騒げるものだ。実習が本格的でないから
といって体力があり余ってるようだな」

千冬先生がゆらりと立ち現れる。相変わらず、黄色い声援が鬱陶
しいそうだ。

「ち、千冬姉どうしてここに？」

「織斑先生だ。お前らが織斑を祝うと聞いて顔を見せに来ただけだ。なに心配するな、すぐ帰る」

「せ、先生！ 露崎さんってあの沙種さんの妹なんですか！？」

クラスの一人が興奮気味に尋ねる。……ああ、とうとう来たよ。

「ああ、そうだ。露崎は真正正銘、露崎沙種の妹だ」

こゆねあかり
露崎沙種。

私の姉で元日本代表候補生。第一回大会は最終選考で千冬先生と決勝で戦い、敗れた。

そのため日本代表に選ばれなかった。

そして姉さんに勝利した千冬先生は世界大会でも全勝し格闘と総合部門で優勝した。

その三年後の第二回モンド・グロツソ大会では射撃部門、及び総合優勝者を果たした。しかし、総合優勝については事件があったため姉さんはたまたま勝ちを拾っただけに過ぎない。

一般、総合優勝者には「ブリュンヒルデ」という呼び名が栄誉として与えられるのだが、

「えええっ！？ 露崎さんってあのジャンヌダルクの妹！？」

私の姉はその強さ故に自由国籍権を持ち、その第二回大会はフランスの代表として優勝したことからその国の英雄になぞらえて「ジャンヌダルク」と呼ばれている。

それに「ブリュンヒルデ」の呼び名があまりにも千冬先生に定着してしまったため、代わりに姉さんに別の名が送られたのだが。

「ブリュンヒルデ」

織斑千冬。

「ジャンヌダルク」

露崎沙種。

「天才」

篠ノ之束。

三人の世界的有名人の弟妹が同じ学び舎、同じクラスにいるなんてなんとも奇妙な縁だ。

「なんだお前ら、気づいてなかったのか？　こんなに分かりやすい苗字なのに」

「でも織斑くんは篠ノ之さんと二人も有名人が続いたんだから……」

「これ以上はまさか、ねえ……？」

にしても今の今までよくバレなかったよホント。

「とにかく、露崎は沙種の妹だ。篠ノ之同様、こいつもそういっ部分でデリケートだからあまり気にしてやらないように」

確かにデリケートといえばデリケートですけど、姉さんとの二者間ではそれほど問題ないんですけどね。姉妹仲は悪いわけじゃないですし。

「では私はもう行くが羽目を外し過ぎるなよ小娘ども。今日のことの原因で明日のSHRに出席できなかつたらどうなるか分かつてるだろうな」

そう公開処刑を宣告するとなにごともなかつたように去っていく。うわ、かつこいい。

「じゃ、じゃあとりあえず何か一言だけでも頂けないかな!？」

「べつに」

「みじかつ! どの女優さん? でも捏造のし甲斐があるわ! 沙種様の妹だしそれくらい過激な発言があつてもいいわよね!」

よくねーです。大体いつも過激なのは千冬先生ともう一人の天才の方で、姉さんはどっちかというと常識人なんですけど。

「じゃ、写真取るわねー。三人いるから織斑くんが真ん中でいいよわね?」

「はあ……」

一夏は状況は掴めてないらしくなんとも覇気のない返事をする。

「あの、撮った写真は当然いただけますよね?」

「そりゃもちろん」

「でしたら、いますぐ着替えて

」

「いつてらっしゃい、その間に撮影は終わってると思いますけど」

「そんな冷たくあしらわないでくださいませんか!? このままでいいんでしょう!?!」

そうそう。何もたかが写真一枚くらい制服で構わないじゃないですか。

「それじゃあ、撮るよー。35x51÷51÷35x2はー?」

「えつと……2?」

「ぴんぽーんっ!」

パシヤ。つておおい。

「なんで全員入ってるんだ?」

シャッターが切られる瞬間の僅かな時間にクラスメイト全員がフレームに映る位置に移動していた。恐るべし、女子の行動力。箒もちっかかり映り込んでいた。

「あ、貴女たちねえっ!」

「まーまー」

「セシリアだけ抜け駆けはないでしょー」

「クラスの思い出になっていいじゃん」

「う、ぐ……」

結局はクラスメイトに丸めこまれてしまったとき。

部屋に戻り、部屋の電気を点けると一直線にベッドに身体を投げ出す。

脇を見ると、時計は十時を回っていた。

「あー、しんど……」

こうやって馬鹿騒ぎするのは苦手だ。

一緒になって馬鹿騒ぎするんじゃなくて遠巻きにみて、事の成り行きを見守るのが私の性に合っている。

でも、たまにはこういうのも悪くはない。筭の機嫌は結局パーティーが終わるまで治らなかったけど。

「ふう……」

天井を見上げたまま、今日のアーリーナでの訓練を思い出す。

一夏の動きはまだまだ荒い。箒との剣道での訓練でいくらか勘は取り戻しつつあるがそれでも剣筋はまだまだ甘い。

でも負けながら確実に成長している。敗北は成長の糧になる。負けの中で何かを掴めばいいのだ。

実を言うと何度負けても這い上がる一夏が羨ましくあつたと思う。

昔から私に敗北の二文字は許されない。

常勝無敗、負けない強さ。

しかしその裏は誰よりも負けを嫌い、負けられない宿命を背負っている。

だが、一度だけ負けたことがある。それが原因で大騒ぎになり、周りに大いに迷惑をかけた。

特に私に勝つたあの子。たかがあれだけの勝負で大事になったのだ。その子にかけた心配は計り知れない。

あの子は悪くないのに。悪いのは自分の体質なのに。

病室に謝罪に来たその子は泣きながら謝った。ごめんね、ごめんねと。何度も泣きじゃくりながら謝った。

あれから三年。元気にしてるかな。確か名を、

「ファン・リンイン
鳳鈴音……」

第8話 「宴と過去と」(後書き)

アニメ三話、原作二話に突入。

一夏、箒同様仕種の姉もまたチート。大人組みのチートっぷりがパネエ……。

仕種の設定とかどうしよう、書きたい……。ものすごく書きたい。でも書くと駄作っぽく見えてしまう。

……でも書きたいなあ。キリのいいところで書くとします。

第9話 「ファースト、セカンド、あれ私は？」（前書き）

セカンド幼なじみ登場。ストーリーがようやくオリジナル展開に動きまします。

第9話 「ファースト、セカンド、あれ私は？」

side:???

「ふうん、ここがそうなんだあ……」

IS学園の正面ゲートに着くと感慨深げに思わず呟く。まあ、世界で唯一ISの専門教育の場なんだしこれくらいのデカイ施設であつて当然といえば当然か。

「えーと、受付ってどこにあるんだっけ？」

上着のポケットからくしゃくしゃになった案内用紙を取り出す。

「本校舎一階事務受付……って、だからそれがどこか聞いてんのよ」

地図の一つでも書いてくれていればすぐに分かるのだが、生憎とこの案内は不親切で多種多様な言葉で案内が書かれてるくせに肝心なところは書かれていない。

「図画ほど万国共通の分かりやすいものはないのにどうしてそれをしないのよ。」

「まったく自分で探せばいいんですよ。探せばさあ」

不貞腐れながらも足を進める。考えていて辿り着く訳でもなし、とにかく動かなければ始まらない。考えるよりも動く。口よりも先に手が出る。あたしというのはそういう人間なのだ。

にしても出迎えがないってのは本当だとしてももうちょっと丁寧に扱ってくれてもいいんじゃないの？

政府の連中もこんなイタイケな女子高生を外国に一人ほっぽり出してなんとも思っていないの？

まあ、そんなことを愚痴ったとしてもあの人なら「なんだ、不満があるのなら好きに辞めてもいいんだぞ」とか言いかねない。マジで言いかねない。

あたしが以前日本で暮らしていたからいいもののこの待遇は絶対おかしいわよ、そうに決まってる。

くっ、こんなことならあの時にヘソを曲げずに素直にここに入學しておけばよかった……。

それもこれも、あのバカが……。

思考を止めるのと同じ、足も止まる。

(面倒くさい……)

開始五分、早速ダレた。昼間に来たのならまだ人影もあったらうこの通りも夜の八時になると疎らを通り越して閑古鳥だ。

うまく事が運ばないのに加え、飛行機に乗っていた疲労感の影響で今いい感じにイライラしている。

(いつそISを使って空でも飛んで……)

一瞬、それは名案だと思い浮かんだが某天気予報士が使っている電話帳の三冊分もある学園内重要規約書を思い出し止める。

流石に初日から規則を違反するのはマズイ。下手をすれば外交問題だ。それだけは勘弁してくれと政府の偉い連中が懇願していたのでしようがなく、しょうがなく止めてやることにした。

なにせ今のあたしは国のVIPなのだ。だからその辺はあいつらの顔を立てるために自重してやらないといけないのだ。そう考えると少しだけ気が紛れた。

昔から『年を取っているだけで偉そうにしてしてる大人』が嫌いだったあたしにすれば今の世の中は住み心地のいいものだ。

男の腕力もISにかかれば、児戯に等しいことも楽しい現実である。

(でもアイツらは違ったなあ……)

そう二人の姿を思い出す。

「元氣かなあ、一夏」

なんて口にしてみたけれど、思い返せば一夏が元氣じゃなかった記憶がない。

「一夏、いつになつたらイメージが掴めるんだ。先週からずっと同じ所でつまづいているぞ」

「だからお前の説明が独特なんだよ。なんだよ、『くいつって感じ』って」

「……くいつって感じだ」

「それが分からないって言ってるんだ……って待てっでっ！」

一夏が女の子を怒らせたみたいでした。たと先にいっってしまう。

(ていうか、またアイツ女侍らせて……)

幼なじみの相変わらずっぷりに思わずゲンナリする。

なにせアイツは少し優しくするだけで、笑うだけで、歩くだけで、軽く女が数十人がオチる一級フラグ建築士なのだ。

弾がモテない男の敵だとか言っていたのが遠目から観察してみればよく分かる。

それにアイツと付き合いおつと思えばその前に立ちはだかるのが世界最強。りむいちひゅう

うん、無理だ。あまりにも壁が大き過ぎる。

あの人を認めさせるなんて幾千、幾万の策を弄したとしても全て捻じ伏せられてしまう。かといって正面突破できるような相手じゃ

ないし。

それにあいつの好きなタイプが千冬さんみたいな大人……っついてい
うか年上タイプだし。あたしとまるっきり逆のタイプだし。

そもそもあたしはどうしてかあの人のことが苦手だ。理由なんて
ない。苦手なものは苦手なのだ。

あ、女も先に行ったみたいだしちょうどいいや。今のうちに受け
付けの場所を聞いて

「分かんねえよ。篝の説明、あれで理解出来たか？」

「あれで分かる方が希少というか……やっぱり私には無理ですね。一
夏、ふぁいとです」

「……お前は理解できなくとも、動かせるから楽でいいよなあ」

苦笑交じりで隣の女の子が一夏に話しかける。

一夏の隣を歩く女の子に妙な既視感を覚える。

知っている。あの顔、あの髪、あの目、あの口調。全てあたしは
あの女のことを知っている。

けれどそれはあり得ない。とても似ているがあれがアイツである
訳がない。

だって、アイツは……。

我に返ると、一人暗闇に取り残されていた。一夏たちも寮に帰ってしまつたらしくまた人影はなくなつてしまふ。

それからすぐ、アリーナの方へ歩いていくとアリーナの裏に総合受付を見つける。

「はい、じゃあ以上で手続きは終了です。ようこそIS学園へ、フア鳳ン・リン・イン鈴音さん」

明るい声がするが、残念と受け付けの声はあたしの耳に届いていない。心はここあらずだ。

「織斑一夏つて何組ですか？」

「ああ噂のコ？ 織斑くん一組よ。鳳さんは二組だからお隣ね。そうそうあの子一組のクラス代表になつたんですって。やっぱり織斑先生の弟さんなだけはあるわね」

聞いてもないのに次々と情報が送られてくる。噂好きは女の性とは言つが目の前の女性はまさにそれだった。

同じクラスではないと聞いて少し残念な気持ちになつたが、気持ちの切り替えは早かつた。

（ま、いっか。クラス変えになつたら一緒になれるかもしれないし）
それよりも、この女性には聞きたいことがあつた。

「あ、あともう一つ聞きたいんですけど。露崎仕種つてこの学園にいますか？」

それは希望。そんな筈はない、目を覚ませと自分に言い聞かせるような一筋の願い。

「いるわよ。沙種さんの妹さんでしょう？ 露崎さんも一組よ」

そんな希望すらあっさりと言いで打ち砕かれた。

じゃあ、あの場所で一夏と話してたのってやっぱり。

（仕種なんだ）

気がつけば、部屋に入っていた。

考えながら歩いていたらしい。自分の無意識の行動に少し戸惑いを覚えるが、今はそんなことも気にならなかった。

「、、、」

同室の女子に声をかけられているみたいだが、心は別のところにあるみたいで一つも耳に入っていない。

「ごめん、疲れたから自己紹介とか明日にして」

これ以上は相手に悪いので素っ気なくそれだけ言ってベッドに身体を横たえると途端に疲労感と虚脱感から強烈な眠気襲う。

今日は色々あり過ぎた。身体は睡眠を欲している。あたしもそれに抗うことが出来ない。

(露崎さん、か……)

そこまで思考停止。お風呂は……まあ明日でいいや。たまには朝風呂というのも優雅なものかもしれない。

意識は眠気に勝てずにブラックアウトした。

side：露崎仕種

「ねーねー、転校生の噂って知ってる？」

クラスメイトが朝一番に一夏に声をかけていた。相変わらず物珍しさというのは中々抜けないようで今朝も今朝で一夏の周りに女子が集まっていた。

「転校生？ 今の時期に？」

一夏が興味を示したのか話を始めた女の子に聞き返す。

「そうそう、なんでも中国の代表候補生らしいよ」

代表候補生、ね。それにしてもどうしてこの時期なんでしょうか。入るのなら一学期の最初から入ってしまった方が学校としても本人としてもその方がいい筈なんです。

「あら、わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら」

ずいと、一夏の横に現れるセシリア。いや、それはないですから。どうしてそういう風に考えられるのでしょうか。超ポジティブ思考？

「別にこのクラスに転入してくるわけではないのだろう？ 騒ぐほどのことでもあるまい」

先程自分の席にいた篝もいつの間にか一夏の横に立っていた。

それにしても中国、ね。随分と懐かしい人物を連想させる。

「今のお前に女子を気にしている余裕はあるのか？ 来月にはクラス対抗戦があるというのだぞ？」

「そう、そうですね、一夏さん！ クラス対抗戦に向けて、より実戦的な訓練をしましょう。ああ、相手ならこのわたくしセシリア・オルコットが務めさせていただきますわ！」

クラス対抗戦とは読んで字の如く、クラス同士のリーグマッチだ。スタート時点の実力指標を測るためにやるのだとか。

ただ練習量からすると今の一夏なら機体性能抜きでも一回、二回くらいなら順当に勝ち上がれると思うが。

「まあ、やれるだけやってみなさい一夏」

「おう、そうする仕種」

「やれるだけでは困りますわ！一夏さんには勝っていただきませんと！」

「そつだぞ。男子たるものそんな弱気でどつする」

「織斑くんが勝つとみんなが幸せなんだよ」

ちなみにみんなが幸せという意味は優勝クラスには学食のデザー
ト半年間フリーパスが与えられる。甘味は女の味方であり、女の敵
であることは彼女たちは知っている。

「というわけで織斑くん、頑張つてねー」

「フリーパスのためにもね！」

「今のところ専用機を持つてるクラス代表つて一組と四組だけだから余裕だよ」

へー。四組にもいるんですか。後で情報収集しておこう。ていうかこのクラスに専用機持ちが三人もいる時点で異様なんですけどね。

「その情報、古いよ」

聞き覚えのある声が入り口から聞こえた。

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単に優勝は出
来ないんだから」

「鈴……？ お前、鈴か？」

一同が唾然とする中、一夏がおそるおそる尋ねる。

「そうよ。中国の代表候補生、鳳鈴音。今日は宣戦布告に来たって
訳」

ツインテールが小さく揺れる。どやっと言わんばかりに勝ち誇っ
たい表情をしている。

「なに格好つけてんだよ、すげえ似合ってねえぞ」

「な！？ なんてこと言うのよ一夏！ あんたって相変わらずデリ
カシーの欠片もないわね！！」

一夏の一言に破顔すると同時フシャーッ！と猫の威嚇みたいにツ
インテールを逆立てる。実際に立ってる訳じゃないけど、こっちの
方が鈴らしい。

「おい」

「なによ！？」

バシン！ 世界最強ちふゆせんせい が現れた！

千冬先生 の先制攻撃！

鈴 はダメージを受けた！

「もうSHRの時間だ。教室に戻れ」

「ち、千冬さん」

「学校では織斑先生と呼べ。あと入り口を塞ぐな。邪魔だ」

「す、すみません……」

さすがごとと退く鈴。千冬先生が苦手なものも相変わらずか。

「また後で来るから！ 逃げないでよ一夏！」

そう捨て台詞を残して、鈴は自分のクラスに帰って行った。

「ていうかアイツIS操縦者だったのか。初めて知った」

私も初めて知りましたよ。中国と聞いて、予感はしていましたがまさか本当に鈴が来ることになるとは。人の縁とは面白いものです。

「一夏。今のは誰だ？ 知り合いか？ 随分と親しそうだったな」

「い、一夏さん！？ あの子とはいったいどういう関係で

」

その他のクラスメイトも一斉に一夏の席に詰め寄る。ああ、馬鹿。

「さっさと席につけ、馬鹿ども」

バシンバシンバシンっ！！

情け容赦一切無用の出席簿が立っていた見舞われた。

ついでに記しておく、今朝のことが原因で授業でぼーっとしてたため簿とセシリアは何度も叩かれていた。

「お前のせいだ！」

「貴方のせいですわよ！」

「なんでだよ……」

昼休み開始早々二人は一夏に食ってかかっていた。っていうか二人とも、それはあまりに理不尽な怒りでしょう。恋患いで勉強に手がつかないといっても相手に当たるのは拙い……一夏だからいつか。

「まあ、話ならメシを食いながら聞くから、学食に行こうぜ」

「む、それもそうだな……。お前がそこまで言うのならそうしよう」

「そ、そうですね。行って差し上げないこともなくってよ」

この程度の話題転換で宥められるって何か、子供か。恋する乙女とは分らないものです。

一夏が学食に向かう道に何人かのクラスメイトがぞろぞろと着いてくる。この光景も慣れたものだ。人間、異様なものでも何度も見ていると抗体が出来るんだな……。

「待ってたわよ、一夏！」

どーんという効果音と共に鈴が待っていた。いや、実際しませんよ。そんな感じがしたというだけです。

それになんて先に買って待ってるんですか、麺がのびるでしょう。一夏が来てから一緒に並べばいいものを……。

「まあ、とりあえずそこをどいてくれ。食券を出せないし、普通に通行の邪魔だ」

「う、うるさいわね！ 分かってるわよ」

悪態づきながらも丼を持ったまま一夏の横につける。

「それにしても久しぶりか。丸一年か。お前がISの操縦者なんて初めて知ったぞ。いつ代表候補生になったんだよ」

「それは「うちのセリフよ。テレビ見てたらアンタが出てくるんだからびっくりしたじゃない。あんたもたまには怪我病気しなさいよ」
「どんな希望だよそりゃ……」

そんなふうには鈴と一夏は他愛もない話をしながら、席に移動する。
箒とセシリアの表情が険しい。ていうか、嫉妬オーラをこれ以上出さないでください。他の女子もなんか修羅場か何かと興味示しちやってるじゃないですか。

「一夏、そろそろ説明して欲しいんだが」

「そうですね」

「別にそんなんじゃないわよ。こいつが人の好意に気付いて彼女作れるタマだと思っ？」

「酷い言い草だな鈴……。っーか箒、セシリア、仕種うんうんって頷くな！」

え？ 鈴の言うことその通りなんですけど何か文句でも？

「はあ……。見ての通り、ただの幼なじみだよ」

「幼なじみ……？」

ぴくりと、箒が反応を示す。流石に幼なじみと聞いて黙ってられませんか。

「あーそういや箒とは入れ違いだっけ。箒が引越していったのが小四の終わりだろ？ で、鈴が転校してきたのは小五の初め。そんな中二の終わりに中国に帰ったから一年振りってこと」

「前に話しただろ？ 篠ノ之箒、俺のファースト幼なじみだよ」

「ファースト……」

いや箒、そこ喜ぶところじゃないですから。

「で、鈴がセカンド幼なじみ」

「ふーん。そこはあんたバカあ？ って言っとけばいいの？」

感心なさそうに頬を嚙る鈴。鈴その言葉は拙いです、モロ被りです。性格とか髪型とか立ち位置とか。

「んんんっ！ 幼なじみがどうかは知りませんが、わたくしも忘れてもらっては困りますわ？」

「何、このコロネヘア？」

「人の髪型の悪口を言わないでくださる！？ わたくしはイギリス代表候補生のセシリア・オルコットですわ！ まさかご存じではありませんの！？」

「うん。悪いけど興味ないし」

悪びれる様子もなく、鈴はけろっと言い放つ。

「い、言ってくれますわね……！ 日本といい、中国といいアジア人はイギリス情勢を何一つ知りませんの……！？ 言っておきますけど、わたくしは貴方にだけは負けませんことよ！？」

「言ってくればー、あたし悪いけど強いし」

きしし、と笑う鈴。何か確信があるのか嫌味を含んでいない。あれが素でそう思っている分、尚更に性質が悪い。

セシリアがぐぬぬ、と拳をぶるぶるさせて箒は止めていた箸を再開する。

「で、アンタクラス代表なんですからね」

「おう、なんか成り行きでな」

ま、あれは仕組みられたものと言っても過言ではないですけどね。

「ふうん、ま。頑張れば？ その二人に教えてもらってもあたしとの差が埋まるとは思わないけど」

「「っ……………」」

箒とセシリアが顔をしかめる。自分が好いている人を貶されるのは気分のいいものではないようだ。

「ごちそうさま。お先失礼します」

そんな隣はお構いなく最後に残っていた味噌汁を啜ると手を合わ

せて合掌し席を立つ。うん、塩サバ美味しかった。

「あ。し、仕種。話あるんだけど……」

鈴が呼びとめるが言葉はどこか歯切れの悪い。

「悪いですけど放課後で。それに急がないと次の授業に間に合いませんですよ?」

時計は次の授業の開始の十分前を指していた。だというのに一夏の皿はほとんど箸が着いていない状態だ。筈たちはなんだかんだ言いながら箸を動かしてたし。

「げ！ 本当だ、仕種なんでそのこと言ってくれないんだよ!?!」

「いやあ久々の再開なんですし、積もる話もあるんでしょうからお小言はお節介かなあ、と」

「そういつときは言ってくれよ！ 仕種の鬼！ あくま!」

「はいはい、そんなことに口を動かしている暇があるんなら食べる方に動かさない。それと、その言葉まるっと覚えておきなさい?」

そう言っって食器を返しに行くと後ろでちくしょー!とか哀れな断末魔が聞こえてくる。実にいい気味だ。常に女に囲まれてるハーレムな主人公体質はもげてしまえばいいと思います。

「仕種の一夏に対する態度も相変わらずね」

あくせくと一夏が物を食べている横でスープをこくりと飲み干し

て鈴はそう小さく呟いた。

放課後の第三アリーナ、そこにサムライがいた。

「し、篠ノ之さん！？ どうしてここに！？」

「一夏に頼まれたからだ。それ以外に何がある？」

いつもと違うところは打鉄を展開しているところだ。

打鉄は純国産の第二世代量産型だ。安定性のあるガード型で初心者にも使いやすく多くの企業や国家、IS学園の訓練機として採用されている。

「打鉄の使用許可が下りたからな。近接戦闘が足りていないだろう、私が相手してやる」

くっ、こんなに早くに使用許可が下りるなんて……と悔しがるセ

シリア。

「刀を抜け、一夏」

「お、おう」

剣道のように距離を取り、剣を構える。

場を独特の緊張が包み込み、動こうとしていた時、KYも動いた。

「お待ちなさい！ 一夏さんのお相手はわたくしセシリア・オルコ
ットですよ!?!」

割り込むように二人の間に銃弾を撃ちこむ。

「勝負の邪魔するな！ 斬る!!」

「篠ノ之さんにそれが可能でした?」

切りかかった筈をあらかじめ展開しておいたインターセプターで
いなすと距離を取りスターライトmk?で連射する。

こうして、一夏を巡る戦いが始まった。当の本人は完全に置いて
けぼりだけど。

「うわ、戦闘始めちゃったよ。どうしたものかなあ仕様」

「一夏、一つ尋ねますが筈はファーストで鈴はセカンドなんですよ
ね?」

「だからなんだよ」

「じゃあ、私は？　そう言えば聞いてないですね？　私の方が、箒より付き合いが長いというのに？」

「あー……ファーストは箒だし、セカンドは鈴だろ。で、仕種は箒の前か。じゃあ仕種は幼なじみゼロだな」

「幼なじみ、ゼロ」

「おう、幼なじみゼロだ。ゼロ幼なじみだと語呂悪いだろ？　だから幼なじみゼロ」

「ふっ」

「は、ははっ」

「んなコーラの商品名みたいな名前もらって誰が嬉しがると思ってるんですか？　私の敵さん？」

「神は死ん……みぎやあああああああああっ！！！」

一夏が言い切る前に呼び出したストレリチアを容赦なくぶっ放す。これでもかというぐらいに、これでもかというぐらいに。大事なことなので二度言いました。

結論。

一夏のネーミングセンスは非常にいただけません、まる。

第9話 「ファースト、セカンド、あれ私は？」（後書き）

幼なじみゼロ（笑）

仕種の秘密について、回収が近づいて参りました。

思った以上に粘れそうにないです。

第10話 「ワン・プロミス／ワン・シークレット」(前書き)

タイトル通り、仕種の秘密に迫る回です。
原作乖離がそろそろ始まります。

第10話 「ワン・プロミス／ワン・シークレット」

Side：織斑一夏

「も、もう無理……。流石にこれ以上はし、死ぬ……」

「と、一夏が申しているので今日はこれくらいにしますか」

あれから三対一のワンサイドゲーム一方通行が数時間にも及び、日もすっかり落ちてしまった。

篝からは籠手・面・胴を食らい、セシリアからは、弾幕のような射撃の嵐を食らい、仕種からは雪片を持っている右手のピンポイント狙撃を食らい、それはもう結果から言つと散々な惨状だった。

「そうですね。今日はこれでお開きということだ」

「これくらいで音を上げるとは、軟弱者め」

ぐあ、篝の心ない一言に思わず涙が出そうだ。俺の周りにはこん

な奴ばっかりなのか……？ 千冬姉に始まり、箒に仕種、鈴……うん、こんな奴らばかりだよな。

「いや、箒も三対一やってみろって……。めっちゃくちや疲れるんだぞ」

「それはお前の行動に無駄が多すぎるからだ。自然体で行動出来ればそんなに疲れることはない」

それが出来ねえから苦労してるんだって箒。二対一でも一方的なのにそれに一人加わるんだぜ。それはもう猫三匹と鼠一匹のほとんど勝ち目のないバトルロイヤルみたいなもんだ。どうしろってんだ。

「では一夏。またご飯時にでも」

「そうですね。その時に今日の反省会をいたしませんと」

うげ……、あれ今日もやるのか。

反省会では容赦なく俺のわるいところをダメ出しされる。毎回、とんでもない数のミスが列挙される。

「つーかどんだけ悪いところだらけなんだよ俺。粗探しにも程があるぞあれ。」

「もうやめて！ 一夏のライフはもうゼロよ！」 状態でも平然と言葉を続けるしなこの三人。

けど、そのおかげで技術が向上してることに変わりないんだよなあ。

「お手柔らかに頼みます……」

「拒否します。強くなるための薬です。耳の痛い話ですが、薬は苦くなくては利かないんですよ。特に馬鹿につける薬は」

「うあ、相変わらずの辛口だ……。言っていることが真実なため否定できない。」

仕種とセシリアは俺たちとは逆方向のピットへ歩いていった。

「一夏、私たちも行くぞ」

「箒、先に行つてくれ。まだ、動けない」

「まったく、しょうがないな。先にシャワー使わせてもらつて」

「おう……」

生返事を返すと天を仰ぎながら箒を見送る。

しばらくすると息が整ってきたので、クールダウンを行つてピットへ戻る。

誰も使われていないピットはがらんと置いていつも以上に広く感じる。

「一夏、お疲れ」

バシュっというスライドドアの開く音と共に鈴が入ってくる。

「鈴、もしかして今まで待っていてくれたのか？」

時間はもうけっこう遅い。食堂もほとんど最終だ。

「ん、まあそうね。はい、これ」

手に持っているタオルとスポーツドリンクを手渡される。

そうか幼なじみとは優しくして甲斐甲斐しいものだったのか。あれ、どうしてだろう。目から汗が出るぞ？

「相変わらず、仕種に優しくされなかったのね。よしよし」

子供をあやすように優しく頭を撫でる。

やべえ、さつきから止めどなく溢れてて止まらねえぞ。なあ知ってるか筈、仕種。幼なじみって本来こうあるべきものなんだぜ。

「落ち着いたわね。じゃ、はい」

いい笑顔で手のひらを突き出した。うん、なんだこの手は。そうかこれはあれか、お手だな。というか鈴よ、俺は犬ではないんだがジョークのつもりなのだろうか。

ほんと、手のひらの上に手を乗せる。

「ちっがーう！ 何間違った解釈してんのよアンタは！ お代よ、お・だ・いー！」

バチンと乗せた手を振り払い、手のひらを再度突きだす。

おだい？ はて、お題のことか？ IS学園 幼なじみと俺と時々千冬姉、なんちて。

「何つまらないこと考えてんのよアンタは。スポーツドリンク代とタオル代と優しくしてやった代。^{アフターケア} 本当なら一野口のところ、再会祝いだし五百円にまけてあげるわ」

「金取るのかよ！？ つーか、一野口つてどんだけ守銭奴だよお前！？」

「いいじゃない、ワンコインにまけてるんだからさあ。払わなかったら十日で一紫式部の利子がつくわよ？」

ぼったくりだあっ！？ 関西の金融もびっくりな位なぼったくりだあっ！？

「つたく、払えばいいんだろ。ほれ、五百円」

「まいどあり〜」

受け取った五百円をほくほくと財布の中に蓄える。

「ねえ一夏。あたしがいなくて寂しくなかった？」

「そうだな、遊び友達が減るのは大なり小なり寂しいもんだけど」

「そうじゃなくてさあ。ま、あんたならこんなもんか」

「なんだよ鈴。なんか違ってたのか？」

「違ってなくないわよ。あんたが正しい、お世辞のひとつでも期待したあたしが馬鹿でしたよーだ」

あー、女心はよくわからん。

「ね、一夏。記念撮影って続けてるの？」

「ああ、ついこの間アルバムが届いたからな」

俺は千冬姉の影響で定期的に写真を撮るようになった。元々そんなことにあまり気にしていなかったが、前に千冬姉が周りにいた人を覚えておけにって言われてからそうかもしれないと思い、今も続けている。

「あのさ、今度見に行つていい？」

「ああ、いいぞ。整理終わってないからけっこうバラバラだと思うけど」

「別にそんなこと気にしないわよ」

「んじゃ、身体冷えてきたから部屋戻るわ。箒もシャワー使い終わつただろうし」

「箒って幼なじみの子よね？　なんで男と女がおんなじ部屋で暮らしてんのよ。仕種じゃないの？」

「ああ、なんか俺の立場が特殊だから、特別に部屋を用意できなか

ったんだと。それで今は箒と二人部屋で

「もういいわ。内容は分かったから」

お手上げといわんばかりに万歳をする。おお、幼なじみは最後まで言わなくても理解してくれるのか。

「そっぴや、仕種がどうって……」

「ああ、あたしの勘違いみたい。忘れて」

微妙に返事が素っ気ない。でもそんな表情もすぐに元に戻る。

「でもさ、あんた大丈夫なの？ 年頃の女の子と同室なんてさ。ムラムラ〜って来て襲っちゃったりしないの？」

「箒相手に？ 幼なじみ相手にそんなことしないって」

それにそんなことしようもんなら問答無用で木刀（竹刀にあらざ）でぶっちKILLしだし。俺だって命は惜しいんだ。

「はあ……。そっぴや一夏は千冬さんで散々見慣れてるのよね。そりや壁高いわよね」

何を溜息ついてるんだ鈴、そんなんじゃ幸せが逃げるぞ。確かに千冬姉は下着姿でウロウロすることはあるけど。正直止めて欲しいよな、こっぴだって健全な男の子なんだぞ。

「身体のことやたら気使ってるし、同世代の女に興味示してないし……。やっぱアンタ枯れてるわ」

枯れてるってなおい。弾もおんなじことを言ってたけど、別に俺は女子に興味がないわけではなくてだな。

「あんたまさかそっち系！？ 道理で弾といっつも……」

「待て待て待て！ 勘違いするな、俺は断じてそっちの道に足を踏み入れてない！」

「っておい待て鈴！ じゃ、とか言っただ勘違いしたままどっか行くなあああああっ！！」

一夏と箒と分かれた反対側のピット。

「仕種、少し厳しすぎではありませんでしたか？」

セシリアがピットに戻るといの一番にそう言った。

クラス代表戦以降、セシリアの態度はだいぶ刺も軟化し取れてきた。それでも中身がお嬢様なため時々出る上から目線もこう言う奴なんだと温かい目で見てやることにしている。

「何がですか？ 一夏への態度？ 練習？」

「……一夏さんへの態度は今に始まったことじゃありませんけど。練習に関してですわ。たとえ代表候補生でも三対一は流石にきついですわ。ましてや一夏さんはISに触れてまだ一月も経っていないんですよ？」

「ならセシリアが譲ればよかったんじゃないですか。そうすれば二対二のタッグマッチが出来たというのに」

今日の練習は四人いるから二対二で分かれて試合してみようと言ったものの、箒とセシリアがお互い譲らず。

私が一夏と組もうとしても二人は許そうとしないので結局三対一ですることになった。何やってんでしょうね……。

「そんなこと出来るわけありませんわ！ 箒さん、ましてや幼なじみの凰さんが現れた以上わたくしはこれ以上後れを取ることは許されませんわ！」

「……さいですか」

「しかし、今のままでは篠ノ之さんと対して変わりありませんわ。それどころか一夏さんと同じ部屋で暮らしてる向こうの方が歩があるようですし」

「じゃ、クラス対抗戦が終わったところにもデートにでも誘えばいいんじゃないですか？」

素っ気なく適当に返事をする、

「で、で、で、で、でデートおおっ!?!?」

思いつきり顔を真っ赤にして反応した。

「そうですよデートですよデート。日本風にいえば逢引でしょうか」

「あ、逢び……!」

ぼっ!と湯気を立てながらへにゃへにゃと崩れ落ちる。えー、そんなに刺激の強いこと言ったつもりないんですけどねー。

「し、ししししかし、一夏さんがたくしの誘いを受けるのでしょうか……?」

「日本の街を歩きたいとか適当に言い訳つければあの男は着いてきますよ」

「そうですわよね!?!?」

「ただネツクなのは一夏がデートだって意識しないことですかね…」

「そうですね……」

まったくそのとおりである。一夏は女の子と遊びに行っても、「女の子と遊びに行った」としか認識していないのだ。世間一般にそれをデートというのに。朴念神め。

「ま、その辺はご自分で頑張ってください」

「は、はひー！」

や、何にもないところで噛まれても……ちょっとだけ可愛いなって思っちゃったじゃないですか。

夕食を取りながら一夏の練習の反省会を十分ほどした後、お開きとなり各々の部屋に戻っていく。

シャワーを浴び疲れたため少し早めの就寝を取ろうとした時、ドアが叩かれたので出る。

「しーぐさー。少し聞きたいことがあるんだけどいい？」

ドアを開けるとそこにはネコがいた。中国産で人懐っこい奴だ。名前は鈴という。

「なんですか鈴。ISの訓練と一夏の会議で私は疲れてて明日にして欲しいんですが……」

「嫌よ。仕種ってそうやって有耶無耶にするじゃない」

流石は幼なじみ、こちらの手の打ちはお見通しか。

「はあ、少しだけですよ」

「平気平気すぐ終わるって。ていうか、相方の了承なしで勝手に通じていいの？」

「別に大丈夫です。私、一人身ですし」

「え……。一夏女と一緒にの部屋なのに仕種は一人身なの？」

「ええ。寂しくはありますが、一人だと気楽です。ま、中に入ってください」

中に入れるが奥の方まで入ってくるような気配がない。

ボタンとドアが乱暴に閉まる音に振り向くとドアのところまで鈴は俯いていた。髪の毛でその表情を読み取ることが出来ない。

「鈴……？」

近寄った無防備な一瞬、見逃さないように鈴が動いた。

異変に気付いてこちらが構えるよりも早く鈴は両手を部分展開し、床に押し倒され組み伏せられる。

「くっ！」

押し返そうにも部分展開された両手によって押さえられた腕はピクリとも反応しない。そもそも人とISでは敵う筈もない。

「どう？ これならあんたも動けないでしょ？ それに部分展開できなしいね」

鈴の言うことは事実。完全に拘束されている。いや、本気で逃げようと思えばまだいくらでも手段はあるのだが、それは穩便に済ませることを度外視した場合でそうした場合千冬さんの制裁を食らうことになる。

「で、もう一度聞きたいことあるって言ったけど遠慮なく聞かせてもらっわ。あんたがどうしてIS学園にいるの？ いや違うか、どうしてあんたがISに乗れるの？」

その質問に肝が冷える。

そのことを聞くとはたぶん鈴は気づいている。

かといって鈴は竹を真つ二つに割ったような性格だ。誤魔化しが通じる相手じゃない。

それにこんな状況だ。下手な冗談も打つことが出来ない。

逃げ道を必死に模索する。

「ふうん、口を割るつもりはないんだ。なら、こっちから

」

「クラス対抗戦……」

ぼつり、と言葉を落とす。

「ん、何よ？」

鈴は耳聡く言葉を広い聞き返してくる。

「今度のクラス対抗戦、そこで優勝できたらその時に理由を教えま
す」

「な！ そんな要求受け入れられる訳……」

「これがこちらの出来る最大限の譲歩です。それとも鈴は優勝出来
ないんですか？ 中国の代表候補生なのに？」

「っ！ あーもう！ 分かったわよ！ 優勝すればいいんでしょ優
勝すれば！」

投げやりに語気を強めて言い放つ。発破をかけてやれば性格上、
鈴はそれに乗らざるを得ないのだ。

「その代わり、優勝したらなんか驕りなさいよね」

しかし鈴木も転んでもただでは起きない。対価を要求するあたりかなりしたたかだ。

「駅前のクレープで手を打ちましょう」

「ぬるいわね。こっちは@クルーズの期間限定の一番高いパフェを要求するわ」

待ちなさい。あれって一つ二千五百円する奴でしょう？

学生が一回の食事にそんな膨大な量を払わなければならないのですか。

「あ、別に呑まなくてもいいわよ。その時は今この場でまるっとひん剥いてあげるから」

「はあ……、分かりましたよ。それで手打ちにしましょう」

「やり！ 約束したからね！」

納得したのか押さえていた拘束を解く。押さえられてた箇所が少し赤くなってる。

「見てなさいよ！ あたしが優勝して仕種の口から本当のことを喋らせて見せるんだからね！」

そんなことも気にせず鈴はぴゅーっと出て行った。まさしく風のよう。

出た直後に「ぶぎゃっ!？」って叫び声が聞こえたのは空耳のせいにしておきましょう。

これはますます、一夏の訓練に熱を入れなければならなくなりましたね。

その後日、一夏が鈴に宣戦布告を受けていた。

かくいう当人の一夏は、

「俺、何か鈴を怒らせるようなことしたか……?」

と首を捻りながら考えたとか。

side：凰鈴音

「ぶぎゃっ!？」

部屋を出るや否や頭に強烈な衝撃が走り、虫が潰れたような声を上げる。

「急に部屋から飛び出すな凰」

「ち、千冬さん」

「学校では織斑先生と呼べと言っているだろう凰」

ぎん、と目から放たれる威光が強くなる。

「す、すみません」

頭を下げながらふと思いつく。

同年代で覚えがない人ならこの人なら、職種について知っているかもしれない。

「あの、少しいいですか？」

「なんだ、手短にしろ」

「はい、職種のことです」

千冬さんの眉がぴくりと動いた。それも微微たるもので注意深く見ていないと気付かないほど小さな変化だ。

逆に、変化を見せたということは絶対職種に対しての私の持っている違和感の答えを何かを知っている。

「やっぱり、何か知ってるんですか」

「……ここでは、拙いな。私の部屋に來い」

そう促されると千冬さんに連れられて寮長室に行く。こんなところに入るのには寮則を犯した時と相談事ぐらいしか敷居を跨ぐことはないだろう。

あれ、あたしってばけっこうレアな体験してる？

「まあ、適当な場所に座れ」

そう促されるが、当のあたしは呆然と立ち尽くしていた。

(いやいやいや！ この足場のなさは何よ……！？ 座るどころの問題じゃないわよ!?)

心の中でそう突っ込む。間違っても口にするなど出来ない。

一夏の家に何回か遊びに行ったことあるけどこんなに散らかっていなかった。むしろ綺麗だった。ていうかどんな散らかし方すればこんなに部屋を汚すことが出来んのよ。

ていうことはこれ全部千冬さんが散らかした……？ で、こんなのを一夏は毎日掃除してんの!?

一夏の掃除スキルの高さを相変わらずに実感した瞬間だった。

「ほれ、飲め」

缶のスポーツドリンクを手渡されるとはあ、と覇気のない返事をした後何気なくぷしゅとプルタブを開けて口を付ける。

「飲んだな？」

それを見るや否や子供の悪戯が成功したかのように千冬さんにはやりと笑った。

「このことは口外するなよ？ プライバシーは守られるべきだから

な。それは口止め料だ」

そこまでして生徒の夢を壊させたくないか。世界一になるというのも難儀なものだ。

「一夏に掃除させた方がいいんじゃないですか？」

「それもそうなんだがこの寮もあくまで学校だから……。一個人をこき使うのは気が引けてな。もう少しだけ待ってあいつに頼むか……」

千冬さんはそう呟くと缶ビールをぶしゅと開ける。

千冬さんの言うあいつとは一体……。一組の副担任のヤマダマヤ？にやらせるんだろうか。それだとしたらかなりご愁傷様だ。ていうか個人を使うのが気が引けるといふのと矛盾してないか。

「あのちふ、織斑先生」

「ここにお前と私の二人しかおらんだろう。そんなに畏まらんでいいぞ」

「はあ……」

言いなおそうとしたところを意地悪そうに笑う。

千冬さんは公私の区別をはっきりと分ける、それを逆手に人をかからかう「私」の状態の千冬おしなさんはずるいと思う。

「それで聞きたいことというのはなんだ？」

「はい、どうして仕種がIS学園にいるんですか？」

「それは仕種がISに乗れるからだろう」

にべにもなくさも当然のように答える。

「そうじゃなくて。どうして仕種がISに乗れるんですか？」

「では聞くが鳳、何故男の一夏がISに乗れる？」

「いえ。千冬さんは分かるんですか」

「いや、私にもわからん」

取り付く島もない。

「それにしても妙な物言いだ。まるで、仕種がISに乗れる筈がないというような言い草だ」

千冬さんの厳しい眼光があたしの背筋を貫く。

私人の目でも、教師の目でもない。現役のIS操縦者のように厳しい目だ。

「その様子だと、ある程度真実に近づいているようだな。どうして気づいた？」

「会ったときから違和感がありました。一夏とか幼なじみの篠ノ之さんの態度であたしも最初間違ってると思ってたけど、部屋割とか

見たら不自然な気がしたので」

いかに一夏が姉弟で暮らし慣れていたとはいえ、年頃の男女を同室にするのは拙い。

男の一夏を仕種と部屋替えして一人部屋にすればいい。

なのに、実際は交代されることなく女の仕種が一人部屋を使っている。

ここに大きく違和感を持たざるを得なかった。

つまりは仕種が一人部屋を使わざるを得ない状況が存在する可能性があるかもしれないということ。

ふむと足を組み代え、缶を振りながら千冬さんは思案する。

「変化に疎い一夏は当然として、篠ノ之はあんなことがあったからな。まともに仕種のことを覚えているのはお前ぐらいだから……。本人はどう言っている」

「さっき話してきましたが、クラス対抗戦で優勝したら話すって」

そうか、と呟くと缶ビールを飲み干して空にする。

「なら私から言うことは何も無い」

「!? 知っている筈なのにどうして!」

「ああ、確かに仕種の抱える秘密について私は知っている。しかし

仕種の意味がなければ他人の私が無闇に話すことも出来ない。それくらいに事は大きい」

言われなくても分かっている。

仕種が言い渋っている時点で大したことあるんだって重々に承知している。けど……。

「鳳、仕種の話だが興味本位の生半可な覚悟で聞くなよ？ 事はそれくらいに重いぞ」

「あ、あたしはそんなつもりじゃないです」

「そうか。だが、あの日のことを引きずっているのなら尚更やめておけ」

その一言にあの日の記憶が鮮明に甦る。

目の前で苦しそうに倒れている仕種、騒然とする教室、右往左往する担任教師。そして何が起こったのか分からずに立ちつくすあたり。

全てが忌まわしく拭いされない一つの過去。それが今もあたしの心の闇を掴んで離さない。

「っ」

フラッシュバックした光景にきゅっと唇を噛みしめる。

「あれは事故だ。誰でもが成り得た役をたまたまお前が引いただけ

の話だ。お前に責任はない」

千冬さんは仕方ない、といった風に諭す。

「でもどんな形であれあたしは仕種を殺しかけた。親友を、あたしのこの手で……」

大切な人を言葉通りこの手にかけようとした。

その罪は消えることはない。許されることもない。許せる筈がない。

「あまり思い詰めるなよ。なにあいつは勝てば話すと言ったのだから？　なら、勝って正々堂々と奴の口を割らせればいいさ」

ただし、と千冬さんは一言を添える。

「その口からどんな真実が告げられようと目を逸らさずに受け止める。私からの忠告はそれだけだ」

それだけを聞き届けると寮長室を後にした。

気分は仕種の部屋を出た時のような高揚でもなく、IS学園に来た時のようなやるせなくモヤモヤと言い表せないようなものだった。

第10話 「ワン・プロミスノワン・シークレット」(後書き)

もうバレバレだorz。鈴のスーパー推理タイムは大目に見て下さい。突っ込み禁止。おk？

ちーちゃんのだらしなさが増してるかもしれない。けど気にしない！

第11話 「アイ・ニード・インフォメーション」(前書き)

とある人があまりにも早出し過ぎるって言うか。

ピッチャーが投球モーション入るまでに走り出しています。

それで盗塁が成功しているかどうかは皆さんの感想次第。

第11話 「アイ・ニード・インフォメーション」

side：露崎仕種

「四組は、つとここですね」

以前クラスメイトが話していた専用機持ちを見に行くことにした。クラス対抗戦までそれほど日がないたため情報収集も大切だ。私が今探している情報は専用機に関するものである。

ほとんどの生徒が訓練機を使う中、一組、二組、四組は専用機持ちだ。そのことも大きいようで上級生回からも注目を集めている。

技量の差が機体の差に救われるかは分からないが一夏の技量なら上級生に苦戦することは間違いない。後は挙げるとしたら上級生が三人？専用機持ちだが、クラス代表なのかどうかの情報がないため少し厳しい。

まあ今が上回生のことはともかく、一組の専用機持ちは一夏だし二組の鈴は代表候補生だからいくらか情報が探せばある。

さてそうなると問題は四組だ。まったくのノーマーク、ノーデー

ただ。不気味なことこの上ない。

専用機を持つということとはそれ相応の実力があるということでもある。

実力者相手にノーデータは流石に今の一夏の状況では拙い。

「ねえ、あの子が例の沙種様の……?」

「そうらしいよ。織斑くんとおんなじクラスなんだって」

「私、束博士の妹の篠ノ之さんとも同じクラスだって一組の友達に自慢されたんだけど……」

「いーなー、沙種様のサイン頼んでみようかな……」

この間の就任パーティーの時に露崎沙種の妹とバレてから割と露骨に後ろ指差されるようになった。一夏の時ほど周りがざわついていないがないのだがこれはこれで辛い。

「ちょっといいですか」

入口付近の手近な四組のクラスメイトに声をかける。

「ええと、沙種様の……」

なんとということだ、この子も姉さん信者なのか。というか私がある人の妹と露見して以来、姉さん信者が増えていないか?

「四組のクラス代表も専用機持ちって聞いたんですけど」

「ああ、ひょっとして更識さんのこと？」

「ええ。機体がどんな感じか教えてもらいたいんですが、よろしいでしょうか？」

そう聞くと二人は顔を見合わせてなんとも言えない複雑な表情をする。一体どうしたのでしょう？

「教えるも何も私、見たことないからな。更識さんの機体」

「????？」

「実習の時も訓練機だもんね更識さんって」

それは少しおかしな話だ。

専用機持ちなら皆の前で実践を行う筈だ。一夏やセシリアや私のように。

その時に専用機持ちが専用機を扱うのは当然のことだ。その方が早いし何よりIS自身に経験を積ませられる。稼働時間は長ければ長いほうがこちらの癖や特性を理解してくれる。

私はそのことに関して主眼を置かれ、専用機が与えられた。現存する、誰よりもISの起動時間を長くするために私はISに乗り続けた。

……つと話が逸れた。要するに、専用機持ちなら専用機を使った方が強くなれるということだ。

なのに、ここのクラス代表はその理論に逆行するように専用機の姿を現していない、みんなは見えていないという。これはかなりおかしい事態だ。

「その更識さんで今どこに?」

「うーん、いつもなら窓際の席でキーボード叩いてるんだけどお昼買いに行ったのかな。更識さん、今いないみたいだし」

四組の子はそう言って一度、教室を見渡す。

同じクラスメイトですら情報がナシではなんとも言えない。

長居は無用なため、彼女が戻ってくる前に四組の子にお礼を言うて大人しく引き下がることにした。

放課後。

第三アリーナへ向かう廊下は珍しく人気がなく静寂に包まれている。

そんな中足跡が二つ。一つは自分。もう一つは後ろから付いてく

る人の足音。完全に私の歩調に同調しているが気配が消し切れていない。むしろ、意図して消していないのでしょうか。

間違っても後ろには誰にもいないなんてことも、足音がぺたぺたと一回ずれてたりもしないですよ、あうあう……。

「誰ですか？」

「ありゃ、ばれちゃったか。私に気づくとは中々ね」

その言葉を心待ちにしていたのか彼女はそう言って、あはっと笑う。

外側にはねた薄い水色のショートヘア、十人が十人美人と頷く容姿。

身体も同性ですら羨むプロポーションでそのスタイルの良さは制服越しても充分に見て取れる。

「もう一度聞きますが、誰ですか？」

「さあて、誰でしょう？」

うふふと笑い、右手に持った扇子を広げて口元を隠す。そこには「Who am I?」と英語を無駄に達筆に書かれている。

余裕を持った大人の雰囲気とは対照的に子供っぽく面白がっている笑み。そのどこか含みがあるような雰囲気、面白がっている表情は東さんを連想させる。

こういうタイプで一番怖いのはどこまで自分を見せているのかが分からないところ。不透明、掴みどころがないと言ってもいい。案外と苦手なタイプだ。

「ヒントを下さい」

「あら、一回会ってるじゃない。忘れちゃった？」

さもありません、とあつけらかなと言つてのける。確かに一回会つたら大抵の人は覚えているのですが、生憎とこの人は全くの覚えがない。

これが初めて会話したようで。

リボンの色からすると二年生だ。分かることはそれしかない。

「お嬢様」

のろのろと、もしくはトテトテと形容したような走り方でクラスメイトが走ってくる。見ていて転びそうなのだがこれが案外と器用に転ばずにこちらまで辿り着く。

「本音ちゃん、人前でお嬢様は駄目よ？」

「そうだった。これはうっかり」

布仏本音。

いつもサイズの合っていないだぼだぼの袖の長い制服を着ていて、行動が緩慢なこの子は一夏からのほほんさんと呼ばれている。一夏

にしては珍しく的を射たネーミングセンスだ。

なんでここに通れたのか結構不思議だが、座学が出来るのか成績は割と優秀らしい。

「かいちよー、書類のここのところなんですが」

「んー、どれどれ」

会長。

その一言にまだ記憶に新しいビジョンが映る。あれは四月。あの時も皆の前に姿を現した。

二人の会話にピースがかちりと噛み合う。

「ん？ その顔じゃ答えに達したみたいね。じゃあ、答え合わせと行きましようか」

私が確信を得たのを見抜いたのか、先輩はパチンと扇子を閉じる。

「はい。学園最強の生徒会長にしてロシアの国家代表、更識楯無さん」

「うふふ、ご明答」

再び扇子を広げ、ひっくり返す。裏には「You win!」とこれまた無駄に達筆な英語が書かれている。

「あ、でも学園最強は間違っても私じゃないからね。私、まだ織斑

先生から一本取ったことないし」

そんなことは先刻承知です。あの人から物理的に一本取れる人間なんて存在するんでしょうか。

「それで何の用ですか？ 私、クラス対抗戦の情報集めの最中なんですけど」

「一組よね。仕種ちゃんって」

「ええ。二組は代表候補生ですしいくらか調べれば露見はあるでしょうし、四組は……何故か専用機がないみたいですし」

四組の話をした当たりで微妙に表情が変わったような気がした。

「え〜、しくしく、かんちゃんに会ってきたの〜？」

入れ替わるようにのほほんさんが食いついた。

かんちゃん、とは更識簪さんのことだろうか。で、しくしくとは文脈からするとどうやら私のことらしい。

ちなみに一夏は「おりむー」、箒は「しののん」、セシリアは「せっしー」だった気がする。なんとも束さんと似たり寄ったりなネーミングセンスだ。

「いいえ、ちょうど食事時なので入れ違いだったみたいです」

「そうなんだ〜。ざんねん〜」

そう言つてのほんさんは残念のポーズを取るのだが、声もポーズも全然残念そうに見えない。

「で、これから上回生の情報収集です。織斑先生に聞けば知ってるんじゃないかって思つて職員室に向かう最中です」

「じゃあその手間をおねーさんが省いてあげましょう」

はい？

「二年生も三年生もクラス代表は専用機持ちじゃないわよ。それにあの子の機体も完成してないしてないみたいだし実質、クラス代表の専用機持ちは一組と二組の二つだけよ」

やったね、大チャンスじゃない みたいな調子で楯無さんは教えてくれる。

「いいんですか。ペラペラ喋っちゃっても」

「いいじゃない。頑張つてる子って私好きよ。特に好きな人のために頑張つてる子はね」

「一夏は友人止まりです。それ以上は木星人がいるのと同じくらいにあり得ないです」

「あはは、辛辣ねー。一夏くんに対して」

「間違つて覚えられるよりマシです」

あはは、とまた笑い出す。

「まー、それと興味出たからかな。仕種ちゃんのこと」

扇子で口元を隠したまま楯無さんはにやにやと笑うのを止めない。興味が出たとは絶対いいような気がしない。

「仕種ちゃんさえよければ貴女の挑戦、楯無おねーさんがいつでもどこでも二十四時間受け付けるわよ？」

「そうですね。じゃ会長が寝てることを襲うことにします」

「わあ、しぐしぐつてば大胆」

のほほんさん、そういう方向じゃなくて。

「勝てる確率が一番高い手段を私は選択したまです」

「あら私、寝技けっこうデキる方だけど大丈夫？」

「……会長も何、そういう方向になってるんですか」

うふふ、と笑う。

「初心ね、仕種ちゃんって。じゃ、仕事あるみたいだし」

仕事が残っているのか颯爽と去って行った。

少しの間なのにあの人と話すのは疲れる。それはきっと私自身の本来の姿を見せまいと知らず知らずに肩肘を張っているからなのだろうか。

「しぐしぐもお疲れだね。きつと糖分が足りてないのだ」

「ああいうタイプは苦手なんですよ。いつの間にペースを握られてるうえにこっちの言い分は暖簾に腕押し。厄介この上ない人です」

「わたしはお嬢様のこと好きだよ。しぐしぐもきつと好きになれるよ」

「苦手意識、とでもいうのでしょうか。腹に一物を持つ人間としてはああいう人が怖い。」

「それよりもああいう人物はしたたかに内情を掴まれている可能性があるのが嫌だ。」

「で、なんで楯無さんと仲がいいんですか？」

「布仏家は更識家に代々使える名家なんだよ。でっ、わたしはかんちゃん付きのメイドさんなのだ」

「ああ、だから楯無さんを「お嬢様」なのか。」

「ちょうどいい。幸いここに彼女に近い人物がいるので情報収集としよう。」

「のほほんさん、甘味奢ってあげるから教えて欲しいことがあるんですが」

「え〜！？ いいの〜！？ がってん承知なのだ〜！」

情報の対価に報酬は必要なものだ。今回はそれがお菓子だという話で五百円前後で内偵出来るのなら安い話である。

「で、なに〜？ しぐしぐの聞きたいことって〜」

あの会長と親しいということは当然、姉妹の彼女とも親しい関係にあるに違いない。しかも彼女付きの使用人だと言っている。

つまり、何かを知っている筈だ、

「更識簪の専用機について」

「どじつしたのですかね……」

ベッドに寝ころび天井を見上げながらはあ、と溜息を吐く。

得られた情報は思った以上に複雑なものだった。

『かんちゃん機体はね、おりむーの白式のために開発が遅れてても完成してないんだよ』

更識簷の専用機の開発元は倉持技研、奇しくも白式と同じ会社なのだ。

早くから簷さんの専用機

打鉄式

の開発に着手

していたが、そこに現れたのが世界中で唯一ISが扱える使える男、織斑一夏だ。

一夏にはデータ取りの意味合いも含めて専用機が与えられることになった。その際、名乗りを上げたのが倉持技研である。

その時に人事の割り当てを間違えたのか研究員を全て白式に回してしまっただけらしい。結果、本来なら四月の頭に届く筈だった専用機も一月経った今もまだ完成していない。

既存のよりも新しい物作りがしたい、研究者魂が騒いだといえは聞こえがいいが要は頼まれていた通常業務を放棄したのだ。研究者たちが男ばかりだったからとかの内部情報は知らないが明らかに企業としてそれはおかしいでしょう。

『そつだよね！ しぐしぐもそう思うよね〜！』

のほほんさんが珍しく力が入っている。やはり親友の機体の完成の遅延に怒っているのだろう。怒ってもたいして怖くなさそうだが。

『つまりね、かんちゃん機体はおりむーに寝取られたんだよ』

いや、違うでしょう。間違っている表現だった。

はあ、ともう一度　　しかし先程よりも大きな溜息を吐く。

どうにか出来ないものだろうか、と考えを巡らせる。

……方法がない訳ではない。

姉さんの機体開発に携わった会社に頼めばいい。

私の機体も少しばかり特別で、製造元が潰れているためそのデータを元に再現させたのが今のオルテンシアである。

尤も、主任が完成したものに更に手を加えて別の機体になったのは起動させてから気づきましたが。姉さんの時もそうだったのでしょうか……？

オルテンシアのハンドガン　フタリシズカ　やレールガン　ストレリチア　などの後付装備でもお世話になっている。姉さんのもあそこで作られてそれで世界を獲った。

あそこは割に合う仕事をしてくれると姉さんは好評しているし私もそう思っている。

(いらぬお世話かもしれませんが、やっとなないと後々面倒事になりそうなんですよねー)

私が見知らぬ他人のために行動を起こす時には必ず理由がある。

特に理由がないことは今のところなく、何かしらの理由が存在する。中にはム力つくなど理不尽な理由もあったりしますが……。

今回起こす訳は一夏だ。絶対後に問題になる。絶対、どこかで揉める。憂い元はさっさと断ち切つて奥に限る。

問題を起こしたら必ずフラグ回収に発展する。そういう男なのだ
織斑一夏とは。

現状はまだ少数ですが、これから何人一夏の取り巻きハイレムは増えるんでしょうか……。

(ま、それはさておき)

専用機のこととは姉さんを通して話しておいた方がいいでしょう。
あの人から取り次いでもらった方が話は進むと思いますし。

来週にはクラス対抗戦が始まる。一夏には頑張つて貰わなければ。
なにせこのトーナメント、専用機持ちが一夏と鈴の二人だけとい
うバランスの偏ったものなのだから。

専用機持ちのどちらかが姿を消せば一方が非常に有利になるこの
試合。

とにかく、もう一度一夏の癖を洗い出して徹底的に扱きあげなければ。私が負けないためにも、秘密を知られないためにも。

クラスリーグマッチ対抗戦、初日。

一回戦の相手は天の悪戯か鈴だった。運がいいというべきか悪い

というべきか知り合いとの勝負である。

ピットにて最終確認を行っている。ここにいるのはセシリア、箒、私と選手の一夏といういつものメンバーだ。

「ISネーム、甲龍^{シムロン}。近接格闘型で一夏さんと同じくパワータイプのISですわ」

「一夏、甲龍の非固定浮遊部位^{アンロック・ユニット}に注意してください。あれも第三世代型兵器です」

おう、と一夏は短く相槌を打つ。

「ていうか仕種、鈴を倒したら他に専用機持ちはいないってその情報本当なのかよ？」

一夏は半信半疑で尋ねる。まあ、実際信じられないような話だ。一応、間違いがあつてはいけないのである。後千冬先生に確認に行ったら間違いはなかったのだ。

「ええ、先輩の中にクラス代表で専用機持ちはいないと確かな筋から情報を得ているので」

「その確かな筋の情報とやらは誰から受け取ったのだ」

箒も納得していないのかぶすつとした表情で訝しげに尋ねてくる。

「生徒会長」

セシリアと箒は息を飲むが、一夏だけ分ならずにはぼかんとしてい

る。相変わらず無知ですね。

「……なら、確かなのだな」

篤は生徒会長という言葉聞いて食い下がった。やはりトップからの情報というのは影響力があるのでしよう。

「とりあえず、自分な得意な間合いを維持し続けなさい。相手が鈴ということもお忘れなく。性格の方は分かっているでしょう?」

「……なんかいつも前よりも口出ししているな仕種」

焦っているのだろうか、いつもよりも饒舌らしい。そのことを篤に指摘される。

「そうですね? ま、相手のペースに巻き込まれずに頑張ってください」

「おう。白式、出る!」

そう言って一夏はピットを飛び出した。

この後引き起こる事件など、この時点では誰も知る者はいなかった。

side：織斑一夏

『両者、既定の位置まで移動してください』

ピットを飛び出した後、指示に従い既定の場所までお互いは無言で移動する。

甲龍の肩の横に浮いた刺付き装甲スパイク・アーマーであれで殴られたらとんでもなく痛そうだ。……つか、あれで殴るなんて攻撃法なんて想像できないけど。

試合開始までお互い無言でこんな調子かと思いきや、鈴が解放回線ヤネルで話しかけてくる。

「一夏、リタイアなら今の内よ」

「誰がリタイアなんてするかよ。全力で来い」

真剣勝負で手を抜かれるのも手を抜くのも嫌いだ。試合は全力を出してこそ価値があるし、相手を尊重するのなら尚更だ。試合中の

手抜きなんて失礼にも程がある。

「一応言っとくけどISの絶対防御も完全じゃないのよ。シールド・エネルギーを突破するだけの攻撃力があれば本体にダメージを貫通させることが出来る。」

ちなみに鈴の言ってることは本当だ。

『殺さない程度にいたぶることは可能である』

その事実は俺を気持ちを強張らせる。俺だって痛いことは嫌だ。嫌に決まってる。千冬姉にバカバカ好きで叩かれてるわけじゃない。だけど、

「だからどうした。俺以外の唯一の専用機持ちの鈴が一番の強敵なんだよ。代表候補生のお前に無傷で勝とうなんて鼻から思ってるない」

相手が自分より実力が勝っている以上、多少の傷は覚悟で倒す。そうでもしなければ、そういう覚悟でなければ鈴は倒せないだろう。

「っ、ちょっと待ちなさい。何よその情報」

俺の言葉に引っかかるところがあるのか鈴はさっきまでの調子から一転し、いつも雰囲気で噛みついて来る。

「知らなかったのか？ 仕種に言うにはこのリーグマッチ、俺とお前しか専用機持ちを出てないんだと」

俺もそのことは試合前の対策会議で初めて聞いたが、筈やセシリ

アも納得するくらいに情報は確からしいし。

「つまり、あんたを倒せば他のクラス代表は専用機持ちはいないって。そういうことね？」

鈴は今のやり取りでメリットを確信したかのようにふふん、と笑う。

そうか、俺が専用機持ちのライバルが鈴しかいないのと同様に鈴もまた専用機持ちのライバルは俺しかいないんだ。

「ああ、決勝戦のつもりでかかってこい」

「一夏のくせに一丁前に言うんじゃないわよ。あんたをコテンパンにして勢いそのまま優勝させてもらうんだから。そうしたらその時は……」

「その時は、なんだよ？」

「な、なんでもないわよ！」

いきなり怒鳴られる。気になるから聞いただけなのに急に怒り出すなんて、変な奴だな。

『それでは両者、試合を開始してください』

戦いのゴングが鳴った。

第11話 「アイ・ニード・インフォメーション」(後書き)

楯無さんが早くも登場しました。あと名前だけ簪さんも。

簪さんとは絡ませていきたいですね。妹繋がりで話が広げられれば
幸いかと。

次話、いよいよですね。一巻の山場ですので濃く書きたいです。

第12話 「encounter」(前書き)

IS 人気を下火にならないことを祈りつつ書いております。見向きもされなくなると少し悲しいですね。

なんと5月31日に奇跡のOPVを獲得しました！ あざーっす(泣)

そんなこんなでクラス対抗戦、開幕。

06/11 追記

どうやらアクセス解析が不調だったようでしばらくしてから見たらちゃんとアクセスがありました。ほっとしました。

第12話 「encounter」

Side：織斑一夏

「おおおおっ！！」

「はあああっ！！」

試合開始直後、鈴の青龍刀と模した双天牙月と俺の雪片弐型がぶつかる。

「ふうんやるじゃない、初撃を防ぐなんて」

けど！と言葉を続け鈴は青龍刀をもう一本を取り出す。

「はあっ！！」

鈴はスラスターを吹かして間合いを詰める。

左右から繰り出される剣戟の嵐。

二本の鈴と一本の俺では手数で圧倒的に違う。

そもそも代表候補生に選ばれるくらい技量の高い鈴だ。こちらの攻勢に転じる隙すら与えさせない。

事実、俺は反撃することも出来ずに鈴の双剣をさばくのがやっとだ。

その手数の差に段々と圧倒されていく。

罅迫り合いになった時に突き離す勢いを生かして一端、距離を離す。

「いつ終わりって言った？ まだまだいくわよ！」

今度は二本の青龍刀を連結させバトンを扱うかのようにくるくると高速で回転させて構え直す。

上空に急上昇したかと思うと思い切りよく縦に両断する。

「ぐ、う……！」

手に受けた鈍い衝撃が雪片越しに伝わる。

手数で圧倒していた先程とは違い、今度は一撃一撃の攻撃が重い。

高速で回転しているのだから慣性の力も加わるのだから当然といえは当然だがそれ以上にこちらの支点を的確に狙った攻撃は情けない話だが剣を弾き飛ばされないようにするので精一杯だ。

連結して重撃を加えたかと思えば、次の瞬間には刀を切り離し双刃による乱舞。

その戦い方はまさしく変幻自在。蝶のように舞い、蜂のように刺すとはまさしくこのことだ。

(このままじゃ消耗戦になるだけだ。ここは一度距離を取って……)

鈴の攻撃の切れ間を読んで、鈴との間合いを離そうとする。

「甘いわよー!」

そう言つと肩のアーマーが開き中心のクリスタルが光るのが見えた瞬間、殴られたような衝撃が走る。

「……がつ!?!」

意識が刈り取られそうな一撃をどうにかISのブラックアウト防御のおかげで踏み止まる。

「ふふふ、今のはジャブだからね」

もう一度、しかし今度は反対側の水晶体が光る。

「しま　　!?!」

頭で理解するが既に遅く、先程の牽制ジャブに足を止めてしまった俺は本命を真正面から受けて殴り飛ばされる。

勢いそのままに地面に叩きつけられる。

セシリアの時には感じたこともない直接的なダメージが痛覚を襲う。

シールドエネルギーもかなりのダメージを食らっている。このままでは、拙い。

side：露崎仕種

「なんだあれは！」

箒がモニターを目の前にし声を荒げる。

「『衝撃砲』ですね。空間自体に圧力をかけて砲身を生成、余剰で生じる衝撃それ自体を砲弾化して撃ち出す兵器です」

山田先生が一夏が吹き飛ばされた正体を説明する。

「仕種の言った通り、あれもおそらくブルー・ティアーズと同じ第三世代兵器ですわ」

セシリアも声を落とす。同じ第三世代を扱う身としては複雑な心境なのだろう。

「あれの厄介なのは砲身も砲弾も見えないところだ。おまけに射角はほぼ無制限と来たか。中々中国もえげつないものを作る」

「つまり、あれには死角がない？」

「そういうことになりますね」

衝撃砲に関する情報を列挙する内に、相手の圧倒的な兵器の前に全員が押し黙る。

「結局はそんなのは理屈。扱うのはあくまで一夏と同じヒトなのですから、やりようはいくらでもあります」

そんな通夜のように意気消沈した空気を一蹴するべく私はわざと強気な発言に出ることにする。

「ほう興味深い意見だな。では露崎、お前ならどうする」

だが藪蛇だったか、千冬先生はこれ見よがしに甲龍に対する攻略法を投げかけてくる。無茶振りもいいところです。

「そうですね……。まず煙幕で相手の視覚を奪い、相手の死角を作りそこを徹底的に苛め抜く。それが出来ないとしたら、死角から急襲して隙を突くってところですか」

前者は一夏には無理だ。生憎と一夏の白式には射撃武器が一切積まれていない。

それにこれは相手の視覚を奪うと同時に、自分の視覚も奪うことに

なる。そんなリスクの高い破れかぶれな戦法が一夏に出来る訳がない。

しかし後者は一夏の白式には一応それが出来る。

「どちらも死角を突くこと前提ですね……」

「死角からの攻撃は定石ですからね」

見えない場所からの攻撃は脅威だ。それにこれは戦闘の基本である。セシリアのブルー・ティアーズの戦法にしかり、一夏の現状にしかりだ。

「死角がないというのに、死角を突くというのか？」

篤が矛盾している言葉を訝しげに尋ねる。

「言った筈ですよ。ヒトが扱う以上見えない死角は存在する。自分の真後ろとか真下、真上は目で直接視認出来ない場所はISの補助があるとしてもどうしてもその反応には弱い」

ヒトの視野は草食動物に比べるとそれほど広くはない。つまり、それだけ見えていない盲点が存在する。

ISのハイパーセンサーがいくら万能だとはいえ、所詮扱うのはヒト。見えていない場所は頭の中で一度整理する必要がある。その結果、視野外への対応はゼロコンマ何秒の遅れが生じる。

つまりは、人間である以上どこかしら反応が僅かにでも遅れてしまうスポットは存在する。それがたとえ代表候補生であったとして

もだ。

説明しているうちにモニター上の一夏の動きが変わった。回避優先といえど回避優先のままなのだが距離の取り方を非常に気にした、そんな飛び方だ。

「織斑くん、何かするつもりですね」

「イグニッション・ブーストだな。私が教えた」

「イグニッション・ブースト……？」

「イグニッションブースト 瞬時加速は一瞬でトップスピードに乗り敵に接近する奇襲攻撃だ。出し所さえ間違えなければ、アイツでも代表候補生と渡り合える筈だ」

「それって仕種が使ってた奴と同じ……」

今日までの時間を近接武器しか積まれていない白式と一夏は近接格闘と移動の基礎訓練に費やした。

その中で一夏は千冬先生に近接戦闘におけるとっておき、イグニッション・ブースト 瞬時加速を教わっていたのだ。

指導者が千冬先生とあってか、だいぶ扱かれてまだ不安は残るがなんとか実戦で使える形になった。

それに一夏は以前、既に似たようなことをしていた。

セシリア戦で見せた最後の一撃前の加速はその片鱗であった。

元々武装が刀一つの白式だ。近づいて切るしか選択肢がない以上、その間合いの取り方は様々な技量が要求される。

しかし、そこは姉譲りの天性の剣の才能のおかげで間合いや状況判断の目は代表候補生並に肥えている。

一夏がこれを使いこなせば千冬先生の言う通り、鈴と互角に戦うことが出来る。

「問題なのは通用するのが一回だけということだ」

千冬先生が厳しい表情で言葉を続ける。確かにイグニッション・ブーストは出しどころさえ間違えなければ状況をひっくり返すことが出来るだろう。

相手が即座に対応出来なければ。

鈴は腐っても代表候補生。一度見たものを二度も食らうほど馬鹿じゃない。二度目には即時対応して返り討ちにされるだろう。

つまり、鈴がどう足掻いても対応出来ない位置で使い、なお且つ必殺の一撃を打ち込まなければ相手の牙城は崩せない。

勝負の行方をモニタールームの全員が一夏の行動に注目を集めていた。

side：織斑一夏

「っ!!」

右からの衝撃砲 龍砲 を避ける。

そのまま付かず離れず、衝撃砲をかわせる距離を保ちながら鈴の周りを旋回し続ける。

今まで訓練で仕種やセシリアから一方的な攻撃を受けて来たためか焦れることなくにかく回避優先で飛び回る。

「ちよろちよろと鬱陶しいわね！ いい加減に当たりなさいよ！」

対する鈴は回避し続けかわされ続ける現状に対して焦れ始め、さつきまで掠っていた衝撃砲の精度が徐々に落ち始める。

代表候補生というエリートだった鈴はこんな展開になった試しがないのだろう。

それにエネルギーだって無限じゃない。衝撃砲が実弾でない以上、そのエネルギーはISのエネルギーから持つてくることになる。

千冬姉から教わった瞬間加速イケニッション・ブーストによる奇襲をしかけるべく見えない弾を一定の距離で回避を続ける、反撃の機会を窺いながら。

「っー」

今まで即座に対応してきた鈴の反応が一瞬、遅れる。

(ここだ……！)

その隙を逃すまいと瞬間加速イケニッション・ブーストを発動させる。

「っおおおおおっ！！」

見事に不意を突かれた鈴は虚を突かれた表情をする。完全に引き抜いた。

そしてもう少しで鈴に刃が届く

その数歩手前、巨大な光の柱がアリーナのシールドを貫いた。

「な　　!?」

突然の事態に思わず絶句する。何が起こったのか理解できない。いきなりビームがアリーナのシールドを突き破って……?

「な、なんだ? 一体何が起こって……」

『一夏! 試合は中止よ! すぐにピットに戻って!』

こちらがうつろたえてる所に鈴からプライベート・チャンネルが飛んでくる。

それとほぼ同時、ISのハイパーセンサーから警告のログが知らされる。

ステージ中央に熱源。所属不明のISと断定。ロックされています。

『一夏、早く!』』

「お前は どうするんだよ!？」

「あたしが時間を稼ぐから、その間に逃げなさいよ！」

「逃げるって……女を置いてそんなこと出来るかよ！」

「馬鹿! アンタの方が弱いからしょうがないでしょうが！」

「別にあたしも最後までやり合うつもりはないわよ。こんな異常事態、すぐにも学園の先生たちがやってきて事態を収拾」

「鈴、あぶねえっ!」

鈴を掻っ攫って飛ぶ。その直後、元いた場所は熱線が通り過ぎていた。

「ビーム兵器かよ……。しかもセシリアのよりも出力は上だ」

「い、一夏下ろしなさいよ! 下ろせつてば!」

「お、おい、暴れるな! 今、下ろすからじつとしてるつて!」

下ろそうとするよりも早く俺の腕をすりと抜ける。むっ、そんなに嫌だったのか。

朦々と黒煙が立ち上る中、さきほどの攻撃の主は姿を現した。

「なんなんだ、こいつ……」

そのISを一言で言うならば、果たしてあれをISと呼べるのか
という疑問に尽きる。

地面に付きそつなほどに長すぎる両腕、首なしの頭、そして『全
ル・スキン
身装甲』。

機械的なデザインはその身体にも表れていて全身の至るところに
姿勢制御用のスラスタがいくつも配置され、頭部には剥きだしの
センサーレンズが不規則に並んでいる。

「お前、何者だよ」

「……………」

相手は返事を返さない。当然といえば当然か。戦国時代じゃある
まいし名乗れば名乗り返してくれるような気骨ある時代ではない。

『織斑くん！ 凰さん！ 今すぐアリーナから脱出してください！
すぐに先生たちがISで制圧に向かいます！』

山田先生からプライベート・チャネルが飛んでくる。いつもと違
いはつきりした口調は少しばかり教師としての威厳があつた。

「いや、先生たちが来るまであれば俺が食い止めます」

先生の言い分を拒絶する。大切に思ってもらっていることはとて
も嬉しく思うがここで素直に逃げ帰っても、客席に被害が及ぶ可能
性が高い。

なにせ、あいつは俺を狙っているのだから。それならば狭いピットに戻るより、広いアリーナで戦う方がよほど賢いと言える。

「ちょっと待ちなさいよ一夏！　なんでそこにあたしの頭数が入ってないのよ！」

鈴が俺の言い分が気に入らないのか食ってかかる。

「俺はなんかアイツからロックされてるみたいだ」

「はあっ!?!」

鈴は訳が分からないと言ったふうに堪らず聞き返す。

「だから、アイツの狙いは俺と白式みたいなんだよ！　だから、俺がアイツの注意を引きつけてる間に鈴はここから……」

「ふざけんじゃないわよ！　素人のアンタ残してあたしにおめおめ尻尾巻いて逃げだせて言うの!?!　冗談言うのは緊急事態以外にしてよね!?!」

鈴はいきなり噛みついて来た。代表候補生としての意地があるらしい。

「それにあんたあの機体にロックされてんでしょ。だったら尚更あたしが逃げるわけにはいかないじゃない。さっきまでの戦闘であった一人でアレの相手出来るだけの余裕ないでしょうが」

そう言われるとぐうの音も出ない。リーグマッチの戦闘に引き続き、乱入したISの相手だ。回復のピットインすら与えられないこ

の状況では正々堂々もクソもない。

「あたしが衝撃砲で道作ってあげるから、一夏はそれで思いっきり叩き斬ってやりなさい」

「そうだな。それでいくか」

『だ、駄目ですよ！ 生徒にもしものことがあったら』

「鈴、来るぞ！！」

そこまでしか山田先生の言葉は届かなかった。突っ込んでくるI Sをかわす。

幼なじみによる即興のコンビネーションを見せることになった。

side：露崎仕種

「お、織斑くん！？ 聞こえていますか！？ 鳳さんも聞こえています！？」

モニターに向かって叫び続ける山田先生。傍から見れば危ない人認定されるだろう。

「本人たちがやると言っているのだから、やらせてみたらいいだろう」

「織斑先生もどうしてそんなにのんきなこと言ってるんですか」！

おおらかに構える千冬先生に対して、おろおろする山田先生。

「まあコーヒーでも飲んで落ち着け。糖分が足りないからイライラするんだ」

「先生、それ塩です」

それを聞いた千冬先生の腕が塩のふたを開けたところでぴたっと止まる。危ない危ない、塩入りコーヒーなんて飲めるわけがない。

「なんで塩がこんなところにあるんだ？」

「さ、さあ……？ でも大きく『塩』と書かれていますし」

「や、やっぱり織斑先生も弟さんのことが心配なんですわっ！？
だから、そんなミスを」

最後のそれは今この場において最悪の選択だった。正義の味方志望の赤髪の少年ならデッドエンド直行だ。

「……………」

「お、織斑先生……？　そ、そっちは塩です！　聞いてください！
つてあーっ！！」

山田先生のきゃーきゃーという声も聞く耳を持たず塩を再び取り、
コーヒーの中に投入。そのままぐるぐるとスプーンでかき混ぜる。
無表情のまま行う様が非常に怖い。

「山田先生、どうぞ」

ずいといと有無を言わさぬプレッシャーをかけて渡す。名誉の無駄
遣いだ。^{んよう}

間違いない、これは故意だ。

「で、でもそれって塩入り……………」

「いいから塩の入ったコーヒーも一度試してみるといい」

一介の教師である山田先生が世界最強の重圧を前に屈しない筈も
なく千冬先生から渡されたそれを受け取ってしまう。

それを啜る山田先生の表情は理不尽と苦くてしよっぱいコーヒー
にこの世の終わりを見たような顔だった。

「織斑先生！　わたくしにISSの使用許可を！」

「そっしたいところだが、これを見る」

電子パネルを数回叩く。どれも同じような数字が並んでいる。

「遮断シールドレベル4に設定……？ しかも、扉もすべてロックされて あのISの仕業ですよ！？」

「そのようだ。これでは非難することも救助に向かうことも出来ないな」

表面上はカリカリしていないが内心は焦れているのだろう、せわしなく電子パネルを何度も叩く。

「で、でしたら緊急事態として政府に助勢を …！」

「やっている。現在も三年の精鋭部隊がシステムクラックを実行中だ。遮断シールドを解除出来ればすぐにでも部隊を突入させる」

学園側は打てる手はすべて打っている。それなのに後手に回ったせいで何も対応出来ないのが歯痒くて仕方ないのだろう。

「織斑は自身がロックされていると言ったな？ ならば、こちらに無理して帰還させるより向こうで敵と戦って時間稼ぎしてくれる方が都合がいい」

そうは言うものの、一夏も鈴木も万全の状態ではない筈だ。よくてあと数十分、それ以上はシステムクラックよりも早く一夏たちがダウンしてしまう。

「それに突入部隊にはお前は入れないから安心しろ」

「ど、どうしてですよー！？」

「お前のISが一对多向けだからだ。多対一ではむしろ邪魔になる」
「わたくしが邪魔になるなんてそんなこと

「では連携訓練はしたか？ その時のお前の役割は？ ビットはどのように扱う？ 味方の構成は？ 敵はどのレベルを想定してある？ 連続稼働時間

「わ、分かりました！ もう結構です！」

千冬先生の指導にどんどん青ざめていき、仕舞にはギブアップをした。分かればよろしいとばかりに千冬先生は頷く。

ちなみに私もほとんどがスタンド・アロン独立稼働の状況を想定しているので連携訓練はほとんど行っていない。

「あら？ 篠ノ之さんはどちらへ……？」

セシリアの一言にはっとして部屋中を見渡すが箒の姿が見当たらない。途端に、苦虫を噛み潰したような感触が口に広がる。千冬先生に至っては舌打ちをする始末だ。

「千冬先生、すみません。箒を探してきます」

そう断って、一礼すると駆け出した。

「あ、ちょっと仕様！？ 織斑先生、わたくしも……！」

「構うな。一人いれば十分だ」

私の後を追おうとするセシリアを止める。

「あの馬鹿……。ISなしの生身の人間で何が出来ると言うんだ……」

千冬先生の忌々しげな咳きは誰にも聞こえなかった。

side：織斑一夏

「何やってんのよ一夏!!」

鈴から激しい野次が飛ぶ。敵ISに必殺の間合い、必中のタイミングの一撃がかわされたのだから仕方のない話かもしれない。

(だからって……!!)

こいつの回避率の高さはおかしすぎる。全身にスラスターが付いていてかわすのが自由自在だと言えども、見えていない場所からの攻撃を四度もかわすのは異常としか言いようがない。

「一夏、離脱!！」

鈴の言葉にはっとし、その場を離脱する。

「くそ、タイミングとか絶対完璧な筈なのに……」

「だったらもっと早くにあいつが沈んでるでしょうが」

「分かってるっつーの」

「で一夏、エネルギーあとどれくらい残ってる?」

「六十切ったとこだ。バリア無効化攻撃もあと一回が限界だな」

「そう、あたしとどっこいどっこいね」

そうなる事実、次の攻撃で決めなければいけない。

同じようにやって成功する確率は高く見込めない、ならば切り口を変えないと。

普通ではだめだ。規格外のスピードで相手にぶつからなきゃいけない。既存のどのISよりも速く、相手の反応すら追いつかない速さで。

「……鈴。死角からの攻撃、視覚に頼らないで四度も回避に成功できるか?」

「はあ? 何よその神業。千冬さんくらいしか出来ないんじゃない

？ それかマサイの戦士とか」

千冬姉とおんなじことが出来るって鈴の中でどんだけつえーんだよ、マサイの戦士。確かに視力とか脚力とかすげーけど。

「あいつ、俺のさっき言ったことを全部成功させてるんだ。機械的に」

「言われてみれば、あいつの行動パターンってどっか機械染みてるわよね」

攻撃の後の反撃の手段もまるで同じ。回避パターンもほぼ一定。これを機械的と言わずに何という。

「けど、機械的に行動してるからって何が変わるなのよ。ISは人が乗らないと動かない。無人機なんてありえないわ」

「だったらさ、今の俺たちの会話の最中に攻撃してくる方が普通じゃないか？ 待ってたって増援が来るだけだし、さっさと俺たちを潰すのが当たり前な思考だろ？」

鈴はその言葉に息を飲む。俺の言い分に気がついたのだろう。

「つまり、一夏はあいつが無人機だって言いたい訳？」

鈴の言葉は疑ってはいるが、大凡そうかもしれないといったニュアンスが表れている。

「ああ。それなら零落白夜、白式の全力を出しても大丈夫だしな」

ワンオフ・アビリティ
単一仕様、零落白夜。

それはエネルギー兵器を無効にし、相手の本体に直接攻撃する
バリア無効化攻撃が出来る元である。

ただこの能力使い勝手が悪く、公式戦や訓練では威力が高すぎて
まったく使えない。全力なんてもってのほかだ。

しかし、こういった有事に際しては最大の武器となる。

「で？ どうすんのよ。どっちにしろこのままじゃジリ貧よ？」

「大丈夫だ。俺にいい考えがある」

「いや、それって絶対ロクでもないから……」

なんだよ知らないのか、この名台詞。

「まず……」

「一夏あああっ！！」

俺が鈴に作戦を説明しようとした矢先、箒の聲が飛んで来た。

どこからと探して見れば、俺の飛び立ったピットに箒が立っ
ていた。

「男なら、男ならそのくらいの敵に勝てなくてなんとする！！」

ハイパーセンサーで拡大するが、箒はさっきまで走っていたのか

肩で息をされていてその表情は俺の不甲斐なさに対する怒りと今の状況の焦りの入り混じったようなものだった。

「だから、勝てえっ！　一夏あああっ！！！」

それは最高の檄だった。そしてそれは致死量の毒でもある。

「拙い！　あいつ、あの子狙って……！！」

鈴の言っている通り、敵は今まで俺たちかた逸らさなかったセンサーレンズを箒の方に向けている。

今から鈴に説明してたら間に合わない……！！

「箒、逃げる！！」

叫ぶ。箒もそのつもりのようなだが、敵のチャージが早い、早すぎる……！！

箒のところまで行くこうにも距離という壁が立ちはだかる。

そして、無情にもその腕から光の砲撃が放たれる。

「箒iiiiiiiiiiiiっ！！」

アリーナを一夏の悲痛な叫びと絶望が支配した。

第12話 「encounter」(後書き)

引っ張ります、だと……。

と言っても次回で対抗戦は閉幕。その後日のことを1話やって長かった1巻は終わりです。こんなペースで大丈夫か……。

第13話 「ペインキラー」 (前書き)

ルビを振るとしたら、脆い^{ペインキラー}ところに口づけを。

某ゲームの章のタイトルなんですけど知ってる人いるかなあ……。

こゝ、こんなに長くなるなんて、戦闘は前回とまとめておけばよかったです……orz

第13話 「ペインキラー」

Side：露崎仕種

「あの馬鹿……！　なんてことを……！」

珍しく箒に対して悪態つきながら走る。

オルテンシアにサーチをやらせた結果、箒は一夏の飛び立ったピットを指摘している。

箒がいらないのを気づくと同時に駆けだしたものの、箒の身体能力の高さは抜きんでているため普通に走っていても追いつくことは出来ない。

かと行ってこんな狭い廊下でISを展開しようものなら、逆にそこで動きが取れなくなってしまふ。結果、走るしか手段がなくなるのだ。

「一夏あああっ！ー！」

箒のハウリングが尾を引いた声がグラウンド中に響く。それほど

大きな声が外で響いていれば館内にも聞こえてくる。

『男なら、男ならそのくらいの敵に勝てなくてなんとする!!』

箒は言葉を続ける。これしか出来なかったのだろう。だからと言って……。これは無謀としか言えないものでしょう。

『だから、勝てえっ！　一夏あああつ!!』

箒の鼓舞を聞き入れながら走り続けるが、オルテンシアの送られてくる情報に肝を冷えた。所属不明のISが箒に対して砲撃準備を開始しているのだ。

ISを持っていない人間はあまりに無防備な存在だ。それに乱入してきた時の一撃を放とうものなら確実にその命はない。

「ああもう、間に合えええっ!!」

ピットに辿り着くとそのまま走りながらIS装甲を展開、右足を踏み切ると両肩のスラスタを吹かしそのままスタジアムに出て箒の前に躍り出る。

「っ!!」

咄嗟に箒を抱きかかえ、背中に敵のISから放たれたビームを浴びる。

生憎と防御用の装備がオルテンシアには積まれていない。あるとすれば普通のISよりも分厚い装甲ぐらい。

「ぐ、うっ……！」

奥歯を噛み砕かんばかりにぐっときつく食いしばる。

焼けるような痛みが背中を襲い、絶え間なく熱い風が頬を撫でる。煉獄があるとしたら今この場のことだろう。

(耐えて……！　お願い、オルテンシア……！)

私の思いに応えたのか、光の流れが通り過ぎ耐え切った。

額から赤がぼたりと地面に零れ落ちる。頭のどこかを切ったのか血が足りなくて頭が少しフラフラする。

「し、ぐせ……」

篝の声は震えていた。その目は子供が悪いことをして怒られるかどうかを気にした、そんな目だった。

「……まったく、夫婦揃って世話が焼けるんですよ。ISの展開してない素っ裸で戦場に出るなんて正気かどうか疑います」

憎まれ口を叩いてみせるが、相反するように私の機体はスクラップ寸前のポロポロ。立っているのも不思議なくらいだ。自慢の黒髪も毛先が血で赤黒く染まっている。

「にしても、なんつー馬鹿威力。ま、アリーナのシールドを破るくらいなんだからこれくらいの破損は当然ですか」

ISの情報を呼び出して確認するがシールドエネルギーの残り残

量は三ヶタを切っていた。一撃で七割のエネルギーをこっそり持っていく威力は零落白夜に匹敵するほどだった。

いや、それ以上に。零落白夜に攻撃されたものとは比べても受けた物理的ダメージが大きい。

「仕種あつー！」

一夏が叫んだ。他人を気にするそれは一夏の美德ではあるが、今のこの場では必要なものだ。

「一夏、さつさと倒しなさいー！」

私は構わず叫び返す。

「私のことを気にする余裕があるんならさつさとそいつを止めなさい！ あんな攻撃二度は持ちませんよ！ 私と箒が蒸発してもいいんですか！？」

珍しく声を荒げた。状況はそれほど切羽詰まった状況なのだ。

「お前しか倒せる奴がないのに、余所見する馬鹿がいるか一夏あつー！」

それが私に出来ることだった。一夏への檄、そして敵の注意をひきつけること。

狙いはあくまで陽動。ボロボロの私に加戦したところで何の戦力の足しにもならない。それに守る術のない箒の傍を離れるわけにはいかない。

一夏と鈴の準備が手間取る筈がない。幸いと相手はダメージの大きな私と無防備な筈に狙いを定めている。

「鈴、やるぞ！ 衝撃砲を最大出力！！」

「わ、分かったわよ！」

鈴が一夏に言われた通り最大出力を放つために補佐の力上展開翼が広がる。その鈴の前に一夏が立ち塞がる。

「ちょ、ちょっと何やってんのよ！ どきなさいよ！」

「いいからやれ！ 俺を信じる！！」

「ああ、もうっ！ どうなったってしんないんだからね！」

破れかぶれにそう叫ぶと、ドンという音共に一夏は背中に衝撃砲を受ける。

あんな砲撃を背中に受けて大丈夫な筈がない。白式を除いては。

一夏の瞬時加速がはじけスーパーボールの跳躍のように、跳んだ。

オルテンシアを爆ぜるような紫電とするならば、白式は夜を切り裂く白き流星。

衝撃砲のエネルギーを変換して得たその加速力は鈴の不意を突いた時の何倍もの速さだった。

「許さねえ！ 鈴を、箒を傷つけようとした、仕種を傷つけたこいつは絶対許さねえ！！」

一夏が怒りを隠そうともせず吼える。

「うおおおおっ！！」

雪片式型のレーザー刃が一夏の気迫に応えんばかりに通常の何倍もの大きさを形成する。

そして長い右腕を薙ぎ、断ち切った。その余波はアリーナの遮断シールドさえ断ち切らんばかりの余剰な風となる。

その直後、左腕からカウンターのパンチが入り一夏は敵が落ちて来た時のクレーターの壁に叩きつけられる。

「一夏っ！！」

箒と鈴が同時に叫ぶ。

「大丈夫ですよ」

私の自分でも不思議なくらいに落ち着いた声の後ろをよく見知った蒼が通り過ぎてゆく。

「狙いは……？」

『完璧ですわ！』

いつもの甲高い声とともに四機の雨が降り注いだ。

さきほどの一撃で右腕諸共、遮断シールドは零落白夜によって壊された。あとは援軍を待つのみ。

幸いとあの場に動ける専用機持ちがもう一人いた。

セシリア・オルコット。イギリスの代表候補生にして自律兵器ブール・ティアーズの助手。

「決める！ セシリア！」

「了解ですわ！」

スターライトmk?の一撃がISを貫き、敵は動きを止めた。

「ギリギリでしたわね」

「セシリアならやってくれと思っていたさ」

「と、当然ですわ！ なにせわたくしはセシリア・オルコット。イギリスの代表候補生なのですから！」

そのフリーズが好きですね、ホントに……。

ハイパーセンサーに異常を感知。敵ISの再起動を確認！

「一夏！ まだそいつ動いて……！！！」

鈴が叫ぶよりも早く、正体不明の敵は片方だけ残った左腕を最大出力形態に移行する。

エネルギーの切れかけた今の一夏では拙い。なのに、アイツは躊躇わずに敵に向かって突っ込んだ。

「一夏さん！」

「一夏っ！」

セシリアと鈴は同時に叫ぶ。

「しょうのない奴です」

発射態勢に入りエネルギーが放たれるゼロコンマ数秒前、機体に対してそれをさせまいと一筋の光が残った左腕を貫いた。

セシリアのスターライトmk?でも、鈴の龍咆からの攻撃でもない。私の放ったレールガンだった。

威力はフル稼働の域には到底届かないが、シールドエネルギーのない今回ではそれだけで充分だった。

「さっきのお返しです」

にやりと口の端を釣り上げ弧を描く。意地悪な笑みを浮かべると同時に、発射寸前で充填し切ったエネルギーのオーバーロードを起こした左腕はいとも容易く爆発を起こす。

「ぜああああああっ！！」

それを見逃すまいと一夏は気合いと共に敵の懐に飛び込んだ。ビ

ームを放つにはあまりにも近過ぎる。かといって近距離の敵を排除する手段はない。

零落白夜が正体不明の機体の胴を通り抜けざまに一閃、真一文字に切り裂いた。

攻撃する両腕のない相手は唯の木偶に過ぎない。ましてや拡張領域を雪片の制御に全て割いている攻撃に特化した零落白夜の前にはISの装甲なんて紙同然だ。

灰色の機体は地面にぐしゃりと崩れ落ち、ようやく今度こそ完全に機能を停止した。

「なんとか、終わりましたか」

そう呟いて膝を突く。貧血を起こしてるのか立っているのも少し辛い。

一夏も緊張の糸が切れて意識が落ちたのかその場に受け身も取らず前のめりに倒れる。あれくらいのダメージなら残っているエネルギーで大丈夫だろう。

少し遅れて突入部隊がアリーナに入ってきたのを見届けると、安堵から容赦なく意識を手放した。

「あ……、いつっ……」

全身の痛みの訴えにたまらなくなり目が覚める。

軽く見渡すと寝ているこの部屋は学校の保健室らしい。頭を筆頭に身体のいたるところに包帯が巻かれている。時間も外の茜空を見る限り、放課後のようだ。

「起きたか露崎」

千冬先生の声と共にしゃっとカーテンが開けられる。空けられた瞬間に西日！ なんてこともなかった。思えば建物の構造的に逆ですし。

「最初にお前のISだがダメージレベルがCに達している。しばらく動かすのは禁止だ、実践は訓練機を使え」

「分かりました」

これだけの怪我をして、私自身がキズものにならなかったのはISの絶対防御によるものが大きいだろう。

ただ、それまで自分のISとは行動を共に出来ないというのがなるとも痛い。一分一秒と長く経験を積ませてあげなければならぬというのに。

焦ったところで仕方ない。よし今度の休みに一度、会社に見ても

らいにいこう。今日の影響でパーツの補填などをしなくちゃいけないでしょうし。それにもう一つの方の仕上がり具合も気になりますし。

「そついえば、一夏は？」

あの場で私よりも早く一夏はぶっ倒れた筈だ。ということは一夏も起きるまでどこかの部屋で寝ている筈だ。ひよっとすると、私の隣に……。

「そんな訳あるか馬鹿者。男と女が同じ部屋に寝させると思つか？別の部屋で寝ている、安心しろ」

それは千冬先生なりの気遣いなのだろう。私と一夏が横にいて間違いが起ころうとないとは言えない。

私自身はそういう気はなくても向こうがそういう星に生まれた人間なのだ。流石姉弟、そういうところはよくわかっている。

「ああ、それと」

バシン、と怪我人には重すぎる出席簿の一撃が頭に振り落とされる。ち、千冬先生、怪我人は労わろうって道徳で習わなかったですか……？

「あの馬鹿を守るために身を楯にする馬鹿がどこにいる？」

呆れたように言っただけ。それともっと上手くやれなかったのかと暗に言っているようなものだ。最善は尽くした筈ですが……。

「……あの馬鹿を守るにはあれしかなかったんですよ」

ていうか篤がもし死にでもしたらその日の内に束さんに全世界の核ミサイルがハッキングされて世界滅亡なんてあり得すぎて笑えない。

「というか人類の未来はそれしかないような気がするのは何故でしょう？」

「だったら篠ノ之の行動に目を光らせておけ。あれはとんだじゃいや馬だということが身に染みて理解しただろう」

ええ、十二分に理解しました。自分の命を賭けて激励とかどんな三大恥ずかしい告白ですか。一夏スキーにも程があります。

「……まあ、よく生きて帰って来た。知り合いが死なれてはこちらも寝覚めが悪い」

千冬先生の声色はどこか柔らかかった。小さいころから露崎家と織斑家は似たような家庭からか付き合いが長い。だから千冬先生は身内同然に接しているのだろう。

ふと先程の戦闘を思い出し、疑問が湧いた。

「千冬先生、あのISは……」

「まだ解析中だ。かといってお前らに口外することはないからお前が気にする必要はない」

私の考えが見えていたのか先に質問の答えが出される。

フル・スキン
全身装甲の妙に機械的だった乱入したあのIS。

最後の再起動が妙に引つかかる。

ハイパーセンサーは一度、あのISが機能停止したことを告げていたにも関わらず、再び動き出した。

人間ならば意識が落ちてしまえばすぐには戻ることはない。

「さて、私は行くが、露崎も一息ついたら部屋に帰れ。いつまでもここにいれる訳ではないのだからな」

「はい」

そう返事すると、ふっと笑みを零して保健室を去って行った。

「入るわよ」

その声とともに入れ替わるように鈴はこちらの許可するよりも早く敷居を跨いだ。まあ、鈴は私が断ったところで関係なく結局入ってくるのですが。

「さっき一夏んとこ行って来たけどやっぱ仕種の方が酷そうね。あいつ全身打撲で一週間は地獄だった」

「こつちも似たようなもんですよ。しばらくはISの起動禁止をさつき千冬先生に言い渡されました」

「心配したんだから」

そんなふうに言われると罪悪感が湧き上がってくる。おまけにその言われる相手が鈴なために罪悪感が通常の二割増した。

「あ、それと試合で無効で対抗戦はもう中止だって」

さらりと言ってベッド脇の手近な椅子に座る。

あれだけの騒ぎになったんだからこれ以上続けるのは不可能に近いため仕方ないか。

「ねえ仕種。どうしてあんたはISに乗れるの?」

ぼつりと夕日の入る保健室に鈴はぼつりと言葉を落とす。それは以前の時の凄みを利かせたようなものではなく、ぼろりと出た本音のようなそんな呟きだった。

「何を今更。先日の焼き回しのつもりですか?」

「別に。なんとなく聞いてみただけ。今なら答えがぼろっと出るかなあと思って」

「……何も初めから乗れた訳ではありません」

え? と小さく意外そうな声が漏れる。

「私はISを起動せはすれど、今のように自由に扱えはしなかった。私のISランク知ってますか? Eですよ? E」

ISランクは潜在的にISを上手く扱える指数のことである。

経験を得てランクの変動があったりするがそれでも伸び代の幅はだいたい決まっている。

ランクはS〜Fの七段階で表され、自分はその中でEランク、I Sの稼動に問題をきたすレベルだ。その下のFは起動不可を指す。

つまり、私のランクが稼動出来るか出来ないの瀬戸際なのだ。優秀なこの学園の生徒はEランクなんて私を残して他に誰もいないだろう。

そんな私が奇跡的にもISに乗れるのは、ISを動かせるのはそれに見合った時間を専用機オルテンシアと共に過ごしてきたから。

共にいた時間の分だけ、私のことを理解して心開いてくれたから。オルテンシアは私の手足となってくれるのだ。

「ただ乗れるようになった、と言っても正確には乗れるように身体を弄くったってというのが正しいんですけどね」

自虐的に苦笑する。

「じゃあ、あんたってやっぱり……」

鈴はそこまで言って口を噤む。

そして訪れる沈黙。

なんともいえない空気が保健室を支配する。

その沈黙を破ったのは私の方だった。

「……ふっ。それってもう答えを言ってるみたいなもんですよ、鈴」

「そうね。露崎仕種は男なんですよ」

それが辿り着いた答え。そして露崎仕種の真実。

「はい、正解。で、どうしてその結果に至ったのですか？」

「最初はあたしも自分の記憶を疑ったわ。仕種は女だったかもしれないって」

「でも、そうは思わなくなる何かがあったんでしょう？ それってどんな理由ですか？」

「あんたが大浴場に姿を見せないから」

あまりに大雑把な回答に思わず面食らう。

「なんていうか短絡的な思考ですね」

「うっさいわね。ま、それ以外にも色々あるけどさ。部屋割とか昔の写真と比べてとか。でも決定的だったのは千冬さんがだんまりを決め込んだあたりかな」

普段なら知らない、と一言で切り捨てる筈の千冬先生が切り捨てられなかった。

私と鈴があこの事件の当事者で馴染みが深いだけに捨てられなかった。

「で、一夏と篠ノ之に言わなくていいの？ 幼なじみなんですよ？」

「言わなくていいでしょう？ 気付いてないんですし。気付かれるまでひた隠しにしますよ。案外、一夏は三年間気付かなかつたりしてね」

「でも……」

鈴は食い下がる。

「それに、私は知られたくないんですよ少なくともあの二人には。私の身体のこととは姉さんと千冬さんと東さんが絡んでる。だからおいそれとあの二人に話せないんですよ」

「千冬さんに沙種さん、それに東博士が……？」

東さんの名前が出て鈴は意外そうな表情をする。

「あの二人はまだ受け止めることが出来ない。私のせいでこれ以上、溝を作りたくない」

あの二人は千冬先生や姉さんのように割り切った思考をすることが出来ない。だから私のことがばれるとなれば箒と東さんの間にあまる溝はますます広がるだろう。

デリケートな問題とはよくいったものだ。私のせいで他人友人の姉妹仲を裂くことになるかもしれないなんて。

「仕種……」

鈴はもどかしそうな表情をする。

「この話は終わり。このことは鈴と私の秘密ということで」

明るく振る舞ってみせる。バレてしまったことは仕方ない。幸い、鈴は口が固い。鈴がへまを起こさない限り私のことは漏れないだろう。もっとも、私がへましない保証もないのだけれど。

「ねえ、あの約束覚えてる……？」

茜空であの約束と聞いて幼いころの記憶を思い出す。あれは六年生の頃だったか。

「覚えてますよ。『料理が上達したら毎日あたしの酢豚食べてくれる？』でしょっ？」

「え。あ、ああっ……」

その言葉を皮切りに鈴の顔がリンゴのように紅潮する。この反応を見る限りビンゴのようですね。

「でもあの時言いませんでした？ 酢豚だけ上手くなっても……」

「うっさい！ あれから色々努力したわよ！ 酢豚も、バンバンジー棒棒鶏も、チンジャオロース青椒肉絲も、ホイコーロ回鍋肉も、麻婆豆腐も、炒飯も、天津飯も、カニ玉も、エビチリも、坦々麺も、餃子も、八宝菜も、飲茶も、なんでも作れるようになったわよー！」

私が振った時の口上を述べようとした時、被せるようにいきなり

啖呵を切られた。一息で言い切ったためふーふー、と鈴の息遣いが荒い。

「…………マジですか？」

「ええ、大マジよ」

思わずそう聞き返すと、自信満々にそう言い返してきた。

なんでもこの幼なじみは私を振り向かせるために中華料理一通りをマスターしたらしい。見上げた根性です。女はやはり強いです。

「で、どうなのよ」

どうなのって…………たぶん、嬉しいと思う。これだけ自分のことを思っただけ料理が上手くなってくれたっていうんなら男冥利に尽きる。

それに鈴は同年代でも可愛い部類に入る。女の子のレベルの高いIS学園でも上位に相当すると思う。

何より、気心知れているのが一番大きい。幼なじみのため私のことをよく理解してくれているのは付き合おうとしたらだいぶ気を使わなくても済む。

それは、どんなに楽しいだろうなって……………。

だけど。

「やっぱり、無理です。こんな身になつたうえに例のアレもある以上、鈴の気持ちに応えられない」

鈴の顔が苦々しく歪む。それを見るこちらも非常に辛い。

「治んないの……？ それ」

「ええ、家系による呪いいひですから。これとは一生付き合っあっていきなきゃいけないんですよ」

勝ち続けなければ生き残れない、そんないつ終わるか分からない呪われた人生。そんな不安定な片道切符の列車に鈴を相乗りあかりにすることは 出来ない。

「だから、私は鈴とは、」

「……違う。あたしが聞きたいのはそんなじゃない。身体のこととか言い訳にして本心を隠さないでよ！ 立場とか身体のこととか

全部、取っ払って全部見せてよ！」

鈴が批難する。

それは私が一番言い返しにくい言葉だった。

本音と建前が対極に位置する思惑を口にしてしまうとそれは承諾ということになる。しかし鈴にいつ終わるか分からない旅に連れていくことはしたくない。

両端に揺れる思いに言うのを躊躇っているところに。

突然、不意打ちのようなキスに唇を塞がれる。

「ん……」

色っぽい声が目と鼻の先から聞こえる。

目の前に鈴の顔がスクリーンいっぱい映る。

何が起こったのか分からず、思考が置いてけぼりを食らい頭が回らない。

それ以上に密着している鈴の唇に柔らかさに気が回って完全に思考が停止する。

くすぐったいような、甘酸っぱいような、不思議な感覚にただ酔いしれるように。

「
っ」

いきなりのことに心臓が早鐘を打つ。

今、どういう状態になっている？

そっだ、鈴とキスをして　。

しばらく口づけをした後どちらからという訳でもなく、お互い重なっていた唇を離すと唾液の銀の糸がつーっとな橋を架ける。

鈴はほんのりと気恥ずかしさで目を潤わせ頬を桜色に染めている。私も似たようなことになっているに違いない。心臓の音が大きく聞こえて落ち着かない。

「仕種、あたしはそういうの全然気にしない。女の子みたいになっても仕種を好きな気持ちに変わりはないから」

真っ直ぐとただ私を見据えながら告げる。

「だからあたし、諦めないから。絶対、仕種のこと振り向かせてやるんだから」

それは告白というよりも宣言だった。

「そこはあたしを取らなかつたことを後悔させてやるんだから！と
か言わないんですか？」

「嫌よ。あたし、諦めるつもりないし」

あつけらかんとさも当然かのように言い放つ。

「絶対、仕種が何もかもを投げ出してあたしを取るように女を磨く
から。だから、首を洗って待ってなさい」

そう言い切ると顔を真っ赤にして保健室を後にした。

「なんていうか、困ったなあ……」

一人残された保健室で大きな独り言を呟く。長らく使っていなか
った男口調で。

零れる茜色の夕日は、全てを見ているだけでなにも語ってはくれ
なかつた。

side：織斑一夏

夕食を食べ終えて部屋に戻ると、真っ暗闇が迎えに出た。

誰もいないのかと電気を付けると、真っ黒な空間の中でベッドに腰掛けている同居人がぴくりと肩を震わせる。

「篝………？」

「……………一夏」

返ってきたのは今にも消え入りそうな声だった。篝にしては柄にもない虚ろな受け答え。

「どうしたんだよ。部屋の電気も点けないで」

しな垂れたポニーテールは篝の沈んでいる感情そのままを表しているようだった。

「……………あれは私のせいだ」

ぼつりと篝は言葉を落とした。何を……………と言うより早く、今日

のことについてだと認識する。

「私が余計なことをしたばかりに仕種に傷を負わせてしまった」

「ちげえよ。あの応援が余計なことなわけあるかよ」

「違うない！ 私があんなことをしなければ仕種は出ずに済んだし、お前も今傷つかずに済んだ……」

俺の言葉を強く否定する。

「一夏。私は、弱い。実力も、心もお前たちに及ばないほどに。心の弱さを上辺だけの力で塗り固めた虚勢を張って……」

独白。

「私は私を許せないんだ！ 無力な、自分が……！」

それは悲痛な叫びだった。いや、今まで心の奥に閉ざしていた筈の弱音かもしれない。

専用機よかりのないもどかしさ、悔しさ、歯痒さ、焦燥感。そして友人を傷つけたことへの恐怖、そして後悔。

ありとあらゆる感情がごちゃ混ぜになって整理がつかない、パンク寸前で剥きだしな感情は聞いているこちらの心も痛くなる。

「私は、私は……！」

「筈……！」

錯乱する筭をぎゅっと抱き寄せる。

「は、離せ、一夏!」

拘束から逃れようと暴れる。剣道で培った肉体は強靱で筭が暴れる力は生半可なものではなかった。

「いいから、このまま聞け」

それでも離さないようにするために筭を押さえつけるようにぎゅく抱きとめる。

いつもなら相手を尊重して解放するのだが今回はしなかった。今、離してしまうともう筭がどこかに消えてなくなってしまういそうだったから。

「俺だって自分の力のなさを悔しく思うことだらけだよ。今回のことだってもっと上手くやれた筭なのにさ、自分の不甲斐なさに情けなくて泣きたくなるさ」

抱き寄せた筭に優しく話しかける。

思い返せば織斑一夏はあまりに無力な存在だ。

二年前のあの時だって、自分の無力さのせいで千冬姉の経歴に泥を塗ることになってしまった。

今日も自分の力が足りなくて仕種を傷つけてしまった。

そして今、箒をここまで追いこんでしまった。

これほどなまでに自分の無力さのせいで迷惑をかけていると情けな過ぎて、あの時に戻れるのならもっと上手くやれと殴りとばしてやりたいくらいだ。

「けど前を向かなくちゃ進めない。前を向かなくきゃ強くなれない。そう俺は思ってるから」

一歩でも遠くへ、一歩でも強くなるために歩みを止めない。

「やっちゃったことは仕方ない……って言ったら開き直りかもしれないけど、それはしっかり反省して次に生かせばいいさ」

後悔と反省は違う。後悔は悔やむだけ。後悔だけでは次に進めない。

反省は失敗を生かし次につなげる。強くなるためのステップアップ。

「そうやって少しずつ強くなることが仕種へのせめてもの罪滅ぼしだって俺はそう思っている」

「いち、か……」

震える声で呟く。

「あ……、れ……。涙、どうして……」

箒の目から涙がぼろぼろと零れる。

「箒、辛いことか泣きたいことかあったら我慢しないでいいんだぞ。俺がそういうのちゃんと受け止めてやるから」

「……………っ!!」

俺のその一言に今まで堪えていた涙が決壊した。

その泣き方は六年分、溜めに溜めたような感情の氾濫だった。

箒は子供のように泣き続けた。えんえんと人目を憚らないような大声で泣き続けた。

俺はそんな大きな子供をあやすように優しく背中と頭を撫でてやるしか出来なかった。

しばらくすると箒も泣き止み、いつもの落ち着きを取り戻した。

「すまない。情けないところを見せたな」

涙をぬぐいながら恥ずかしそうに言う。目は泣き腫らして真っ赤になっている。

(そういえば、箒が泣くの始めて見た気がするな)

ふとそんなことを思った。俺の知る限り箒はいつも毅然としていた。他者を寄せ付けられない見えない白刃を常に周りに向け、鉄面皮を被って血も涙もない女か、と思うくらいにきついような面もある。

しかし、それも裏を返せば弱さを見せないための高い壁。外敵から身を守るために有刺鉄線で囲い、何人も近づけない魔城のような中にいた囚われの心はなんと繊細なことが。

「一夏、お前は強いな」

「別に強くなんかねえよ。強くなりたい理由があるから、止まりたくないだけだよ」

「強くなりたい理由、か……」

箒はその言葉を聞くと考え込む。

あの事件以降、決勝を放り出してまで俺のことを助けに来てくれた千冬姉みたいに俺も守られるのではなく、何かを守る存在になりたいと憧れた。そのために強くなりたいと、初めて心の底からそう思った。

だが、それも未だ敵わない。脆弱にして情弱な自身の腕では他人は愚か自分の身を守ることにすら敵わない。

「だけど、諦めない。それは絶対に諦めたくない目標だから。今まで守ってくれていた千冬姉に恩返しをしたいから。」

「すまない、よく分からない。私はただあの人と比べられたくなかったぐらいしか思いつかない」

思い返せば東さんと篤が一緒にいて笑いあっている絵は見たことがない。

劣等感。よく出来た姉を持つと弟妹は必ず姉と比べられる。自分がどれだけ劣っているかを見せつけられるような形で。

篤の場合、より顕著でより敏感だったのだろう。だから、東さんの持っていない

幸いと世界最強の姉を持つ身として俺自身は劣等感に悩むなんてことは特になかった。

そのことを囁し立てる周りの目にウンザリすることはあれど千冬姉を恨むようなことはなかった。むしろ、誇らしかったりする。思った以上に俺はお気楽な性格なのかもしれない。

「私にはどうして強くなりたいたのかという確固とした理由がない。そういうことを考えてこなかった。なあ一夏、強くなりたいたい理由がなければ強くなれないのか？」

「どうだろうな。強くなりたと思う理由って力の使い方、道標みたいなもんじゃないのかな。そういう目標があるから頑張れるっていうのもあるし」

「こう言うてはいるものの俺自身もよく分かっていない。あくまで感覚論な訳だしそうじゃない人だっている。」

……そういえば、仕種の強さの根底にあるのは一体何なのだろう。

「決めたぞ。私もお前と同じ目標にする」

「俺と同じって。筈はいいのか、それで」

「ああ。私もなってみたいんだ、誰かを守れるような強い私に」

その時笑った筈の顔は泣き腫らしていたにも関わらず、とても綺麗だった。

第13話 「ペインキラー」 (後書き)

始めに。

今回の言い訳を申し上げます。

こゝ、こんなの鈴じゃねえ……！ RINじゃねえか！ もしくは凜。
一夏もICHIKAだし、仕種もなんか誠っぽくヘタレ劣化して
るし、篝は……原作通りか？

終幕1 「紅の乙女は願う」(前書き)

前回到引き続き、ルビを振るならば紅の乙女アイ・ウェンチュは願う。
あと7巻のネタバレあり。読む際は注意すべし。

終幕1 「紅の乙女は願う」

Side:篠ノ之箒

気がつけば、走り出していた。

思えば、私は焦っていたのかもしれない。

専用機。その有る無しは専用機を持つ一夏との距離間に大きな揺らぎを与える。

セシリア以上になす術のない私は、今回は行き場のない感情をどうにか飼いならすことが出来なかった。

歯痒かった。自分は何も出来ない歯痒さ。一夏の隣に立てない悔しさ。

苦しかった。辛かった。この感情を私は弄んでいたのかもしれない。

だから叫んだ。

「一夏あつ！ 男なら、男ならそのくらいの敵を勝てなくてなんとする！」

思いの丈を。もどかしさを。私の中の醜い感情を。訳の分からない自分でも形容しがたい感情の塊を。

全て吐き出した。吐き出さずにはいられなかった。

「だから、勝てえっ！！ 一夏あつ！！」

この言葉があつてどうなるという訳でもない。

言ってしまうえば自己満足。我慢弱い自分の身勝手と自分可愛さを綺麗な形で昇華して見せているに過ぎない。

目の前と敵対する一夏を鼓舞する形にして。

なんて独善。なんて幼稚。

なんて、惨め。

それでも行動に移したのは自分にはそれしか出来なかったから。意地しかなかったから。

一夏の力になりたいと思ったこの感情に嘘を吐きたくなかったか
ら。

「っ！！」

こちらに砲身を向けられる。

当然のことだ。あれだけの大声を上げれば相手の注意を自分に向けられることになる。

おまけに今の私はISを装着していない制服のままだ。ひとたまりもない。

いや、ひとたまりもないではない。確実に跡形もなく死んでしまおう。

それを認識した時にあったのは愚かしさに対する後悔ではなく全身を蹂躪するような恐怖。身も竦むような絶望。無機質に光るセンサーレンズに対する畏怖。

「篤、逃げる!!」

一夏が叫ぶ。私だってそのつもりだ。ここがどこよりも危険なことは今身を以って実感している。

が。

無情にも腕から光が放たれた。

一夏と自分との距離はあまりにもかけ離れ過ぎている。

物理的にどう足掻いても絶望的な距離。

私はもうここまでなのだろうか。

「箒iiiiiiiiiiiっ!」

一夏の絶叫が響いた。

「っ!」

光が自分の目の前まで迫ったところで飛び起きる。

息遣いは荒く、額も背中も冷や汗でぐっしょりだ。

「っ……。夢、か……。?」

虚ろな瞳が部屋の様子を探る。ここがあの場合のアリーナではなく、寮の部屋であることを確認すると安堵からか深い溜息が洩れる。

まったく嫌な夢だ。記憶を蒸し返すような悪夢。焼き回しのよう
な現実の再現。

時計を見るが、まだ丑三つ時。眠りについてからそれほど時間は経っていないかった。

「……………」

隣を盗み見るが、一夏には気づかれていないようだがぐっすりと眠っている。

一夏に少しだけ心配されたい気もするが、かえってこれ以上気を使わせたくないとも思う心もあり少し複雑だった。

本来ならばクラス対抗戦のあったあの日、私は部屋の整理がついて別の部屋に移動する筈だった。

しかし私が取り乱したため、不安定な精神の私を別の部屋にすぐには移すことは出来ないと、今回の引越は見送られもうしばらく一夏と一緒の部屋にいれることになった。

とはいえ、それも一時的な措置。すぐに一夏とも一緒にいれなくなる。

男女七歳にして同衾せず。早く一夏と別の部屋にしないと学園側としても拙いものを感じるのだろう。

無駄な思考をやめ、ひとまずシャワーを浴びることにする。

これからどうすればいいかはそこで考えればいい。

それにぐっしょりに濡れたこの嫌な汗を一刻も早く落としたかつ

た。

シャワーから上がるが一夏は今日、いやもう昨日か。昨日の出来事で疲れているためか起きる気配がない。

太い神経をしているのだから、鈍いのかもよくわからないお気楽そうに眠っているその寝顔に思わずくりと笑いが込み上げる。

長いようで短かった一か月。出会いこそ唐突なものだったが、それでも久しぶりに幼なじみと一緒に過ごした時間は今まで離れていた時間を埋めるかのような嬉しいものだった。

あまりの鈍さに腹の立つこともあったが、それはそれだ。

一夏だから納得しなさい、と仕種ならいっただろうがもう少しくらい人の感情の機微くらい読み取ってくれてもいいのではないだろうか。

身体をベッドに横たえるが眠気というのが全くやってこない。寝直すにしてもあんな夢の後のためか頭がそんな気にもならないのだ。

脇目もくれずに剣道に打ち込んでいるせいか手軽な趣味という、

こういう時のための時間潰しの手段もない。

手になんとなく携帯電話を取り、電話帳を開く。

今でこそクラスメイトの数人とメールアドレスを交換したが学園に來た当初はほとんど誰も登録されておらず新品同様な状態だった。

転校を繰り返してきた自分と周りの人間とは浅い付き合いしかなく一夏や仕種のような幼なじみぐらいしか深い付き合いをした友人はいなかった。

よくて剣道部の同じ部員。それ以上の関わりを持つともしなかったし、何よりもあの時は周りに気を使おうという心の余裕がなかった。

あの頃の私は擦り減っていた。

一夏と離されたせい。仕種と離されたせい。家族と離されたせい。

ISの開発者である姉、束のせいで転校を繰り返す日常。それに伴い姉の場所を探るためと重要人保護という名目のための政府主導の監視と聴収の日々。

特に中学生の時は監視の目が一段と厳しかった。

大人たちはいつも張り詰めていた。何かに警戒するように。その失敗を繰り返しをしないように。政府の大人たちはいつもそんな雰囲気だった。

そのせいで神経がかなり参っていた。

当時の私を称するならば触れるもの全てを傷付ける抜き身の刀。生徒は愚か、教師でさえ近づけないような気を常日頃から纏っていたらしい。

そして、あの事件が起こってしまった。

それは忌々しい記憶。自分が生きてきた中で、一番自らの醜態を晒したあの事件。封印したい筈なのに、それは時折ふとした拍子に甦る。

忘れたいのに忘れられないその記憶は私にとっての戒めなのかもしれない。

強い力を望み、道を踏み外した姿に目を決して逸らさせはしない。焼き付ける。あれが己が道を踏み外した姿だと。もう一人の自分がそれを忘却させないことでその己が持つ危うさを知らしめさせようとする。

ぼんやりと画面を眺めているとあるところ指が止まる。

篠ノ之束。

どうして彼女の名前がこんなところにあるのか自分でも不思議でたまらない。

そもそも政府から手渡された携帯に一番最初からこの名前だけが入っていた。父や母でもなく、一夏でもなく仕種でもなく束の名が。

……もしかしたら。彼女ならば、姉さんならば自分の今の悩みを解消してくれるかもしれない。

「……っ。駄目だ、それは」

一瞬よぎった悪魔の囁きに頭を振る。

分かっている。姉さんにそれを頼むということは、身内鼻肩以外のなんでもない。

けれどももし今日みたいなことが起こった時自分はまた一夏の隣に立てないのかと思うとたまらなく胸が苦しくなる。

それに、一夏のように自分を見失わないように私もなると誓ったのだ。

今度こそ力に振り回されないように力を御してみせると。

「……………」

しばらく携帯の画面とにらみ合った後、意を決してコールボタンを押した。

side：篠ノ之束

「むーん……」

どことも知れぬ暗闇に一人、若い女はPCの前でにらめっこをしていた。

特段、不思議な行動ではない。夜中のこんな時間にPCと向かい合ってるなんて光景は、切が明日に迫った一般企業ではよくよく有り触れている光景なのだ。

不思議なのはその女の格好にあった。

ウサミミカチューシャを付け、青空のようなワンピースを着ているその様は一人『不思議の国のアリス』状態なのだ。常軌のセンスを斜め135°ほど傾いて盛大に逸脱している。とうてい普通の人間には理解し難い。

この人物こそISを生み出した世紀の天才、篠ノ之東である。

馬鹿と天才は紙一重と言うがまさしくその通りだろう。天才は凡人には思いつかないセンスを持ち、凡人には到底思いつかないようなことを平気でやってのける。

見ていた映像は昨日、IS学園を襲った謎のISだった。

「なんとか形になるってな具合かな。あー、けどまだまだ先が長いな。危つく筈ちゃん蒸発させそうになったし」

何でも無いようにあっけらかんと言つてのける。しかし一つ間違

えると大惨事だ。自分のミスで肉親一人をこの世から消し去ってしまうところだったのだ。

実のところ、学園の中継をハッキングしてそれを見ていたが当時は酷く取り乱していた。緊急自爆のプログラムさえ半分以上をリアルタイムで組み立てたくらいだ。

ISのコアを作れるのは全世界において、篠ノ之束しかいない。スタンド・アロン登録されていないコアを作り出したのも束自身。ISの独立稼働。束だけが唯一持ち得る技術の一つだ。

しかし今回の襲撃さえ、あまり意味を持たない。試しに作った無人機の稼働状況を確認したいただけ。そのためにわざわざIS学園まで飛ばしたのだ。

結果、所詮はまだまだ発展途上。？では専用機持ち数人がかりだと相手にならないレベルだった。それでもそのうちの一人を大破させたという功績を残したが。

「ま、二人のナイトくんが助けてくれたからいいけどね」

くすくすと笑う。彼女のいうナイトとはあの異形のIS。ゴームを止めた織斑一夏と実妹、箒を身を楯にして守った露崎仕種のことだ。

束も仕種の秘密を知る数少ない人間である。

織斑、篠ノ之、露崎。

束はこの苗字の幼なじみとその姉妹にしか興味を示していない。

両親はかろうじて身内と認識できるが後は等しく他人。どうなっても構わない存在だ。

自分に害をなすものは別に束自身は殺してしまっても構わないと思っているが、それは二人の親友である千冬や沙種が嫌がるためしていない。今のところは。

しかし、それに準ずることは束は既に経験済みである。

所謂 社会的地位の抹殺。

ちゃららら、ちゃららら

どこぞのシマ取り抗争のテーマソングが流れる。最初に断つておくが束は別にこのシリーズが好きだという理由でこの着信音を使っているのではない。かといって本人も何故この着信音を使っているのかは自分でもよくわかっていない。

「この着信音は！ とう！！」

行動が機敏だった。その行動の早さはまさしく脱兎のようだ、ウサミミなだけに。どこぞの世界のつけるとフィールドでの移動速度が1.5倍になる頭巾か。いや、あまりにメタ過ぎて分かる人間がどれくらいいるのだろうか。

「もすもす終日！ はろはろ！ みんなのアイドル束さんだよ！」

『……姉さん』

げんなりとした妹の返事が返ってくる。深夜のこの時間にハイテ

ンションな姉に対して電話の向こう側で頭を抱えているに違いない。

「やあやあ篝ちゃん、篝ちゃんがかけてきてくるのずっとずーっと待ってたんだよ！」

『……………』

「うんうん。言葉にしなくてもこの束さんには要件は分かってるよ。
オルタナティブ・ゼロ
代用無きもの。欲しいんだよね篝ちゃんの専用機」

『っ……………』

電話越しから息を飲む音を聞く。それすらも楽しむかのように、実の妹からの電話を楽しむかのように、束は言葉が続ける。

「にしても意外と早かったな。もちっと時間かかるかなーって思ってたのに束さんの読みが外れちゃったな。どっという心境の変化って奴です？」

うふふという楽しい笑い声に一瞬、言葉に詰まるが篝は意を決したかのように告げる。

『力がなくて守れないのは、もう嫌だから。誰かが目の前で傷つくのは見たくないから』

「ふうん。それって今日のこと？」

『どっしてそのこと！？』

「ふふふ、何言ってるんだい篝ちゃん、私は天才束さんだよ？ 束

さんが知らないことなんてこの世界において一片もありはしないのさ！」

もつとも『この事件を起こした犯人は私、篠ノ之束なのだ』
驚いた？ ね、ね、驚いたでしょ』なんて口が滑りでもしない限り言わないが。

それにしてもまさかあの暴走がこんな形で筭と自分を繋ぐことになるとは束自身も思ってもみなかった。

筭は昔から強い力を望むきらいがある。それが今回のことで大きく天秤が傾いたと見るのが妥当だろう。

「それで筭ちゃんの専用機だけど来月の終わりに個人戦のトーナメントあるよね？ それに間に合うようには調整するから。だから、もう少しだけ時間が欲しいな、なんて言っちゃってみたい」

「お願い、……姉さん」

その一言に垂れていた耳がぴーンと立つ。

今日は吉日大安に違いない。嫌われていた妹に頼られるなんて自分の生きてきて最も嬉しかったベストテンに余裕でランクインするレベルだ。何がベストテンなのかは知らないが。

「天才束さんにぼぼぼーんと任せなサイ！ 筭ちゃんに見合うだけの最高スペックの機体、『紅椿』をぜったいぜったい用意するから！」

ピツと電話が切れると電話を投げ捨て再びPCに向かい出す。そ

の表情は先程のつまらなさそうな事後処理とは雲泥の差で創作意欲にあふれた子供のように生き生きしている。

「さてさて忙しくなりそうだね！ ゴレムのスペックアップ、篝ちゃんの紅椿も急ピッチで完成させなきゃ出しそれに、しーちゃんのISも調整しなくちゃね」

そう言うと、PC画面からラボの別の部屋の映像が映し出される。中身はまだ未完成のようだがフレームだけは完成しているらしい。

それらは白式と同様、無駄なものを削ぎ落としたシンプルなデザインだった。

片や絢爛な真紅、片や繚乱な黄金。

名は体を表す。その言葉通りなら、紅い機体は篠ノ之箒のために作られたIS、紅椿だろう。

そうなると残りは、

「しーちゃんの第四世代IS、オールラウンダー全能にして特化型。スペシャル白式と紅椿、白騎士に暮桜と灼焼のノウハウを全て詰め込んだハイエンド最高性能。その名も、

こがねぎく
黄菊。

終幕1 「紅の乙女は願う」(後書き)

はい、長かった一巻もこれで終わりです。所要期間およそ三カ月。けっこう時間、食ったな……。

篝さんの独白については独自解釈だらけです。三巻の落ち込みようからするに今回もこれくらい落ちるだろうなあという予想のもと書きました。どんだけマイナス思考で自分嫌いなん……。

二巻ではいよいよ、シャル・ラウラが編入してきます。そしてあの人も……。

という訳で次回もお楽しみください。

キャラ紹介1（前書き）

やってしまった！ 設・定・集じらいげん！！
だってやりたかったんだよ。にんげんだもの。

キャラ紹介1

キャラクター紹介1

オリキャラ

露崎 つゆさき 仕種 しゅくね

中学で別れて、高校で再会したら男の娘になっていた本作の主人公でヒロイン？な子。
別にナニカに目覚めた訳ではない。

一夏と箒と鈴の幼なじみ。一年一組。世界的IS操縦者、露崎沙種の妹。

性格は大人しく周囲からも落ち着いた印象を受けると言われている。しかし根は他人を弄って面白がる悪戯っ子。（現在の被害者は主に一夏とセシリア）
箒やセシリアに対して色々助言をしているがこれは一夏の愚鈍さの改善のために行っている（が、はつきりいつてしまえばその時の乙女な反応を確かめようとするために面白半分で言っていたりする）が予想をぶつちぎる唐変朴さで仕種の努力は中々報われない。

体格は女性の平均より少し高め的身長、胸は平均的。

容姿は紫がかった前髪が黒髪パツツンでシャギーボブ。

若干の釣り目、頭にコサージュ（待機状態のIS）を刺している。

趣味は一話で述べたように観葉植物と友人観察（主に一夏とその周りの恋模様）。

口癖というか、仕種の中の勝負事におけるモットーは「勝つことは

息をすることと同じ」

オリIS

オルテンシア
紫陽花

第二世代IS、ラファール・リヴァイヴのカスタム機。
カラーリングは紫色。

背中にはリヴァイヴ？と同じく四枚の四枚の多方向性推進翼、マルチ・スラスト両肩の展開式スラスタバインダー、脚部自身を覆うような巨大なスラスタユニットを配置。更には肩部や腰部などに多数配置されている姿勢用制御用のノズルを装着している。そのため肩や脚部が多少ごつい装甲で覆われている。加速力が強く、イグニッション・ブーストの出力は第三世代をも上回る。しかし、これはオルテンシアの真の姿ではなく……。

待機状態はアジサイのコサージュ。大抵、頭に付けている。

武装

*は豆知識。

・ハンドカノン<フタリシズカ>(ビーム兵器)
オルテンシアの基本兵装。二つで一組のハンドガン。連射性能が高い。

*和名は二本の花序を、能楽「二人静」の静御前とその亡霊の舞姿にたとえたもの。

花言葉は「いつまでも一緒に」

・レールガン<ストレリチア>

長距離用カノン。高出力でその燃費に似合うほど威力は高い。

* 極楽鳥花とも呼ばれる。花言葉は「全てを手に入れる」「気取つた恋」「万能」

・ラピッドライフル<ネモファイラ> (実弾兵器)

オルテンシアの基本武装。未登場武器。

連射機能に優れるアサルトライフル。大抵フタリシズカにお株を奪われている。

* 瑠璃唐草とも呼ばれる。

花言葉は「どこでも成功」「可憐」「愛国心」「清々しい心」「莊嚴」「私はあなたを許す」

原作キャラ

・織斑 一夏

原作主人公。専用機は第四世代相当IS、白式。世界で唯一ISを動かせる男。

篤、仕種、鈴の幼なじみ。愚鈍王と呼んでも差し支えがないくらいに恋愛事に疎い。立てたフラグは数知れず、その多くは回収されていなく回収される日が来るのかさえ分からない。

突然、IS学園に入れられたためほとんどISの予備知識が存在しない。いわゆるバカ。

・篠ノ之 篤

原作の正ヒロイン。専用機は一巻終了時点ではなし。

一夏と仕種の幼なじみ。幼い頃より一夏に好意を抱いている。

本作は自分が嫌いのレベルが恐らく格段に上がっていると思われる。

劣化ヒロインとか言わないで。

乱入事件で仕種が傷ついたのは自分のせいだと責め力を望んだ結果、原作よりも早く紅椿を手に入れることになる。

・セシリア・オルコット

原作ヒロイン。イギリスの代表候補生。専用機は第三世代IS、ブルー・ティアーズ。

一夏にIS学園でフラグを立てられた最初の人。仕種のこの学園で一夏、箒を除いての初めての友人。

一夏戦で慢心なく戦うあたりが彼女の見せ場の頂点なのかもしれない。書いている最中はオルコット党に乗り換えたかのような錯覚に陥るほど鼻屑目だった。

・凰鈴音

原作ヒロイン。中国の代表候補生。専用機は第三世代IS、甲龍。

一夏と仕種の幼なじみ。本作では一夏ではなく、とある人物に好意を抱いている。

過去に仕種を事故で傷つけたため、仕種に対して複雑な感情を抱いている。

・織斑千冬

織斑一夏の姉で、仕種たち一年一組の担任教師。一年の寮長もしている。

第一回IS世界大会、モンドグロツソの総合優勝者。

仕種の秘密を知る数少ない人間。「公」は自他ともに厳しい完璧超人であるのに対し、「私」ではものすごくズボラな人間。

・山田真耶

一年一組の副担任。

人当たりがいいがそれ故に苦勞人。ストレスをためすぎるとくすくす笑ってごーごーな状態になるやもしれない。

昔は日本の代表候補生だったらしい。仕種の入試の時の対戦相手。

キャラ紹介1（後書き）

ここに書かれていない人たちはまた2巻の終わりに更新されます。
沙種と束、2巻より登場のヒロインはそっちに回します。

第14話 「家族」 (前書き)

第二章に突入。

一夏が弾の家に遊びに行ってるそんな裏側の話。

第14話 「家族」

とある企業の大きな一室。

高い天井、広い間取りの部屋は会議室とは似つかないほど大きくどちらかといえば工場の整備室のようだと言った方が正確だろう。実質はその通りなのだ。

中央には紫陽花が鎮座している。その花こそ私の愛機、オルテンシアにほかない。

ここは深桜重工しんおうの開発室。

深桜重工は日本国内でも指折りの企業で国内のIS産業でも倉持技研に次ぐシェアを持つ大企業である。

昔は一端の中小企業でしかなかった深桜の名はモンドグロツソ第二回大会で姉さんの沙種がこの企業の開発された武器を使ったことで注目を浴びるようになった。

それ以降ISの武器を中心にシェアを展開、ラファール・リヴァイヴや打鉄の一部の武装の取り扱っている。また最近では新しいスタッフを加えたことにより機能特化のパッケージにも企業の手を広げていて倉持技研に次ぐとは言え引けを劣らない業績を残している。

私はここにオルテンシアの整備や装備全般を任せている。姉さんがここを重用するというのも一因だが、一番の理由は昔からお世話になっている人がここで働いているからである。

その人はオルテンシアの横で厳しい表情をしながら空中に投影されたディスプレイ上のデータを見比べている。

年齢は二十代後半で日本人の黒髪とは趣の異なる括ったブロンドのポニーテールが揺れる。

そのプロポーションもモデルであってもおかしくない位に抜群で、特に豊満な胸をアピールするかのよう^にワイシャツの谷間がざっくりと空いている。

流石は外国人、オープンというか自己主張が激しいというかそんな着こなしは数少ない男性スタッフたちにとってはさぞかし眼福なことだろう。

そのパソコンを眺める濃褐色^{ブラウン}の瞳は彼女に流れる日系人の血の数少ない特徴である。

「……の稼働データは取れたみたいね。壊して帰って来たのがいただけないけど」

ブロンド美女、シンリ・シュヴァリエはデータを確認し終えると席を立ちこちらにジト目を投げかけて来る。最後にちくりと述べた不満が反論を返す余地がないため胸に刺さる。

昔は別の企業で開発スタッフの最前線に立っていたが、そこがと

ある事件によって潰れてしまい今の深桜の社長にその技量の高さを買われ引き抜かれたのだ。

そんなシンリさんは生え抜きの他のスタッフを差し置いて深桜重工の開発主任で開発・整備において全権を与えられている。

かといって他のスタッフたちとギクシャクしてるというわけでもなく、むしろ切磋琢磨、和気藹々と仲良くやっているらしい。

「まあ、いいわ。ブルーティアーズと白式に勝てる出力が出せるとデータは証明してくれた訳だし。篠ノ之博士のご息女を守ったという事で今回は不問にしましょう」

不満そうではあるがデータ収集の期待以上の成果により、今回は目を瞑ってくれるようだ。

「で、次に試すのがこれですか」

そう言って新たに装着されたデータを確認する。

一見すると大差ないように見えるがしかし、その細部は異なっていた。

肩パーツと背部のスラスタは前とそれほど変化がないが、肩パーツに特殊な細工が施されている。

足パーツはスラスタはそのままに地面にアンカーを撃ち込めるようにパーツが追加、改良されている。

腕は以前は必要ないと廃止していたシールドを右腕に取り付けら

れている。まるで、何か兵器を隠すかのようじ。

そして何よりも、格納クロスされている武器の種類がまるで違っていた。

現行の武器は全て取り外され一新されているが、どれもこれも中々に無茶苦茶な武装ばかりだ。

「ええ。どう気に入ってくれた？」

シンリさんが嬉々とした表情で尋ねてくる。

この人がISを組むとどうしてか決まって重厚なデザインになる。武器を作る時はそうでもないのだが、ISの装甲を作らせるところいうゴツイ仕様に必ずなる。ついでに言うておくが好きなタイプはゴツイ人とは言う訳ではない。

「え、ええ……。また今回もゴツイのを組みましたね」

正直に言ってしまえばISの装甲が分厚くある必要はない。何故ならほとんどがエネルギーシールドで防御を行うため装甲は必要最低限で構わないのだ。

だというのにシンリさんはその意に反して事あるごとに重厚なフレームを組むのだ。スラスターの拡大に伴うことも一つの要因だがもう少しどうにかならないのですかね……？

「まあね。仕種クンの回避性能の反応も悪い訳じゃないし、多少装甲が肥大化したところで問題にはならないでしょう？」

私のことを知り尽くしているかのような妖艶な笑みを投げかけて

くる。いや……。ような、ではなく実際に私とオルテンシアのことを彼女は知り尽くしているのだ。

「それにしても、随分と懐かしいものを引っ張り出してきましたね」

私はこのフレーム自体に見覚えがある。なにせ、このフレームのテストパイロットを務めていたんだから。

シンリさんの勤めていた企業というのはオルテンシアの今の原型となるフレームを組み立てた会社でオルテンシアの製造以来、私はシンリさんと共にオルテンシアを育てて来た。

「とは言うものの、あの頃と違って出来ることが増えたからほとんどーから組み直したようなものだしね。私はまだこれでも足りないくらいよ」

まだ足りないという言葉聞いてもはや頬がヒクついた苦笑いしか出来ない。

この人に任せていたらそのうちに全身装甲フル・スキンのISに乗せられたりするんじゃないだろうか。

「とりあえず、インストールは終了したから試運転して頂戴。相手はいつものでいいかしら？」

「いいえ。いつもの二倍をお願いします」

シンリさんはそれを聞いて目を見開いて驚いた。

「張りきるわねえ。いつも通りローペース運行だと思ってたのに、

何かあったの？」

いつもと違う私のテンションにシンリさんは興味を示す。

「ちょっと、自分の限界を知りたくて」

自分が守れる、自分自身の限界を。

数十分後。

深桜重工の地下特別アリーナに私はいた。

足元には大量の薬莖をばら撒き、前面にはもうもうと弾幕煙が立ち込め、両腕にはガトリングガンが構えて肩で息をしていた。

煙の奥には二人。先程まで展開していたISはシールドエネルギーが切れたため装着を解除されている。

『試合終了。勝者、露崎仕種』

「うあ……」

無機質な音声が私の勝利を告げると、代わりに私の口からはなんともし難いような声が漏れた。

全ての敵を沈黙させ試運転が終了するとISSの装甲を解除し粒子状になって消えると膝から崩れ落ち地面に寝転がる。

『お疲れ様。初期起動には上々よ。どう？ 初めてやった二倍盛りの感想は』

モニタールームからのプライベート・チャンネルが飛んでくる。シンリさんだ。

「初期起動で二倍は、もう、やらないです……」

ぜえ、ぜえと息も整わずに荒い呼吸をしながら息も絶え絶えに答える。

正直、初めての機体で二対一は死にかけた。武装の特性を開始前に一応把握したつもりでいたが、武装は想定範囲を逸脱した代物ばかりだった。

特にガトリングガンと最後に使ったとっておき。あれはISSの兵器の中でも異常な破壊力。今回の型にもっとも当て嵌まった最強の矛。そしてそれ以上の暴れ馬。使いこなすには骨が折れそうだ。

しかも相手は元代表候補生。現役を離れて何年かのブランクがあるとはいえこうして毎回、私をギリギリのところまで追い詰める。それが今回は二倍なのだ、正直普通なら軽く死ぬる。一夏なんて翻弄されて瞬殺だろう。

武器の性能と装甲に救われるとはこのことか。無駄に厚くしたという訳ではなさそうです。

『その割にはあっさりこなしちゃうんだもの。よほどコアとの相性がいいのね』

私はこのコアとしかシンクロ出来ない。オルテンシアが事故により破損中の間、訓練機を使うことになっていたのだが起動出来てもどうもこちらのイメージ通りにならない。

これでも大分、マシになった方だ。昔はISが起きるだけで装着して動かすことも叶わなかったのだ。

……そのせいで、あんなことになったのだが。

つまるところ、私はオルテンシア以外のISに乗ることが出来ない。乗れてたとしても訓練機では今の実力の十分の一も発揮することが出来ないのだ。

『妬げちゃうなあ。ISが恋人だなんて。人間の方にも恋人とか出来ないの？』

シンリさんの何気なくからかったその一言に先月の保健室での出来事を思い出してしまふ。

あの時、交わした鈴とのキスの感触。そして、あの言葉。

『仕種、あたしはそういうの全然気にしない。女の子みたいになっても仕種を好きな気持ちに変わりはないから』

忘れる筈もない。忘れられる筈がない。思い出すだけで顔が紅潮する。

鈴からの告白。それは振り向かせて見せると同時、いつまでも待ってるという一途な思い。

鈴のことは好きか嫌いかと言えば好きだ。ライクかラブかの線引きは別にして。

しかし、

「私の体質を知っているでしょう？　それで恋人なんて……」

どれだけ、勿体ない話か。

鈴の思いを知っている以上、その思いに応えたい心と壊れることを恐れる心も同時に秘めている。

脆く剥き出しの死への恐怖。負け＝死の連立式を持つ私にとって身近過ぎる人物は逆に怖い。

私がいなくなった時、鈴はどうなってしまうのか。そのサイアクを想像するのが怖い。身近過ぎるが故の悲惨な結末を。

だから距離を置きたい。本当に大切なものだから、遠ざけて置か

なければならぬ。

『仕種クンの体質が大変なのはよく知ってるからあんまり口出ししないけど。あんまりそのことに憶病になって逃しちやっても知らないわよ？ でないと、私みたいになるから』

シンリさんは、おどけた調子で笑いながら話す。けれど、その裏側には暗い影を落としているのを知っている私は安易に笑うことが出来なかった。

『ま、こんな話も終り。もう少しだけ調整して上がりましょうか』

「はい」

そういつと頭を切り替えて作業に入る。

私という存在はもう誰にも、何にも負ける訳にはいかないのだから。

5。

午前中で起動実験は終わって、昼食は外で取るようになった。

あそこの社内食堂でも良かったが、久々の外ということで鈴の実家の中華料理店に足を向けていたのだが。

「あー、そういえば……」

鈴の親は離婚してしまったため店を止めてしまったのだ。それが鈴が中国に帰ることになった原因なのだが生憎とそのことを私はこの地になかったから後から口伝で聞いたくらいにしか知らない。

かといってもう思い出すのが遅すぎた。既に店の周辺まで来てしまっている。会社に戻るにしても面倒なこと変わらない。

とりあえずでも店のあった場所に行ってみるか。

しばらく歩くと懐かしい町並みが出てくる。三年振りなこの町はあの頃と雰囲気は何も変わっていなかった。

店の様変わりはあるが、この土地にしっかりと調和している。まるで、昔からあったかのように。

その中に見慣れた暖簾が店にかけられている。

「へいらっしやいー!」

恐る恐る暖簾をくぐると威勢よく出迎えてくれたのは
鈴の父親だった。

「おう、なんだ仕種じゃねえか。久しぶりだな」

気前よく、気さくな笑顔で対応する鈴の父。その屈託のない笑み
はあの時と何も変わっていなかった。

「ええ。お久しぶりですね」

「おうおう、こんな美人さんになっちまってよ。ま、適当な場所に
かけな。注文だが酢豚でいいよな？」

促される通り、適当な場所に座る。私はここに来るとよく酢豚を
食べていた。だからって人の注文を勝手に酢豚にするのはどうい
うものなのか。別に構いませんけど。

「ええ。少し、トイレに行ってきます」

そう言って席を立ち、トイレに向かう。

ドアを閉めて、鍵もかけると携帯電話をかける。発信相手は、鈴
だ。

プルル、プルル、プルルと長めのコールの後にブツと繋がる音が
入る。

「もしもし、鈴ですか？」

『何よ、仕種……。せっかくの休みだから寝てたのに……』

鈴からの返事は眠たそうな声だった。さては今日が休みだからって昨日夜更かしをしていたな、ぐうたらな奴め。

「鈴、すぐに鈴の前の家のところまで来なさい。説明は後でするので」

『は？ ちょ、どういうことよ。今更、そんな場所に行っても……』

「いいから来なさい。後悔しなくなかったら来なさい。分かりましたね？ 絶対に来なさいよ」

そう最後に念を入れて伝えると、電話を切る。そして何もなかったかのようにトイレを出る。

店を見渡すとタイムリーな時間が外れてるからか客もほとんどいない。一通り終わって私が来たという感じだ。

「ほらよ、酢豚お待ちどう」

酢豚をおじさん直々に手渡される。相変わらずここの酢豚は美味しそうだ。

「ったくよ中学に入ると同時にパツタリだったからな。ちょうど三年振りか、お前さんもお姉さんに着いて行ってたのかい？」

「まあ、そうですね……」

「てことは三年間フランス暮らしかよ。どうだったんだ？ 向こうの暮らしは」

「土が合わないっていつか。やっぱりこっちの方が落ち着きます」
答えながらも酢豚を口に運ぶ。

「そうか。やっぱり自分の国が一番だよなあ」

そうしみじみと呟くとおじさんはうんうんと一人で頷く。

その後もおじさんとやり取りをしながらも箸を進める。味わつのも忘れずに。

そして皿も空になり、食事の時間は終わりを迎える。

「ごちそうさまです。確かお代は……」

「ああいいよ。帰国祝いと入学祝いだ。タダにしといてやるよ。その代わり、」

「鈴を頼む、でしょう？」

「ま、その通りだ。これからもアイツとよろしくやってくれ」

「勿論ですよ。末永く付き合ってくださいですよ」

席を立ち、店を後にする。外は梅雨に入る前の夏日が眩しく輝いている。

さて、鈴と顔を合わせると何を言われるか分からないので別ルートで帰りますか。

side：凰鈴音

「あー、もうなんなのよ仕種の奴……」

眠りを邪魔された私は私服に着替えて早足で指定された場所に向かっていた。こう言う時にISが使えたらどんなにいいかと思うのだが、そうするとIS条約に抵触してしまうためしない。

それに代表候補生という立場でそんなことで問題を起こせば代表候補生から外されてしまうかもしれない。下手をすれば国際問題だ。

とにかくこんな太陽の照り付ける真昼間にあんな場所に呼び出すとはいいい根性をしてる。出会い頭に文句の一つでも言いつけてやらなければ気が済まない。

あの告白以降、最初の頃こそ意識してしまいうまく喋れなかったが一月という時間は元通りに直すのに十分な時間だった。

今は以前と同じように仕種と会話出来るようになった。一夏のこ

ーチングも一緒に出来る程にだ。

しかし、仕種は振り向く気配はない。一夏のように鈍チン過ぎて気付かないのと違って、仕種の場合知っていて断っているから辛い。それが仕種も私のことを嫌いだから断っているのではないから尚更だ。

しかし問題はない。最低、三年は一緒に学校にいれるのだから長期戦を予定してそのうちに……、

「え」

目の前のものに目を奪われ思考が飛ぶ。

一瞬、目を疑った。けれど、私の視覚情報に間違いはなくあれはそこにある。

「……なんで」

その言葉が口に出た瞬間、早足がダツシユへと自然に変わる。

なんで、なんで、なんで……！

「おう、いらっしや……って鈴!？」

「なんで店やってるのよ! あの時、店畳むって言ってたじゃない!」

息も切れ切れに出会い頭に大声で怒鳴り付けた。父さんに。

一瞬、面食らってぱちくりしていたがすぐに自分のしている前掛けを外す。

「文句は後だ。ほら」

そういつと前掛けを投げて寄越す。

「ちょ、これってどういう……」

「仕込みの手伝いだ。早くしねえと夜の分が終わらねえから頼んだぞ」

「あ、あたしは学園に帰らないと拙いんだって!!」

「じゃあ尚更だ。ちゃっちやとやってさっさと帰れ」

そういうと奥に厨房の奥に引っ込んでいった。

嵌めやがったわね。仕種の奴……。

けれど、心は不思議とムカつくけど穏やかなものだった。

「こつやって二人で厨房に入るもの久しぶりだな。まるまる一年振りか」

久しぶりの親子の会話のためか、どこかぎくしゃくしている。

「ねえ、どうしてまた店やるうって思ったのよ」

「まあ、な。あの時はあいつとお前とでやってこそ意味があると思

つてたから、それが出来なくなった以上やる意味はないって思ってたんだけどよお……」

そういう父さんの言葉はどうも歯切れが悪い。

「あの後考えたけどよ。やっぱり駄目だな、動いてなきゃ嫌な方へ嫌な方へって頭ん中が勝手にいつちまう。だから考えてる暇を与えないためにバイト数人雇ってまたここに店を構えたって訳よ。つっても店の手伝いしてた鈴に比べればあいつらもまだまだひよっこだけだよ」

そついうとニカリと笑みを浮かべる。

母さんは離婚して少し変わってしまったけど、父さんは離婚しても父さんのままだった。

なにより父さんがまた店をやっていることが嬉しかった。

けれど、ここにもう一人足りない。

「どうして、母さんと別れちゃったの？」

「俺としてはお前にこのまま店の暖簾を継いで欲しかったさ。その内に俺の認めるような男に出会って店継いで……。そんな平凡な幸せでも俺はアリだと思ってたな」

それは分かる。ISの代表候補生になってない時のあたしならそんな考えも持っていた。もっとも、一緒に仕種も中華料理やらせるなんて発想は今、父さんに聞くまでなかったけど。

「けどあいつもISに乗れた方がお前の将来のためだって譲らなくてな。確かに代表候補生って肩書きはつくだけで将来にやれることの幅はかなり広くなるからな」

それも分かる。ISの代表候補生になって初めて分かる数々の優遇。女尊男卑の世の中、その象徴たるISの代表候補生となれば受ける恩恵も大きい。

母さんはその恩恵を娘が受けられるのであれば、受けさせるべきだと考えたのだろう。

平凡で有り触れた幸せとエリートで約束された幸せ。

「そこで意見が衝突して女房がそこで癩癩起こして、じゃああなたとは離婚だって。情けない話だが俺とあいつの終わりはそんなもんよ」

父さんはそう簡潔に締めるが、そこに至るまでにはあたしの知らないようないざこざがあったのだろう。両親とも私を思っていてくれてたのになんてこんな結末になってしまったのだろう。

そんな乾いた自虐的な笑みを浮かべる父の背中がいつもより小さく見えた。

「ねえ、父さん」

「なんだ鈴？」

「家族って、難しいね」

「……ああ、そうだな」

そういつと静寂が訪れる。

一夏の家も、仕種の家も。聞く話によると筈の家も、セシリアの家も。どの家も問題を抱えている。

「なあ、鈴。あいつの電話番号分かるか？」

「分かるけど。どうするつもりなのよ」

「もう一度、話し合おうと思ってな。お前はどうしたいよ」

「あ、あたしは……また、三人で暮らしたい。三人でお店をしたい」

「そうか。じゃあ、ISの代表を引退したらそうするか」

それは未来の約束。十年先か、二十年先か、はたまた三十年先か。

「うん！」

だけどその日まで父さんはここで待っていてくれる。

その日がいつになるかは分からないけど。

いつか、三人でまた……。

「にしてもお前も成長しねえなあ。あいつは人並みにはあるのに。ホントにあいつの娘か？」

「ど、ど見てそんなこと言ってるのよ!? これから成長するからいいでしょ!! 変態オヤジ!!」

第14話 「家族」 (後書き)

はい、捏造日常話でした。

鈴の家族問題ってちよつとくらい進展させてもいいと思うんだ。作者、回収する気なさそうですし。ちよつとでも心温まってくれれば幸いです。

この後に及んで新キャラを突っ込むとかどんだけ首絞めてるんだ自分。

まあ、元ネタとは性格が大きくかけ離れてしまいましたけど。

第15話 「代理教師は世界最強」(前書き)

遅くなって申し訳ないです。

「代理教師は世界最強」マインスター

お楽しみくださいな。

第15話 「代理教師は世界最強」

side: 鳳鈴音

「おはよー」

教室に入ると喧噪が飛び込んでくるが今日はいつも以上に騒がしい。

今週からISを使用しての実践が始まることもありクラス中は既にISスーツの話で持ちきりになっていた。

本来ならこの中で更に専用機持ちの門は狭まり多くは個人用のISスーツの必要性は難しくなる訳だが、そこは十代女子の他人との差別化したいという感性を優先させてくれるらしい。

「おはよー鈴。そーいやさー、鈴のってどこの社製？ やっぱ中国製？」

同室のクラスメイト、ティナ・ハミルトンが話しかけてくる。

どうでもいい話だけど中国製って聞くとなんか胡散臭く感じるわよね。自分の国のことなのに。

……まあ、パチ猫とかパチロボとかパチ鼠とか作ってたらそりゃそんな響きに聞こえるようになるか。

「あたしのは、確かー……」

「みなさん、おはようございます」

「「「おはようございます」」」

私がティナの質問に答えようとしたところに副担任の先生が入ってくる。

「せんせー、藤崎先生はー？」

一人足りない。いつもなら一緒に入ってくるか先に入ってくるみんなの先生が。
アイドル

「藤崎先生は皆さんの知つての通り、今日から産休を取られることになりました」

「えーふじのん来ないのー？　じゃあ、ISの授業は先生がするんですかー？」

ふじのん、とは藤崎先生の愛称である。ざつくばらんな性格と私たちと年がそれほどかけ離れていない感性も相まってあだ名で呼ばれて親しまれている。隣のクラスの副担任の山田真耶とはいい勝負だ。

「流石に先生一人でISも通常の授業もつていうのは厳しいです。」

ですので、今日からISの授業は代理の先生が就くことになりました。では、お願いします」

先生がそう言うところがりと教室の戸が開く。

「……え？」

その反応は私だけでなく、皆が同じだった。

しかし嵐の前の静けさとはよく言ったものだ。しばらく啞然と硬直した後、待っていたのは二か月振りに響いた割れんばかりの歓喜の声だった。

side：露崎仕種

「い……い？」

びりびりと響き渡る声に思わず耳を塞ぐ。廊下を介してなおここまで響く爆音を発するなんて十代女子の音量は侮れるものじゃない。

山田先生の通達に一拍遅れてクラス中がざわめく。今回は鈴の時と違って完全に情報がなかったのだ、驚くのも無理はない話だ。

しかし転校生、ということはおそらくまた代表候補生なのだろう。それにどうしてまたこのクラスに編入なのでしょう？ 普通ならバラして入れるのが妥当な判断だろう。

現にこのクラスには代表候補生はセシリアがいるし、隣には鈴がいる。というよりもこのクラスに専用機持ちが三人もいることが異常なのだ。

また代表候補生とあればまたこのクラスの専用機持ちが増えるのだろう。

いくら担任が元世界一ブリュンヒルデだからといっていくらなんでもこれはちょっと思慮に欠けるような……？

「失礼します」

教室のドアが開き二人の生徒が入って来た時、完全な沈黙が訪れた。

無理もない、入ってきたうちの一人が「男子」生徒だったのだ。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、みなさんよろしくお願いします」

男かどうかとかそんなのは私の耳には入らなかった。

入ってきたのは彼が「フランス」から来たということ。

「この国にも僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国から転入を

「

「き、

「……はい？」

「「「きゃあああああああああああああああああああああ
あっ！！！！」」」

そんな思考を吹き飛ばすほどのクラス中に先程の廊下から響いた
のと負けず劣らずの爆音が響いた。しかも起点はどこかが分からな
いのが怖いもので、といっても私と一夏と箒とセシリア以外の全員
なんだろうけど。

「男子！ 二人目の男子！」

「しかもうちのクラス！」

「美形！ 守ってあげたくなる系の！」

きゃいきゃいと騒ぐ女子を横目に私は乾いた笑みを浮かべるしか
なかった。それは前にいる転入生も同じだろう。とりあえず、精一
杯笑顔を絶やさないようにしている。

「し、静かにしてくださいーい！ もう一人いるんですからー！」

山田先生の言うとおり、ブロンドの貴公子の脇にはもう一人の転

校生がいた。

伸ばしっぱなしの銀髪。医療用ではなく本格的な黒い眼帯。その彼女はつまらなさそうに腕組みをして目を閉じている。

十代のこつというノリを嫌う千冬先生と同様な対応だろうが、違う点を挙げるとしたならば他者を見下しているという点。

そしてそれも僅かではずっと千冬先生に熱い視線を送り続けていた。

「……挨拶をしろ、ラウラ」

拉致が明かないというように千冬先生は腕を組んでいる生徒に面倒くさそうに挨拶するよう促す。

「はい、教官」

そう言つとラウラと呼ばれた転校生はどこかの国の敬礼を向ける。そのあまりのズレっぷりに一同は思わず黙りこむ。

彼女から受ける印象は軍人。しかも千冬先生のことを教官と呼んでいたのかつての教え子なのだろう。

「ここでそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、ここではお前も一般生徒だ。私のことは織斑先生と呼べ」

「了解しました」

敬礼を解くとこちらにぴっと向き直る。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

上官が下級士官たちに挨拶をするかのような簡潔な挨拶。

一夏の時のようなもつと何か言ってよみたいなきな空気になったが、その空気もあまりの無愛想さに霧散してしまう。

「あ、あの、それだけですか？」

「それだけだが」

笑顔で対応する山田先生だがまったく取り付く島もない。目の前の彼女はシャルル・デュノアと違って私たちに対して心を開くつもりはないらしい。

「っ！ 貴様が……！！」

一夏と目があつたのかつかつかと足早に一夏に近づいて

次の瞬間にパシン、と乾いた音が教室中に響く。

教室中が何が起こつたのか訳が分からないというよつな空気が支配する。あの筈ですらポカンとする始末だ。

「私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認められるものか……！！」

そう静かに、なお且つ怒りに燃えるような絶対の拒否の言葉を――

夏に突きつける。

「いきなり何しやがる!」

「ふん」

一夏を平手打ちしたソイツは一夏の怒りを無視して今度は目敏く私を見つけ出し歩み寄ってくる。そして私の席の真ん前で立ち止った。

「貴様か。ジャンヌダルクの妹というのは」

ラウラ・ボーデヴィツヒと名乗った転校生は静かにこちらを見下ろしてくる。その片方だけの真つ赤な瞳は底冷えするような絶対零度の威圧感を放っている。

軍人だからなせる技の一つといっても彼女が放つ気配はあまりに異質なものだろう。それはまるで親の仇を見るような。

「ええ。ですが何か? 一夏ですらもう少しマシな挨拶をしましたよ?」

私はそれに怯むことなく真正面から見つめ返す。

「貴様ら姉妹さえいなければ教官の二連覇は達成された」

「だから許せないと? 恨む場所を間違えてるんじゃないですか? それとも貴女は決勝戦のあの後、何が起こったのかわからないんですか?」

お互いの言葉に刺々しくなる。この人は千冬先生しか見ていない。だから知る筈もないだろう。あの裏側で起こった惨劇のことを。

「何を　　！」

「いつまでそこに突っ立っているボーデヴィツヒ。とつとと席に着け」

「っ。……了解です」

千冬先生に促されて渋々ながら自分の席に着く。それでも僅かな間にチラチラとこちらを敵視する眼差しを送り続けてくる。

なるほどね。一人は男。もう一人は千冬先生の教え子。しかもかなりの問題児と見た。だから転校生を二人とも一組にせざるをえなかったのか。

それに両方が両方、私と因縁の深い相手とはなんとも世知辛いものでこれからは波乱に満ちた学校生活になりそうです。

「ではHRを終わる。各人はすぐに着替えて第二グラウンドに集合。今日は二組とごうどうでIS模擬戦闘を行う。では解散！」

そう千冬先生が締めると一夏にシャルルはすぐに教室を出て行った。毎回、ISの実習の度に移動なんてご苦労さまです。

「さて、さつさと着替えてしまえますか」

そう言って上着に手をかける。下には既にISスーツを着ているためぼぼーんと脱ぐだけでもう準備完了なのだ。

それにあまり、女同士の着替えの場に長居したくないし。

「ではお先に」

そう言って、一早くに教室を後にした。

「では、本日から格闘及び射撃を含む実戦訓練を開始する」

そう言って千冬先生は授業を最初の挨拶をする。

ちなみに遅れて来た一夏はありがたい出席簿を受け、後ろで雑談をしていたセシリアと鈴もまたありがたい出席簿を受けていた。

「では今日は戦闘を実演してもらおう。ちょうど、活力溢れる十代もいることだしな。嵐！ オルコット！ 前に出る！」

「は、はい!？」

「どうしてわたくしまで!？」

「専用機持ちが早く準備出来るからだ。いいから前に入る」

「でしたら! 一夏や仕種も前に出るべきではないですか!？」

「ごねるなオルコット。織斑では実践にならんし、露崎では面白みが欠ける」

千冬先生に理屈で折られしむしむと前が出る。さっき、出席簿で叩かれたのもあつてかテンションが低めである。

「元気を出せ。……アイツにいいところを見せられるぞ?」

「やはりここはイギリス代表候補生、セシリア・オルコットの出番ですわね!！」

「アンタは単純でいいわよね。ま、やるけどさ」

何かを吹き込まれたかは分からないが二人はやる気になったようだ。セシリアに至ってはゲージを振り切る勢いだ。

「で、対戦相手はどなたですか? 鈴さんでもわたくしはよろしいんですが」

「アタシはいいけど? そういうのは一回、自分の対戦成績に聞いてみてからにしないよ」

ちなみに私を除いた模擬戦の成績は鈴が一位、セシリアが二位、
篤が三位で、ドベが一夏だ。特に鈴は機体性能的に相性がいいのか
セシリアに勝ち越している。

「安心しろ。対戦相手は……山田先生、どうしてここにいるんです
？ 今日の演習をお願いした筈ですが？」

千冬先生の言葉に後ろでこそそそしていたISスーツを着ている
山田先生がびくうっ！という効果音がつきそうなほどに驚いていた。

「お、織斑先生、その話なんですけど……。あの、言にくい話な
んですが変わって欲しいって頼まれて、その、断れなくて……」

しどろもどろになりながら山田先生は言い訳をする。その様はま
さしく小さな子供がなんとか言い訳を考えているような様子によく
似ている。

「誰に？」

目を閉じたまま不機嫌そうに短く聞き返す。千冬先生、これ以上
山田先生にプレッシャーかけるのは可哀想なんです。あーもう、
なんか涙目になってますし。

「そ、それはあ」

「私だよ千冬」

軽快な声が空から降ってくる。それはよく聞き慣れた声で、なお
且つこの学園では聞き慣れない声で。

「は？」

なんとも間の抜けた声が出る。その言葉を発したのは恐らく私だけではないだろう。そうに違いないと信じたい。

なにせネイビーカラーのラファール・リヴァイヴを駆って空から舞い降りて来たのがかつて織斑千冬と同じく世界最強の称号を獲った姉、露崎沙種なんだから。

すらつと伸びたしなやかな肢体はモデル体型とでもいうべきか。カッコイイとキレイの均整のとれたそのボディラインはISスーツ越しにはつきり表れている。

下ろされた私とよく似た紫がかった黒髪は毛先が軽くウェーブしていて我が姉ながら気品を感じさせる。

そしてその穏やかそうなくりくりとした目は人懐っこそうな印象を受ける。

「その役目を山田先生に頼んだのだが」

「何よ、折角ISを使つての授業なんでしょー？ だったら私たちがこの学園で一番ISについて知ってるんだから持っている技量全てを学生たちに見せるべきなんじゃないの？」

「お前とこのガキ達とを比べるな。自重しろ」

千冬先生にぶーぶーと文句を言っていると姉さんが固まっている周囲の視線に気がつく。

「あ。千冬のクラスには自己紹介まだだったね。一組の皆さん、おはようございます。今日から二組で藤崎先生の代理教師をすることになりました露崎沙種です。教えるのはISについて全般になります。藤崎先生が戻ってくるまでの短い間よろしくね」

そう気さくに世界一からの挨拶が終わると二組から響いたのと同じような爆音が校庭中に響いた。思ったんですが二倍の人数がいるから二倍じゃなくて二乗の歓声になるんですね。十代女子恐るべし。

「きゃあああつ！ 沙種さまあああつ！！」

「千冬様に次いで沙種様も……！！」

「織斑くんについて露崎さんも姉妹揃い踏みなんて！！」

「IS学園に入学してよかったああつ！！」

流石はミーハーな花の女子高生。千冬先生の時と負けず劣らずの歓声だ。まるであの時の興奮を巻き戻したかのような状況だ。

「やー元気だねー。一組の子も」

二組でも同じ反応をされたのだろう。姉さんはころころ笑いながらきゃいきゃいと騒ぐ一組の生徒たちの反応を楽しんでいる。対照的に千冬先生はかなり鬱陶しそうだった。

この二人はいつもそうだ。

人当たりがよく誰にでも寛容な姉さんと自他共に厳しい千冬先生

はいつも対比される。

ファンに対して愛想良く対応する姉さんと鬱陶しがって相手にしない千冬先生。

そして、その得意とする戦闘スタイルも。

「織斑先生……？ ま、まさか相手というのは……？」

セシリアが恐る恐る千冬先生に尋ねる。

「本当なら山田先生のつもりだったが仕方ない。お前たちには特別に露崎先生と相手してもらおう」

ざわめきが一層大きくなる。世界一の戦い方をナマで見れるのだ。ISに関わっていない人でもなくても、ナンバーワンの实力を見られるというのは希少な体験だ。

それに千冬先生はこういったような実演をしようとしなない。それは実力があまりにかけ離れているからというのもあるが、自分の持つ力を見せびらかさうとしないのも理由の一つだろう。

「制限が欲しいなら一応聞くけど？ 流石に仮にも世界一と現代表候補生がガチンコってのは大人げないしね」

「いいんですか？」

貰えるものは貰っておくというのが鈴の主義だ。そのせいで先日約束してた@クルーズのパフェで何枚野口さんが飛んでいったことか。

「いいわよ。でもISを装備するなはナシね。そんな条件で勝てるのなんて千冬くらいしかないからねー」

コロコロと笑うが洒落になってない。というか姉さんもISの装備なしでも十分に勝てそうな気が……。

「じゃあ、射撃武器なしで」

その言葉と共にざわ、と周囲が有り得ないといった風な音を立てた。

姉さんの得意とする戦術は射撃戦だ。その技術は千冬先生の近接戦と並び立つくらいの実力を持つ。ようするに世界一の射撃。

鈴はそれをハンデとして使用させないのだ。それはつまり千冬先生に近接武器を使用させずに射撃戦のみで挑むようなものだ。

観衆としてもそれを期待していた筈なのにそれをさせない外道っぷり。鈴、後で刺されても知りませんよ……。

「鈴さん、いくらなんでもそれは……」

「言つとくけど沙種さん、千冬さ……織斑先生とタイマン張って互角に戦える数少ない人物なのよ。ハンデくれるっていうんならこれくらい貰わないと勝負になんないわよ」

セシリアの懸念を鈴は一蹴する。確かにそれは一理ある。

「結局千冬には一回も勝てなかったけどね。そういえば私って千冬

に一勝もしないまま引退しちゃったんだっけ」

「ああ、そうなるな」

千冬先生は前人未到、公式戦無敗の戦績を誇る。練習試合においても負けたということ聞いたことがない。

対する姉さんも戦績は異常で引退するまで千冬先生以外に負けた相手はいない。

つまり、この姉さんは試合で千冬先生に当たらなければ必ず勝ちを取ったのだ。

「じゃあ、行きますか」

そう姉さんが呼びかけると三人は宙に舞い上がる。

「では、始め！」

その合図と共にブルー・ティアーズは先制攻撃とばかりにいきなりBT兵器を投入する。

姉さんはそれを何ともないようにかわしていく。無駄のない最小限の動きでBTの嵐をユラユラと飛び回る。

鈴もそれに応戦しようと衝撃砲を景気良く放つ。それでも数多の砲身から放たれるレーザーと空気圧の砲弾の弾幕も諸共せずにかわす。

「……………つ。もうエネルギー切れですの!？」

相手が世界一とあってか予想以上のハイペースの攻撃に三分もせずにエネルギーを使い切ってしまったBTを仕方なく引き戻す。

「ちよつとアンタ！ エネルギー切れるのが早すぎるでしょうが！」

「仕方ないでしょう！？ 相手は彼のジャンヌダルクなんですし出し惜しみしてられませんのよ！」

二人の言い争う様を姉さんは余裕があるのだろう、微笑ましげに眺める。

「射撃武器がない時点でアドバンテージが取れてるって思ってたでしょ？ まずそこが大きな間違い。射撃武器を得意とする者は射撃について深く理解をしていなければ強くあれない」

姉さんの知識量は千冬先生の持っている知識量とほぼ同等である。

しかし知識があるのとそれを実践するのでは訳が違う。戦術や戦略を理解していたとしてもそれを実践できなければ使い物にならない。

それを机上の空論で終わらせないとところに姉さんの強さがある。

「射撃武器を理解しているからこそ、その利点、特性、そしてその弱点についてよく熟知しているのよ？」

そう言つと瞬間加速イグニッション・ブーストを使ってセシリアの懐に飛び込む。

「っ……!?!」

射撃戦を主体とするセシリアは距離を詰められれば近距離で取り回しの出来る武器を即時に呼び出し出来ないために非常に脆い。

故に相手を近づけさせない試合運びが重要であるのに、それを実践することが出来ない。セシリアはまだその高みに立てていないということだ。

しかし、その高見に立つ姉さんはそれが出来る。

「でしたらこれで……!」

ミサイルの砲身を突撃する姉さんに向ける。私や一夏と戦った時のように至近距離での実弾兵器の砲撃で迎え撃とうというのだろう。

しかも、イグニッション・ブースト時に急な旋回は難しいためそれを避けるのは困難極まりない。

「言った筈でしょ？ 射撃武器に関しては熟知しているって」

が、姉さんは何事もなかったように言葉を続け、セシリアの砲身から放たれたミサイルを既にかわしていた。

懐を捉えた姉さんは、そのまま見事な一本背負いでセシリアを鈴に向かって投げつける。

鈴もまさか「投げる」なんて思ってもみなかったのだろう。見事に虚を突かれたのか、回避をするタイミングが遅れてしまいガシャーンとIS同士がぶつかりあう。

「ご両人、飛来する兵器にはご注意を」

姉さんが楽しそうにそう言うとセシリアの放ったミサイルが折り重なっている二人目がけて飛来し、直撃して試合は決まった。

ドゴンという爆発音の後に、きりもみしながら完全敗北した二人が落ちてくる。

きりもみしながら落ちて来たのがアレなんだろう。二人とも目を回している。

「じゃあ、さっきの戦闘の反省に入るよ」

そんな二人を倒した勝者の姉さんが下りて来た。

「まずオルコットさんはビットを出すタイミングが早かったかな。出来る限り見せずに奥の手として奇襲に用いた方が効果的だよ。あと近接武器をすぐに取り出せる訓練もすること。減点1」

「う……」

「それで鳳さんは衝撃砲を無駄に撃ち過ぎ。相手の武装に射撃武器がないからといって数で制圧しようとしても当たらないよ？ エネルギー消費の効率がいい武器だからって無駄打ちしない。それにパトナーはBT兵器なんだし外してBTを壊したりするとそれだけで火力が減るわけだから状況に応じて自制すること。減点1」

「うぐ……」

姉さんが丁寧な反省点を挙げていく。

「まあ、最後に即席でコンビネーションなんて無理かなとは思ってたけどこれは代表候補生でも酷過ぎ。いうよりもお互いに我が強すぎて好き勝手に行動してるため協調性ゼロ。何度か試合してるって聞いているからお互いの武器の特性を理解してる筈だからそこを組み立てて行動すること。減点3」

「ぐ、ぐぐぐ……」

「で、合計すると五十点ってとこかな。補講つけて一応仮免発行ってレベルかな。ま、一対一ならもう少しマシな結果になるんだろうけど。もう少しお互いがお互い譲り合いの精神を持つこと」

「は、はい……」

姉さんの正論を受けて二人ともシユン、と頂垂れる。

「お前はいつも甘過ぎる。私から言わせればお前に勝てない時点で落第決定だ」

それもそれでどうかと思いますが……。姉さんに勝てるのは貴女しかないんですよ？ それを十代そこそこの人間が勝てという時点で無理な気が……。

「よ、よくよく考えれば織斑先生と互角ということは織斑先生に試合を挑むようなものですわね……。射撃武器を封じただけで勝てる筈ありませんわ……」

「射撃なしで勝つなんて、やっぱどんだけ化け物なのよ、アンタの

姉貴は……」

「さて当初の予定とは違ってしまったがこれでIS学園の教員……の實力も分かってくれただろう。以後、教師には敬意を持って対応するように」

微妙に言葉に詰まる千冬先生。まあそうですね。世界一の臨時ねえ教師の實力を見せつけたところで他の教師に敬意を表するようになるとは思えないですね……。

「専用機持ちは織斑、露崎、オルコット、デュノア、ボーデヴィツヒ、鳳の六人だな。では出席番号順に分かれる。各グループのリーダーは専用機持ちが行え。いいな？ では分かれる」

パンと手を打つとクラスメイトたちは一斉に別れる。

一夏やシャルルの班の女子は喜んでたり、セシリアの班はビミョーといった顔をしていたり、鈴のところは一夏の情報聞き出そうとしてたりと十代女子人によって様々な対応だったが、ラウラの班だけは悲しいかななんの会話もなく沈黙したままだった。

「いいですかーみなさん。これから訓練機を各班に一体取りに来て下さい。数は『打鉄』が三体、『リヴァイヴ』が三機です。好きな方を班で決めてくださいねー。早いもの順ですよー」

山田先生はいつもよりも少しだけ張り切っているように見える。姉さんの試合に刺激されたのだろう、教師らしくしようという気持ちちがその端々から滲み出ている。

「では、うちの班はリヴァイヴを取ってきますね。私のリヴァイヴ

が元なので教えやすいでしょうし」

班のメンバーは皆同意したので、リヴァイヴを持ってきて訓練を開始する。

流星は使いやすい初心者にも親切設計なリヴァイヴだ。特に装着、起動、歩行までは問題なかった。皆、授業で何度か乗っているのその辺りはなんとかこなせるだろう。

が、何人目かで直立させたままという簡単なミスをしていた。専用機と違って訓練機は終了するときはしゃがませないといけないのである。

「あーどうしよう、これ……」

リヴァイヴが直立したままのため次の人は途方に暮れている。よじ登るなんてこと一夏やシャルルのいる前で出来る訳でもなし、そんなことしようなんて毛頭思いつかないだろう。

「仕方ない。コックピットまで私が運びますので次からは注意してくださいね」

一夏の班でも同じようなミスをしていたのでそれに倣ってオルテシアを起動させる。もともと、向こうはその度にきやいきやいと騒いでいたので千冬先生に厳重注意を受けていたりするんだが。

頭に起動、と考えるだけで紫色のフレームした愛機が装着される。

このISについても学園の生徒は見慣れたもので別段不思議に思っていないのが唯一、表情の変化した人がいた。

今日、転校してきたばかりのシャルル・デュノアだ。

その表情があり得ないものを見た、とでもいうべきか。

(まあ、当然か……)

オルテンシアの今のフレームは深桜重工で製造されたものだが、
これのオリジナルは「フランス」で鑄造されたものだから。

「デュノアくん、どうしたの？」

「な、なんでもないよ？ 代表候補生でもないのに専用機持ちなんて珍しかったから……」

「それは言い訳でえ、ホントのところは露崎さんにお熱とか？」

「ち、違つよ!？」

「そんなあー。薄い本の題材になると思ってたのに、デュノア君には意中のもうお相手がいるなんて……」

「それに露崎さんには織斑くんって強敵がいるよ？ ハッ!? これ三角関係の予感!？」

「だから違つつて〜!!」

「ここからでは遠過ぎて話の内容が聞こえてこないがとにかく、クラスに溶け込んで仲睦まじいのはいいことだ。ドイツから来た人は大違いだ。」

そして、その後も滞りなく訓練は続き午前中の授業は終了を迎えた。

第15話 「代理教師は世界最強」(後書き)

遅くなって申し訳ありません、結構難産でした。

やりたいことは見えてる筈なのに……書いてたら初期の二倍の量になるってなんぞ……？ 詰め込み過ぎ？

ようやくキーキャラの一人である仕種の姉、沙種がきました。こっから物語が進んでいく！ ……と信じた。

7月7日、奇しくも篝の誕生日と同日よりArcadia様にも掲載させていただいております。内容はこちらに掲載させていただいているものと同じものです。

第16話 「暗躍する者たち」(前書き)

オリ展開上等！な感じになってます。

第16話 「暗躍する者たち」

「……どうしてこうなったのよ」

本日の昼食は鈴の不機嫌そうな一言で始まった。ていうかそのセリフきつと屋上でも使われていることでしょう。

まあ、分からないでもない。あの告白以来、どこか鈴と私はぎくしゃくしてたがそれもようやく慣れてきて今日久しぶりに二人で食べることになっていたのだ。

その不機嫌の原因というのは、

「あの、そんなに迷惑だったかな？」

今日来たばかりの転校生、シャルル・デュノアである。

元々は鈴と二人で食べようという話だったところにシャルルが来て一緒に食べてもいいかなと聞いて来たのだ。

鈴も入学初日、右も左も分からない人間に冷たくするほど情がない訳ではないので断るにも断れずに了承したのだが、別に誰が悪いという訳でもないので行き場のない感情の怒りを持って余しているようだった。

「別にそういう訳でもないけど……。でもあんた、一夏に誘われてたじゃない」

確かにあの授業の後、シャルルは一夏に昼食を誘われていた。その前に女子にも誘われたりしていたが、一グループずつ丁寧に通っていた。律儀なものだ。

その一夏はというと屋上で食べるらしい。私と鈴も誘われたのだが、第一夏と食べると約束したと聞いたので普通に、常識的に考えてそれを断って下の食堂で食べている。一人、二人つきりにはさせまいとそのお誘いを受けた恋する乙女がも一人いたりするんだが。

ちなみに私は日替わり定食で今日はハンバーグで鈴はいつもどおりラーメン、シャルルはパスタだ。

「えっと、一夏に誘われた時に後ろに篠ノ之さんがいたんだけど、その時なんとも言えないような顔してたから……」

断らざるを得なかったという訳か。その空気を読むシャルル、グツジョブ。というか有無も言わせない筈の形相って何ぞ……？

「ま、そんなにあたしは気にしないけどね。こっち来て正解よ。向こうにいたらセシリアの不味い料理食わされる可能性があるからね」

「そんなにオルコットさんって料理駄目なの？」

「駄目なんてものじゃないわよ、あれは料理に対する冒瀆よ。この前のサンドイッチだってどうしてあんな単純なものをあんな味付け出来るってのよ。訳が分からないわ……」

料理人の娘だからだろうか、食材を無駄に扱われることに対して憤りを感じている鈴。ああ、こんなところにも確執の原因があったんですね……。

「ま、元々包丁すら握ったことのない典型的なお嬢様ですしね。味見という大事なことを知らないのでしょうか」

「あ、あはは。それはこつちに来て正解だったかなあ……」

それを聞いて乾いた笑いを浮かべるシャルル。うんうん、料理は美味しく食べられるべきですよー学食のように。

「露崎さんって結構辛口だよな」

「親しい人ほど辛辣になっていきますけどね。それと私のことは仕種でいいですよ」

「あたしのことも鈴でいいわよ。同じ代表候補生なんだしね」

「あ、うんよろしく仕種、鈴。僕もシャルルでいいよ」

そう言うてはにかむシャルル。

「それで仕種が深桜重工でメンテナンス受けてるのって本当なの？」

「ええ」

「じゃあ、シンリ・シュヴァリエ博士が直々に調整してるの？」

「ええそうですが……、シャルルはどうしてその名を？」

「シユヴァリエ博士はフランスどころかヨーロッパの科学者といわれてるからね。彼女が深桜にスカウトされた時もフランスではちよつとした騒ぎだったんだよ？」

確かに彼女の技術は一線を画している。それはオルテンシアや武装を通してひしひしと感じている。

使いやすさにしても性能面にしてもそれらはラファールを改造しただけに過ぎないものが第三世代と十分に渡り合えるだけの物へ変貌を遂げている。

本人曰く、篠ノ之束さえいなければ稀代の天才という謳い文句は自分であったかもしれないというのは伊達ではないらしい。

「深桜ってあれでしょ？ 沙種さんが使ってた武器が有名になったからって世界的ヒットになったっていう」

特注スナイパーライフル、春紫苑。姉さんの使ってた愛銃にしてビームと実弾を一丁で撃ち分けられる斬新で画期的な武器である。

しかもビームのエネルギーを刃状に固定すれば突撃槍にも出来るという変態極まりない装備だ。姉さんはそんな使い方をしなかったがギミック上それは可能らしい。

ちなみに同モデルの形態を一個に絞った簡易版はISの武装業界では全世界でバカ売れしたとか。

「シャルルってやっぱりそういうの気になるの？」

「ま、まあね。デュノア社の息子だし……」

デュノア社といえばラファール・リヴァイヴを作った世界シェア第三位の大企業だ。で、シャルルはそんな一流企業の御曹司って訳ですか。

「やっぱりお偉いさんの子供ってこうあるべきよねー。あっちの金髪なんかと違って！」

ちなみにその一言をニュータイプ的なもので感じとったセシリアが放課後の訓練で鈴に対して盛大な国家間戦争が吹っかけたことをここに記しておく。

「ぶっ」

ベッドに腰掛けて一息を吐く。先程まで訓練の方は休みにしてもらってシャルルの引っ越しの手伝いをしていた。

引っ越しといっても荷物も数えるほどしかなかったのですぐに終わってしまった。やっぱり女子とは違うな、男子は荷物が少ない。

その当のシャルルは引っ越しの手続きのために今、山田先生のところに行っている。

コンコン、とノックの音が響く。

「はい、どちらさままでって……筈？ どうしたんだよ」

ドアを開けると筈がむすっとした形相で突っ立っていた。

「い、今お前一人か……？」

「ああ、そっただけど。どうかしたのか？ とりあえず、部屋に入れよ」

「いや、ここにいい」

「そ、そっか」

「そっだ」

そういつとそれきり黙りこくってしまふ。気まずい沈黙。ていうかこういうこと前にもあったぞ。コミュニケーション障害か、コミュニケーション障害なのか筈。

「筈、用があつて来たんじゃないのか……？」

「そ、そうだが私にも事情というのが……」

「ごによごによと言うが後の方は小さく口ごもっていて聞き取れない。」

「なんか言つたか？」

「な、何も言つてない！」

急に大声を出して、びっくりしてしまふ。筈、大声出す癖直した方がいいぞ。

その後、気持ちを落ち着かせるために筈は咳払いをする。

「それでだな……。こ、今度の学年別個人トーナメントだが……」

微妙にそわそわと落ち着きがない。

「わ、私が優勝したら」

そこまで言うと、急に顔が真っ赤になる。ん？ 風邪か？ 熱でもあるんだつたら早めに寝た方がいいぞ。個人トーナメントもあるんだな。

「け、けけけけけ結婚を前提にお前と付き合ってもらおう!」

びしいっ! と指で突きつけて宣戦布告をされる。

どうやらさっきのは熱じゃなくて恥ずかしさによる紅潮だったらしい……っで。

「ま、待て箒。結婚ってのは、」

「わ、私の言いたいことは以上だ!! で、ではな!」

そういうや否や一俺の言葉も聞かずに一目散に退散していく箒。あまりの事態にそれをぽけーっと思えることしか出来ない俺。

結婚ってあれだろ? レッツマリッジって奴だろ? でも男子は18にならないと結婚出来ないんだが箒はそこんどこちゃんと知ってるのか?

「どうしたの一夏。今、篠ノ之さんが凄いスピードで走っていったけど」

シャルルが手続きが終わったのか部屋に帰って来る。

「あ、いや何でもない。何でもないぞ……」

そうやって自分に言い聞かせるように部屋に戻る。

（結婚、ねえ。俺と篤が結婚……）

部屋に入ってもさっきのその一言だけが妙に頭の中でリフレインしてしまい、未来のビジョンを幻視する。

（なんつーか、カカア天下にしかなりそうもないな）

今でも篤に頭が上がらないのに結婚なんてしたらますます頭が上がらなくなりそうだ。

ただ、無意識ながらもそういうのもアリかなと心の中でそう思っていた。

IS学園、地下50メートル。レベル4という高い秘匿レベルを設定された学園でも一部の権限を持つ者しか入ることのできないIS学園において隠された空間。

この場に二人の世界最強は下りていた。

「すまん。こんな時間にこんな場所に」

「別に気にしなくていいよ。私も気になってたし」

千冬の気遣いは無用と沙種を連れて入る。時計の針は日付が変わることを指していた。職員の大半は明日のために就寝している頃だろ。

「それでコイツがこの間、アリーナに乱入してきたっていうIS？」

横たわっているISを見下ろす。それは解析された後で今も今後のために解体せずに原形を残してここに安置されている。

「ああ。コアは登録されていないもので、」

「おまけに無人機ときた。世間にバレたら相当ヤバい代物だね」

リモート・コントロール・スタント・アローン
遠隔操作に独立稼働。どちらか、もしくははこの両方が使われていたこの機体は現時点でどの国家もその技術の確立が行われていない。

もし、このことが学外に知られればどの国家もこの技術を是が非

でも欲しがらるう。

なにせ、戦争で人が必要としなくなるから。

「で、だ沙種。この無人機に関してだが、お前の意見を聞きたい」

「千冬だって薄々分かってるくせに。こんなこと出来るのアイツだけだって」

沙種は悪戯つぽい笑みを浮かべる。千冬も察しはついているのかはあ、と息を吐く。

二人には共通した人物が頭の中に映っていた。

篠ノ之束。

人を食ったような天才にして天災。ISの産みの親で現在においてもコアを作れるのは全世界において篠ノ之束しかいない。

「ただ、理解できないのはあいつが何故IS学園に無人機を投入したのかだ」

「あんまり真剣に考えない方がいいよ、束が無軌道なのは今も昔も変わらないからね。おおよそ、一夏くんの白式のデータでも取りに来たんじゃない?」

「……かもしれんな。あいつは白式がロックされていたと言っていたからな」

千冬はそう言うと腕を組んだまま壁にもたれかかる。

確かに教師権限を行使して、白式のプライベート・チャネルの口を確認した時にはそう残っていたのでこれは間違いない。

「ねえ、千冬。次に公式な試合があるのはいつ？」

「六月の終わり、学年別個人トーナメントがある」

「もしかすると東がまたそこにも何か仕掛けてくるかも」

沙種の言葉に千冬は眉を顰めた。

「用意し過ぎて困ることはないよ。東に対してどれほど警戒したところで無駄骨だらうけど」

「何も警戒しないよりはよほどマシだ。ただし、生徒にはられないように」

学年別個人トーナメントでは企業のスカウトマンや各国の重役が視察に来る。そこで大がかりな事が起これば、警備態勢が疑われる。それは日本の警備態勢が疑われるのと同義である。

それにこんな大きなイベント事で東は何かを起こさない訳がない。

「千冬、無人機が乱入してきた時どうして出なかったの？」

「一夏と凰が任せるといふから若い者に任せただけだ」

「嘘ばかり。出られなかったんでしょ」

千冬はいつも通りつつけんどんに答えるがそれは嘘であることをこの幼なじみはすぐに見破った。

「……まだなの？」

「ああ。かく言ってお前もそうだろ？」

「まあ、そうかな。今日みたいに訓練機走らせれば出られないこともないけど、千冬とおんなじ。あれはまだ出せない」

苦笑から一転、沙種は真剣な表情に変わる。

「千冬の『暮桜』も、それから私の『灼焼』も。まだ『その時』じゃない」

沙種はそう言って無人機を見下ろす。それはまるで遠いものを見るような目だった。

未だ現役を思わせる射手としての鋭い眼光は来るべき日のために備えられた尖兵。

「沙種」

「なんてね。湿気った話もこれで終わり。さっさと部屋に帰る？あ、それから今週末にアレをやるからね」

張り詰めた表情もぱっと切り替わって沙種はすぐに明るく振る舞う。この切り替えの早さは千冬にとって羨ましいものだった。

「あ、ああ」

鉄面皮を被っていることで有名なあの千冬が珍しくうつろたえる。それほどアレは千冬にとって苦手なことなのだろう。

そのアレとは何か。それは折を見て語ることにしよう。

千冬と沙種が地下で語り合っているその頃、一人の生徒がとある一室で連絡を受けていた。

その生徒はオレンジ色のラインの入ったジャージを着ているフランスの代表候補生、シャルル・デュノアだ。

ただその電話に出る表情は年頃らしさはなく、事務的な任務を告げられてるように答える。

『では、この学園にアイツが作った機体があるんだね?』

「はい、間違いありません。あれは『ミステール』の発展型と思われるものでした」

ミステール。

それはフランスにとって救世主的な存在であり、また忌むべき存在でもある。

その作りは第三世代兵器とは趣旨が異なるが高い技術力が用いられているのは間違いない。

それに、極端な話シャルルの扱う専用機のコンセプト元となつたといっても過言ではないだろう。

『そうなるとおそらくあれを設計したのは彼女に間違いないだろうね。ということは彼女はまだ肩入れしてるのか』

「……おそらくそうであるかと」

ふむ、と相手は短く電話越しで思考する。その実、深く考えているような雰囲気はしない。

『引き続き、内偵を頼むよ。出来れば今月末に行われる学年別個人トーナメントまでに結果を出してくれると嬉しいんだけどね。僕もその時にそっちに行くからいい報告を期待してるよ』

「し、しかし」

『何、問題ないさ。男が女に近づくのは当然のことだろう？ それ

とも、あのことを公開してもいいのかい？」

「そ、それは……」

あのことを持ち出され、思わず言葉に詰まる。

『そうだよ。困るよね。君もデュノア社もこのことが知れば信用がガタ落ちだ。それにただでさえあんな事件のあった後じゃあ世界シェアの第三位といってもただラファールが売れているだけの会社だ。いずれは第三世代開発の波に取り残される』

シャルルはただ押し黙って彼の電話からの言い分を飲み込むしか出来なかった。

依頼主の言い分は全て正しい。ただ、その正しさが本当に正しいものかどうかは信用し切れなかった。

胡散臭い、というよりも彼の言葉はどこか他人事のように、まるで自分は目的のための捨て駒のような扱われているのではないかと疑問を持たざるを得なかった。

『だったら僕の命令には従うんだ。デュノア社だけでなく、フランスの再興は君にかかっている。分かったかい、シャルル・デュノア君？』

「……………はい」

長い沈黙の後、彼の命令を了承した。

『うん。素直でよろしい。聞きわけのいい子って僕はスキだよ？』

白々しいと思いつつもその言葉は心の奥底に飲み込まざるを得なかった。従わなければ、あの事をバラされてしまうのだから。

その後もしばらく機械的な受け答えが続いた。

「はい、では……」

そう言っつて電話を切る頃にはシャルルはぐったりと疲れていた。

会社のためだ、国のためだとか言いながらも結局はただ単に彼女に会いたただけだ。ただ、彼女がフランスを救ってくれるかもしれない力を持っているというのもまた事実。

ふと、ナイトテーブルに置かれた依頼主から送られてきた書類に目を落とす。

「ん……、シャルル……?」

それを手に取ろうとした時、一夏が目を擦りながらのそりと起き上がる。

「あ、ゴメン。起こしちゃった?」

そう言いながらもシャルルは慌てて書類を後ろ手に隠した。

「いや、別に構わねえけど。何の電話だったんだ?」

「うん、ちょっと本国の方に定時連絡をね」

「あーそつか。日本と向こうじゃ結構時差があるもんな。シャルルは来た時大丈夫だったのかよ？」

「来た時は治すの大変だったけど、今はもう大丈夫だよ」

「なら大丈夫だな。早く寝ないと明日も授業あるんだしきついで。じゃあおやすみ、シャルル」

「うん。おやすみ、一夏」

そういうと一夏は十分もせずに入った。訓練でよほど疲れているのだろう、これほど寝付きがいいのが羨ましくもある。

彼が寝たのを見計らうと隠していた書類を再び開き、中身を見る。

『シンリ・シュヴァリエと接触し、フランスに帰るように説得せよ』

フランス政府からの特命であるようだが、それも依頼主のアイツが手回ししたのだろう。

その中で一番手っ取り早いのが彼がいうように露崎仕種の接收し交渉材料にすることだ。

でもそれは友達を売るということ。

そんなことはしたくない。けどしななければ秘密がバラされてしまう。

「ねえ母さん。僕は、どうしたらいいの……？」

一人、小さく天国の母に問いかける。だが、悲しいかなその問いに答えてくれるものは誰もいなかった。

シャルル転校初日、早くも波乱に満ちた生活が始まった。

第16話 「暗躍する者たち」(後書き)

筭の告白がレベルアップしました。このことを吹き込んだのは勿論、あの人で……。

フランスの様子がちょっと複雑になっています。オリキャラが次々増えてくのでどう処理しようかと模索しながら続けるしかないか……。

文章量が今回は少なめですが、当初はこれくらいだった気ガス……。途中がおかしかったのだ……。

第17話 「縛られる過去」 (前書き)

時間が空いてしまいました、申し訳ないです。

仕種のイラストはなくはないが、沙種のイラストがない。

あと、ISのアーマーとか無理ゲー。

第17話 「縛られる過去」

side:織斑一夏

シャルルが転校して来てから始めての土曜日の放課後。

今さつきもシャルルと軽く手合わせをしてもらったんだが、見事にボコボコにされている。

特に射撃武器を持っている相手とやった時は相性最悪でボコ負けがほとんどだ。

「どうして一夏が勝てないのか分かる？」

「えーと、たしかあれだろ。俺が射撃武器の特性について把握していないから、だっけ？」

毎回の訓練後の反省会のおかげもあって自分の改善する点だけはよく知っている。

正直、これも仕種がいなければっこう危うい。何せ、自称俺専

属コーチの二人の説明が訳分からな過ぎて反省会になってるのかなってないのか分からないのだ。

篤は擬音語ばかりで訳分かんないし、セシリアは理路整然過ぎて理解しろって言うのがきつい。鈴からも時々お言葉を頂くのだがあまりに感覚的過ぎていまいちイメージが掴めない。

かろうじてマシなのが仕種だが、っていうか仕種以外に説明が分かる奴がいない。おまけに三人の分かりにくい意見を分かりやすく翻訳してくれてる（それでも分からないことが多いが）。

あれ、これ成り立ってるの仕種のおかげじゃね？

そう言った意味で転校して来てくれたシャルルの言葉は非常に分かりやすかった。おまけに男子同士、気楽なことこの上ない。

「一夏の答えはあってるけど付け加えるなら知識だけ知ってるって感じかな」

「とは言うものの射撃武器なんて使ったことねえからなあ」

「確か一夏の白式イコライザって後付装備がないんだよね？」

「ああ。この前調べてもらったときに拡張領域ハススロットが全部埋まって新しい武器を量子変換インストールするのは無理だって言われた」

「ワンオフ・アビリティーに拡張領域を全部割いてるのか……」

そう言ってシャルルは考え込む。

普通、拡張領域には五つから八つくらい装備出来るのだが白式はその容量全てを単一能力、ワンオフ・アビリティ零落白夜に割いているのだ。

単純計算、俺の零落白夜がアサルトライフル五つ分の攻撃力を有しているといえれば分かりやすいが、それがアサルトライフル五つ分の働きをしてきているかと聞かれれば俺の実力不足のせいか微妙だ。

おまけにその攻撃力を確保するためにシールドエネルギーからもエネルギーを持っていくため使えば使うだけ己を身を削る厄介な仕様となっており、使いどころを考えないと自分で首を絞める始末。

「割に合わないなあ……」

「そんなこと言わないの。その代わりにエネルギー兵器に対してはかなりの脅威だよ。それにシールドエネルギーを無効化出来る力を持っているんだからね。これって一夏が思っている以上に強力だよ」

とはいうものの、エネルギー兵器を使っているのも今のところセシリアのブルー・ティアーズくらいだ。

他の量産機だって実弾がメインだしシールドエネルギーを無効化する肝心の攻撃だって当てなければ旨味がない。

そこで今回の射撃武器の話。おお、繋がった。

「大体、第一形態でワンオフ・アビリティが発動してるってだけでも凄いことなんだから。しかもそれが織斑先生　ブリュンヒルデと同じ能力なんだから尚更ね」

「姉弟だからで済まされないのか？ それ」

「それはちょっと難しいかな。ワンオフ・アビリティーはISと操縦者の相性の問題だからね」

「言われてみればそうだ。白式はあくまで俺の機体で、千冬姉の使っていた機体ではない。」

「ん、まあそういうのはおいおい考えるところ。今は射撃武器の訓練しようぜ」

「あ、うん、そうだね。じゃあ、はい」

「そういつて渡されたのはさっきまでシャルルが使っていたアサルトライフル、ヴェントだった。」

「あれ、本人以外は撃てないんじゃないか？」

「普通はね。でも使用許諾アンロックをすれば登録してある人全員が撃てるんだよ。うん、使用許可を発行しておいたから」

「……待てよ。この方法が出来るんだつたらもつと早くに知れたんじゃないのだろうか？」

「私の使ってみますか？ かなりクセの強い代物ばかりですけど」

「仕種の射撃武器といえば二丁のハンドガンにレールガン。確かにクセが強い。強いて使いやすそうなものはアサルトライフルか。」

「素直にシャルルに借りときなさいよ」

「おう、そうする」

鈴の後押しもあって、シャルルからヴェントを手渡される。

「か、構えはこれでいいのか？」

「えと、脇を締めて。それで左手はこっち。オツケー？」

ふわりとISで浮いているシャルルが手取り足取り指導してくれる。うん、うちの自称コーチもこれくらい親切であるべきだと思っ
よ。

「火薬銃だから瞬間的に大きな反動がくるけど、は衝撃はISが自動で相殺してくれるから心配しなくてもいいよ。センサー・リンクは出来る？」

「いや、さっきから見当たらないんだが……」

「格闘専用の機体でも普通は入ってる筈なんだけどなあ……」

「欠陥機らしいからな」

「100%格闘オンリーなんだね。じゃあ、仕方ないから目測で撃つてみて」

……ていうか千冬姉もこんな機体使ってたのか？ いくら射撃武器を使わないからってセンサー位入れといてくれよ。ズブの素人なんだぜ俺。

「じゃ、いくぞ」

引き金を引くと大きな炸裂音が響く。

「うおっ!？」

思いのほかに大きな炸裂音にビビってしまふ。

「どう、感想は？」

「なんていうか、アレだな。『速い』って感じだな」

「そう、『速い』んだよ。一夏の瞬間加速イゲニツジョン・ブーストも速いけど、弾丸はその面積が小さい分より速い。だから、軌道予測さえあっていれば簡単に当てられるし、外れても牽制になる。一夏は特攻する時集中してるけど、それでも心のどこか無意識でブレーキを踏んでるんだよ」

「だから、簡単に間合いも開くし続けて攻撃されるのか」

「そういふこと」

なるほど、そういふことだったのか。

「……まさかあんた、そんなことも理解してなかったの？」

「いや、そりゃそうだけど。銃なんて使う機会なんてないし分からないだろ」

やっぱり実践というのは知識の何十倍もためになるな。百聞一見に如かず、習うよりも慣れろって奴だな。

「はあ、本格的にダメねこりゃ」

それは酷い言い草だぞ鈴。シャルルみたいにもっと分かりやすく俺に教えてくれたら理解したと思うんだぞ。つーか、銃の速さのことを感覚の一言で片付けようとするお前が悪いぞ、今回。

「そつえば仕種のオルテンシアとシャルルのリヴァイヴってどう違うんだ？ 確かそれも元々はリヴァイヴだつて言つてなかつたか？」

前にそんなことを言つていたような気がするがこうして並べて見比べてみてもどこが共通しているのかでんで理解できない。どう見ただつて完全に別の機体だ。主に装甲とか装甲とか装甲とか。

「ええ。オルテンシアはリヴァイヴとの差別化するなら主に外装と機動性、それに使用する武器全般ですね」

「外見は別として、確かに仕種の武器つて企業が使つてるようなものじゃないよな。いつたいどこ製のだ？」

「私が扱っているのはシャルルみたいなメジャー企業の武装ではなくて、深桜の試作武器がほとんどです。しかもほとんどがワンオフ形体で中には市場に流れることもない物を使つてたりしますけど」

「ふうん。ていうことは仕種の使つてる武器の中からこれを元に深桜は武器を作つたりするのか」

「ごく稀にですけどね、と仕種が付け足す。」

「シャルルのところは仕種みたいなおことはないのか？」

「僕のところはISを作るところだから。武器よりもリヴァイヴの試運転とかはやらされたけどね」

そういつて苦笑する。その時、シャルルの表情が少しだけ陰つたような気がした。

「シャルルのも沙種さんの使ってたやつと形が違うよな。シャルルのリヴァイヴってカスタム機か？」

「うん。ちゃんとした名前はラファール・リヴァイヴ・カスタム？
プリセット初期装備をいくつか外してそのうえで拡張領域を倍にしてあるよ」
バスターレット

「へえ二倍か。それじゃ、ちよつとした火薬庫だな」

火薬庫か、言い得て妙なものだ。フランスなのにヨーロッパの火薬庫とはこれいかに。確か、あそこは旧ユー……。

「???？」

「一夏、またしよーもないこと考えてたでしょ」

「失敬な。場を和ませるウイットに富んだジョークだ」

「あたしから言わせればオヤジギャグに違いないの！」

ん、待てよ。？つてことは当然？もある筈だ。順番的に言えば。

「じゃあ……」

そのことを聞こうとしたその時、

「あ、あれ……」

「ウソっ、ドイツの第三世代型だ」

「まだ本国でのトライアル段階だって聞いたんだけど……」

アリーナに小さなざわめきが生まれた。ドイツのアイツが現れたのだ。ソイツとコイツはどこへ行ったか知らないけど。

「「一夏(さん)!!」」

うおっ!?! 篇はともかくセシリアまで!?! そんなに顔に出や
がりますか俺のジョーク!?!

「……………おい」

オープン・チャネル
開放回線から声が飛んでくる。

忘れもしない。あの時、俺の頬を引っぱたきやがったラウラ・ポ
ーデヴィツヒの声だ。

「なんだよ」

「私と戦え」

「嫌だ。なんで俺がお前と戦わないといけないんだよ」

「決まっている。教官の唯一の弱みである貴様を叩き潰せば、教官はより完全に近づくからだ」

ラウラの口から吐いて出る言葉はもはや崇拜の域だろうか。千冬姉や沙種さんの信者は学園に五万といるが、ここまで行き過ぎてるのは正直初めて見る。

「第二大会のあの日も貴様がいなければ、教官の二連覇は確実だった筈だ」

あの決勝戦は、日本代表の千冬姉とフランス代表の沙種さんが戦う筈だった。日本での代表候補争いの頃からの戦績からすれば千冬姉に歩があると誰もが思っていた。

しかしその決勝戦の当日、俺は謎の組織に連れ去られた。そのせいで千冬姉は俺を助けるために決勝戦を放り出して俺を助けに来たんだ。

その時の千冬姉のことを忘れられないし、俺の力のなさも忘れない。

「だから、その障害である織斑一夏を私は認めない」

そして、おそらくこいつがその後、千冬姉がドイツで教えていた時の教え子なの一人だろう。

「単純で何よりだ。俺が気に入らねえからわざわざドイツから俺をぶちのめしに来たってのかよ。ご苦労なこつたな」

「少しはやる気が出たか」

確かにそれはラウラが俺と戦いたがる理由だ。俺もそのことは理解できる。戦ってその確執が晴れるのであればさっさとすべきなのだろう。

「それでも、今ここでお前とやり合う義理はねえよ。今月末のトーナメントで嫌でもぶっ飛ばしてやるから大人しくしてろ」

でも今戦いたい気分ではない。それにいずれ戦わなければならぬのだから、少しくらい先延ばしにしてもいいだろうと思う。

今の實力では到底、アイツには届かない。千冬姉が直々にアイツを鍛え上げていたとしたら強くない筈ない。そしてそれ以上の實力を秘めていることを直感的にそれを感じ取った。

「そうか。では戦わざるを得ないようにしてやる……!!」

ラウラはいきなり戦闘態勢を取り、左肩のレールカノンが発射する。

「一夏、下がって!」

そう言うよりも先、シャルルが俺の前に躍り出て即座に展開されたシールドが放たれたそれを防いだ。

「こんな密集空間でいきなり戦闘を始めようとするなんてドイツの人は随分と沸点が低いんだね。ビールだけじゃなく頭もホットなのかな?」

シャルルは盾で防いだのと同時にアサルトライフルを構える。仕

種の武器の収納と展開クローズ オープンの早さもかなりのものだがシャルルはそれ以上に切替が早い、それも下手な国家代表よりも。

二倍の拡張領域にこの武器の展開の早さ、特筆すべきはその器用さなのかもしれない。

「フランスの第二世代型アンティークごときで私の前に立ちふさがるとはな

「未だに量産化の目処の立たない第三世代型ルキーよりもは動けるだろうけどね」

互いが互いを牽制し合いながら涼しい顔で睨み合う。

「誰が一对一でやるって言いました？」

仕種もシャルル同様に臨戦態勢を取る。シャルルに加勢するつもりらしく右腕にはいつものハンドガンが握られている。

「私は雑魚が何人でも相手にしてやっても構わないぞ？ 有象無象が群れたところで私の黒い雨シュヴァルツェア・レーゲンに届きはしないがな」

「そうですか。じゃあ、少し早いですけどこれの試し撃ちしてもいいですよね？」

そうやって新たに展開した左腕に握られていたのは見たこともないガトリングガンだった。黒光りするそれを見たラウラの表情がわずかに陰る。

「貴様、その武器は……」

『その生徒、何をやっている！ 学年とクラス、出席番号を言え！』

ラウラの呟きをかき消すかのように教員からの怒鳴り声が飛ぶ。今の騒動を聞きつけたアリーナの担当教師だろう。

「……ふん、興が削がれた。今日のところはこれで引き下がってやる」

そう言っただけでアリーナを後にして行った。アリーナの出入り口では教師が待っているだろうが、あの言動ではちっとも堪えはしないだろう。

それに今日のところは、ってことはまたいずれ戦いに来るってことだよな。

それがトーナメントに入る前かどうかは分からないが俺が千冬姉の弟である以上いずれば起こるアイツとの衝突は免れることは出来ない。まったく、厄介なのに目をつけられたもんだ。

「一夏、大丈夫？ 怪我はない？」

シャルルはというと元の人懐っこい表情に戻っていた。

「ああ、助かったよシャルル。あと仕種のそれ、新しい武装か？ 初めて見たんだが」

「ええ、初めて見せましたから。といつてもトーナメント当日までは見せる予定もありませんけどね」

そう言つと右腕のガトリングガンをすぐに収納クローズしてしまつ。きつと深桜の新しい武器候補なのだろう。

「てことはまだ他に隠し玉があつたり？」

その問いに仕種はこくと頷く。

「今は同じ装備ですがトーナメント前にもう一度、深桜に行つて調整してもらつ予定です」

これがワンオフ機体と量産機のチューンアップの違いなのか！？

.....
こんなに手近に調整できるなんて羨ましくない、羨ましくないぞ。

追加武装とか追加武装とか追加武装とか！ う、羨ましくないんだからね.....!？

「羨ましいんでしょうが」

「.....はい、羨ましいです」

寮への帰り道、二人の話声が聞こえた。というよりも片方が一方的に責めているような感じだった。

声の方向へ歩いて行くとそこにいたのは、沙種さんとラウラ・ポ―デヴィツヒだった。

とりあえず、木の陰に隠れてなりゆきを見ることにする。

「その荣誉は教官で受けるものであった筈だ。貴女が受け取っていないものではない」

それは違う。沙種さんも千冬姉に匹敵するだけの實力を持った選手だった。千冬姉と対等に渡り合えるのも世界に数人でその中で一番千冬姉に實力も立場も近かったのが沙種さんだった。

「そう、かもね。ジャンヌダルクなんて自分でも過ぎた名前だっと思っよ」

けど、沙種さんから出た言葉はラウラの言葉を肯定するものだった。そこには頂点に立ったというはなく、代わりに申し訳なさや悔恨の表情が浮かんでいた。

「だから、私ははじめをつけた。正確にはつけようとした、だけどね」

そう言って寂しそうな表情をラウラに向ける。沙種さんの「けじめ」というのはIS選手としての引退のことなのだろう。なのに、俺にはそれが引退以上に深刻な決断だったような気がしてならなかった。

「ならば、どうかして教官をドイツに帰るよう説得を……」

「そこまでしておけよ小娘」

「き、教官……」

「目上に対する態度がなっていないな。一度、痛い目を見んと分かんか？」

「わ、私はただ事実を述べていたまでです」

「ほう」

千冬姉は目を細め、ラウラを見据える目が厳しくなる。

「教官はジャンヌダルクに第一回大会の時の選考会でも勝っておりません。それに第二回の決勝戦でも全戦全勝の教官ならたとえジャンヌダルクの相手であろうと万に一つ……」

「どのみち、私は負けを選んでいたさ」

千冬姉の一言にラウラだけでなく俺も衝撃を受けた。千冬姉は俺を助けるために決勝戦を放り出して来たとはかり思っていた。

そのせいで俺は千冬姉の大会二連覇の偉業を成し得なかったばかり思っていた。

しかし、千冬姉の口から告げられた答えはたとえ俺が攫われなかったとしても二連覇を諦めていたというものだった。つまり、それは戦う前から勝敗は決していたということだ。

「教官、それはどういう……」

ラウラは俺の気持ちを代弁するかのように千冬姉に問いかける。

「ボーデヴィツヒ。お前に大切なものはあるか？ 世界中を敵に回してもこれだけは守りたいという物だ」

「わ、私は……。私は教官さえいてくれればそれで……」

「甘えるなよ十五歳。私は貴様の親でもなんでもない。ただの教え子と教官に過ぎない。所詮は他人だ」

ぴしゃりと言いつ切る。こういふところの線引きが明確なのも千冬姉らしいといえはらしい。

「私が、守りたいのは。一夏と、私の友人姉妹だ」

「ッ……」

その一言が決定打だった。ラウラの表情は年相応、いやそれ以上に幼く歪んだ。千冬姉に選ばれなかったことのショックと、また俺が選ばれたという二重の屈辱。

居た堪れなくなったのかラウラは宿舎へ逃げ帰るように走り去ってしまった。それを見えなくなるまで見送った後、千冬姉は盛大に溜息を吐く。

「はあ。これだからガキの相手は疲れる」

ラウラに関して千冬姉も相当頭を悩ませているのだろう。だってなあ、あんな千冬姉に心酔して俺を排除しようとする過激派な奴は始めて見たぞ。ドイツではそういうのが流行ってるなのか？

「にしても千冬も弟がいる前で堂々とそんなくさいセリフを吐けるのかねえ」

「っ！？ い、一夏がいるのか！？」

千冬姉もラウラのことですぐ一杯で俺の気配を探す余裕もなかったのだろう。ていうかテンパリ過ぎて名前の方を呼んでるし……。

「早いとこ出て来た方がいいよー。今の内に面倒事は解消しておかないと明日にとばっちりを食らうことになるからねー」

仕方がない。出なければ明日がない。出なければずっとこのままな気がする。勇気を絞り出して……！

「お、俺はしようとしてした訳じゃないし……。たまたま聞こえて来たからそれで……」

「ほー、立ち聞きとはいい趣味をしてるねー。異常性癖は感心しないよー？」

「どうしてそうなるんですか沙種さん!!」

出鼻をくじくかのように沙種さんにかかわれる。東さんと違った掴みどころのなさ。それをくすくすと笑いながら人（主に俺を）をからかって楽しんでいる様を見るとああ、姉妹だなんてすごく思う。

「千冬姉、さっきのどっちにしる負けを選んでたって……」

「それは言う訳にはいかん。忘れる」

そっけなく返す。そこにあるのは拒絶に近い何か たとえ家族であるうと何人たりとも踏み込ませないようなプライバシー。

「でもそれってフランスのやあ……」

「忘れると言った。三度目は言わんぞ織斑」

「……っ」

俺が言いきるよりも早く語気を強めて俺の言葉を封殺する。そんな風に言われては俺はそれ以上を言えずに口を噤むしか出来なくなる。

「……分かったよ、千冬姉」

「学校では織斑先生だ」

「う、はい。織斑先生……」

うむ、と腕を組みながら縦に頷く。沙種さんがこういうことに緩い分、千冬姉は締めるところはとことん厳しい。

「けど、家族間での秘密主義も大概にしてくれよな。心配してるこっちの身にもなってくれよ」

ドイツのことにしろ、今回のことにしろいつだって千冬姉は俺には何も話してくれない。あるのは学園で先生方から聞きたった少しの情報くらいだ。もう少し話し合いをした方がいいと思うんだ、絶対。

「勝手にお前がしてるんだろうが。私の預かり知るところではない」

「ですよー。千冬姉はいつもこんな調子ではぐらかす。こうなったら以上もつ何を聞いても今日は教えてくれないだろう。」

「そら、早く戻れ劣等生。このままでは、お前は月末のトーナメントで初戦敗退だぞ」

「分かってるって」

「ふむ。なら、いい」

そう言っつて、俺は千冬姉と沙種さんと分かれて寮の方へ戻った。

「……家族だからこそ、言いつ訳にはいかんのだろつが馬鹿者」

その一言は俺の耳に届かなかった。

第17話 「縛られる過去」 (後書き)

モンド・グロツソでの出来事が少しずつ見えてきました。

沙種の過去がこの物語の根幹を成しているといっても過言ではありません！

全ての始まりの話ですからね、ここ。

つか、それ言ったら二巻終わったらどうするんだ……。

第18話 「カレの思惑/彼女の思惑」(前書き)

で、できたあああああ……。すげえ難産だったああ……。
という頭のアイデアをガリガリと削りながら捻りだした18話。
色々と残念な場面もありますが、そんなものはご愛嬌。お楽しみく
ださい。

あと少し遅れましたが、100,000PVを達成しました！
活動報告に書ければよかったのですがどうも時間が合わなくて……。

第18話 「カレの思惑/彼女の思惑」

Side:篠ノ之篤

あの転校生が騒動を起こしそうになった後、もうすぐアリーナも閉館するとあって私たちは一夏たちと分かれ、ロッカーに移動した。

途中、セシリアが一夏と一緒に行くとしたがそんなことをさすまいと首を引っ張って連れて来た。まったく、油断も隙もあったものではない。

現時点で目に見えて一夏に好意を寄せているライバルはセシリアだけだが、油断は出来ない。何しろ、男は一夏一人しかないこの学園ではその容姿も相まってかなりモテる。

小学生の時分ではまったくそうだった話はなかったが鈴に聞く限り、中学生でもかなりモテていたらしい。

それに一夏は誰にでも優しい天然ジゴロ体質なのだ。優しさは一夏の美德でもあるが、後の正直余計なものだと思つづく思つ。

それに独占欲が強い自分からすればもっとそれを自分に向けて欲

しいと思うが、毎度毎度ズレた解釈をしているので暴力で訴えてしまふ。

悪い癖だとは思ってはいるが、これはちゃんと理解しない一夏だつて悪い。悪いと思ったら悪い、そうに決まっている。

とにかくこれ以上恋敵が増えないように願っているのだがそれは希望的観測だろう。来年になれば後輩という撃墜されやすい対象がまた増えてしまふ。その前にどうにかして一夏と付き合わなければますます困難を極めるだろう。

だからあんなに恥ずかしい思いをしてまで告白したというのに…。

「一夏に告白する？」

「そ、そうだ。このままでは埒があかんな。それに部屋も別々になってしまったし……」

本当ならば部屋が変わったあの日に言おうと思っていたのだが、ズルズルとずれ込んでしまい結局言えず仕舞いで六月まで来てしまった。

あれから言おう言おうという思いはあるのだが、どうしても最後の踏ん切りがつかずその一押しが欲しくて仕種を頼って部屋に訪れたのだが。

「で、どういう風に言うつもりなんですか？」

「わ、私が今度のクラス別の個人トーナメントで優勝したら付き合いってもらおう……ってどうして仕種に言わなければならない!？」

仕種の誘導尋問くひくひに乗せられて、これから一夏に言おうといていた口上を述べてしまう。

「やだなあ確認ですよ、確認。それでちゃんと一夏が正しい解釈をして受け取るかどうかの確認。で、実際のところどうなんです？」

「う……。正直、そう言われるとこれでも駄目な気がして来た……」

何しろ相手は彼のキング・オブ・唐変朴なのだ。これで通じていたらとつくの昔に一夏は誰かと付き合ってる筈だ。「付き合う」の意味を男女交際の付き合つと取らなさそうな気がして来た……。

それを聞くと仕種はふむ、と目を閉じて静かに思索する。すると何かを思いついたのかぼん、と手を打つ。

「でしたら、言おうとしてる言葉の前にこれを付け足しといてください」

そう言っただけで耳打ちされた言葉に、瞬間的に顔に熱が集まるのが分かった。

「な、なななななにやんてことを……!?!」

言葉にならないとはこのことだ。最後に噛んでるのは気にしている余裕すらなくらいにテンパリながら後ろにもものすごいスピードで後ずさる。その早さは壁につくの一秒も満たない。それくらいに仕種の言った言葉は衝撃的だったのだ。

「一夏に気付いて貰いたかったらそれくらいにド直球ストレーターに言わなきゃ
気付きもしませんって」

「し、しかしだな。そ、そんな、そんな言葉言える筈がないだろう……」

もじもじとしていると仕種にはあ、と溜息を吐かれる。

「筈、はつきり言っただけくらいしないと一夏の中で女友達の力テゴリから抜け出せないですよ?」

その一言にむっとなる。

「私は幼なじみだぞ!? ファーストだぞ!? セカンドとは違うのだぞ! セカンドとは!?!」

「ファーストもセカンドも幼なじみは幼なじみです。一夏にはそうとしか見てないんじゃないでしょうか？」

仕種のその言葉を否定しようにも否定できないのが恨めしい。

『箒？ 幼なじみだろ、ファースト幼なじみ。それ以外？ ……何かあったか？ 同じ同門だろ、同じ小学校だろ、えと他にまだ何かあったか？』

……言いそつだ。すごく言いそつでこれ以上、一夏のことを考えるのをひとまず止めにする。

「だいたい、箒にしたってセシリアにしたって自意識過剰なんですよ。一夏は箒のことを箒が思ってる以上に意識してないと思いますけど」

「そんなことは……！」

「そんなことあるんですよ。だったら同じ部屋にいる時に何かアクションの一つでもありますって」

そう言われると反論に困る。

「それにこの約束にしたって専用機持ちが私も含めて六人もいる一年の中で優勝出来るって考えてる時点で楽観的過ぎ。勝てるとしても剣の実力が上な一夏ぐらいだし、射撃型のセシリアやシャルルに對してどうするんですか」

「う、ぐぬぬ……！」

そう言われるとぐうの音も出ない。私は専用機を持っていないため使うISは打鉄になる。その攻撃法は近づいて斬るしかないのだが、まずそれをさせてもらうのかどうか怪しい。

セシリアにしたって鈴にしたって代表候補生に選ばれるだけの実力を有している。それはきつとフランスから来たシャルルとドイツのラウラも同じことなのだろう。まともに戦って勝てる見込みはかなり少ない。

「じゃあ、仕種は私のために負けてくれないか？」

「何言ってるんですか。嫌ですよ」

仕種に笑顔でそう言われて思わずがっくりと肩を落とす。

仕種が勝負事に手を抜かないことを分かっていたが、こうもいい笑顔で返されると逆に諦めもついでしまう。

「まあ、秘策があるってのなら無鉄砲だっていったのも考え直しませうけど」

秘策。そう言われて先月の夜に交わした約束を思い出す。

「秘策なら、ある」

姉さんは私のために機体を作ると言っていた。それは卑しい話だがきつと私のために心血を注いだ最高傑作であるに違いない。

そして、それは個人別トーナメントまでに間に合わせるとも言っていた。つまり私も仕種たち専用機持ちと肩を並べられるのだ。

「へえ、何か策があるんなら別に構いませんけど。まあそれは別としてえっちなことの一つや二つでもすれば一夏だって嫌でも気付くんでしょうけどねえ」

「え、えっちなこと」

そう言われると実際に一夏としていること　つまりは具体的なナニをしているところを想像して。

「……ぶっ！！　は、破廉恥だぞ仕様！！」

「何を今更。ただでさえそういうことに興味のある年頃なんですから仕方ないことだと思えますよ。おまけにこうやって女に囲まれて抑圧された生活を送ってるんですからかなり溜まってるんじゃないですか？」

「た、溜まって……」

仕種から口に出たワードを反芻するだけで頭が上気に当てられたかのようにぐわんぐわんする。

だ、駄目だ。これ以上具体的なナニを想像するのは刺激的過ぎる。ひたすら剣に打ち込んで来たためか私は如何せんこの手の話題には疎い。それとも仕種くらいの考えをしているのが普通なのか？

「それに付き合っただけじゃいざいざそういうことだあってあるんですよ？」

そう言われて近未来、そういうことになったことを想定して想像するが……。

……。

……。

……。

ほんっー！…ぶしゅーっ……。

「あ、あつっ……」

すぐに頭が情報処理しきれずにオーバーロードを起こしてしまう。

「……いや、別に尊にそこまで望んでませんけど」

で、あの告白だ。

『結婚を前提に、私と付き合ってください』

ぶっちゃけ、これってプロポーズじゃないか？と気付いたのは自分の部屋に帰ってからだった。その後は恥ずかしさと後悔による悶絶の繰り返しだった。同居人がドン引きだったのは言うまでもない。

「……さん！ 篤さん！ いい加減、放して下さい！」

「……え。あ、ああ、すまない」

思考に埋没していたからかセシリアの声が全く聞こえていなかった。ぱつと放すと、後ろで「ああ、ISスーツの首が……」とか言っているが全くの無視だ。

「それにしても一夏め、私の説明の何が分からないというのだ」

思い出しただけで腹が立って来た。私が懇切丁寧に教えてやっているというのにまったく理解していないのだ。おまけに男子に教えられる始末。

……確かにデュノアは優秀だが、それよりも私の方が長く一夏のコーチをしていたのだ。一夏のことなら私のほうがもっとちゃんと把握している！

「まったくですわ。せっかくわたくしが理路整然とお教えして差し上げていますのに」

セシリアも思うところがあるのか、がうんうんと頷いて同調してくる。

「そりゃ無理よ」

私とセシリアが共感しているところに鈴が横やりを入れる。

「私の説明のどこがいけないというのだ！ 私の説明を理解しない一夏が悪い！」

「そうですね！ いくら入学して来たときに知識がなかったとはいえもう六月。わたくしの言うことくらい完璧に理解してもらいませんと！」

「無理ですよ」

仕種も横やりを入れ始める。どうでもいいがこの二人、随分と仲が良くないか？

「じゃあ、一体」

「何がいけないというのかしら……？」

ずいとならぬとセシリアと共ににじり寄る。すると二人は涼しい顔で、

「だってそりゃあ、一夏だしねえ」「

声を揃えてそう言った。その一言に凄く納得させられてしまうのがなんとも腹立たしい。この行き場のない怒りはどこにぶつけようか。それ以外にこの二人から生ぬるい眼差しを感じるのは気のせいだろうか……。

「それにしてもあのドイツの転校生、どうしてあんなにも一夏を目の敵にするのよ？」

「それは私も聞きたいくらいだ。私に聞くな」

正直、私だって心中穏やかではない。それは仕種を除いたここに
いる私たちの総意であるに違いない。

一夏がいなければ。アイツはそう口にした。

織斑一夏という存在の否定。

それは一夏がいなければ全てが上手くいっていたような口振りだ
った。一夏さえいなければ千冬さんはより高みにいけると。二連覇
が果たせただろうと。

そんな妄信のような確信をあの女は抱いていた。一夏とアイツの
間に何があったか知らないが、アイツのその言葉は一夏に救われた
私まで否定されているようで苛立たしい。

何よりも、アイツの目はまるで

「……筭さん？」

セシリアが心配そうに覗き込む。

「いや、済まない。少し考え事をしていただけだ」

少し気にし過ぎてるようだ。アイツはアイツ、私は私だ。アイツ
と私は違う。

「仕種は知らないか？ あの転校生があそこまで一夏を狙う理由を」

「さあ、ね。ただこんなこと、当事者でもない私たちが心配しても仕方ないんですけどね。さっさとあの二人にはこの問題を片づけてもらわないと」

確かにこのことは一夏と千冬さん、ラウラの問題であって私たちが介入すれば即解決というそんな生優しい問題ではない。これはきつと私たちが思っている以上に確執が深いだろう。

そしてこれを解決できるのは当事者である一夏でしかない。

「さ、暗い話題も終わり。さっさと着替えて、夕食にしましょう」

そう仕種の一言で皆は着替えに取りかかるのだが鈴はうーっと唸ったまま動かない。その鈴の恨めしそうな目線を辿って見ると先にあるのは。

「ないものねだりですよ、鈴」

「う、うっさい！ 分かってるわよ……」

胸である。人がここにいる胸を都市の発展具合で表すならセシリアが政令指定都市、仕種が県庁所在地らしい。

そして私がメガロポリスで、鈴が過疎……とのこと。誰が例えたかは知らないが失礼なもの言いである。

「だいたい、あんたら育ち過ぎなのよ！ 何食べてたらそんなに育つ訳！？」

鈴の怒りようはまるで親の仇を見るかのよう。こればかりは遣伝子だからしょうがないなんて言った日にはどんな目に合わせられようか。女の嫉妬ほど恐ろしいものはない。

「こんなものあっていいものか。あれば肩が凝るだけだし、合っ服はないし、周りには奇異の目で見られるだけだが」

「り、鈴さん。落ち着いて。世の中には慎ましい方が好みという方もおられますし、そう悲観することでもありませんわよ……？」

私が大きいこと的不满を言い、セシリアがフォローするに入るも、

「持つてるあんたらが言っても説得力がないのよ！ それに箒、アソタに限っては嫌味か！？ あたしへの当てつけか！？ 新手のイジメか！？ それとも心理作戦か！？」

半泣きになりながら訴えられた。これ以上は焼^{いっだけむだ}け石に水だ。放つておこつ。

「じゃ、じゃあ仕種さんはどうなのかしら……？」

こつちに振るな空気読めよセシリア、なんていたいたいけな視線がセシリアを穿つ。その視線は主は勿論、仕種である。

「あんたら二人のも納得いかないけど！ 仕種のも納得いかないのよおおっ！！」

鈴はズビシィッ！と音を立てるような感じで仕種を指差す。ああいえばこつ言つ、どないせいっちゅうねん。

仕種は私たちに比べれば平均的で何ら問題がないように見えるがそこには私には理解出来ないような深い事情があるのだろう。

ただ、揺るぎない事実なのは少なくとも仕種は鈴よりかはある。

あるものないもの
大は小を羨ましがり、その逆もまた然り。仕種の言ったとおり、ないものねだりである。

「そんなデカパイは男でも女でも死ぬほど揉まれて消え失せるおとおおとおおおおっ！！！」

「鈴さん、落ち着いて！ 貧乳はステータスだというこの国の格言が……ひゃああああああああああああああああっ！？」

まあ、極論ぶっちゃけて言ってしまうえばないやつのはがみであった。

あとセシリア、それは言う人間を絶対に間違ってる。

その後、部屋に帰ってすぐ軽くシャワーで汗を流して夕食のピークを避けるために明日の予習をしていると控えめなノックが聞こえて来た。

ゆっくりと立ち上がりドアを開けると部屋を訪ねて来たのは、

「シャルル？ 何の用ですか？」

オレンジのラインの入った部屋着を来たシャルルだった。その華奢な肢体は制服を着ている時よりも更に儂げな印象を受ける。

「うん、ちょっと仕種の部屋を見ておきたくて」

別に変ったものなんて置いてないですけど、まあいいか追い出すほどのこともないし。

ちなみにこれは関係のない話だが、セシリアの部屋はシャンデリアに天蓋付きのベッドが置いてある完全にお嬢様な部屋だった。なんでもああでなければ寝付けならしい、子供か。

まあ、枕が変わると寝られない人もいるという訳ですし、セシリアの場合その酷い奴なのだろう。同居人の肩身の狭さには同情せざるを得ない。

「仕種が一人部屋ってホントなんだね」

部屋に入ってそう第一声を上げる。まあ寮生の多くは二人部屋だし私が一人部屋でいるのが少し珍しいのだろう。かくいうシャルルも一夏と相部屋だし。

その当のシャルルはというと何か気になるところがあるのかはキョロキョロと部屋を見回している。

「……何か可笑しなものでも」

「べ、別に何でもないよ？ あ、僕が紅茶入れるよ」

「お気遣いなく。部屋の主がお茶の準備くらいしなないと悪いですよ」

「そんないって。いきなり僕が押し掛けて来たんだし」

頑として譲ろうとしないシャルル。シャルルってこんなに積極的だったか？ まあ時々強引なところもあるようだしこつ言った以上、折れることはないだろう。

それに入れてくれるっていうのなら人の好意を無碍にするのも悪いですしここは素直に受けておきますか。

「分かりました。勝手はどの部屋も一緒ですから。とはいえパツクしかないんですけどね。あ、そのこの棚の中に入ってますから」

そう紅茶の場所を説明するとポットでお湯を沸かし、慣れた手つきで二人分の紅茶を用意する。

「はい」

そうシャルルに手渡され紅茶を口に運ぶ。シャルルが淹れた紅茶は心なしか自分で淹れた時のものより上手に出来ているような感じがした。

「紅茶ってフランスのイメージがあんまりないんですけどね」

どちらかといえばセシリアの国イギリスがそれに相当する。実際、食事のときでもコーヒーやお茶よりも紅茶を好んで飲んでるし。

「そうかな。フランスでも飲む人は飲むけど、やっぱりコーヒーが多いかな」

「ふうん。で、シャルルはコーヒー党ですか？」

「僕はどっちでもないよ。コーヒーも飲むし、紅茶も飲むけど。苦いのはあんまり得意じゃないかな」

そうしてシャルルが部屋に来て話をして十分くらい経った時、急に視界がぐらりと揺れる。

「あ、あれ……？ おかしいですね……。いつもこんな時間に眠くなることはないんです、けど……」

人がいるのに欠伸が出てきそうになるのを必死に噛みしめる。

「きつと疲れてるんだよ。明日休みだからゆっくり休むといいよ。僕が戸締りしとくから」

「そんな、悪いですよ。戸締りくらい自分でします、から……」

そう言って立ち上がるうとするが上手く立てずにテーブルに手を付く。足取りも覚束ないぐらいに眠いとは相当重症のようだ。

「いいからいいから。そんなんじゃ危ないよ」

「それじゃ、ご厚意に甘えて。お願いしますね、鍵はテーブルの上に置いてますから」

シャルルに任せるとベッドに身体を横たえると一分も経たずに睡魔が全身を駆け巡る。

起き上がるうにも力が入らず、ただただ我が身をベッドに預けるような情けない構図になっているだろう。

駄目だな……。こんな誰かのいるところで無防備になるなんて。

いけないことだとは分かっているけど正直、考え事するのももう限界、かも……。

最後にそれだけを頭で理解すると瞼が完全に落ちて、世界は真っ暗闇に覆われる。

その意識が完全に落ち切る手前、ごめんねという謝罪の言葉が聞こえた気がした。

第18話 「カレの思惑/彼女の思惑」(後書き)

というCM前の引っ張り。

次回はついにシャルルと仕種が接触します。

一夏のラッキースケベ? そんなものは(ご都合主義という名の紙回避さ!

とにかく、筈と仕種の会話がどんどん増えるのを抑えるのがしんどかった。

色々泣く泣く削ったけど、これはこれでいいか。

第19話 「女装男子／男装女子」(前書き)

みなさん、お待ちかねのシャルロット暗躍回です。
話が進まねえ……。

第19話 「女装男子／男装女子」

「うん……」

目が覚める。

思い出せはしないが、随分と懐かしい夢を見た気がする。

まあ、そのことはいいか。変な時間に寝てしまったため、寝直すには妙に冴えてしまっている。とりあえずは寝汗を流すために一度、シャワーを浴びるとしますか。

そう思い立つと覚醒しきっていない身体に鞭打ちながら起き上がろうとするが、身動きが取れない。

「……え？」

一瞬、理解出来なかった。気を取り直してぐっと力を入れてみるが、うんともすんともいかない。

「っ！！」

事態を把握したのか冷水をぶっかけられたように急激に頭が冷め

る。むしろ冷め過ぎて嫌な感じさえする。

両手は縛られ、その縄はベッドにも繋がれていてベッドの上から離れられないようにされている。

ならばとISを展開しようとするが、私のISはごく丁寧に机の上に置かせてもらってるため展開すら出来ない。まさしく八方塞がり、相手の思う壺という訳ですか。

時計を見ると針は一時を少し過ぎたばかりだった。寝ていた時間も四時間くらいと思った以上に時間は経ってはいないらしい。

「やっ……」

動けない以上、相手の動きを窺うしか出来ない。受け身というのは剣道のスタイル上、慣れてはいるがこうもいいようにされるがまあというのも少し悔しくもある。

しばらくすると開く筈のないドアが控えめな音を立てて開く。続いて鍵をかける音が部屋に響く。

「これは一体何の真似ですかシャルル・デュノア、いえシャルロット・デュノア」

「あはは。どうして……ってやっぱり気付くよね」

息を呑むような声が聞こえたがそれも一瞬で部屋の陰からシャルル、いやシャルロットは笑みを浮かべながら姿を見せる。その笑みはどうしようもなく疲れているような雰囲気を感じさせていた。

それにいつもしているコルセットが何かを外しているのだから普段の時とは違い、身体のライン　特に胸ががよく表れている。

私の部屋は相部屋ではなくパートナーはいない。私以外にこの部屋を自由に開け閉めできる人間なんて寮長である千冬先生くらいだ。

しかしもう一人、私のことを自由に出来る人間がいた。それが私の部屋の戸締りを頼んだシャルロットなのだ。

どうやらあの時に睡眠薬を一服盛られたらしい。だからあの時頑なに私の提案を断っていたのだ。

「それにしてもどうして僕の名前を……？」

「二年前のあの時ですよ。それだけ言えば分かるでしょう？」

「ああ、やっぱり。あの時のミステールはやっぱり仕様だったんだね」

得心がいったかのようにシャルロットはくすり、と笑う。

シャルロットとは過去に一度手合わせをしている。その試合はデュノア社が申し込んで来たのだがお互いに専用機の試験データが欲しいということ合意した上での試合だった。

お互いの名前^{データ}は都合により非公開だったが私はその時相手の名前をツテで教えてもらったためシャルル・デュノア＝シャルロット・デュノアの式はすぐに成り立った。

その後、二人は会うことはなかったがそれもこの学園でISを展

開した時点で私がああ時の操縦者であることがバレてしまった。当然だろう、ミステールとはオルテンシアの原型でありその姿形はあまりにも似過ぎていてる。

それにあの時はバイザーをして顔を隠していたとはいえ、私を取り巻く環境から推測すれば正体が割れてしまうのも時間の問題だっただろう。

「その、ごめんね。こんな強引な手段で」

「だったら、せめてこれを解いて欲しいんですが……」

両腕を後ろ手に固く縛られているのを見せる。

「それは無理。僕の言い分を聞いてくれたら解いてもいいかな」

「随分と買われたものですね。私はIS学園の一生徒に過ぎませんが」

「それでもバックについてる人物は十分に凄いと思うけどな」

その言葉には同意しかしようがない。なにせ、ブリュンヒルデ織斑千冬にジャンヌダ露崎沙種ルダ、おまけにISの産みの親、篠ノ之束まで知り合いと来ている。

更に言えばヨーロッパの稀代の天才、シンリ・シュヴァリエや世界の深桜まで私のバックに付いているのだ。

これでただの生徒というのはおこがましいにも程があるだろう。こんな事件に巻き込まれるとつくづく思い知らされる。

ただ、それは同時に交渉材料わうじょうにされる危険性も孕むんでいる。

あの時もそうだ。私が露崎沙種の姉妹故に、あの日々は始まったのだ。それは織斑一夏が織斑千冬の弟であるのと同じように、篠ノ之箒が篠ノ之束の妹であるのと同じように。

そして今回もそうであるが故にこうした事態になっている。

「それで、何の用ですか？ 代表候補生を使ってまで私に要求を呑ませたいということはフランスは余程、行き詰まってると思えますが」

一瞬、言葉に詰まったがシャルロットは口を開く。

「簡単なことだよ。シンリ・シュヴァリエ博士に会わせて。僕はあの人をフランスに連れ帰るように言われてるんだ」

確かにシンリさんの持つ高い技術は第三世代兵器の開発には必要なものだ。事実、シンリさんは私と出会う前まで第三世代兵器の開発に携わっていたのだ。

『イメージ・インターフェイスを利用した特殊兵器の実装』

これは第三世代の謳い文句である。

イギリスのブルー・ティアーズ、中国の甲龍、ドイツのシュヴァルツエア・レーゲン。いずれにおいても操縦者のイメージ、感覚的な物を重点に置いて兵器を組み込んだISである。

しかしそのどれもが誰にでも乗りこなせるものではない。ブルー・

ティアーズに至ってはBTを運用するに当たつての特別な資質スキルが必要だ。

だから各国は互いに牽制し合いながら、稼働実績をあげるため第三世代兵器を開発しているヨーロッパ諸国の代表候補生が次々とIS学園ISに送られて来たのだ。

「……………」

確かにフランス政府が彼女を欲しがる理由も納得できる。彼女の技術力ならフランスの硬直している第三世代兵器の開発現状を打破する力になるかもしれない。

しかし、理解出来ないのは何故今更になつて彼女をフランスに呼び戻そうと考えたのだらう。彼女があそこを辞める時に引き留めようと思えば可能だった筈だ。

フランスの勅命として第三世代開発を命令すれば一介の技術者に過ぎないシンリさんを繋ぎ止めておくには非常に容易い。

しかしその疑問はすぐに氷解した 出来なかつたのだ。

あの事件の余波で新型の開発にまで手が回す余裕が当時のフランス政府にはなく、各国への弁明と国内の鎮静化に手一杯だったのだ。

結果、事後処理に追われてごたついていいるフランスを離れ、シンリさんは深桜重工のスカウトを受けた。

それにシンリさんが第三世代開発に加わったところで望み薄だらう。あの人ほどの頭脳を持つ人が第三世代開発に携わっていたのに

も関わらず進展していなかったのがいい証拠だ。

その上、遅れに遅れてようやく第二世代兵器　　ラファール・
リヴァイヴの開発だ。矢継ぎ早に第三世代兵器の話なんてコンセプトも方向性も何も定まっていけないのに無理な話だ。

「一応、聞いておきますがノーと言った場合、どうなるんですか？」
そう聞くとシャルロットが目を伏せる。

シンリさんも企業の人間だ。深桜の開発主任を任されている彼女がその立場を投げ出してフランスへ帰るといつて帰れるような立場ではない。それに開発環境が深桜の方がいいため、フランスに帰ったところでなんのメリットもない。

しばらく俯いていたシャルロットだが、意を決したかのように上着のチャックに手をかける。

「……え」

こちらが驚く様子にもろともせずジッパーを下ろしていく。

ジャージの下にあったのはブラジャーに隠された二つの膨らみだった。

それらは主張しすぎることもなく、かといって控えめという訳でもなく。シャルロットの性格を表したかのようなほどよい大きさ。

何をしているのか分からない訳はない。止めないといけない筈なのにそれを止めることが出来ない、いやその光景に見惚れていたの

だろうか。

そんな間にもシャルロットは僅かに躊躇ったがズボンにも手をかける。

「ちよつと、シャルロット……！」

こちらの停止の音が逆にスイッチになったのか、私の声を振り切ってズボンも脱いで床に落とす。

全てを取り払ったシャルロットの姿は見間違えようもなく女だった。そのシルエツトは華奢ながら、均整のとれたラインで金髪によく映える陶磁器のような白い肌は綺麗、としか形容出来ない。

そのシャルロットの顔は羞恥によるものか頬が若干赤い。

「その時はその時、絶対にイエスって言わせて見せるよ。……僕の身体を使っても」

ハニートラップとはよくいったものだ。まさかこんなにも身近で遭遇することになるんなんで。

「切羽詰まってますね」

「それくらいに彼女の技術力が必要なんだ。フランスのためにも」

ひたひたとシャルロットが近づいてくる。

「それに僕は知ってるんだよ？ 仕種の身体のこと」

今度は自分が息を呑んだ。

「どうして、そのこと……」

「さあね。でもこのことをバラされたら仕種は困るよね。だって、一人部屋にしてまでバレたくないんだから」

その通りだ。ただでさえ面倒事がかかえている身としてはこれ以上バレル人間が増えるのは御免被りたい。

「それでも駄目なら僕が……してあげてもいいよ」

「……っ!？」

拙い、それは非常に拙い。今のシャルロットならそれすらやりかねない。それくらいに彼女は追い詰められているのだ。

「だから、お願い。シュヴァリエ博士に口添えして帰るようにならして」

シャルロットの手が伸びて……、

「はあ、仕方ないですね。分かりましたよ……」

私のスカートに触れる前に止まる。これ以上はお互いのためにならないためこちらが折れることにした。

「ホントに……?」

「ええ。私のことをバラされて面倒事を増やされるのは御免願いた

「いのですし、」

「じゃあ……！」

シャルロットの顔にようやく光明の光が灯った……、

「それに、こんなことをしなくても私はシンリさんに貴方を会わせるくらいなら出来ますしね」

「……………ふえ？」

ような気はしなかった。あまりにも間の抜けた声がシャルルの口から零れ落ちる。

それは今の今までの行動が何もかもが台無しになりそうな、シリアス全開な空気が一瞬で吹っ飛んでしまいそうなそれはそれはあま

りに間抜けな声だった。

「ええ。フランスの代表候補生と企業の技術者を会わせるだけなら何の問題もないでしょうしね。まあ、彼女がフランスに帰るかどうかは別問題ですが」

「そうだ、よくよく考えればシャルロットとシンリさんが接触するだけでは何ら問題もない。」

シャルロットがデュノア社の令嬢というのがネックになるかもしれないがシンリさんにとったらそれくらいは瑣末な問題であろう。それにフランスのカスタム機が見れるとか嬉々としそうな気がします。

「そ、それじゃあ僕のやってきたことって……」

「あんまり意味ないですね」

「そんなはつきり言わないでよ！！ 僕のこれまでのドキドキとか返してよ！！ 僕、物凄く罪悪感感じてたんだからね！？」

「自分で勝手にしてたんでしょ。私の知ったことじゃないです」

シャルロットの抗議の声を涼しく受け流す。だってそうでしょう、人並みには感情の機微は読み取れるつもりですがそれはそれ。今回は事情がある程度理解出来ますが、加害者の内情まで深く察しろつてのも無理な話です。

「酷いよ仕種！ ちゃんと責任取ってよ！？」

……段々となんかヘンな方向に向かっているような。これって他の人が聞けば絶対に誤解を招くような言い方じゃないでしょうか。

「こうなったら……」

「ちょ、待ちなさい、シャルロット。そのままじゃ倒れ……!?!」

「きゃあああつ!?!」

そう言い切る前にシャルロットがバランスを崩してベッドに倒れ込む。

「いたたたた……大丈夫ですか？ シャルロット、ト!?!」

次の瞬間に私から言葉は失われた。

二人距離はほぼゼロ、つまりはシャルロットが私に覆い被さるような形で折り重なった状態という訳で。しかも先程シャルロットは腹を脱いでしまったため向こうは下着姿。服の生地越しでも相手の肌の感触が嫌でも分かってしまうのだ。

お、落ち着け、私。これは事故だ、故意じゃない。アクセシデントだ。そうだ、そうに違いない、そうに決まっている、そうでない訳がない。

これがもし狙って起こしたことだとしたらシャルロット、恐ろしい娘……!と戦慄を覚えることになるだろう。

「あ、あの、えーと……?」

あやすような私の問いかけにシャルロットは小さくそう頷く。本当だったら頭の一つでも撫でてやりたいが、こつやって縛られてるためそれが出来ないのが少々歯痒い。

一昔前、フランスでとある事件が発覚した。

それは発覚すると同時、すぐに情報の規制がかけられて被害者は誰であったのかは伏せられたが、それでも抜け道はいくらかあってフランスの上層部の一部の人間には知れ渡った。

その被害者が誰でもない、この露崎仕種わたしであるということ。

この事件は一人の人間の思惑によって私は巻き込まれた。

その始まりにあつたのはどんな感情だったのだろうかなんて知りたくないし、知りたくもない。

ただそのせいでフランスは頂点を知り、英雄を失い、信頼を無くした。私にとってこれらの事実だけで充分だ。

今回のこともそいつの思惑によってシャルロット・デュノアもその渦中に巻き込まれただけ。

「それに、対象は私だけじゃないんでしょう？」

「……仕種には敵わないなあ」

男装であれば私に近づきやすい。男子が女子に近づくのは別に普通のことだから。それは学生生活であれば尚更だ。

そして同じ特異なケースである織斑一夏にも接触しやすいのだ。それに男一人で今まで暮らして来た一夏は何のアピールをせずとも向こうからやってきてくれる。男同士の方が気楽なのだから。

「ただ、着替えまで強要しなくてもいいのに……」

日常生活では何の問題もないが唯一、そこに困ってるらしい。まあ、一緒に着替えでもすれば一発でシャルルが女であることがバレてしまうし仕方のない話だがそんなに一人で着替えたくないのか、無駄に女子思考ですね。

もしかして今の今まで女性に興味を持たなかったのはや・ら・ない・かの化身だったからかもしれない。そうなるとシャルロットの貞操が危ない……！

「シャルロット、一夏が無理矢理近づいてきたらパイルバンカーでもなんでも撃ち込んでやればいいんですよ。そうすれば多少は懲りるでしょうから」

「え、ええ！？ で、でも」

「シャルロット、貴女自身を守るためです。これは仕方がない犠牲なのですよ」

「う、うん。最後の手段として頭に置いておくね……」

私に気圧されて一応、考慮しておくらしい。一夏なら近いうちにやらかしそうな気がするんですけど……まあ、「愁傷様」。

「それでその、シャルロット。さっきから胸当たってるんですが」

抱きつかれれば必然的にお互いの胸が接触する訳で。

「~~~~っ!?!?」

その言葉に意識したのか声にならない悲鳴を上げてすごいスピードで胸を隠すように飛び退く。

「し、仕種のえっち!」

「言いがかりはよしてください。こんな恰好をする貴女も充分に変態だと思えますけどね。いや、自分から脱ぎ出したから淫乱か」

「い、いんら……!?!?」

聞き慣れない言葉にシャルロットは赤面する。流石に花の十五歳に淫乱はキツ過ぎたか。

「淫乱は淫乱ですよ。もしかしてシャルロットも少し期待してた?」

「い、言わないで……! あれはもう充分に反省してるから!」

「ならよろしいです。さっさと服を着て下さい」

シャルロットは言い負かされて色んな意味でしな垂れていた。

「うう、仕種が虐めるよお……」

「シャルロット程度で口で勝てると思わないで下さい。ていうか、そついう誤解される言い方は控えなさい!」

結論、やはりシャルロットは恐ろしい娘だった。

シャルロットは私の縄を解いて部屋を後にした。とりあえず上にシンリさんの接触出来ることを報告するらしい。律儀なことだ。

ベッドに身体を預け、ずっと見ていた天井を再び仰ぎ見る。

詳しい事情は教えてくれなかったが、なんとなく察しはつく。今回も、アイツが動いているのだろう。

「シャルロット、貴方も踊らされているんですね。アイツに」

フランスを裏から牛耳り姉さんを引退に追い込んだ張本人。

「ライア・シュヴァリエ」

某所にそびえ立つ高層マンションの最上階のとある一室で男は電話で報告を受けていた。報告の内容は接收到成功、シンリ・シユヴアリエと接触出来る機会を得たとのことだ。

「そうかい。では今後とも抜かりなく頼むよ」

電話を切ると男はと笑いを堪え切れなくなり、クククと声を漏らして忍び笑いする。

「随分と楽しそうね、ライア」

ワイングラスを傾けながら部屋のソファに座る女性は電話が終わるのを待っていたかのように声をかける。

豊かな金髪に女性も羨むようなプロポーション、そして耳に光る金色のイヤリング。誰もが振りかえるような美しさとは彼女のことをいうのだろうか。

「ああスコール。もうすぐ、もうすぐなんだ。もうすぐ、彼女と会えるんだ」

「そう、それは僥倖ね」

「ああ、そうさ。神の前で永遠の愛を誓い合った僕たちは何人たりとも引き離せない。全ては解けることのないメビウスの輪のように、僕と彼女とは元に鞘に戻る運命なのさ」

普段の道化な姿もさることながらテンションの吹っ切れた今のライアは普段にも増して饒舌さに磨きがかかっており、その様は狂気染みた雰囲気さえも思わせる。

スコールと呼ばれた女性はライアの話の横目にふふ、と微笑む。その笑顔には性別を問わず誰もがドキリとするだろう。

「それはそうと貴方は会えるだけでいいの？ 貴方の目的はもつと先のことだと思っただけ」

「ああ、それに関しては問題ないよ。彼女は僕の元へ戻らざるを得なくなる」

自信あり気に口元を歪めてライアは答える。かつて、とある英雄を追い込んだ時のやり口のように、そして現在を彼らを追い込んでいるやり口のように。相手の弱みに付け込んで狡猾に自身の傀儡に仕立て上げる。

前回は少しばかり事を大きくし過ぎたのとその隠れ蓑が使い物にならなくなってしまったので、取り替えるための準備期間として有名企業に潜伏していたが今回はそれが功を奏したようだ。

「さて、と。僕はもう行くよ」

「あら、もう行くの？ もう少しゆっくりしていけばいいのに」

「ミセスといえるのも悪くないけどね。僕は最後のもう一仕上げに行かないといけないのさ」

そう言つと紳士が淑女をエスコートするかのように、はたまたどこかの騎士が王女に誓つるようにスコールの手の甲にキスを落とす。

「じゃあ彼女にはよろしくね。貴女の一押しがきつと面白い事になると思つから」

ああ、と相槌を打つて部屋を出て行つたライアと入れ違いで女が入つて来る。

「なあスコール、なんでアイツはここにいるんだよ。紳士気取りの道化のくせによ」

「あら、普段の彼はとても紳士よオータム。ただ、そう……思い人への思いが強すぎるために道化に見えてしまうのも仕方ない話かしら」

そう言つて楽しそうにスコールは愛を説く。

「あんなの私からしたら未練タラタラのキモイ野郎だぜ。その上根回しで有無も言えなくさせる、陰湿極まりねえ」

「それが彼のやり方つてもものよ。言っておくけど表の人間なんてそんな連中ばかりよ？」

「それはスコールもだつてことか？」

ええ、とスコールは当然のように答える。

「私の場合はそこに楽しみが加わるけど。ねえ、貴女はどうなの？」
話を振られたベッドの上に寝転ぶ女はのんびりと身体を起こす。

「教えて。貴女を貴女たらしめ、突き動かすその根本に存在する衝動を」

それを聞き届けるとふふん、と鼻で笑って口を半月のように釣り上げる。その酷く歪んだ表情は先程部屋を後にしたあの道化師を思わせる。

そして彼女は己の行動理由を短く、こう言い放つ。

愛、だと。

第19話 「女装男子／男装女子」（後書き）

ついに来ましたシャルの男装バレ回！

でも一夏にバレるのはまた別にする予定です。その時にシャルルに語らせたいこともありますね。主にフランスの経緯とか、その他諸々。

次は100、000PV記念も兼ねての閑話にしようかなあと思っております。

ざっくり言ってしまうえば、混沌とした寮長室を二人で掃除する話。

千冬さんの駄目っぷりが遺憾なく発揮されるであろう回、乞うご期待！

……ていうか、うわああああああああつ！ 新キャラまた出たよ！
！ どんだけ出すんだよ！ 大安売りだよ！ 收拾つくのかよ！？

閑話1 「露崎沙種の受難」(前書き)

思いの他、ヘビィな展開になってしまった。

それに伴い文章量がぐんぐんと伸びる伸びる……。過去2番目くらい？

今回は残酷な描写を伴います。見る方はお気をつけて読んで下さい。

閑話1 「露崎沙種の受難」

唐突な質問だが、世間は織斑千冬をどう評価するだろうか。

『ブリュンヒルデ』、『世界最強』、『鬼教官』、『(厳しい方の)お姉様』

一般的なものから少々アブナイものまで人によって様々な評価はあるが、一貫して冷徹で自立した女性としての人間像を抱かせるようなワードが多い。

事実、弟の一夏以外に家族のいなかった千冬は早くから自立し、たった一人の家族を養うために学業の傍らに就労に励んでいた。

しかも学業も怠慢という訳ではあらず、常に生徒の模範とされるべき姿を取り続けて来た。その姿は誰が見ても自立であろう。

しかし彼女の親友である露崎沙種の評価はこのどれにも当て嵌まらない。むしろこのような賛辞ある言葉の逆だ。

彼女が織斑千冬を評価する時、こう表現する。

『真人間の皮を被った駄目人間』

中々に酷い言われようだが残念なことにこの表現はあながち間違

っていない。言い得て妙なものだが、実能的を射た表現なのだ。

これは日本代表候補生として寝食を共にした沙種と実弟、一夏のみが共感出来る千冬の世間では見せられないようなあられもなくだらしない部分である。

こんなことを知っているのは一番親しい者の特権とでもいうべきか、気を許しているからという信頼の表れなのか。兎にも角にも親近者にとってはいい迷惑である。

では逆に、露崎沙種はどう思われているのか。

第二回大会での射撃部門での優勝者、^{ガールキリー}そして総合優勝を果たした織斑千冬の親友にして最高の好敵手。

世間一般にジャンヌダルクと呼ばれ、学生時代では千冬同様に（ただし枕詞に優しい方がつく）お姉様と持て囃されていた沙種。

彼女を千冬はこう指す。

『私以上に真面目で、律儀で、潔癖で、どうしようもなく甘ったるいお人好し』

これが千冬なりの贅辞なのか皮肉なのかは分からないが、嫌っている様な表現ではないのは確かである。

むしろ自分がない丁寧さを羨ましがっているような、そんな感じのニュアンスが含まれている印象を受ける。

ムチとアメ。格闘と射撃。ブリュンヒルデとジャンヌダルク。

相反するような千冬と沙種。

ちなみに彼女らの学生時代は薄い本のネタとして千冬×沙種なのか、沙種×千冬なのかという談義が後を絶えなかったとか。

これはそんな露崎沙種がIS学園に赴任してまだ一週間も経っていない初めての休日の出来事のことである。

ピピピピ、ピピピピ、ピピピピ……。

目覚めは目覚まし時計のデジタル音だった。

音に反応して半覚醒状態で耳を頼りに音のする方へ宙を彷徨うように手が伸びる。

手だけで目覚まし時計を探している様子は本当にこの女性が世界一を取った人間なのかを疑いたくなるような醜態だ。

ピピピ、ピピピ、ピピ。

そして何度か空を切った後に目覚まし時計に行き着きアラームを止める。

「う、ん……。何時い……。？」

時計の針が指す時刻は朝の六時過ぎ、休日に目覚める時間としては充分早い。

この女性の日頃の生活リズムからすればもう少し遅い起床なのだが、枕が変わったせいかもしれない。朝と変わった。

もっとも同居している長年の親友はとっくの昔に起きて朝から書類の整理をしているのだが。

しばらく虚ろな頭のまま、時計を見入っていた女性
露崎沙
種はほどなくして立ちあがりうーん、と伸びをする。

同居人の開けて行った窓から差し込む太陽光はぼーっとした頭を否応なしに覚醒させる。

何気なく壁にかかってあるカレンダーに目を移す。

くるりと赤丸で囲まれた日曜日。

大抵、何か特別な日であるという意味で囲ってあるのだが、沙種

たちも例に漏れずにいる。

今日がその例の日で、長いようで短い休日が始まる。

食堂に着くと先に千冬が朝食をとっていた。今日が休日ということもあっていつもより人が若干だが疎らである。

「おはよ千冬、朝から事務仕事？ マメだね」

そう言って沙種の前の席に着く。お盆には沙種同様、日替わり定食が乗せられていた。

「うちのクラスにはアイツがいるからな。他のクラスと比べて何かと書類が多いんだ。面倒臭い」

朝から愚痴を溢す千冬。沙種が同じ職場の人間となったということもあり気が緩んでるのである。

千冬の担任するクラスは織斑一夏という世界的にも特異な存在がいるため、必要書類も必然的に増えてしまう。

しかも今週の始めに更に二人の転入生を一組に迎え入れることになったため、休日になった今でも書類を捌ききれなかったのだから。

が、本人の性格からすれば今日は今日でやることがあるので残った書類は全て副担任の真耶に回してしまうのだろう。本当にご愁傷様である。

「ま、それも仕方のないことだけどね。しかし、どうして専用機持ちは一組にばかり集まっちゃうのかな？　うちのクラスなんて鈴ちゃんだけだよ？」

一年生の専用機持ちは一組に一夏・仕種・セシリア・シャルル・ラウラの五人、そして二組の鈴と四組の簪の二人だ。

明らかに一組に固まっている　　この中で意図して固めたのは五人中四人なのだが。

「仕方ない話だ。ラウラはともかく、デュノアは表向きは男なんだしな。同じ男である一夏と同じクラスにいれる他ないだろう」

「表向きはって、やっぱりあの子……」

「ああ、大きな声では言えないが十中八九、そうだろうな」

千冬は転入初日からシャルルが女であることに気付いていた。生来の勘の良さなのか、培ってきた物を見る目の確かさなのか。

沙種もなんとなくそうであるかもしれない、と察していたが千冬まで確証を得るまでは至れなかった。

「あの子が来た理由って一夏？　それとも仕種？」

「さて、な。片方だけならまだいいが、両方もというのもあり得るな。どちらも今のフランスの情勢からすれば喉から手が出るほど欲しい物を持っているからな」

一夏は世界で唯一ISを扱える男としてのデータを。仕種は世界の深桜とのコネクションを。

もし仮に両方を手に入れることが出来ればフランスの立て直しは容易に叶う。それくらいに二人の立場は危ういものである。

「ま、そういう問題はおいといて。折を見て個人面談すれば？ あの問題児ちゃんも一緒にさ」

「問題児……ラウラのことが。アイツはあれで自立してるんだがな」

「アレのどこがよ。千冬にべったりで自分で立ってないじゃない。千冬がべったりなのは一夏くんだけで充分だったの」

「誰がべったりだ、誰が」

「千冬以外に……っていつぱいいるか。ま、それでも一夏くんに依存してることに変わりないんだし。夏物だってどうせ一夏くんが用意してくれたものなんですよ？」

「う……」

実にその通り過ぎて何も言うことが出来ない。

「私に一夏くんにべったりだって言われないうようにしたきゃ前に言ってたアレを私なしで出来るようにしないとね」

日替わり定食の鯖をつつきながらころころと笑いながら千冬に話しかける。

「アレ？」

「忘れたの？　私がここに越してきてしばらくしてから言ったじゃない」

「あ、ああ。そうだったな」

沙種の言っていることを思い出したのかどこか不安げな相槌を打つ。

いつもの鉄面皮はどこへやら、額から薄らと冷や汗が垂らしながら狼狽る様は世界最強ブリュンヒルデとしての威厳がまるで感じられない。

人間、誰しも苦手の一つや二つは存在する。

織斑一夏の女性関係然り、篠ノ之箒のコミュニケーション然り、セシリア・オルコットの料理然り。

当然、完璧超人と思われがちな織斑千冬にも弱点は存在する。

そう、それは。

「寮長室の大掃除よ」

掃除　　もっと広く言ってしまうえば家事全般だ。

前々から沙種が計画していた休日返上の大掃除。

それをせねばなるまい原因は二つあった。

まず一つは織斑千冬の私生活のずぼらっぷりだ。

千冬は働くことに一生懸命だった弊害か、炊事洗濯はおろか掃除すらまともに来ない一人で暮らすには駄目人間一直線な人種に育ってしまったのである。根がそうであったのかもしれないが、その駄目っぷりはまさしく干物女と言ってもいい。

しかも駄目人間っぷりに拍車をかけていたのは皮肉なことによく出来た弟だった。

自分のために自分の時間を犠牲に働く姉のためにせめて家のことくらいは、と早くから姉を思っただけで家事を覚えていった一夏だが、これに味を占めたのか気を許したのかはさておき段々と今まで駄目なりにやって来た家事はおざなりとなっていき仕舞いには全て弟に任せきりとなってしまうていた。

本人曰く、「餅は餅屋だ。自分より一夏の方が上手いのだから任せている」、ということらしい。

千冬がこういう性格であるが故、書類の皺寄せが全て真耶にいくのだろう。実に納得である。

結果、千冬が一人暮らしをするとその私生活におけるあまりの駄目っぷりが遺憾無く発揮されてしまうのだ。

そんな駄目駄目な姉の私生活を支えていた織斑一夏の頑張りがなければ、今頃二人はゴミ屋敷と化した織斑邸に埋もれていたことだ

ろつ。

「ったく。魚はこんなに上手に食べられるのにどうして部屋の片づけやら整理整頓が出来ないのさ？」

「潔癖症のお前に言われたところで何も響かないな」

そしてもう一つの原因は露崎沙種の潔癖症だ。

千冬が健全な暮らしを送れているのは一夏と沙種の二人がいてこそである。

綺麗好きの沙種がいなければこの惨状は拡大していたに違いない。もしも沙種が潔癖でなければという仮定をした時の寮長室の惨状は予想の遙か斜め上をいくだろう。

沙種の潔癖は生まれついでに血筋に由来する。

そうあらねばならない。 . . . そういう生き方を露崎の人間は強いられる。

それは沙種はいうにあらず、仕種もまた同様だ。

潔癖はそういう生き方についてきたおまけみたいなものだ。

「そーですかー。とりあえずそういう訳なんで飯食い終わったら掃除開始するんでそこんところよろしく」

ちなみに残っていた千冬の分の書類は大方の予想通り全て真耶に押しつけたのだとか。強く生きる。

朝食を取った後、寮長室に戻りジャージに着替えた時点で時計の短針は九時を指そうとしていた。

「にしても……。まあ、こんだけよく広げたまんだね、逆に感心させられるわ」

部屋中をひっくり返ったような寮長室を一瞥してから沙種は大きな溜息を吐く。

沙種がこの寮長室で寝泊まりするということが決まってから掃除したであろう跡が見て取れたがそれでもその場凌ぎ。そんなボロも沙種にかかればすぐに見破られていた。

千冬は基本、片付けるのが苦手な人間だ。

出したら出しっぱなし。元に戻すということをしてしない。

知らないのではなく、知らないというところに生来片付けの出来ない人間の性質の悪さを感じる。

これほど酷いのであれば、職員室の自分の机も大丈夫なのだろうか？と危惧したがそこは意外なことに思いのほか片付いていた。

ここはこれほどの惨状であるのに、どうして職員室の机は綺麗に片付いているのだろうか。

と、そのムジユンも一週間共に生活するうちに解けた。

職員室の机も表面上片付いているように見えるが、あそこに必要書類を置いてないだけ、要は全て真耶任せなのだ。仕事に真面目だというのは嘘だったのか。情報操作も大概である。

しかし、プライベートで気を許せるといっても限度がある。今回のこれはその範疇を完全に超えていた。

「お前が来たらしようと思ってな」

沙種のぴしりとこめかみに青筋が走る。自慢げに言ったことが更に彼女の中の腹立たしさが二乗となった。

「つまりは私頼みと？」

頬をひくつかせながら、精一杯堪忍袋の緒が切れるのを堪えている。

「好きだろう、掃除」

その言葉に沙種の中の種的なナニかがはじけた。

「へえ、そんなこと言うんだあ。千冬。そっかそっか。そうなんだあ……」

ハイライトの消えた沙種で振りかえると、千冬は思わずたじろぐがレイプ目になった虚ろな目が千冬のその姿を逃さないよう捉える。

空鍋でもやるんではないかと思えるような重い雰囲気纏っている沙種はフースの暗黒面にでも墮ちたのかと思えるほど黒く、スパーサヤ人になったのかと思えるほど激昂していた。

日頃ジャンヌダルクと呼ばれる気さくな人物とはおおそかけ離れて入るがその威圧感は流石というべきか、並のIS選手ですら裸足で逃げだしそうなほどハンパない。

こんな地雷を平然と踏み抜くのも世界広しと無二の親友と天災ウサギの二人しかないだろう。

「い、いや。それはそういうつもりで言ったのでなくてだな」

千冬はなんとか釈明してみせるがそんなものは今の沙種の耳に入らない。

「ああ、別に気にしてないわ。私のことをそんな便利な人間だと思ってたトリガーハッピーな千冬の頭にちょーつとカチンときただけ」

いや、ちょっとどころでそんな虚ろな目にならないだろうという千冬の心のツッコミは軽く受け流して。

「言つとくけど、例のアレまだ生きてるのよ？　もしよかつたら世間に大々的にバラしてもいいのよ？　初恋の人は中学の二年の時点で相手は剣道部の顧問の……」「言うなあああああっ！？」

今まで見たことのないようなうるたえ方を見せる千冬。

普段の毅然とした面影はベルリンの壁の如く完全に崩壊してしまっている。

千冬の態度はまるで乙女の秘密を知られてしまったかのような

まあ、事実その通りなんだが。

露崎沙種は織斑千冬を弄ることの出来る数少ない人物である。

それはあの天災、篠ノ之東ですら出来ない偉業の一つに数えられる。

東の場合、悪ふざけをしても秘密を漏らそうとしても大抵千冬にのされて有耶無耶にされて揉み消されてそれでおしまいなのだが沙種の場合は違う。

千冬の非常に繊細な部分の弱みを握っているため、まず勝てない。要するに青春時代の恋愛関係だ。

それに東は学校では千冬と沙種以外に興味を示していなかったのてこつというネタで弄られるようなこともなかったのだ。

そつという訳あって免疫の薄い千冬にとって沙種はこのネタで弄られるとどうやっても逆らえない人物の一人でもある。

「棺桶にまで持って入ろうと思っても入りきらないほどの千冬の恥ずかしい過去はこちとら山ほどあるのよ？ リア充のノロケともいふべきかしら？ それに日本代表選考の祝賀会で酔いつぶれた時に、あの人のことをまだおも……」だから言わないでくれえええっ！
「！」

……正直な話人心掌握と言えば戦術的だが、ぶっちゃけ脅してある。

「さて、始めるわよー」

ひとしきり弄ってスッキリしたのか暗黒面から解放された沙種はいつもどおりに戻っていた。

で、相対する千冬はというと掃除開始時点で弄り倒されて既に草臥れていた。

「とりあえず私は冷蔵庫整理と。千冬はいらぬものはゴミ袋に詰めてってね。あ、言っとくけどプラゴミとは分けて入れてね。そう

でない」と区の条例でひっかかるみたいだし」

「分かった分かった。相変わらず細かいなお前は。燃えればみんな同じだと有名な環境学者は言ってるぞ」

「そうじゃないって世間一般が信じてるから分けていれるっていう規制があるんでしょうが。それと前から言おうと思ってたんだけどさ、冷蔵庫の中身が酒と水とアテだけってどういうことよ……!？」

その中に所狭しと並んでいるのは酒（ほとんどがビール）と酔いを醒ますための僅かなミネラルウォーター。そして食糧といえはタコワサやライカの塩辛やらサラミやらチーズやら出るわ出るわお酒のお供のオンパレード。いつからこの冷蔵庫はお酒のおつまみのコーナーになった。

「食事は食堂にいけば出る」

「うん、それはその通りなんだけどね……」

千冬のいう通り、食事に関しては食堂を使えばいいだけの話なので必然的に冷蔵庫の中身はこういうことになるんだろが、なんていうかこれをリアルで見えてしまうと色々と萎える。

まさしくリアル自炊しないOLの冷蔵庫だ。いや、それでももう少しマシなものが入ってる筈だ。二十代半ばで既にこういうのってどういうことなんだおい、これは流石に一夏おとつちくんが泣くぞ。

「はあ……、とにかく千冬は風呂掃除とトイレ掃除が終わったらゴミ捨てもして来てね」

「待て。やること増えてないか？」

「失礼な。か弱い私は千冬がゴミをまとめたらこの後部屋中に掃除機をかけてるんですけど。それとも何？　こんな状況になった本人には私的にはキリキリ働いてもらわないと不満なんですけど、何か反論ありますか？」

「いや、しかしだな……」

「例のアレの件だけど……「仕方がないな、今回だけだからな！」うん、分かればよろしい」

よく出来た主従（？）関係だった。

「はあああああ。一休みつと」

掃除機を止め、ベッドの上に腰掛ける。

二時間程で見違えるほど綺麗になった。

ちなみに千冬は今、ゴミ出しに行って部屋にいない。

「もう少し、こまめにでも掃除してくれればこんな大掛かりなことしなくてもいいんだけどなあ……」

それが無理な人種というのが織斑千冬なのだからしょうがないかとすっぱり諦める。この思考の切り替えの早さは千冬に準ずるものがある。

「さて、待ってるのもなんだし仕上げに入りますか」

そういつてダンボールを崩すためにカッターを手に取る。

カチカチカチ、という音と共に伸びる銀の刃。

スムーズに動いていた沙種が急に刃物に魅入られたように動きが止まる。

突然、言いようのない衝動に駆られる。

「あ
」

喉を奥から声が漏れる。

カラカラと乾いて無意識に支配されそうになるのを必死にこらえる。

キズツケタイ。

どうしようもなく叫ぶ私の内なる衝動。

もう許した筈なのにそれはまだその味を知っているからなのか子供のように駄々を捏ねて欲しがる。

それはもうしないと決めた筈の、

ワタシヲキズツケタイ。

自傷衝動。

「沙種っ！！！！」

千冬の声が沙種を現実に戻す。どれほどの時間を刃物に魅入られていたのだろうか。

「ち、千冬……？ あれ、もうゴミ捨てに行つて来たんだ？ 早く来たね？」

茶を濁すように力なく沙種は笑う。が、その顔色はとても千冬が見た数分前と同一人物のものとは思えなかった。

「そんなことはどうだっていい！ 何をしようとしていた!？」

ずんずんと歩み寄って沙種の手のカッターを乱暴に奪い取り手首を確認する。

リストバンドで隠されていた手首の下には痛々しい傷跡が残されていた。

「あ、これ……？ ダンボールバラそうと思ってカッターを取ったまではよかったんだけどそこで魅入っちゃって、ね」

バツの悪そうに沙種が答えるが、千冬は表情を曇らせるばかり。

「沙種、まだ治ってないのか……？」

「……うん。刃物を見ただけでちょっと意識が、ね。今のままじゃ台所に立つのも難しいかな」

自傷衝動。

沙種が総合優勝を果たした裏で慢性的に悩まされていたものだ。

第二回IS世界大会、通称モンド・グロツソ。

優勝候補は当然、前回大会の総合優勝を果たした織斑千冬だった。名実ともに世界最高のプレイヤーであり、彼女を凌ぐプレイヤーは他にいないだろう。それが世間の目だった。

優勝候補は彼女一強だったが、それに待ったをかける人物が一人

だけいた。

露崎沙種。強大な力を持つがために自由国籍権を持つ彼女は日本を離れ、フランスの代表として今大会に参加していた。

確かに射撃では千冬に勝るものの、総合すれば沙種は千冬に一步及ばずにいた。

それが原因で第一回大会は日本代表としての参加資格を逃したのだ。

今大会も大方の予想通りならば優勝するのは千冬の筈だった。実力差的にも、これまでの戦績からしても、相性的にも。

が、事件は起こった。

迎えた決勝戦の朝、千冬の元に一報が入った。

織斑一夏が何者かに拉致された。

その報を聞いた千冬はすぐさま飛び立った。

たった一人の家族おとつとと己の名誉を天秤にかける筈もない。

織斑千冬とはそういう人間であったし、千冬には弟を救いだすだけの力を持っていた。

結果は織斑千冬の決勝戦棄権。不戦勝で沙種の優勝が決まった。

大番狂わせとはこのことだ。第一回大会の代表選考の予選で破っ

た相手が今大会で優勝するなんて誰が予想しようか。

「この逆転優勝は世界的に波乱を呼んだ。」

ある人はこの状況をひっくり返したこのフランス代表の若き乙女に過去の英雄になぞらえて異名を与えた。

ジャンヌダルクと。

世界が英雄が生まれ沸き立つその裏で、沙種の心を後悔の二文字が蝕み始めた。

優勝は本来千冬に与えられる筈だった。大会二連覇という華々しい形で終わる筈だった。

私がそれを奪ったのだ。

勝つことに重さを感じたことはなかった。それが露崎沙種の勝負に対しての心構えであったし、勝つことは息をしていることと同じだと自身で言っていたほどだ。

しかし、あの試合で千冬に勝ったことに対してだけはいつまでも沙種の心の中の申し訳ない気持ちは燻り続けていた。

自らを罰する何か欲しい。

懺悔では物足りない。そんな目に見えない何かで自分を納得させることが出来なかった。

自分は目に見える傷あかしが欲しかった。

そして、自らの手首を切った。

滴り落ちる鮮血。とたんに襲い来る眩暈、脱力感。

ただ、それを眺めていると不思議と安息が生まれた。

罰を与えることで自分が生きていることを許されているような気がして、自分が生きているための必要な手段として手首を切るようになった。

沙種のリストカットは段々と常習化してきた。

試合前に気持ち落ち着かせるためにやることも多くなった。一日に何度も試合があれば何度も手首を切るとはそう珍しくなかった。

そうやって自分を傷付けることで心の平穏を保ってきた。試合に臨める状態を強制的に作り出していた。

手首から流れ出る血^{つみ}を見ることで生きている実感が得られた。

そうやって自分に罰を与えることで生きることが自分に許していた。

そんな歪で不安定な生き方ながらもその後のフランスやEUの大会でも優勝を重ね続けた。

そうしなければいけなかったから。そうしなければ生きてはいけなかったから。そうしなければ守れなかったから。

そんなことも知らずに周りからの期待が大きくなる。その度に繰り返される自傷行動。

まるでメビウスの輪のように終わることのない負の連鎖。それが終わるとすればそれはきつと。

そしてEUの世界選手権の時にその時は訪れた。沙種は織斑千冬が引退した今、EUだけでなく名実ともに世界最強のプレイヤーとして君臨していた。

沙種はいつも通り、待ち時間に自傷行為リストカットをし試合に備えていた。

この大会は昨年、優勝して二連覇がかかっている。奇しくも冬のモンド・グロッソと同じような状況となった。

そのことが妙に可笑しい。

立ちあがった瞬間、異変が生じた。

「あ、れ？」

沙種の視界がぐらり、と傾いた。否、傾いたのは沙種自身の方だった。

沙種の身体は受け身を取ることなく地面に叩きつけられた。

少し前から何度か体調を崩していたが、立てなくほどここまで酷いものはまだなかった。

度重なるリストカットが原因となる体内の酸素量が急激に低下したことによる重度の貧血。

沙種にとって繰り返して来た自傷行為のツケがこんな場面に現れるとは思ってもいなかった。

「駄目……。これから試合があるのに、どうして……」

立ちあがろうと身体を動かそうにも身体が重くその場を動くことすらままならない。

それ以上に今まで感じたことのないような虚脱感が身体を襲う。

「う、そ……」

血が止まらない。いつもよりも出る血の量が多い、多すぎる。こんな血溜まりが出来る程の血の量が出るなんてことはなかった。

動脈を切ってしまったのだ。

動脈は心臓から送りだされる血液を送る血管で逆は心臓に帰っていく方の血管を静脈という。

普段の場合、静脈を傷つけるのだが今回は痛覚が麻痺していたからなのかいつもよりも深く切り、動脈をつけてしまった。

動脈は心臓から血液を送り出されるために動脈を傷つけるというのは血を外へ放出しようとするのと同義。

「い、嫌……。死にたくない。死にたく、ないよ……。！」

お願い、誰でもいいから私を助けて……！

あの日以来、虚ろな生を生きていた沙種にとって初めての渴望だった。

たった一人の妹を守るために自分を押し殺した望まざる生き方を強いられてきた沙種。

自分を傷付けることでしか生が実感できなくなったそんな歪な存在は確かに生を求めた。

生きたい、死にたくない、と。

天にその望みは通じたのか薄れゆく意識の中、沙種は倒れた音を聞きつけて部屋に入って来た人間の悲鳴を聞いた。

地面に広がる赤。私の周りを取り囲む喧噪。

身体は持ち上げられ担架に担がれた時に悟る。

ああ、私はもう戦わずして負けたのか。

そう沙種の中の結論付けられると今まで張り詰めていたものがぶつり、と意識と共に切れた。

その大会のトーナメント一回戦。露崎沙種はアリーナに姿を現すことはなかった。

結果は露崎沙種の大会棄権。皮肉にもあの時の意趣返しのような呆気ない幕切れだった。

それが露崎沙種の大舞台での最後の戦いとなった。

その年の終わり、沙種は現役を引退した。

沙種自身がもう戦えるような精神こころではなかった。

それがちょうど一年前。

沙種と仕種はこの一週間後に日本に帰国した。

当時のことを思い出したのか千冬は顔を顰める。

「そんな暗い顔しないでよ。もう一年近く手首近く切ってないから大丈夫だって」

「だが……」

「もう心配性だな千冬は私が大丈夫だった言ってるんだから大丈夫……っっておよ？」

沙種の目にある物が目に留まる。その先にあったのは分厚い本で広げて見ると中身はアルバムだった。

「懐かしいね。私たちが高校に入学した時だっけ？」

「ああ、そうだな」

頭一つ抜けたセーラー服を身に纏った千冬と沙種に東、それぞれの下には一夏、仕種、篤が写っていた。

写真に写る姿は高校生の時のものでまだISが発表されておらず、親友の三人はただの学生でその弟妹たちもただの子供だった。

同じような状況下にいた筈の千冬と沙種はまったく逆な性格だったが、それ故に引かれあつたのだろう。

そんな姉たちとは違い同じような境遇で育つたためか仕種も基本的に姉に迷惑をかけないような聞き分けのある子であった。

ただ仕種は一夏と対照的に大人しい子で、活動的な一夏とは真反対の存在だった。

それでも根は同じでよく遊んでいた。

「いやあ、もうアレがそんなに前になるなんて。時の流れの早さを感じるね」

「まったくだ。二人揃って小学校に呼び出されたときには何事かと思っただがな。今思うとまったく馬鹿なことだ揉めたものだ」

そう二人は先ほどの思い雰囲気はなくなりくすくすと笑った。

パラパラと何ページかめくると、そこに東の研究室で撮られた写真が出て来た。

その時の東の表情は他の写真に比べて非常に楽しそうだった。

「思えばISが出て、随分と私たちの立場も変わったね。ISなんてなかったら私たちただの苦学生だったのにさ」

「人は望む、望まざる関係なく変わらざるを得ないさ。その渦中にいた私たちなら尚更、な」

千冬も沙種も東のIS関連に付き合わされていた。

それは例の事件に端を発し、二人の世界は一変した。

それはまるで、東が二人の立場を変えるために作ったかのように。

そしてISの開発と操縦を初期段階から手伝っていた二人にとって敵はこの二人以外に存在しなかった。

開発にも関わっていた二人は同じ第一世代を駆る相手との知識レベルが既についていたのだ。その上での訓練量と独自の戦術。

その結果、二人は世界の頂点を知ることとなった。そしてその立場上の危うさも。

「だが、変わらないものだってあるさ。こっつして二人でまた過ごせるんだからな」

「そつだよね。変わらないものもあるよね。なんだかんだで一夏く

んに篝ちゃんに鈴ちゃんとも再会できたんだし」

人の縁とは不思議なもの。知り合いは引き寄せられるように集まってくる。この分だとあのウサギ耳も……。

「とりあえず、掃除も終わったんだし祝い酒でもするか」

「真昼間っからビール？ 今日だけだよ？」

「ほう、お前にしては随分と甘い処置だな」

「千冬にやな思いさせたお詫びよ」

そう言って冷蔵庫を開ける。

取り出されたのは二人分のビール、そしてつまみのチーズ。

「ふむ、物足りないな。一夏を呼んでつまみでも作らせるか？」

「いや、そうしたら飲酒してるのがバレるから拙いでしょ」

はっはっはと千冬は楽しそうに笑う。

「では掃除祝いとお前の帰国一周年を祝して」

「乾杯」

カッン、と缶は小気味のいい音をたててぶつかりあった。

闇の中にそれはいた。

それは赤の瞳を闇の中で鈍く輝かせ、銀の髪は光のない部屋で仄かに光らせている。

ベッドに倒れ込んだままの人形　　ラウラ・ボーデヴィットは動きを止めるように眠りにつこうとしていた。

ピルル、ピルル、ピルル……。

無機質な着信音が部屋に鳴り響く。

眠りにつこうとしていた人形は身体を起こし、人へと姿を変え電
話に出る。

「……貴様、何者だ」

悪意が、動き出す。

閑話1 「露崎沙種の受難」(後書き)

今回のNG 締めの部分

「ところでねえ、二人でまた過ごせるって愛の告白と受け取っていいかな千冬？」

「ばっ！！ 馬鹿なことを言うな！ 私が女に惚れる訳あるか！

わ、私は今でも……」

「はいはい、ごちそうさまっ」と

「し、しまったあああああああああああつ！？」

どうにもしまりの悪い二人だった。

なんて、千冬のダメ可愛い場面を増やそうとしたらこういうことになっちゃったよ！？

どうしてこうなった！？ すっかり尻に敷かれちゃってるよ変な部分でチート発動しちまったい。

で、ここは真面目な話なんですけど沙種の場面は書いてて正直鬱になりそうでした。

資料探してその文献を見てたら表現だけでもドン引きで見ててしんどかったけどそれでも物語の根幹を為す部分であるから丁寧(といえるかどうかは分かりませんが)に書いてたらこの量……。

リストカットも作者はしたことないので、したことある人の気持ちとか分かりませんが真似しないでって言いたいです。

資料を文面で見てるだけでもしんどいのこれ見てやる人が出たらもう立ち直れそうにも……。

とりあえずそういう鬱成分で終わらないように清涼剤としてNG追加とききました。少しでも癒されて帰ってください。

次回よりラウラ無双が始まる。書いててラウラ無双になるのか？

第20話 「切開し節介する」(前書き)

元々この回のタイトルは黒い嵐(シュヴァルツエア・シュツルム)の予定だったんですが、なんかシュヴァルツエア・レーゲンのセカンド・シフトっばいよね? 雨から嵐だし。ってことでボツ。

第20話 「切開し節介する」

side：露崎仕種

「おはようございます」

シャルロット 学校ではシャルルにしておこう 部屋
を襲撃されてから二日経つての月曜日。私はいつも通り学校に登校
した。

ただいつも通りというのは表面上の話。中身はシャルルにエンカ
ウトした時の対処をどうしようかと内心びくびく状態なのだ。

まあ、下手をすればあのままえっちい展開になってたんだから無
理もない話かもしれない。

「おはよう、仕種」

シャルルも表面上はいつも通りだった。自分のコントロールが上
手ののだろう、よかった鈴の時ほど確執は長くなさそうだ。

「あ、ああああ、うっうっうっうっ……」

と、思った矢先何がスイッチかは知らないが急に紅潮し出す。

……前言撤回。シャルルお前もか。

シャルルのことを除けば教室はいつも通りだった。

他にあるとすれば学年別トーナメント（行事ごと）を心待ちにする特有のちよつとした高揚感。

そんな賑やかな雰囲気もラウラが教室に入ってくると霧散してしまった。

一週間経った今でもラウラだけはこのクラスに馴染んでいない。十代女子特有の気難しさがあるのかもしれないが、それよりもラウラの方が狎れ合いだとクラスの輪に入るのを拒んでいる方が大きい。

言葉を発してはいけない重い空気はまさしく冷や水をぶっかけられたかのよう。……なるほど『ドイツの冷や水』とはよく言ったものだ。

実力は軍属とあって非常に基礎能力が高く、その上で織斑先生に指導を受けていたらしくその実力はセシリアや鈴と比べると目を見張るものがある。

おまけに彼女の機体は第三世代のレーゲン型^{モデル}。あの慣性停止能力^{アクティブ・イナーシャル・キャンセラー}、通称AICが積まれているのだ。実弾を主力とする私にとって厄介なことこの上ない。

それにしてもアイツの視線がずっと私に注がれているのは気のせいでしょうか。

転入初日以来、一夏を目の敵にしてきたラウラが今ここにきて私に対して何を恨むようなことがあるのでしょうか。

それともアイツはあのことに気付いたのででしょうか。

そんなことを考えていると隣の席の子が話しかけて来た。ラウラがいるからか声を押さえての話声だった。

「ねえ露崎さんって例の噂信じる？」

「噂？ 噂って何の話ですか？」

「あれ知らないの？ 情報通っぽそうだから一番にキャッチしてると思っただのに」

「情報化社会においてそれは致命的だよ？ 死活問題だよ？ そんなんじゃ生きていけないよ？」

「仕方ないじゃない。だってほら、露崎さんってば篠ノ之さんやセシリアと違って織斑くんに興味なさそうだし」

中々キツイことを言われてる気がするが気にしない。日頃キツイことを言ってるバチが当たっただけの話だ。しかし言いたい放題ですなあんたたち。

女の子の間では一週間前からこんな噂が一年だけではなく三年まで流れている。

曰く、今度の学園別個人トーナメントで優勝すれば織斑一夏と付き合える……って待て、この話どこかで聞いたことないか？ 確か、

「！」

……なるほど、そういうことですか。

自分たちでは専用機持ちと戦っても勝ち目はない。訓練機とは性能は一線を画す上になんてったってこの学園に来てからISの稼働訓練をやってる彼女たちと違って専用機持ちはこの学園に来る前より何かしらの訓練を受けて来たため稼働時間が段違いなのだ。

専用機持ち同士が潰し合えば万に一つチャンスはあるかもしれないがそれでも確率は万分の一。そんな宝くじの一等を当てるような真似が到底出来る筈もない。

しかし、トーナメントで優勝しなければ織斑一夏と付き合うという千載一遇のチャンスを無に帰すことになる。

そこで彼女たちは考えた。

じゃあ、専用機持ちにも勝てる相手を立てることで自分たちの代わりに優勝してもらおうという魂胆なのだ。

そういう意味で私に白羽の矢が立てられた訳だ。実力は一年の中でもトップクラス、専用機持ちにも全勝。

おまけに他の専用機持ちたちと違って一夏に対してあまり恋愛対象として見ていない。彼女たちにとってはあまりに美味しいパイなのだ。

「ああっ！ ずるい！ あたしにその権利譲ってくれたら三年間、デザートは奢って上げるけどどう!？」

「わたしなら上とのコネクションを使って露崎さんに色々便宜図って上げられるわよ？ 卒業後もばっちりサポートよ？」

「私なら今作ってる一シヤル本を出来たら一番にあげるからっ！ 他にも色々一夏本付けるよ！！」

どれだけ賄賂を積まれたって誰からの誘いも受けるつもりはないんですけど……って最後のは待ちなさい、私にそういう趣味はありません！ 一夏のナニとか興味ありませんから！！

とりあえず、これ以上広がらないよう情報統制という抑止をかけよう。

「……その噂、千冬先生も公認なんですか？」

「「「え……！？」」」

温暖化、温暖化と騒がれているがここの一角に氷河期が訪れた。

「え？ だってそうでしょう？ 女の園でたった二人の男子と付き合っつてことは必然的にも千冬先生の耳にも入る。向こうが認めないのにも交際してたら授業も気まずいっただらありやしないですよ？」

もっとも千冬姉千冬姉と口頃言ってる一夏が同年代との恋愛に興味を示すなんてあり得そうもないんですけど。

「そ、それは、ねえ……？」

「どう、だったかなあ……？」

「あ、あはははは……」

「あ、あたし情報のウラ取りに行く……！」

「ま、待ちなさい……！ もうすぐ織斑先生のHR始まるのに今出て行くのは自殺行為だって！」

「大丈夫だ、問題ない」

「それは死亡フラグ……って今ホントに出てっちゃ拙いからあああつ……！」

「織斑先生に隠れて育む禁断の愛……。そしていつの間にかデュノアくんと三角関係……。ジュル、そそるわあ……」

「あんたもなんかおかしいから！？ 変態思考は本だけにしなさい！！ 現実になんかそれをもちこんだら血で血を洗う修羅場に発展するからあああああつ……！」

まさかここで織斑千冬の名前が出るとは思わなかったのだろう、彼女たちの動揺の色は激しかった。指揮系統は一気に崩壊。戦線は維持できずHRが始まり解散となった。

一夏と付き合うということは上手くいけば将来的に千冬先生が義姉になる可能性があるということでもある。

強過ぎる姉なんてうちの沙種ねえさんで間に合ってる。それに私生活でいい話聞きませんし。姉さんそのことで愚痴ってばかりだったしなあ。

これで噂も広まるのが止まってくればいいのですが。はあ……。

結果を先に伝えておこう。

うん、無理　無理に決まってるじゃないですか

女子の妄想力というのは恐ろしいもので事象を勝手に都合のいいように書き換える能力でもあるのだろうか、織斑先生も公認なのかという確認通達はいつの間にか織斑先生のお墨付きという確定情報として学園中に出回っていた。

女子の情報の伝わる早さを甘く見てましたよ！！　それが誤報だとしてもお構いなしに広まるんですから性質が悪いつたらありゃしないですけどね！

結果として私が止めようとして流した情報は昼休みになった今も余計に悪い状態で噂は全校に広まりつつあったのだ。

「うああああ……。ホントに頭が痛い」

「仕種大丈夫？」

顔を覗き込んでくるシャルル。男装をしているとはいえ女だと分かればホントに女にしか見えないのは不思議なものです。

「体調的には何も問題ないです、精神面だけです。それもこれも噂のせいです。なんで私がこんなにきにしなきゃいけないんですかあ……」

「噂？ ああ、一夏がどうとか？」

一夏がどうとかの話はあってもシャルルがどうとかの話はとんと聞かない。

何故に？ 会社の娘として嫁ぐには夢が大き過ぎるから皆遠慮してるんでしょうか？

それとも何か神聖化されてるのでしょうか？ ん？ 遠くでぶるあああああああああ！とか、おおおおおつづつづるはあああああああいる！！ ちよめちよめあああああ！って叫び声が聞こえたのは気のせいだろうか。

「ホントだったら筈が個人別トーナメントで優勝すれば一夏と付き合ってもらって内容なんですけどねー……」

それがどこでどう間違えたのやら。今や全校中は『個人別トーナメントに優勝すれば織斑一夏と付き合える』と広まっている。

そもそも各学年の優勝者と付き合うのか。三股か、公然と三股が許されるのか。そんな光源氏が許されていいのか。

「ああ。あの時、篠ノ之さんの様子がおかしかったのはそのせいなんだ」

ピシリと私の表情が固まる。ソレツテドーナコート……？

「シャルル、なにか心当たりでも……？」

「あ、うん。ちょうど一週間前だけど僕が部屋の手続きとかで部屋に帰ったらちよつど帰って行ったんだ。凄いスピードで」

そつか、あの時はそういうことだったんだ、と一人納得しているシャルル。

そんな穏やかな思考のシャルルとは正反対に私の感情の海が一気に荒れた。

ば、ばかやるおおおおおおおおおおおおおっ！？

どうしてそんなことを廊下でやってるんですか！？ 屋上とか裏庭とか体育館裏とか人気のない場所を選びなさいよおおおっ！？

頭ん中は乙女思考全開おとめチックモードのくせに行動がそれに伴ってないじゃないですか！ 廊下で宣言とか漢らし過ぎるわ！？

それにここはIS学園ですよ！？ 乙女の園ですよ！？ 嗜好おんなきの巣窟なんですよ！？

迂闊にも程があります！ それこそこんなこと引き合いに出すのはいけないことなんでしょうけど千冬先生の授業で居眠りかます位に迂闊すぎますよおっ！？

「う、はあ……」

非常に激しいツツコミの嵐（ただし、頭の中で）を終えた後、溜息が洩れる。

溜息を吐くと幸せが逃げるとかなんとか言うが、一夏関連のことに首を突っ込んでる時点で既に私の幸福のパラメータはガリガリと削られているのだ。実にいい迷惑である。

「だ、大丈夫？ 仕種」

「……大丈夫です。幼なじみの行動の軽率さに呆れ返って脱力してるだけです」

まったく、一夏にしても幕にしても迂闊過ぎます。もう少し慎重になるべきです。せめてシャルルくらいには……ってシャルルも似たようなものか。

「それでこれからのことなんですけどどうするつもりですか？ このまま三年間隠し通せるとは私は到底思えないのですが」

「確かにそれは自身がないかな。だから必要なデータが集まったらお払い箱かな」

確かにそれは政府としては当然の方策だろう。データ収集が済み、シンリ・シュヴァリエとのコネクションが確立すればフランスの黒い部分を知るシャルルは不要となるということを聡いシャルルは理解していた。

だからシャルルは諦観している。これから起こるであろう運命に身を任せ、抗うことなく流され終えていくつもりだろう。

使い捨ての人生もしょうがなかったと諦めれば色々と悟れることもあるだろう。

だから気に入らない。そうやって諦めているのを。悟った気になっっているのを。

あるがまま、為すがままを受け入れることも重要だが流されるだけでは運命を勝ち取ることが出来ない。

私自身もあるがまま、為すがままを受け入れざるをえないような生活を送ってきたがその心まではあいつらに捧げたことは一度もなかった。

あいつらの喜ぶことをしようがそれは私との利害が一致したからであって屈服した訳ではない。

あるがままの偽りの安息の終わりを求めていたから、今に繋がっているんだと私は信じている。

だからシャルルにもせめて、一矢くらい報いて欲しかった。あいつらのいいなりのまま、負けたまま終わって欲しくなかった。

「シャルルはそれでいいんですか。そんな終わり方で。そんな決められたレールで」

「良いも悪いもないよ。僕はただその方針に従うだけ。悔しくはあるけど、僕にはそうする以外方法は取れないんだ」

その一言に言いようもない感情が胸を燦る。それは今まで感じたことのない一瞬にして煮えたぎった熱湯のような激情だった。

ああ、きつと鈴も同じ気持ちだったのだろう。こうやって本心ではSOSサインを送り続けているのにそれを見て見ぬ振りをして心を偽られるということはこんなにも見ていてもどかしいものか。

私もこうやって自分の本心を偽って本当を隠してきたのだろう。

『仕方ない』と言い訳して。建前という嘘の仮面を被って。

きつとその気持ちと向き合うのが怖かったんだ。

本当に選びたかった道はどうしようもなく困難で心が折れそうでどう足掻いたって上手くいく算段なんて見つからなくて。ならばいっそのこと見なかったことにしたくて。

そうやってホントウを偽って、騙して。見たかった世界に蓋をして。

おそらく今の感情は自己嫌悪。自分で自分の醜いところを鏡合わせにされたような錯覚。

でもそれが私の今の姿、真実の姿。助けを求めているのに助けての一言をどうしても言いだせない弱い自分。

本当は好きなのに好きの二文字がこれから起こるかもしれない絶望に押しつぶされて口にすることが出来ない憶病な自分。

あまりに脆くて、か弱くて、どうしようもなく孤独な自分を映し出した姿。

シャルルの中に露崎仕種の弱い部分を投影したのだ。

「僕は短い間だったけど、この学園での生活は楽しかったよ」

「だからそういう話じゃなくて……！　なんでそんな終わったような言い方なんですか！　なんでもっと出来ることを探さないんですか！」

だからこそ強く思った。諦めて欲しくないと。そんなに簡単に折れないでと。辿り着きたい未来に足掻き進めと。

だからこそキツイ言葉が口を吐いて出る。それは変な期待の裏返し。単なる弱い自分を見たくない八つ当たりか。当の本人でさえ感情の昂りにより何が正しいのかさえもあやふやだ。

しかし、その芯はぶれることはない。この少女も幸せになるべきだと。もっと普通を謳歌すべきだと。

それが叶わなかった仕種はそう思って止まなかったのだ。

「そもそもこの学校にはですね……」

「デュノア、こんなところにいたのか」

声に振り向くと千冬先生の姿がそこにあった。トレイには食べ終わった食器が乗せられていてこれから返しに行くところだろう。

「放課後、お前とボーデヴィツヒに個人面談がある。場所は会議室でだが、分かなければ山田先生に聞くといい」

「は、はい」

この時期に個人面談とは珍しい。といってもやる人物が人物だから仕方がないか。

相手はフランスとドイツの代表候補生。学園サイドとしても気を遣うところがあるのだろう。

「なんだ露崎、不機嫌そうだな珍しい。喧嘩でもしたのか？」

「そんな、喧嘩にもなってますせんよ織斑先生。僕が、僕が悪いんですから」

三人の間に微妙に気まずい空気が流れる。

「そうか、露崎」

「……………はい」

バシンッ！！う、うおおおお……。な、何故にこのタイミングで出席簿…………？ 私が悪いのか？ とりあえず全部私のせいなのか…………！？ それで四角い世の中がまあるく収まるのであればいくらでも叩かれ役に…………なりたくないなあ…………。

「お前が私のことを引き合いに出したような気がしたのでな」

気がした、という理由で殴らないでください。した、という明確

な根拠なしで殴らないでください。疑わしきは罰せずです。

バシンツッ！！ 読心術とか勘弁してください……。

side：シャルル・デュノア

昼休みの仕種の言葉を思い出す。

『なんでそんな終わったような言い方なんですか！ なんでもっと出来ることを探さないんですか！』

嬉しかった。本当に自分のことのように考えてくれていた仕種が嬉しかった。

焦れてあんなキツイ言い方になってしまったけど真に私のことを考えてくれていた。諦めてしまっている自分を叱咤してくれているような　いや、実際その通りなのだろう、その言葉が私の胸を突かない筈はなかった。

確かに仕種の言う通りだ。私は既に事を諦めていた。

しかし、それも仕方のないことだ。

あまりにどうしようもないほどに事は仕種が考える以上に大き過ぎた。

事の始まりは一年ほど前。

デュノア社で非公式ながら代表候補生をやっていた時に彼は突如と現れた。

元々は別の会社をやっていたという経歴が買われ古参を押しつけて彼はデュノア社の幹部、引いては右腕となる存在になった。

思えば、それが全ての始まりだったのかもしれない。

四月。

彼は私に交渉を持ちかけて来た。

いや、交渉というのもあまりにおこがましい。あれはあまりに唐突であまりに酷い一方通達めいれいだった。

『唯一のIS操縦者である織斑一夏のデータ收拾、及びにシンリ・

シュヴァリエと接触しフランスへ帰るよう説得を図れ。出来なければシャルロット・デュノアの素性をばらす』

あまりの無茶に眩暈すらした。

時の人である織斑一夏への接触は子供ながらの自分でもその真意は理解出来た。それが如何ほどに貴重なサンプルであるかも。

しかしフランスの稀代の天才、シンリ・シュヴァリエとの接触はどのような意図があるかは理解出来なかったが、それもすぐに理解することになる。

この男、異常なほどに彼女に執着しているのだ。

フランスには彼女のほかに彼女に劣らない実力を持つ科学者たちは多い。

が、彼は彼女しか認めようとしなかった。

彼女の作りだすISこそが至高。彼女こそがEU最高の頭脳であるとは是が非でも譲ろうとしなかった。

その妄念は尚も熱を持ち続ける。

そして彼女への思いは形を変えて手段として籠絡せんと策を張り巡らせる。

取られた策はハイリスク・ハイリターン。勝った時の配当は大きいとその倍率はあまりに高すぎる賭け。

おまけに私への見返りなどそんなもの最初からアリはしない。全
ては勝つても負けても親の総取り。

その親というのがフランスではなく、彼個人というところに嫌ら
しさを覚える。

だが私は彼の命令に乗らざるを得なかった。

彼の取った人質はデュノア社の全社員の生活^{いのち}。

彼の言い分を呑まなければ、何万という人間が路頭に迷うことにな
る。見捨てるにはあまりに数が多過ぎたのだ。

いや、そもそも人質を取られた時点で私という人間は『見捨てる』
という選択肢を選べないのだ。

故に、縦に頷く以外に私に道はなかった。

だってそうだろう。我が身一つと何万の生活。天秤にかけずとも
どちらが重いかは明白である。

愛人の子であるという負い目のある私にとってそれが唯一の救い
の道であり、唯一の親孝行であると彼は私に吹き込んだ。

私の心が揺れたのは言うまでもない。

きっとそれすらも彼は計算の内だったのだろうか。

我が身ひとつを犠牲にすることで何万を救えるのなら、きっと差
し出すだろうと。

そんな心の隙間を縫うように彼の甘い言葉は私の揺れた天秤を大きく傾けた。

そして、その命令を受け私はこの学園に来た。

仕種の言葉は確かに嬉しかった。しかしだからといって反抗したところで状況は好転しない。

それも私にとっては過ぎた願い。心配してもらって引き返せるような場所に私はもう立っていないのだ。

だから進むしかない。足掻くことは許されない。その先が泥沼でも、真つ暗闇でも、救いがなくても。茨の道に行く他に道はないのだ。

そうしなければ私の守りたかったものは、デュノアの名はきつと。

「あ」

気が付けば授業は終わっていた。

授業の終わりを告げるチャイムが教室に鳴り響く。

授業が山田先生であることと席があまり前の方でないことが幸いした。上の空であったことに気付かれずに授業を終えていた。

嫌なことを思い出していたせいか全然、授業内容が頭に入ってなかった。

織斑先生ならばそんな状態の私に出席簿の一発や二発、軽く飛んで来ただろう。むしろ、今の私にとってはそっちの方が良かったのかもしれない。

「シャルル、今日も練習付き合ってくれよ。こないだの凄い分かりますかったからさ」

そして一夏はいつものように話しかけてくる。いつもなら嬉しい筈のそれが今回ばかりは胸に刺さる。

仕種の方を見ると仕種は授業が終わるとこちらを見向きもせず教室を後にする。

(仕種……)

やっぱり怒っているんだろうか。次に会ったら絶交とか言い出すんじゃないだろうか。様々な疑念や不安が次々と湧いてくる。

かといってずっとは気にしていられない。この後に個人面談が控えている。場所は以前に確認したからきつと分かる筈だ。

「ごめん一夏。今日、個人面談があるから練習には参加出来ないよ」
「あ、そうなのか。じゃあ、終わって時間があれば参加してくれよな。第三アリーナで待ってるから」

「うん。時間があれば、ね」

曖昧に返事を返す。そんな自分の弱さに少しだけ自己嫌悪。

「一夏！ 何をしている！ 置いて行くぞ！」

「いつまでレディを待たせるつもりですか？ 時間というのは有限ですよ？」

教室の入り口で篠ノ之さんとオルコットさんが急かす。

「っと等とセシリアが呼んでるから俺も行くな」

「うん、頑張ってるね」

「おう」

そう言って一夏たちはアリーナへ向かって行った。

とはいうものの今日は訓練をするような気分じゃない。

だから今日は早く面談を終わらせて、早めにシャワーを浴びて、早めに寝てしまおう。

そう指針が決まると、身体は楽に動き出し教室を後にした。

「デュノアです」

「入れ」

二つノックをした後、会議室から厳かな声が返ってくる。

会議室内は予想していた通り味気のない部屋だった。長机を並べて囲まれた大きな死角は大人たちがいかにも仕事をしてそうな空間だ。

「まあ、適当な場所に座れ」

「はい、失礼します」

織斑先生に促され席に着く。

しかし、こうやってブリュンヒルデと面と向かって一対一で話すなんて珍しい体験をしているのかもしれない。

「さて、今日で転入して来てから一週間が経つが学校の方には慣れたか？」

「はい。周りにはよくしてもらってますし」

「よくしてもらって、か。お前の周りにお節介は多いし心配は無用だったな」

仕種も一夏もお節介だと言ってるようなものだ。

しかし、その仕種を怒らせてしまった。

「授業態度についても特に問題はないな。二カ月も先に来ている織斑に爪の垢でも煎じて飲ませてやりたいものだ」

その後も続く取りとめもない会話、談笑。

このまま、何もなく終わって欲しいのだが。

「最後にデュノア、お前についてだが」

そつも問屋が卸さない。

織斑先生がこんな他愛ないことを話すために呼び出したりはしない。

少なくとも、何かしらの明確な目的があつてここに呼び出されている。そうでない筈がないのだ。

「何が目的だ？」

その言葉に世界は絶対零度の世界に突入する。

世界を切り離されたかのように感覚が痛いほどに鋭敏になる。

織斑先生がすつと細めた目は怯えに満ちた私の心を射抜くかのよう
うに、端正な顔立ちから放たれる威光は私の弱い心を捉えて放さな
い。

まるで狩人たる鷹の如く、いつでも弱者である私を狩らんとする
目に心底震えた。

「な、何のことですか……？　ぼ、僕はフランスの代表候補生に選
ばれて、それで……」

しどろもどろに言い訳を紡ぐ。そのちぐはぐな言葉を一体誰が信
じられようか。

しかし私はそう言うしかなかった。否、それしか言えなかった。

各国が世界唯一のIS操縦者である織斑一夏のデータサンプル
を欲しがる中、フランスはその情報を特に欲していた。

何せ未だ第三世代の開発に着手出来ていない上にあんなことが発
覚したのだからその分を取り戻そうと躍起になるのも仕方がない話
かもしれない。

だからといって他人事では済ませられない。その役回りが不幸な
ことに自分に回ってきたのだ。

「ふむ。お前がそう主張するのならばそれで構わん。プライバシー
の問題である以上、私も深く詮索出来ないしな」

含みの持った言い方。ここで見逃してくればどれほど楽な話か。

しかし、織斑千冬だいまおつからは逃げられはしない。

「だが、お前が男にしては些か筋肉の付き方がひ弱だな。そんな軟弱な男子がこれから三年間大丈夫か？」

シャルロットはこの時点で悟った。自分が性別を偽っていることがばれていると。

IS学園の生徒では細身の男子として通っているのだろう。それこそフランスから来た貴公子と周りが騒ぎ立てるほどに。

しかし、彼女の目は違った。いや、視点が違ったと言えはいいのだろうか。

中性的なシャルルが女であるかを真つ先に疑った。

確かに一夏と比べれば線も細いし、筋肉も男子として見ればかなり少ない。下手をすれば女子と間違えられるレベルだ。……事実、女子なのだからそれは仕方のないことなのかもしれないが。

以前の事件の影響があるからなのか。それとも情報の裏が取れているのか。はたまた勘というものなのか。

どの道、織斑千冬に既にばれているという一点の事実は変わりはない。

「……僕は、どうしたらいいんでしょうか？」

最後まで白を切り通せばいいものを、気付けばそんなことを口にしていた。

簡単な話だ。私は観念して逃げるということを諦めたのだ。

それに担任である織斑先生から何故かどうすればいいのかを教えてもらえるのではないかと淡い期待をしてみよう。

自分の正体を知られた敵に助けを求めるとはなんと浅はかなことか。

だが縋らずにはいられなかった。

降りしきる雨の中大きな木の下で雨宿りしたくなるのは道理。

それは伝わり辛いかもしれない、私の精一杯の『タスケテ』。

「さてな。自分で考える」

しかし、縋り付きたかったその希望すら砕かれる。

それはあまりに残酷な仕打ち。

後ろめたいことを抱えている自分にとってそれは暗にこの学園を出ていけと言われているような気がしてならなかった。

一言の圧力。下手に多弁で言い負かされるよりも時としてその威力は大きいことこの上ない。それが世界一の言葉であるのならば尚

更だ。

男装であることがばれどうしようもなくなり、そしてどうすればいいかすら分からなくなり。

進退窮まり、これ以上の活動は無理だと心が折れてしまいそうになった時、

「ああ、言い忘れていたがうちの学校の校則にはこんなものがあったな」

特記事項第二十一。

本学園における生徒はその在学中にありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない。

本人の同意がない場合、それらの外的介入は原則として許可されないものとする。

織斑先生がわざとらしく何かを思い出したかのように語りだした。

その様子に訳が分からないとあまりにシニール過ぎる光景に思わ

ずばかんとする。まさか突然、校則を読み上げられもしたらたとえ普段冷静な仕種あつてもばかんとするだろう。

「……おかしいな。どこか間違っていたか？」

「いえ、間違つてない……と思いますけど。それってどういふことでしょうか……？」

「お前がここにいたいと言えばこの二年間この学園で学ぶことは約束される。そういふことだ」

織斑先生の言葉の真意が分からずに私は目をぱちくりさせる。

「ああ、ただし留年するなよ？ あくまで三年間だけだ。それ以上は私も面倒は見切れん。三年でここで学べる全てを学んでさっさと出ていけ」

その言葉にますます頭が余計に混乱する。

ええと、それはここにいろといふことなのか？ しかしさっきの出ていけとは矛盾しているような……？

「シャルル・デュノア」

「は、はい……」

急に名前を呼ばれて反射的に返事をしてしまう。

「この特記事項は受ける受けないはお前次第だ。よく考えるよ。お前が考え、お前が選べ。周りがどういふ言おうがお前がここにいた

いという意思があればIS学園わたしが全力で守ろう。たとえそれが国家権力であろうとしてもな」

そこまで聞いて初めて理解した。この人は私が女だと気付いても見て見ぬふりをしてくれるのだ。

そしてそのことがばれてフランスが私を咎めようと手を伸ばしてもこの人は私が助けてと一言助けを求めれば守ってくれるのだ。まるでテレビの中のヒーローかのように。

こと武力においてこの人ほど頼りになる人物はいない。それにこの学園にはもう一人の最強がいる。

たとえIS学園を巡って世界と対立したとしてもこの人がいれば数日は持ち堪えることが出来るだろう。

ああ、納得した。こんなお姉さんを持った一夏が彼女に憧れを抱かない筈がない。彼の中の彼女に勝つということは簡単ではない。

諦めるにはまだ早い。

ああ、そうだ仕種の言うとおりだ。まだ終わってなどいない。むしろ、まだ始まってすらいない。

私にはまだ出来ることが残っている筈だ。その希望の芽が完全に摘み取られるまで諦め、屈するにはまだ到底遠い。

「それ、今からあいつらのところに行って訓練するんだろう？ 頑張れよ男の子」

その言葉が耳に届く頃には迷いなどすっかりと消えていた。私に行くべき道は決まっていた。

「はい！　ありがとうございます！」

「ふ。礼を言われるようなことはしてないぞ」

「はい。でも言いたくなかったので言いました。それじゃ駄目ですか？」

「勝手に言ってる。後ろがつかえてるんだ。行くのならさっさと行け」

織斑先生はしっしと邪険に扱う。その裏は照れ隠しなのだろう。

ああ、本当によく似た姉弟だ。

「はい、失礼します」

一礼をし、会議室を後にする。

扉を開くと外にはラウラ・ボーデヴィツヒが待っていた。

転入してきた時と同じように目を閉じ、壁に寄り掛かっている様はお人形のように儂い存在感を醸し出している。

あんな冷たい雰囲気を纏わなければ残念じゃないのに、という他の女の子たちの声にも納得出来る。

そんな風に思うのも一瞬。次の瞬間には土曜日の対峙した時のことを思い出し自然と身構えてしまう。

「そんなところに突っ立っていると入れないんだが」

「あ、ごめん……」

確かにいくら目の前の彼女が小柄とはいえこんなに堂々と入り口を塞いでいては中に入れない。

反射的に謝ってから入口を譲ると不遜な態度で何事もないようにラウラは動きだしたかと思うと、

「……人攫いの国が」

通り過ぎざまにそう呟いた。

「っ!?!?」

その言葉の真意を聞こうとした時には既に彼女は会議室に入ってしまった。

思いもしなかった一言に呆然と立ち尽くさざるを得ない。

一つの希望を手に入れ、一つの空白を手に入れた。

狂乱たる戦いの日はすぐそこまで迫っていた。

第20話 「切開し節介する」（後書き）

千冬姉マジケメンの回、前回の醜態と足して引いてもカツコよさが上回る。

それがちーちゃんクオリティ。世界最強の名は伊達じゃない。

最近、シリアス成分が多い気がします。

序盤バカ 中盤以降シリアス全開がパターン化されつつあるのが拙いな。

内情を深く掘り下げようとするとこんなことになるんですけど大丈夫だろうか？

早く最初から最後まで馬鹿話でリフレッシュしたい……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7741r/>

IS <インフィニット・ストラトス> 花の銃士

2011年10月22日02時14分発行